

奇譚クラス

■ 新しい風俗文獻誌 ■

2月号



2 February—'68

奇譚クラス

昭和四十三年二月号

昭和四十三年二月号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akasaka Shuppan

(Tokyo, Japan)



2月号 ¥ 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

前篇 続篇 合編

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥家令夫人・静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に姉妹の花と蛇の美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の罪を団鬼六作の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登場。堂々四百数十頁に及ぶサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽 (二度の嫌がらせ)
 - 第三章 美人探偵 (落花紛々)
 - 第四章 洗腸 (強制屈伏)
 - 第五章 救援者 (羞恥地獄)
 - 第六章 救援の失敗 (逆転)
 - 第七章 好餌 (京子の屈伏)
 - 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室 (悪魔の宴)
 - 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥)
 - 第十一章 蛇の執念 (裸踊り)
- 後篇
- 第十二章 姉妹危し (屈辱の狼)
 - 第十三章 調教師 (遂に京子も)
 - 第十四章 美津子受難 (二人の)
 - 第十五章 結末 (美津子の屈伏)
 - 第十六章 落花無残の修羅場
 - 第十七章 淫らな美女の調教
 - 第十八章 すさまじいシヨ
 - 第十九章 汚水にまみれた宝
 - 第二十章 華々しき美女の屈
 - 第二十一章 対峙する美女と
 - 第二十二章 あくどい陥穽
 - 第二十三章 羞恥図絵の展開

直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花特」

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛 **刺青の魅力を探ぐる** 写真集

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 **刺青の女王** 山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版 (思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

「女性刑罰拷問特集」 西洋篇

革具に拘束される女 七十二態

モデル 清楚な美女乃々子IIグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集 (日本篇) 「略号美5」は完結。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号室田京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円 (送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までのMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらに飼育される生きた女王様に奉仕する豊富な写真資料によってマニアの非お申込み願います。

今月の新版SM趣向異色フォト集案内

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円
あぐなき嗜虐の願望を満足させるため大胆奔放な緊縛姿を開陳した恵子嬢が美しい妊孕の女体を縛りの実験台に提供した。

初妊娠の六カ月腹

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円
初めて子を孕んだ二十才の若い美しい女体は適度の脂肪を全身にみなぎらせて緊縛の人身御供としての美しさを發揮している。

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円
妊娠して以来、一層のM心理がたかまり強烈な縛りを甘受するようになった恵子の膨満腹を中心にその美しさを誇らかに強調した。

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円
同好者である恋人の種を宿した恵子は今やマゾ心理の昂揚から借しげもなく裸身を晒して緊縛美の探求のため先駆となるのだった。

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円

恥かしげにぼってりと妊娠六カ月の裸身が縄目に痛めつけられながら、その限りなき美しさを画面一杯に媚をふりまいていく。

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号八〇〇円
中河 恵子 略号八〇〇円
腹部は恰好よく胎動しはじめたようやうに胎児の胎動しはじめたようやうに膨れ上がり、娘時代の腹とは違った色気を発散して憧れの縄目を受けて美しく躍動する。

立縛り髪責め哀歎

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
均斉のとれた全裸の肢体にびっしりと掛った縄目。腰まで垂れる黒髪を驚づかみにされて、のけぞるように引回される安井夫人。

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
猿轡の布片以外は糸もまとわぬ裸身に肌もくびれるばかり厳しく掛った縄は流石にM夫人だけあって素晴しい喰い込みをする。

後手縛りで引回す

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
でぎつちり締め上げた腕のつけ根まで指先から二の腕のつけ根まで痺れる痺れと喚くのをかまわず縄尻を握んで引き回すひととき。

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
厳しい高小手縛りで転がし、片足首に縄を掛けて引き上げればあられもない姿態に全身をふるわせてマゾの境地を満喫する夫人。

憂愁夫人菱縄縛り

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
愁いに満ちた美貌の夫人の細っそりした裸身をくびるよう上下から情容のまわりに至るまで彩ってゆく。

柱対向立縛り夫人

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
全裸の麗わしの女体は柱に向って立縛りに固定され、むきだしに可愛らしい臀部には苛責のないムチが肉もくじけとばかり炸裂する。

片足吊り裂き責め

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
片足だけを吊り上げることによって開股を強制すれば残った肢をばたつかせ空を蹴り長い髪をふり乱してもがき回る被虐のポーズ。

逆エビ責めに喘ぐ

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
柔軟な肢体を誇る裸身が両足首を縛った縄と高小手の縄とを連結して締め上げることによって美

しい曲線を描いて苦痛に喘ぐ。

柱正面立縛り媚態

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
後手縛りで柱を背にして正面向いて立縛りになった裸身は、すくなくと爪先立つて羞らに満ちた媚態でファンの方々の眼に捧げる。

股間縛りにもがく

大手札四枚一組 略号八〇〇円
安井喜久子 略号八〇〇円
首縄から胸腹へと下った縄は股をくぐって背後の後手首へ連結され、横倒しに転がされると締まる縄目の痛さにうううとものがく。

豊満女体をくびる

大手札四枚一組 略号八〇〇円
愛知 葉子 略号八〇〇円
奇クサロンにその豊満な緊縛肢を晒した彼女が最近の見事なボリウムを肌を喰い込みにかけた。て自慢の裸身を提供してくれた。

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
愛知 葉子 略号四〇〇円
開いた両足首に棒をかまして棒の中央と首縄とを連繫して締め上げ巨大な臀部を晒した提供作品。

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号四〇〇円
愛知 葉子 略号四〇〇円
肉づきのよい円ろやかな太股をそり反えらせて逆エビ縛りの苦痛に耐える肢体を鑑賞を願いたい。

今月の新版SM趣向異色フォト集案内

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円
あぐなき嗜虐の願望を満足させるため大胆奔放な緊縛姿を開陳した恵子嬢が美しい妊孕の女体を縛りの実験台に提供した。

初妊娠の六カ月腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円
初めて子を孕んだ二十才の若々しい女体は適度の脂肪を全身に含みながら、緊縛の人身御供としての美しさを発揮している。

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円
妊娠して以来、一層のM心理がたかまり強烈な縛りを甘受するようになった恵子の膨満腹を中心にその美しさを誇らかに強調した。

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円
同好者である恋人の種を宿した恵子は今やマゾ心理の昂揚から惜しげもなく裸身を晒して緊縛美の探求のため先駆となるのだった。

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円

恥かしげにぼってりと妊娠六カ月の裸身が細目に痛めつけられながら、その限りなき美しさを画面一杯に媚をふりまいていく。

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八〇〇円
腹部は恰好よく胎動しはじめたようやうに胎児の胎動しはじめた腹は恰好よく膨れ上がり、娘時代の瞳を受けて美しく躍動する。

立縛り髪責め哀欲

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
均等のとれた全裸の肢体にびっしりと掛った細目の腰まで垂れる黒髪を驚づかみにされて、のけぞるように引回される安井夫人。

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
猿轡の布片以外は糸もまとわぬ裸身に肌もくびれるばかり厳しく掛った細目は流石にM夫人だけあって素晴しい喰い込みをする。

後手縛りで引回す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
手の指先から二の腕のつけ根まできっちり締め上げた後手縛りで痺れる痺れると喚くのをかまわず縄尻を掴んで引き回すひととき。

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
厳しい高小手縛りで転がし、片足首に細い手を掛けて引き上げればあられもない姿態に全身をふるわせてマゾの境地を満喫する夫人。

憂愁夫人菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
愁いに満ちた美貌の夫人の細いそのりした裸身をくびるようには情容のまわりに至るまで彩ってゆく。

柱対向立縛り夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
全裸の麗わしの女体は柱に向って立縛りに固定され、むきだしに可愛らしい臀部には苛責のないムチが肉もくじけとばかり炸裂する。

片足吊り裂き責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
片足だけを吊り上げることによって開股を強制すれば残った肢をばたつかせ空を蹴り長い髪をふり乱してもがき回る被虐のポーズ。

逆エビ責めに喘ぐ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
柔軟な肢体を誇る裸身が両足首を縛った細い高小手の縄とを連ねて締め上げることによって美

しい曲線を描いて苦痛に喘ぐ。

柱正面立縛り媚態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
後手縛りで柱を背にして正面向いて立縛りになった裸身は、すくく爪先立つて羞らいた満ちた媚態でファンの方々の眼に捧げる。

股間縛りにもがく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八〇〇円
首繩から胸腹へと下った縄は股をくぐって背後の後手首へ連結され、横倒しに転がされると締まる縄目の痛さにうううともがく。

豊満女体をくびる

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
愛知 葉子 略号 八〇〇円
奇クサロンにその豊満な緊縛肢を晒した彼女が最近の見事なボリュムを肌を喰い込む縄にまかして自慢の裸身を提供してくれた。

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
愛知 葉子 略号 八〇〇円
開いた両足首に棒をかまして棒の中央と首繩とを連繫して締め上げ巨大な臀部を晒した提供作品。

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
愛知 葉子 略号 八〇〇円
肉づきのよい円ろやかな太股を耐え反えらせて逆エビ縛りの苦痛に耐える肢体を鑑賞を願いたい。



数人のお友達と二台の車に分乗して琵琶湖一周ドライブを楽しんでいたときでした。今まで一度も車などに酔ったことのない私が急に気分が悪くなってきたのです。むかむかと吐き気がするよう胃のあたりから胸へかけてこみあげてくるのです。口の中に酸っぱい唾液がにじみ出てきましたので大したことはないだろうと思いつつも一応ハンドルを換えてもらいました。平常は至って丈夫で通っている私が突然吐き気がするのはいさぐさでもしたのか知れないと、皆がすすめてくれますので、車を内科小児科の看板の出ている医院の前に停めてもらいました。

聴診器を当てた後で、中年の医師は、「これは内科よりも産婦人科へ行かれることですね」とこともなげに言うのでした。今の今まで車のハンドルを握っていたと言うと、医師は、「今が一番大事な

ときですから気をつけて下さい」と快活に笑うのでした。

指折り数えて日は思い当るのですが、迂闊な私でした。貴女、この頃少しふとったわヨ、と言うお友達の言葉を額面通りに受け取って食欲があるから、などと考えていたのです。お風呂から上ったときなど、殊にバストやヒップに肉がついてきたようだとわかっていたのですが、まさか、それが妊娠の一つの兆候だったとは夢にも考えてみなかった私でした。

花と蛇の主人公のように恥かしめられたい、無理矢理さらけ出されたいと願っていた私でしたが、最近はお腹でひしひしと全身を縛りあげられることにも、異常なまでの執着と関心を示すようになって

きていたのです。それが、はつきりと妊娠しているときまり、一日とお腹が大きくなってくると、何かしら、被虐の妄想が一層ひどくなってくるようでした。

不思議なもので、一旦産婦人科の診察で妊娠何カ月、出産予定日は何月何日と宣告を下されると、急に妊婦となってしまうと、お腹も一日とせり出してくるし、何だか乳首や乳輪も黒ずんで刻一刻大きくなってくるように思えてならないのです。胎児の鼓動が聞えてくるような静かなひととき、私は自分の身体の奥底から、せり上ってくるような大きな肉体的変化に、始めて女性としての特異な感覚を自覚するのです。

彼も心から祝福して呉れて、早く式を挙げよう、籍だけは今すぐにも入れておこうと言うのでした。お腹の大きな花嫁。私はひとりでに笑えてくるのでした。

ハンドルにつかえそうになる大きなお腹で、もう当分は車の運転も出来なくなるのかと思うと、一沫の淋しさが襲ってきて、思いき

り縛られてみたい、責められてみたいという想念が汐騒のように湧き上ってくるのでした。縛り方に手加減をしたり、妊娠した身体をいたわってくれたりしても私には一向に嬉しくなかったのです。

異常に膨れあがったお腹、めっきり肉がついて大きくなったお尻や太股、生理的には当然の変化を遂げた人間の牝を、思いきりいためつけ辱かしめてほしいという思いが、あらぬ妄想となって次第に月の進む私の心の中を責めさいなむのでした。妊婦のモデルと早変わりした私の女体が一個のオブジェとして、一つの被写体として、冷酷なレンズの前に縛られたままに晒されるところでした。

出産のぎりぎり間際まで、モデルとしてカメラの前に立ちたいという私の願いは、果して許されるでしょうか。理解がある彼も私のこんな我儘をいつまでも許してくれないだろうと思うと、やさしくされればされる程、私は泣けてきて仕方がないのです。

私の身体にぴったり合せて作った赤いウェット・スーツも今ではすっかり身体に合わなくなっているのも、おかしい気持です。

妊娠体験の記

中 河 恵 子



花火が上る

「K誌」正月号論

太田 三郎

「パン、パン、パンと、するどく夜のしじまを破って花火の音が炸裂した」

——これは奇譚クラブ（43年正月号）は本文トップ「団鬼六・辻村隆対談」の一節からであるが、私はこの同誌上のサロンに「象徴的」という表現を入れた一文を投稿している。これは（憎縄の記）と（奇譚クラブを斬る）がもたらす波紋を、意味していた。ところで正月号の幕が上った現在、そのこととは別に象徴から一歩進んだ具体的なK誌の方向をこの「対談」の中に見付け力強い気持ちにさせられた。△熱海の夜は更けて▽の章にある「今茲に団鬼六氏一人、始めて奇クの作家として、自

からも認め、何ら憶せずおめず名乗り出ようとしている、または「奇クは秘密めいたヴェールの殻を破って、始めて同好者同雑誌から、一般誌として躍進するのではなからうか」という発言である。これについては、これからもっと議論される余地はあるが、とにかく正月号にふさわしい景気のよい放談（対談というより放談といった方がふさわしい）で、しかも背景には花火まで用意されてあるのだから奇譚クラブの初スタートは上々。本文トップがこの対談である所に、△サロン▽のはじめが「愛縄の記」滝沢蓉子（傍点は筆者）であり、羽鳥水江が（本文に）「この野蛮は許せない——憎縄の

記——を読んで——」として堂々たる論陣を張って居り（読みごたえ充分）、能美積「女と縄のある限り」の中にも「一、憎縄の記、所感」をよせられ、黒井珍平「十一月号を読んで△憎縄の記について思うこと▽」など。

「奇譚クラブを斬る」についての直接的な声が見られなかったのは残念ではあるが（二月号を期待しよう！）、編集部御推選の「実践派の体当りの体験小説」とレッテルされた清原麻耶「背徳の果てに」の登場は本誌の創作的なジャンルに新風を吹きつけ、期待されるものがある。以下、走り書きながら、もう少し付け足して正月号論としよう。私はここ、数カ月前から願って居り、また期待していた作品がある。芳野眉美「水中花」だ。願うとは、このへんで本格的な水中花論が出ること。また期待とは彼の小説によって広く文学的な意味でも評価される物が、わが奇譚クラブから生れる可能性がある。——そのよろこびである。△奇譚クラブを斬る△の明文の中で、どうして、この小説を取り上げなかったか、残念でもある。たしかに野心作でもあり、異色作でもあり、芳野眉美にとって

詩

あいしょう
「哀唱」

△浣腸に魅せられた女の
うたえるうた▽

菊池 淳子

一、われみとるひと 母と来て
その笑む瞳 優しくも
褥臥す身ぞ うとましく
まもる掟は 重かりき

二、女の誇り むなしきは
白きおマルに いとどなる
はやくぐり来て 癒ゆためと
身も世もあらぬ そのさだめ

三、あやさるごと だめうけ
赦し乞う身の 愚かさは
気持悪るきと 羞恥告ぐに
イチジクむねん 手軽やも

四、目ざめ悲しや あさがおは
湯ばしり熱つき つぼみまで
くるしき怖それ 女ゆえ
しとね濡るるに あらざるや

五、外つ国ならば 乙女とて
アヌスの検温 ならいと
み姿しらぬ そのお臀
かかげ涼しと 泣かざるや

・・・僕のイメージ画集・・・室井亜砂路

『処刑場の怪』 某国娘子軍が全員、驕り
殺し同様の処刑をされたのは、四日程前のことであった…。



この一本のみに賭けた情熱というより創作的苦悩は、本質は軽文筆ともいふべき短文向（ガン作マニアのノートなど）の作者の既成的事実を知ってるだけ、現在の反響少なしは淋しい。味のある小説としては本誌第一等と支持したい。それと比軽されるべきものは面白

い読物として最高の「花と蛇」である。奇譚クラブは脱皮しつつある。この方向が正月号に盛られた内容に裏付けされる物であり、この地点より、より広く深くほりさげられて行くものならば私はそれを期待したい。読者のだれかが言ったように若い人達の投稿がもっと増

えることも良いことであり、新人の活躍も望ましい。しかし、風俗雑誌出版の長い足跡にともなう形成されてきたオーソドックスな手法による文章（ベテラン寄稿家）の発表も大事にしたいものだ。牧高志・文画による「ほの暗い行燈の灯の下で」などは、その一例でもある。

六、

ひと皆かくや 病む哀れ
湯浴みならじと 術なくも
お寝巻剥かれ 拭かる身は
拷問なりき くまなくて

七、

ちぢみもならぬ おしるしに
つたつながらも 消えいりて
やわ紙揉まる あらためは
か細きいのち 女いま

八、

裳だかされつ うなだれて
お腰湯請うは くらけれど
アンネのいのり 解かる日は
押さえ果さる みじめゆえ

九、

遠くうらめし そのすべぞ
母の想い出 まぬがれじ
緊き備えや リスリンは
通じ見ぬ日の 戒しめと

一〇、

うれいは青き海に似て
まるみ濡るるも 胸せまる
お浣腸なすと その声を
仰ぎし擲 君知るや

一一、

あさましからめ わがアヌス
恥辱の責め具 解やかに
甘きくるめき 口づけの
始めなるごと 縛られて



(第四十四回)

辻村 隆

神酒をいただくというのは、芳野眉美さんや、とやまかずひこ氏の専売かと思っていたが、近頃、このネクターで、奇ク誌上を彩る文章より、もっと堂々とヒトを恐れぬげな小説にお目にかかり、お株をとられた様な気になった。

講談社発行の『血の聖壇』という単行本で作者は宇能鴻一郎氏(定価三九〇円)

ネクターに関する個所を少し抜萃してみよう。この主人公は愛する慶子という女を、たべてしまいたいほど好きだったというのだが、彼女の味覚をあげわう最後の手段として

『……お慶のあれを、ビールのようにゴクゴクと、お腹が大きくなって苦しいほどに飲んだら、わては初めて満足するんじゃないやろか。お慶を十分にわたの体の中に入れたという……』

その結果彼女に三拝九拝して希みが叶う。『パンティを手ばやく

脱ぎ、慶子は彼をまたいで立つ。スカートで顔を蔽われ、暗くて何も見えないが、暖い体温と、なつかしい匂いが、ずっと近づいてくる。慶子がかすかに力を力れている感じが、はつきり判った。一瞬のうちに彼を打つに違いない熱い滝を心ゆくまで飲みこむために、隆平はそれこそ鮫鰐のように、口を大きく開いた』

正に迫真的に徹にいり細を穿つての描写である。神酒奉戴者なら垂涎ものの一章。

× × ×
思い掛けなく、東京の新田英雄氏と交遊の機会が出来た。十一月初旬の某日、大阪へ出張された新田氏とミナミの行きつけの料亭で初見参する。彼の愛妻ゆう子さんのアルバムを三冊許り持参され、私も亦コレクションの一部を開陳したが、激しい恋愛の末結婚された夫人であるだけに、その麗姿実に素晴らしい。プレイフォトを撮

るために、ゆっくり暇と時間をかけるため、自宅ではなさらず、いつもホテルへ行かれるとのことであるが、過去数年、折に触れ、奇クサロン欄で、その一部を散見していたが、今こうした集大成をみると、改めて新田氏のゆう子夫人に対する愛情の濃やかなプレイぶり、まざまざと窺えるおもいである。

結婚後五年の今、未だに子宝に恵まれぬのはお淋みしいが、それだけに夫人の体は、さながら若い娘のように瑞々しく、ぬめって光り輝やいていた。よかったら一度ゆう子夫人を同伴して来阪、夫婦プレイを一緒に撮りませんかとの、願ってもないお言葉である。夫君の命令には絶対服従のゆう子夫人は、恐らく、プレイの一件も承諾するだろうと仰有る。最近では、何かと御多忙で、サロン欄から少し遠ざかっておられるが、これが実現すれば、いずれカメラ・ハントで、新田夫妻の素晴らしいフォトを発表出来ることと、今から鶴首の思いで、その日を待ち侘びている。

× × ×
先日秋の一日、ひょっこりと増田夫妻が、可愛い双子児の赤

ちゃん二人をそれぞれ抱いて訪れたが、この処二人の坊やに手をとられて、プレイの方はすっかり御無沙汰らしい。臨月の出産の前日まで、激しいプレイを続けた増田喜代司の面影はもうどこにもない。そこには若いパパの、子煩悩の姿があるだけで、その変貌ぶりには、私の家内すら飽気にとられていた。結局帰るまで一言もプレイの話はせずじまいに終る。それに引換え、田宮夫妻の猛烈なハッスル振りにはこちらがタジタジで、ちょっと安井夫妻のことを話したら、連日の様に混合ダブルスを希望して来られる。カメラ・ハントで御存知の様に安井夫妻は仲々体があかない。執れ近日実現すると思うが、フリーセックス時代いよいよ到来という感、近頃特に、切実である。

新宮夫妻は、遙々秋田県まで出て、既に混合プレイの実践者であり、岐阜の水野夫妻も、折あらばと、それを希望しておられる。私たるもの、その間に立たされて、只、もうウロウロ、マゴマゴ。あれやこれやで本職の仕事が手につかない。

× × ×

エナメルのロングブーツ

芳野眉美

十一月×日

バーSのママはエナメルのロングブーツがよく似合う。シンプルが細いウエストを締めつけている。バーの壁に馬用の長い皮鞭が飾られてあるが、カウスターに置かれた真新しい短い皮鞭は、これから雄の新馬でも調教するのもかもしれない。

「ママさんのなら、今すぐにでもたべてもいい」

などと、H氏はブッソウなことをいっている（おつまみのことではない）。

上京したH氏はバーSから電話したのである。珍客有りこれにて閉店。この点一人だと気が楽だ。H氏には五月の折のお礼が良かったし、また、バーSの美しい魅力あるママにも会いたかったからである。常連の客らを追いついてバーSに直行した。

H氏は飲めないから（アルコール

ルのことである）かわりに私が飲むことにする（ウイスキーのことである）。スポンサーがひかえていると、えんりょなく飲むのが私の癖である。

どうも、H氏はバーSに来る前に、すでに、麗わしき、また、すさまじい女王様からさんざんいためつけられてきたらしい。響をかけたらしき唇の両端を気にしている。響をかけられたうえ、飲まされて（ネクタールのことである）、たべさせられて（おつまみのことではない）きたらしい。

H氏が上半身裸になった。男の裸なんて見たってしょうがないけ

ど、H氏の背中の鞭のあとが見えたから、Yシャツを脱いでもらったのである。

太い赤い痣が浮き上って斑点を描いている。H氏のベルトでなくられたらしい。

バーSのママ愛用の乗馬用の皮鞭だと、もっと鋭い鞭のあとが残るのに違いない。H氏の背中を実験台にしてママに皮鞭をふるってもらったら、さぞかし面白いことであろう。

H氏の悲鳴を肴にして、ウイスキーを飲んだら楽しいことでしょう。イッヒッヒッヒ。

ママの神酒？ それは、私がいただきます。ウヒ。

短信往来

能美積様へ

S生より

能美積さんの大人の作文？はいつも面白く読ませて頂きます。現在のK誌にあって、これほど読ませる文章を書けるお方は、そうザラに居ないのではありません。今月の分、一月号の分の、「女と縄のある限

り」は、どれも感心させられたりケラケラとひとり笑えさせられたり本当に達筆ですね。特に（一、憎縄の記・所感）のツウレツなユーモアは、まったくカブトをぬぎます。それにしても貴方に取っては真打ちとも考えられる小説の方が、ちょっと力み過ぎて、生硬でエッセイのようにスベリが悪いのは残念です（スミマセン）もっと気楽に書いたら。御健筆を祈ります。

私は貴方のファンです。



リンチ

『リンチ』 山岸三郎

＜短歌＞

『奴隸犬』

山本羊子

生理帯あらわにみゆる胴衣のみ
われに許されうなだれて這う

縛られしままひざまづき浣腸の
責を受くるもかなしき日課

嘲けりの視線浴びつつ浣腹のき
きはじめたる時を喘ぐも

鎖もて首曳かれゆき排便を許さ
るるなり真昼の庭に

強いられて犬の鳴く声真似しつ
つ這いたるままに物を乞いおり

つながれし鎖のままで這い寄り
て御主人様の足を舐めいぬ

妙隸犬われを馴らすと幾人か這
いたるままの尻を答打つ

縛られしまま幾日経て生理日に
入りたるわれを友は嘲ける

室内に飼う犬なれば着せられし
拘束ゴム衣便を漏らさず

「花と蛇」

雑感

立町老梅

十二月号の編集部だよりで「花と蛇」の再刊を知った。今回は読者の強い要望に応じて前統編一挙収録とのこと、まことに喜ばしい企画であり、編集部の方断に敬意を表したい。将来この物語が完結した際には、「全一冊決定版」ともいふべき記念出版をお願いしたいと思っている。

一、「花」役（下段は補欠）

●静子

山本富士子

新珠三千代

●桂子

安田道代

野川由美子

●京子

大空真弓

吉村実子

●美津子

酒井和歌子

和泉雅子

●小夜子

西田佐知子

藤山陽子

付録として、十年前に遡りその当時における適役を選ぶと次のようになる。

静子・月丘夢路、桂子・叶順子、京子・久保菜穂子、美津子・芦川いづみ、小夜子・司葉子。

二、「蛇」役（下段は補欠）

●銀子

京唄子

●葉桜団員（ズベ公達）

黒柳徹子

嵯峨三智子

中尾ミエ

緑魔子など

●川田小沢昭一・天知茂

●森田組員（チンピラ達）

立川談志

東京ぼん太

ルーキー新一など

●田代森繁 久弥

●森田進藤英太郎

●千代清川虹子

●伊沢コロンビア・トップ

●鬼源中田ダイマル

●捨太郎（補欠・柳亭痴楽）

●岩崎G・馬場・若秩父

●津村芳屋雁之助

●春太郎藤村有弘

●夏次郎トニー・谷

●夏次郎横山ノック

（補欠・茶川一郎）

この配役で、たとえば(1)、捨太郎を使って静子夫人を仕込む鬼源(2)小夜子をくどく演技過剰の津村(3)京子を同時に調教する春太郎、などの情景を想像してみたまえ、いかに適役であるかが理解できるであろう。但し盲腸炎手術の直後は御遠慮願いたい。

朗報へメンス・バンドV譲ります

〔使用済の月経帯〕

第三回分入手ノ

○一月号のこの欄でへ若い女性の使用済のメンスバンドを希望者の方に譲りますVと発表したところ申込者が殺到して、準備していた十数枚のバンドは、忽ちのうちになくなっていました。

○そこで入手斡旋者に依頼して更

に若干追加蒐集を企りました。なにしろ申込者が多いところへ、準備した品物が限られていたため、送料として送られてきた金額の多い方から差し当り第二回目に入手した分をお送りしました。

○尚、送料や返信料の封入なしで

お申込み下さった方や予約された方も多数ありましたが、これらの方々には現品をお送り出来ませんでした。

○以上のような状態でしたので、更に新しく交渉の結果、未婚の女性ばかり収容している某社女子寮から第三回分として相当数量の使用済月経帯を入手いたしました。

編集部気付小倉妙子宛、お早い目にお申込み下さい。同封された金額の多い方から優先的に順次、希望枚数お送りいたします。

○色は黒、ピンク、水色、黄などいろいろありますが、いずれも新品ではありませんので大分汚れております。品切の節は第四回目の入手まで待つて頂くか、御希望により返金いたします。

(編集部・小倉妙子)

『イッパイヤツカ?』

遠藤 春一



僕のイメージ画集

『どうする気なの?』

野江 三郎



劇団「赤と黒」の

「女の切腹」

南方 純



カジパン座を本拠に、一部ファンに圧倒的支持を受けている劇団「赤と黒」が、この秋の芸術祭参加を目標に上演した「裸と恐怖の舞踏会―女の切腹」は、官僚のいわれなき偏見のため、その参加が認められなかったが、近來稀に見る傑作であった。

作は緒方洋太郎氏とあるが、恐らくは新しいペンネームで、三島由紀夫氏クラスの実力ある劇作家の作品ではないかと思われる。それ程、骨格のしっかりした立派な作品である。

主演の朱天院風斎に扮する土師

寛氏は、浅草出身の軽快な芸達者。孫娘雪乃を演ずる志村曜子氏は、かつてはミス盛岡に選ばれたこともある美貌の持主で、眼の大きい清純な感じが、役柄にぴったりの美人である。

あらずじとハイライト。

旧軍人朱天院風斎（八十才）は木曾山中の崖の上に建てた豪壮な邸宅に孫娘雪乃（二十一才）と二人で暮している。風斎の息子信太郎は陸軍中將であったが、終戦の際、妻の兄飛鳥宗武の不利な証言により戦犯として処刑され、その妻月乃は旧友高林美沙や水無月淳

子を頼ったが冷くあしらわれ、しかも信太郎の竹馬の友、叶光造には体まで奪われる目に合い、最後に風斎の家に身をよせたが、正規の結婚でないため風斎はこれにくみ虐待した。そのため雪乃が乳ばなれすると月乃は自害してはてた。風斎は自分の八十才の誕生日のパーティーにことよせ、信太郎と月乃を招いた相手に復讐しようともくろむ。

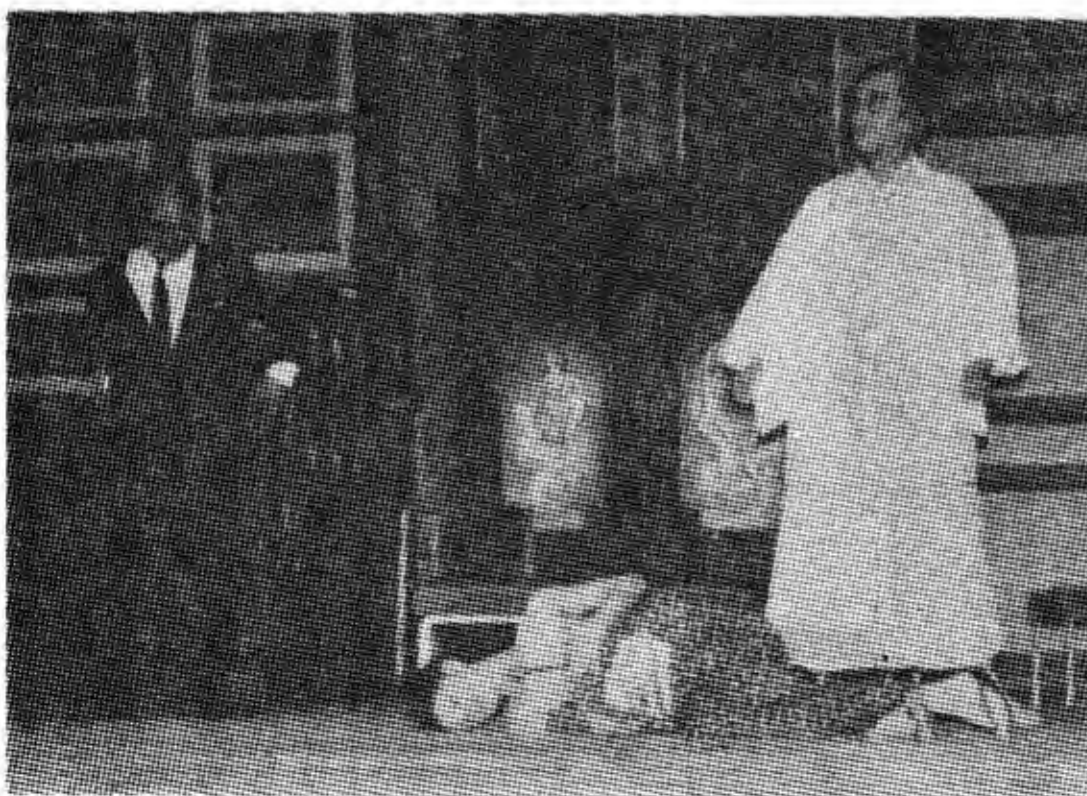
彼等は、老人が死後孫娘に残す莫大な遺産の後見人として、その管理を依頼されることを狙って、全員パーティーに出席し、互に猜疑心をもやす。

乾杯と共に停電女の悲鳴、高林美沙は矢で胸をつらぬかれ第一号の犠牲者となる。

老人の誕生日を祝う仮装舞踏会が開かれ、竹村要介と飛鳥宗武は口論

の結果組み打ちを演じ、窓から木曾谷の深い闇にすいこまれる。叶光造は毒酒を飲んで倒れる。水無月淳子と魚住友絵はフェンシングの剣で女闘を演じ、相撃ちで息絶える。

風斎は、槍で飛鳥宗武の妻、比奈子を追ひ廻し、トド突き殺して



しまう。

風齊（槍に肩をもたせ、疲れた思い入れ）戦後進歩的自由主義者の仮面をかぶり、私利私慾を図った醜いやつらをいまみんな殺してしまった。雪乃、養生酒を持ってこい。

雪乃（奥より湯呑をささげて風齊に渡し）
お心静かにめし上りませ。

風齊（チョット思入れあつて飲む）もうきかないやつは皆いなくなつた。雪乃よ、これからはお前と二人で長く楽しく暮そう。（言いながらだんだん苦しくなり、懐紙を出し口に当てると血がしたたる）
雪乃、わしを、わしまでも殺そうというのか

雪乃 いいえ、わたくしはおじいさまのおいつけどり、武士の娘らしく立派に仇をとるのです。お母さまがおじいさまに



どんなむごい仕打ちを受け、自殺なさつたことか。

風齊（ギクツとして）お前、それを知っていたのか

雪乃 私が十六才の時お母さまが大事にしていた手鏡の中でそれを見ました。それまでは私はお

じいさまの人形でした。それから私はおじいさまにどうして復讐しようかとそればかり考えておりました。この仮装舞踏会のことをおすすめ申したのも実は雪乃でございました。

風齊 それでもお前はたった一人でこの膨大な資産をどうしようというのだ。

雪乃 いいえ、どうもいたしましてん。（すりよる風齊をふり切るように正面の階段に登る）おじいさま、おわびに雪乃は武士の娘らしくここで立派に自害いたします。

（階段のおどり場で、向きをかえて正座する。遠くで横笛がきこえ、上手から霧が流れてくる。雪乃は静かに帯にさしていた黒塗の短刀をとり出し、揃えた膝の前に置き、懐紙をその後に置く。ついで静かに帯をほどき、白むくの着物を脱ぎ、襦袢姿となる。両手で短刀を目八分に取上げ、ゆっくりさやを払い、懐紙で刀身を巻き右手で柄を握り、左手で襦袢をはだけ、きつ先を左脇腹に当て、やや思入れあつて、ウウとうめき声を立て上半身を前に折りまげる。斬くして、左手で身を支え、体

を起し、倒れている風齊の方を向いて）おじいさま、雪乃はこれ、このように（短刀を右脇腹に引廻す）

風齊（頭をあげて、これを見上げ）さすが武士の娘じゃ、天晴れじやぞ。（風齊倒れて息絶える）
大友新也（奥から走り出て）雪乃さん（かけようとする）

雪乃 ここへよらないで。その（左手で指して）棚の中に紙幣が一億円あります。それをあなたにあげます、あなたはそれでみどりちゃんと楽しく暮しなさい。こんな気違いじみたことは私だけでたくさん。

新也は釘づけになったように呆然として見上げる。

大きく肩をあえぎながら、雪乃は倒れかかるのを耐えている。

短刀を腹から抜き、右手で刃を下に持ち直し、左手で、それを受けるように握りしめ、胸元につき

立て、一呼吸。十文字に切下げる心にて、体をのけぞらせ、力つき

て前に倒れ、落ち入る。

新也 雪乃さん（札束をばらばら落し、立ちつくす）

—— 静かに幕 ——

（カット写真・筆者提供）

舞台に見る女体切腹

山城七々男

既に観られた方も多い事とは思いますが、東京のカジバシ座を本拠に、特異な存在として知られる劇団「赤と黒」が、十一月公演として、女の切腹、を上演しました。その感想を記して見ます。

歌舞伎等は別として、併も女腹切りを一つの見せ場としての演劇は、まず珍しいといえましょう。

その点特異な劇団である「赤と黒」の上演だけに期待して見ましたが、小生の感想としては、まずまずという所でした。物足らぬ点は時代の設定が現代であるという点と、主人公の切腹、更にはそれ以前の各種の殺し場面が、どうも劇全体から見ても充分に一つの劇として消化しきれていない為、それぞれの場面だけを言えばともかく何となくとってつけたという様な感じがする事です。

良い点を言えば、切腹シーンが作法に大体忠実に丁寧に行われて居り、又現代の場面ながら、切腹する主人公の扮装が、時代物風で

ある為、感じが出ていた点でしょう。切腹場面を少し詳しく次に記して見ましょう。

女主人公雪乃(志村曜子)は髪を長く後に垂らし、黒鞘の懐剣を胸元にさした白無垢姿で着座します。まず懐から白紙をとり出し前に置き、懐剣をその上に置きまします。次に帯を解きにかかります。しめ方がきついのか解くのに一寸手間どりましたが、却って真実味を憶えます。帯を解き終えんと両袖から、両手を内懐へさしこみ胸元から、ぐいと白無垢の着衣をぬぎすてまします。下には、白の肌襦袢一枚です。ついで襟に手をかけ胸のふくらみが半ばのぞく位にくつろげ、前に置いた懐剣を静にとり上げ目八分に捧げゆっくりと鞘を払い、白紙をとり上げ刃を巻いて逆手にとり、片手で下腹を軽くなでさすって、いよいよ切っ先を左脇腹へ押し当てます。

この間尺八の音がバックに流れ、観客も思ひなしか息をこらして見つめている気配です。一息あって、ぐっと刃をつき立てると、体はやや前のめりになり、更に深くつっこむ形、そしてぎりぎり前かがみになりながら右脇腹へ引き回します。一文字に切腹し片手を前について、やや斜め前に体をかめ一呼吸、せりふのやりとあって、やがて、深く腹につき立った刃を両手でぐいと引きぬき、返す切っ先を鳩尾につきたてまします。うむと上体がのけぞりついで両手で切り下げ、十文字腹です。臍下まで切り下げた刃を、再び両手でぐっと引きぬき、さつと左乳下へ返したと見るや、どつと斜め前方に倒れ伏して息が絶えます。

きれいな切腹ですが、一面一寸物足らぬ思いもさせられます。もう少し苦悶の様子等あればという感じもしました。ともあれ、これを機会に今後共、更に女切腹を上演してほしいものです。その時はやはり切腹というもののふんい気を十二分に出せる時代物で、腰元、武家の妻女、或は女白虎隊、といった姿で、又数人の複数での腹切りを見せてほしいものです。今後を期待します。

「オニ六先生

大いにシバる」

を読み

一言居士

正月号に掲載された団・辻村氏の対談を見て大変興味があった。K誌の二大巨頭の初対面ともいふべきで、長年、大方読者が切望していた週刊誌向のPR文句を借りればまさに夢の企画実現さるーと言ったものだ。団キ六に非ず、団オニ六であるといったペンネーム楽屋話などなど、黄金の頁とも評される、ファンへのなによりのお年玉でもある。ただ、この対談で一寸、気になったことは、本誌がマニア誌から一般誌として躍進する、奇巧は秘密めいたヴェールの殻を破ってーという勇ましい発言のことである。知名人も乗り出し、筆陣にくわる可能性ありということとは、横に広がるという意味でバライティという点でも公刊性を高めることでも賛成だが、それがすべてになってしまうこと

秘物語

看板に偽りあり

牧高志



まず先きに物申す「抗議文」なるものを掲げたい。

東映社長殿

在東京奇クファンよりあなたは時代劇映画の衰微を挽回せんがため、このたびも意欲作として「続・大奥(秘)物語」を製作されましたが、不幸にして宣伝部のポスターと映画内容(の一部)が一致せず、多大の失望を与えたことは甚だ遺憾に耐えません。今後は絶対にこのようなことのないようファンの一員として要望すると共に、敢えて猛反省を促す次第であります。

処で：他の地域は筆者、寡聞にして知る由もないから間違っているなら、深くお詫びしなければならぬが、東京では十月二十九日付の夕刊紙、続いて町内のあちこちに貼られた封切のポスターを見ると、江戸城大奥のお手付き中ろう三人が白州の白砂の上で、いずれも坐臥の形で後手に縛られ、小川知子のおちさは手前で右の方を向き、緑魔子のおことは中央で後向き後手姿、そしてその向うに桜町弘子のおしのがこちらを向いて

いる。裁きを受けるような、そうでないような、何んとなく転がったスチール写真である。つまり時の將軍家治の頓死によって、お側女が一斉に交替し、先君のお手付中ろうは一生、尼屋敷へ軟禁されるという仕組を描いた映画で、その趣旨とテーマの取上げ方は誠に適切なのだが、肝心かなめ(と、筆者は思っている)の看板の場面は、眼を皿のようにしても映画には現われず遂に「終」となってしまう。もっとも映画の中で「たった一つのお位牌(先君の)」のため一生、縛られるなんて……というセフリがある。だから、あの客寄せの看板は決して偽りではございません——というのでは、余りにもファンをなめた事にはなるまいか。

でないとするれば、恐らくお次のように、ウヒッヒ……ヒ……ヒ……お遊びになったンじゃござんせんか。(……てなヒガミ方をしたくもなろうってものですよ、ねえ)「さア、最後のスチール写真を撮りますよ。スターの皆さん、お集り下さい。今回は、うんとリアルにいきましようや、縛られてお裁きされるシーンはありませんでしたが、映画の趣旨が女の一生を縛

のおそれである。本誌が八夜Vの雑誌であり、大人向であり、妖しい秘密が内在し、それが孤独なマニアにとって何よりのなぐさめともなり、素人っぽい所に、だれでも投稿できる気安さも考えられる。そんな雑草の根強いものを、あらためて再認識すべきか。奇クの宿命的な性格はそれなりに懐かしいドラマを意味し、それでもよい。人生そのものが、そのようなだ。仮名でも本舞台で演技できる。それが本命でもあった本誌の特色を無にしたくない。二百号突破の歴史は、その精一杯の喜びも悲しさも、しみ込んでいます。

——対談は本誌の明るい前途を思わせる実にけっこうな読物であったが、脱皮の底には常に以上述べた点もブレーキとして残して置きたく寸感まで——。

るといいますから、どっち道かまわれないじゃありませんか。桜町さん、緑さん、小川さんの後手姿はファンの連中が喜びますからね。大入袋間違いないと云う処です。ヘッヘッヘッ……」

物価が上って看板に偽りあり。さてまでも、気苦勞の多い話である……。

終

本格的責め映画待望

佐 度 喜 男

「大奥マル秘物語」という映画が当たっているようだ。『当っているようだ』というのは、この映画を見たわけでないからで、お色気だけでは興味がないし、まして会社ものでは大したことのないにきまっていると思うからだ。

この続編の方のスケジュールに、三人の美女たちが後ろ手に縄をかけられ転がされているシーンがある。ちょっと気になるが、縛られているとは云っても縄を巻きつけている程度のもの、まして本番では、縛りシーンなどを期待したら馬鹿を見るのがオチだろうから、見に行きたい気も起きない。

TVでは半七、平次、文吾、お仙と名目明かしの競演で捕ものブームの感があるが、この方もまた出演の女優をさがすのがひと苦労だ相だ。というのは、交渉された彼女たちはまず『縛られるシーン』があるかどうかを確かめるのだという。たとえお芝居であっても縛られるのはゴメンというのだから、俳優がカッコよさだけを見

せようと、楽をしてカセぐことだけを考えるようでは……とプロジューサー氏は大ボヤキだという。

ところでこの「大奥……」のヒットに便乗しようというのか、こんどはD社が「秘録シリーズ」の第一弾として「秘録おんな牢」を作るといふ。江戸時代の史実を忠実に描くと称するもので、主演は「痴人の愛」のナオミ役で大胆なビキニ姿を披露して、一躍名を売った安田道代。

主人殺しの罪に問われて、おんな牢という異常な環境に陥った主人公が、死の恐怖におびえながら体験するこの世の地獄の生活。そこにうごめくさまざまな女たち生態を再現するといふ。

「おんな牢」というものの生態については、山田風太郎の小説などでもしばしば取り上げられているのだが、確かに興味をひかれる材料で、当節流行の、お色気ものにも、残酷ものにも、どちらにも向く便利？な対象だ。つまり取り上げかたによってSM向きにもお

色気向きにもなるというわけだ。

今度の「秘録おんな牢」は会社ものではあり、「大奥……」に對抗して作るものだけに、SMむきには期待できないが、お色気の方は相当のものらしい。主演の安田も大張り切りで、衣類をはがれた素っ裸で身体を調べられる入牢シーンなども大胆に演ずるそうで、本人に言わせると「ハダカがいやならお風呂へもはいられないでしょう、とケナゲな口ぶりだといふ。このほか、女牢内の同性愛とか獄吏との関係など、生ぐさいお色気シーン、陰惨なリンチの数々が見られるといふ。

しかし、かつて「日本拷問刑罰史」という大ヒットを放ち、われわれSMファンを満足させてくれた独立プロ陣が、なぜこうした興味ある材料に手をつけなかったのか甚だ残念だ。「拷問刑罰史」やその後で作られた「拷問」にも、このおんな牢の生態はあったけれど少々物足りない。

ことに後者のキリシタン信者の処刑の話など、どうしてあの部分だけに絞って作らなかったのだろうかと思つたものだ。拷問の恐怖、牢内のリンチ、役人の「いたわり」と称する暴行など、これ以

編集部だより

○一月号の誌上に掲載した団鬼六氏のシナリオ『奴隷妻』はハリンチと縛りVという題で封切されたので、すでにごらんになられた方もあると思う。今月号に掲載したシナリオ『お姉ちゃん蒸発』は、△ダブルドッキングVという配給会社のきめた題名で十二月中、下旬に封切られる由。乞御期待。

○ファン待望の△花と蛇V前篇続篇合併号は十二月五日完成、お申込み下さった方には、早速送付した。これで静子夫人や京子嬢をはじめとしたヒロイン達が悪鬼連の手中に陥る発端から、汚辱と飼育のクライマックスシーンに至るまでを一本にして読破できる筈。

○緊縛モデルとして、その秀麗な肢体を見せていくくれた中河恵子嬢が俄然恵子夫人と変貌し、更に妊娠モデルとして登場。我々の目を楽しませてくれた。緊縛モデルから妊婦モデルへと鮮かな転換、これは珍しいケースである。一生に一度しかない初産の妊娠腹といふので、彼女の帰郷の直前、特にカラーで撮影した。

大映作品 「妖 花 伝」 のシーン



上のお膳立てはなかったのに、なまじオムニバスものにしたため損をしている。つまり三本作れるところを一本にしている。

こんどの「秘録」にくらべても、材料をぜいたくに使いすぎているようだ。ひとつだけの話でいいから、もっとじっくりと取り組んで、ファンをたんのうさせてほしい。

柔肌をきびしく縛める縄目にもだえる若い女の身に、ようしやなく加えられる羞恥と苦痛の拷問。石抱き、海老責め、吊し責めと、肉が裂け骨がきしむ地獄の責め苦に、脂汗をしたたらせ血の涙を流してのたうつ美女の姿は残酷美の極致だ。

「日本拷問刑罰史」もよかったけれど、あれは、いわば拷問刑罰の展示会のようなもので、ストーリーの方はむしろつけたりだった。今後のぞみたいのは、拷問刑罰をストーリーとした本格的SM映画。それも時代劇をお願いしたい。せっかく「縄目の芸術」を完成してくれた先祖たちを持っているのだから、この特権を十分楽しませてもらいたいものだ。会社ものに鼻をあかされないよう、独立プロ陣の奮起を望む。

○妊婦といえば、本年は丙午明けで至るところの街という街に、まんなまるいお腹をした婦人が目につく空前の妊娠ブームである。しかし、今迄の例から考えても、妊婦フォートの撮影となると、日が限定されるのと、被写体が妊婦だということでも中々厄介である。恵子さんは、妊婦の逆さ吊りなど強烈な縛りを望んでいたが、現実には実施できなかった。

○十二月号の奇クサロンで『ひそかなる私の願い』を載せた名古屋の三好留美さんは、いち早く辻村隆氏にハントされて、その可憐な緊縛姿態を誌上に飾った。毎月のカメラハントの執筆はきついと言いながらも新人のハントに意欲を燃やしている辻村氏なので、引続いて如何なる佳人が彼の縄の洗礼を受けるか御期待願いたい。

○「痴人の糧」を好評裡に完結して以来、しばらく創作の筆をおいていた山本一章氏が筆を新たに前作に劣らぬ力作を執筆中との連絡を受けた。一月号で特異な題材で初登場した清原麻耶からは、次のアウトラインについて電話連絡を受けていたが、今月号の締切には遂に間に合わなかった。いずれ誌上を飾れることと思う。



大三放浪記

放水鑑賞の記

豊川 大三

ある晴れた十月の日曜日、大三は妙な気まぐれから小旅行と洒落こんでみた。

波静かな内海を表立関にして、背後に連なる山脈には湯煙り上る温泉をその懷ろに抱えて風光明媚、山紫水明の偉容を誇る観光地である。ロープ・ウェイから見渡す眺望は、俗言ながら名工の手による苦心の景観を忍ばせ、澄みきった紺碧の秋空はもとより、金波銀波のキラメキは、感嘆の声を禁じ得ないまでに見惚れさせるものがあった。

たまたま、この五月、関西は宝塚、有馬を訪ねる機会に恵まれた大三は、六甲の百万ドルの夜景こそ打ち眺める機を逸したが、さぞかし値千金、目を見はるばかりの

夜景に相違ないものと買い求めた絵ハガキで想像したものである。

ところで諸君、大三が彼の六甲を訪れた時のことである。今、反すうしても生々しく耳裏に残っている快音の紹介をしよう。

そう、はるばる訪れたあの日、午後から小雨がパラつき、春雨ける神戸港を見下していた大三、車中で飲み下したビールのなせる業、ほろ酔いの漫歩に、たまたま尿意を催し、かたわらの公衆便所や彼方にと、探索のいと間もあらばこそ、かたわらのトイレに駆け込んだ次第。

丁度、折りしも前方数歩のところをコートに召した中年の女性。やはり耐えかねていたと見え、そさくさと個室へ消えたのである。

大三と時を同じくして激しい水音のコーラス……。大三、思わずニタリと忍び笑いを洩らした次第。まことに御見事なる放水の玉音。かくも女性の烈しきものと、水洗でない公衆便所の、ほほえましいエピソードのお粗末。

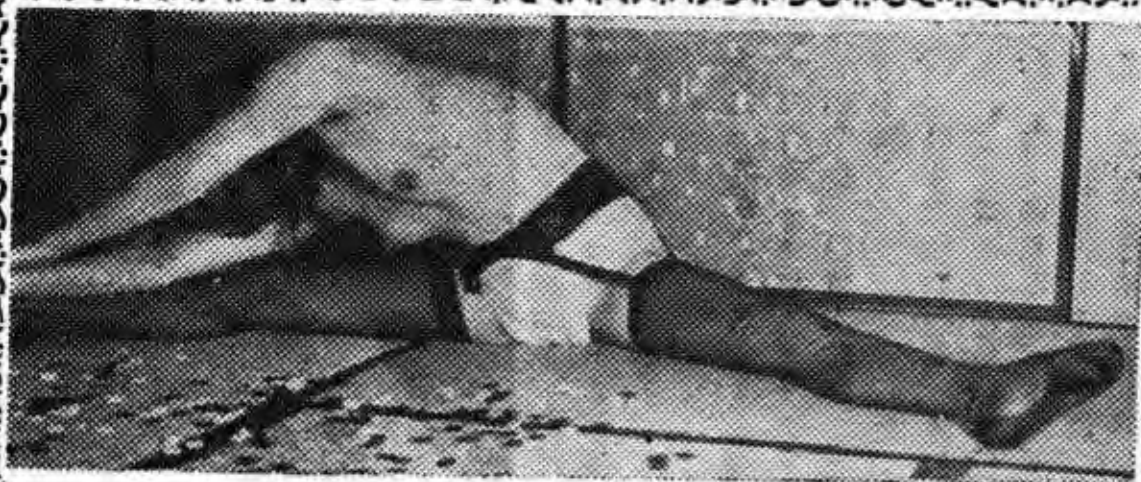
さて、お立会い！ お急ぎでない方は今しばらく。予期せぬ出来事とは、かくの如し。まったくもって赤裸々で、それでいて妙に琴線をゆさぶる何物かを秘めているもの。話を戻そう。

高台から海を眺めていた大三。この地でも尿意を覚え、促されるまま、トイレよ、いずこ？ と見まわす間に、松林のほとり、人目につかぬ恰好の場所に朽ちた小屋建ての便所を見つけ、あたふたと駆け込んだところ、意外や意外、奇妙な連中に直面、思わず知らず息を呑んでしまった。松の樹立ちに囲まれた四囲、隠遁と所在するこの公衆便所の入口で、それも女性用のドアから、そう、年の頃は二十二、三、一見、工員風と覚しき男が二人、何やらいわくありきな忍び笑いを洩らしながら、突如とび出してきたのである。

後は声にならぬ妙な笑い声で、お互いによく頑張ったものよとばかりに、クモの巣を払いながら、後も見ずに山道へ立ち消えた。

大三、「これは覗き！」と直感時刻は午後四時が少し前。さすがに観光客の数も減り、一時の賑いも嘘のよう。もの好きで好奇心の旺盛なる大三。幸い人影を認めないのを機に、早速、調査にのり出した。ドアを閉め、高鳴る鼓動を押し静めながら仕切りの壁をアチコチ探す間もなく、フトそこに恰好の小穴が巧妙に開けられて、隣室へ駆け込む女性の一切を人知れず傍観出来る仕組みに、大三、舌を巻いたものである。

と、災難？ はい、我が身に振りかかってくるものやら、突然、靴音がして入口に近い——もつとも二つしかないのだから、つまり大三の隣りへ、これ又、憎いほどきれいなバス・ガイド嬢が、せわし気にとび込むが早く、脱ぐ手も見せぬ素早さで、誰れはばからぬ快心の放水。余程堪えていたのである。思いもかけず、一部始終を見せて頂いた大三は、白蓮の大輪を忍ばせる豊満な下肢にウットリとしながら、彼女が遠去った頃を見計って退散したお粗末記。



アクロバット

謳歌

京最亜久呂



女体とは柔軟なものと知ったのはいつの頃であつたろう。
女体とは美しいものと知ったのは更に以前のことだつたろう。
女体とはかくも自分を魅きつけるものかと驚いたのを覚えている。
女体とは骨のないものかと疑つたのはアクロの妙技に接した時だった。
女体とは益々自分を放してくれないものだと思つてから既に久しい。

仇安堂肌刺青

小妻あつさ筆



小妻

前髪と女器切腹

室井亜砂路筆



僕のイメージ画集



S M きれぎれ帖

黒井 珍 平

芸術の秋、読書週間、交通安全良書百選エトセトラあまり集中するので、毎年の事ながら。

みない運動のポスターと並んで駅に、今をときめくイラストレーターの広告「O嬢の物語」どこやらで上演？ びっくりした。とても行くひまなけれども、あれを芝居にして上演とはどういう演出なのかしら、首をかしげる。もし見た方は、印象記を書いて欲しい。もっとも「悪徳の栄え」という洋画があったから、題名にまどわされない様に。

いつも日曜日の午後一時頃で「F6セブン」が出ない。二週間目だ。本屋さんにきいたら、アウトとの事。別の所では又出るでし

よう等といっている。まあよく知らないが、若いものからやられて行くらしい。「バイタリティー」「潮流ジャーナル」「ダウン」

(月刊)みな若死で、ついに「F6」か。「がんばれシリーズ」が空しく、よくがんばりました。これで私のよんでいる週刊誌は朝日ジャーナル一つのみとなった。

「アルス・アマトリア」読む。一昔前の日本の雑誌ではない。本物のアルス・アマトリアだ。筑摩書房、古代文字(ギリシヤ、ローマ小説集)64、オウイデイウス作だ。二千年も前の老詩人の愛の技術、いわゆるテクニクではない。もっと心理的なしみじみとした愛の手ほどきだ。オウイデイウスも皇帝ににまれ島流し。メタモルフェーズを残し西洋にギリシヤ神話をつたえた元祖。

この頃のOP映画の広告は嘗々とサディズム云々。ピンク変じて

Sとなる。たまたまよくよくひまのある時、見るけれど、題名は片はじから忘れて終う。面白い。その面白いのはわき役の人々で、前の一本で社長、次なるはやくざ、次に学者。はらはらさせる女王様達の若い男たちは、善良無比なる恋人、次に大写真家、次にすけこまし、いづれこのどの映画館でも一人十役位かるくこなしている顔なじみ。そんなおっさんに、いつか駅であって、妙にしたしみを感じた。あと、面白いのは、ロケでここは、新宿何丁目のあの角だ。

ああ上野のあの坂のどこらへんだといった興味。例のあのぬればというのは、男はいつもズボンをはいて女は決ってぬがされて、ある所はカット。客の方は知っているし、私のような変ちくりんな奴は、特に映倫がうるさく言うような所はまるつきり興味がないから、ロケとわき役のおじさんの顔をみたら、ただタイクツうつらうつら、ただしばりとなると、か

っと目をあける。それでも後手でない時はうつうつとして楽しまず。又これも約束事らしく、必ず悪はほろびて、ばったばったと殺されるんだから、何だか、お前は悪い事を楽しんでるんだぞと念をおされてるようで、この頃はあんまり見ない。

ファールブルの「昆虫記」にほれこんで、全く我乍らいろいろなものにこっけしてしまうパラノイア(偏執狂)だ。これは我が妻が、私の事を名づけているらしい。さり乍ら、あの一寸の虫にも、どころか、ファールブルにちりばめられた虫のすばらしい(ちょっと何ともいえない)生活には、びっくり以外に言葉をしらない。

虫けら共と人間が思っているその虫が、いかなる本能によって生活しているか。こういう細かい分析の目でみたら、人間の本能のSMも、すばらしいひらめきがあるのではないか。「奇ク」と「昆虫記」関係ない話で申し訳ないが、ファールブルがギリシヤ神話にも親しかった所から、つい近づいて終った。これもひとえに黒淵さんの「アリアドネ」のおかげと感謝いたします。戦後初の国葬。つつしんで吉田翁のめいふくを祈る。

奇譚クラブ

昭和43年2月号

(1968年・2月号<第22巻第3号・通刊第237号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

哀 繩 の 説

花 影

叢

A (羽鳥水江の独りごと——羽鳥水江)
十一月号の「憎繩の記」を読んでショックを受け、大いに考えさせられました。

(中略) この野蛮で、無神経、卑怯、強いものに対して弱く、その劣等感を自分より弱いものの上に爆発させて、心の通い合いなどということをまったく無視して、妻を奴隷と考へ、やたらに強がって見せる男、それも抵抗にあうや否や、フテくされてメチャメチャの態度になり、若い無邪気な妻を、おどかさうとする。どう形容しても、し足りない下劣な本質的な意味で変質者、異常性格者である男——その文の筆者の夫——にたいして、心からフンガイしました。

B (読者通信——東京練馬・泰)
こういったものこそ、取り上げられるべき問題であり、SMの美をいかにも、もったい

ぶつてとかれる先生方の言葉より、さらに人間の本質を探るものであると思います。ここにあらわれた女性の言葉は、或は人間が本来、SとMの性向を持つとって真面目な顔をして唱え、信じこんでいることの、偽りを述べているのかもしれない。

以上二篇は寺宇治久美「憎繩の記」に対する反響である。A感覚のバイオニヤ、羽鳥さんと同じくショックを受けたもののひとりとして大いに考えずにはいられない。

いつもながらおさまった感じのない羽鳥さんの率直、真摯なひとがらは敬愛するところであり、寺宇治さんの夫なる人はまこと、その通りの男であろうと思う。しかし、私のショックは、彼のなかに、あまりにも私と相似するところを見たという一事がある。したが

って久美さんに全面的に同情し、卒直にフンガイできない。ちよつとドロップした感情がある。

なおショックの内容を考えてみると、奇クのしめす全体的な傾向、微温的な、仲間どうしのなれあいにおちた、グループとしての独善的な、多少いい気な気分に対する、私自身をまきこんでいるところの気分への見事な痛棒だという事にある。誌面をいどっている夫婦プレイ、あるいは辻村さん山本さんに代表されるルポルタージュの世界、これは無論読者が求めるがゆえ記事中の花形たりうるのであろうし、その世界そのものはうらやましい限りのもので私が非難できるはずもないことだ。にもかかわらずその世界に私もすぐにも参加できそうな、生活思想をちよつと変えれば容易に得られる果実のような、一種甘い

かおりが愚かな私の錯覚をさそう。事例のこ
とごとく一日では到らない道の遠くにあるこ
とは承知しつつも奇巧の現実の見せる近さ
が、距離感を失わせる。ショックは、どうや
ら私の足もとの生活そのものを痛烈に思いだ
させてくれたようだ。泰さんの指摘されたよ
うに信じこんでいることの偽りが事実にはあ
るのかもしれない。SMは、一般的性向であ
るのか。美などに寄りかかっていてすむこと
だろうか？ 疑わしい。ドラマを見ていて涙
に息をつめるが、終ってみれば俳優と客は別
れて小屋の外に散り、ひたいの汗に風を感じ
て身震いするのが結末ではないのか？

独りになってみると、私はただ哀しいだけ
だ。安っぽいセンチメンタルがその本質かも
しれない。冷えた頭のなかに、ふいにぽっか
りあいた空洞の底から暗く、やりきれないわ
びしい風が吹きあがる。

寺宇治さんの手記に直接あれこれいうのも
無意味な気もする。ただ彼女のいう運命とい
うものの行くえ、私が手記を読んだというそ
れだけの接点、かすかに生じた火花に照らし
だされた夫、彼とどこかでつながる私自身の
運命が気にかかる。想いはめぐりつつ手記の
なかの彼に焦点をあわせていく。

彼がもつ性格、経歴などを、同記だけで押
しはかったり、断定を行なったりすることは

至当ではないだろうが、私に共鳴する部分だ
け、あくまで部分として問題にしたい。

二八才の男の初婚といえは一般には普通だ
が、生理的には晩いといえるだろう。十年の
独身生活中、セックスをいかに処理したかは
知らないが、彼の性向から考えると開放的で
はありえなかったろう。その内容に立ちいる
までもなく、いよいよ自分の自由にすること
のできる女を目前にした時、熾烈な熱望の
炎にやかれて、相手をよく観察する余裕はと
てももてなかっただろう。記中の筆者も、新
婚当時の自身の感情を「べた惚れ」と表現し
ている。べたとは、文字通りの距離などまる
でない状態をいったものだろう。盲目的なし
がみつきといえる。彼とすれば、そのなかで
もかねて念願のスケージュールを具体化した
という不安だ。抵抗されることはSの快的な
レパートリーだが、現実には新婚の夫婦間で暴
行が行われ、それがすぐさま快感に結びつく
などと考えるのは愚であらう。相手を失うか
も知れない不安感の方が強くはたらく、めっ
たに力わざなどではしない。おずおずと切
りだした彼の信条とするところの話を、同記
は極めて好意的に誠意をもって聞いたとして
いる。はじめがむずかしいという予期に反し
て彼女は柔順であり、反応もすばらしい。愛
の表現は大いに彼には気にいった。柔順な女

はしばしばM性が強いなどという俗見的な先
入感ぐらいはあったかもしれない。とにかく
彼にとって、至福への道はいとも容易に開い
た、かに見えた。

彼の性向ははめられたものではない。社会
的に指弾されるべきものだ。かつて彼は、自
分の性向に気づくと同時に、何か後暗い後め
たい気分と同居して来た。それから逃げよう
とはかり、酒を飲み、乱れ、またその反対に
ピューリタンのような生活に指向し、または学問
芸術技術の世界に韜晦をはかり、一言にして
いえば苦しんできた。結果、すべての努力は
そのことに関しては何もなく、どうしても正
面から顔つきあわさなければならぬ仕儀に
なる。そこで居直る気もおこる。現在の道徳
に疑念を持つ契機にもなる。後暗いものを後
暗いままに生きていくたぐいはない。自己をあ
くまで正当化しないではすまない衝動の発
は恐らくここにある。後暗さを感じる時期が
なければ、明らかにS性をもつ人でも自己正
当化は必要なことだ。後暗さを感じるに長
ければ長いほど、深くなれば深いほど正当化
の論理は深刻に要求され、対社会的に復讐化
したい気持も自己内部に重くつもっていく。
内面に論理だてながら、だれにも口にだして
いえないことも苦痛である。長い沈黙のあ
と、彼ははじめて口をきける相手を見いだし
た。相手にとってその話は、理解に絶する飛

躍的なものだ、くらいの判断はついたろうが、ともかく理解しようとかかる妻の姿勢に、彼はすばらしい聞き手を発見した。べた惚れ感、一体感も論理のスムーズな移行を助け、彼を錯覚させたかもしれない。思想的なアジテーターとして、何か詩的な高揚感にかけられたかもしれない。ただ残念なことに、相手の状態が彼にはまるっきりわかっていなかった。彼が嬉しそうに、すごく、夢中に、なっている間に、妻はしばらく、痛かった、苦しかった、だけに過ぎず、どうしてこんなにしなければいけないのかと怒りをつもらせつつあった。

ふいの頓挫がやってきた。今まで柔順だった妻がいきなり口答えし、しばらくすることが寒気がするなどという。彼は、面喰った。彼のスケジュールにないことがあった。いやおこりつつある。虫のいどころが悪いのだろうぐらいにはじめ思ってみたが、なかなか強情だ。彼としても意地になった。正当化論理をぶちあげた以上引っこみがつかない。とぐずぐずしているうち事態は悪化をたどるばかりだ。彼は弱気になる。やはりおれの性向は一般に受け入れられないものなのだろうか。正当化など、夫婦プレーなどといい気になっていたのが、急にうすら寒いものになって返ってくる。酒だ。その世界は孤独で物がなく、醒めてみればやり切れない所だが、なん

といっても馴染み深い居こちのよく知った世界だ。妻はやはり他人だ。何を考えてるか見当もつかない。くそくらえだ。

抵抗にあうやいなや、フテくされてメチャメチャの態度になり、若い無邪気な妻をおどかさそうとする、どう形容してもしたりない、下劣な、本質的な意味で変質者、という彼に対する評言はあたってはいる。

彼はその後、まったく一方的に妻を無視して縛り責め苛むのだ。彼の意が、妻の快楽をそれでもなおひきだそうとはかっているらしいことは推察できるが、事は破局へむかって突っ走っている。彼が異常性格者であることは別として、彼は単に失敗しただけなのだろうか？ ならば話は簡単だ。手記をひとつの警鐘と聞き、自分はいまよくやればよいのだ。少しづつ、控え目に自分の性癖を誠意をもってうちあげ、協力を頼んだら、幸福なM夫人になったかも知れないこの若妻、と羽鳥さんも可能性を指摘されている。しかし、それで事は終りだろうか？

後になって、手記をとうして私たちは妻の心理を追う事ができ、したがってとるべき手段も思いうかぶ。彼の幼稚さもわかる。しかし当時そのものに出会って、いったいうまくやれたはずの人間は、パーセンテージとしてどのくらいあるか。彼は、エゴイストで、意

地っ張り、気弱な変態男だが、一面ごく普通の二八才の男なのだ。老成して見えたところで、一見柔順な妻のなかの嫌悪感などは、いわれてみるまで察することなど、とてもできはしない。一度挫折したあと、卒直に話しあってみようとした態度は責められる。しかし、その話しは、

「キミの心の中から本当に女としての喜びをひきだしてやりたい。どうでもして下さい、どんなことでも意のままです、という形を表現する。肌に紐をくいこませたら、実感として柔順の気持ちになるだろう。しばらくでも独占しようとしてくれる夫に対して、愛情をかきたてられて喜びを覚える。そうなるのが女であり妻なんだ……」

という事に尽きている。呆れた身勝手な話だが、彼は十年の孤独のうちに、その話を構築したのだ。お恥ずかしいくらいの話だが、それがまぎれもなく現実なのだろう。

文才まことに豊かな才媛であろう寺宇治夫人も、結局は理解しようと思つた事を理解せず終ったようだ。このことも一種の幼なさを示していないか。

二一才の私には二八才の年令に似あわぬ落着きのあった夫が、すごく頼り甲斐のあるように思えたし、事にあたったの処理方法も、悪くいえば中年男の匂いがする程の読みの深さをみせ、無条件で懐にとびこんで行ける素

晴しい人に想えたのです。

という文言にもアブナッかしさを見る。事実、彼は事にあたって処理をあやまり、ポロを出した結果になったし、彼女の見た目がアテにならなかったことは証明された。もともとなぜ頼り甲斐のある人を求めねばならないのだろう。人に寄りかかろうとする意識が、どこで納得ずくの愛とすり変わるのであろう。

「お前はしばらくれている時だけが美しい」

「じゃあ、しばらくれていない時には美しくはないっていう事ね」

「……」

「しばらくしないと美しくないような女でどうもすみませんでした」

「何もそんな意味じゃあ……。今夜はどうにかしているよ、キミは」

そうです、どうにかしていたんです。いえ、どうにかさせられたのです。

全くどうにかしているとしたか受けとりようがない。今まで柔順な妻がいきなりそんな事をいいだしては、彼でなくともとまどう。女特有の無論理性などといってはじまる話ではない。話はトンチンカンでも、問題はその内面なのだ。しかしまた話しの筋だてのみにとらわれるのは男の特性である。

幼い夫と妻が傷つけあった。結局はそれだけのことも知れない。老成した者が片側にでもいたらうまくいったかもしれない。老成

とはしかし何か？ 若干の才能と、意識的な

訓練が作るテクニクだと私は思う。女になれるには場数と研究心が必要なのだ。そういった意味で、としだけとっても普通の人は老成などせずに、一生を終るのだろう。一般的に、無意識に意識的になる事をさせている。

ベテランのセールスマンが育ちにくいことも同じような心理が抵抗するからだ。その世界のSMとまた異った暗さが、人の向日性と衝突するからだ。エゴイズムは純真にエゴイズムのままに伸びたがっている。しかし伸びることはできない。屈曲し、邪魔を押しわけ、

あくまで伸びようとするひとつの手段が老成である。普通人にできることは、単に日にむかい顔だけをむけて伸びることを待つだけだ。何事も耐えることだけだ。男に頼りたいとは普通の女の願いだろう。女はそこですでに屈折している。みずからの力以外を借りて伸びようとする。女の暗黒が見える。何が可愛い、妻だ。

しかし本然的であるがゆえに、その女たちのもっている暗さを男は哀しむ。

縄。傷つけあう事。下劣な男。憎繩の記の持っている人生の普遍性に胸は痛むのだ。とてもフンガイなどはしてられない。

寺宇治さんをことさらに傷つけるような事

を、私はいつているのかも知れない。本意ではない。本意は「憎繩の記」を読んだだけで、私は強くこのひとにひかれるのだ。出来ることなら、破局は避けてもらいたい。ここで別れてしまえば、恐らく彼も彼女も、さくばくとした人生を送ることになりそう。彼女は傷つくことで男を知る機会をいっし、頑くなく貝のように殻にとじこもってしまうだろう。彼としてもみずから選んだとはいえず、ふたたびまともに女と見合うことはないのではない。それが人生さ、といってしまうば身もふたもない。

私が彼女に執着をおぼえる百層倍のものが彼にはあるに違いない。すなおな形で、もとに戻る（もとなどは元来ないが）はずもないが、人の出会いは執着によって運命になるのである。

幼いものどうしが傷つけあうことは、いかんともしがたい。しかしそれを現実としてうけとめた時、人はもうひとつの世界をみるこ

とができるのではないだろうか。単なる老成は、豊かな実りを約束してはいまい。弱者はいつまでも弱者であるとは限らない。理屈になりそうなので、このくらいにします。

国策という名の下に



こんな夢を見た……
何んとか戦争がもうすぐ始まるとうとう
きざしが、そこかしこに満ち溢れて、丁度焚
火の青い煙が無気味に這い廻るやうに何か
しら慌ただしく、かつ、え辛^{から}っぽい氣運が流

ではなく森や谷のある起伏のはげしい郊外ら
しく、それも辺鄙な日本内地のようでもある
し、また遙かなる中国大陸のようでもあった。
ご承知のように戦争というものは、いろい
ろと複雑怪奇な、もろもろの資材と準備が必

れていた。この何
んとなく落ちつか
ない、薄気味悪い
きざしは筆者がそ
の昔、カーキ色の
軍服で御奉公して
いた頃、幾回とな
く味わった、いわ
ば、またと得難い
貴重な「体験」な
のだから、今回も
ちどころに肌で
ピンと感じ取っ
たものらしい。
ただ残念なこと
に、背景となつた
処が何処だか、さ
っぱり判らない。
黄色く赤茶けた泥
の丘が、切れ目も
なく連らなってい
るあたりから察す
ると、どうも都会

要である。もちろん武器弾薬は、そのさいた
るものであるが、これをぶつ飛ばす将兵の
朝晩の起居、食事、レジャーなども一切ない
がしろにすることは許されないから、今はや
りの多目的ダム同様に、多士済々その内容た
るや誠に大変なものであった。

中でも当時の言葉で云った「慰安」という
名の施設は、何んといつても、かくれた軍刀
の養い場処であつたから、この方面の担当者
は誰に限らず、なみなみならぬ苦勞を重ねた
ものである。上官から呼ばれたので、早速、
佐官室へ行くと

「畑違いの貴官には誠に済まぬが、竜花屯の
日華人街へ赴き、一つ樓主連とかけ合つては
呉れまいか。実は、どうしても早急に隊付特
殊看護婦つまり慰安婦（注：別名なでしこ挺
身隊とも云われたもの）となつて貰う娘を一
人でも多く……と云いたいのが急にそうも行くま
いけれど、少くとも二十名位の頭数は準備せ
んと、これからの戦力に影響する。それで目
ぼしい者はゆうべからじゃんこじゃんこ強制
引立て某処に軟禁中であるが、この方は遠慮
容赦なくどしどし進めるとして、肝心の女達
をまとめて収容し營業させる処は、治安上さ
し当って竜花屯しかないのだ。そこで軍命令
として樓主連にこの旨を伝達し、よろしく召
抱えの交渉をして貰いたい。よいな……」
というご託宣なのである。

当時、私は貨物や人員の輸送を荒らっぽく担当していたので、このようなデリケートな使者は誠に苦手中の苦手であったが、軍上層部の意向とあらば、出来ませんと云ってこのまま引き下る訳けにも行かなかった。

さて夢と云うものは、しばしば途中の経過が要領よく省略されるものと見えて、云われた通り先方へすっ飛んで行くと、いつの間にかやら有象無象の楼主達は、ちゃんと集っていた。

「左様ですか、願ってもないことで助かります。このところ、てんで女ひでりで日本内地からは一人も渡って来ません。私共も、これで儲けようなんて、そんなケチな根性はこれっぽちも持っておりませんから、ご安心下さいまし。どうか活きの良い娘達を、一刻も早く拝ませて下さいまし。一同、これこの通りです。」

と、まるで拝まんばかりの懇願の形には、すっかり驚いた。

軍の命令が一方的なら、受ける側も相当なものだと、半ば呆れて即座に廻れ右をして隊へ戻って来た。ここで当然再び上官室へ行つて事の次第を復命しなければならぬのに、どっかい夢の中だと見えて探せども佐官殿の顔がさっぱり見当らない。

それにしても竜花屯までは車で十里運ばなければならぬが、その輸送車の置いてある

処、これまた隊内でもかなりの遠方だから、気の毒でも娘さん達は仮の軟禁所から一応、車庫まで炎天下を歩いて貰わねばならなかった。

すると、引卒者もろくすっぽついていないのに、ゾロゾロ問題の娘達が断りもせず自発的に、しかも数珠つなぎになって建物のかげから出て来たから、またまたびっくりさせられたのである。

みんな申合わせたように和服姿で、中には戦時中のモンペみたいな安易な服装の者も二、三、混ってはいいたが、大部分は今生の一張羅で、おまけに刺繍付の豪華な衣裳をまとっていた。不思議なことにもきものの地色——つまり色合いは判別出来なかったが、柄の方は遠方からも割方よく見えたから、はっきり覚えていた。一番先頭の松に鶴の模様は、恐らく婚約したばかりの娘さんなのだろう。豪華な巾広の西陣織袋帯を胸高に結び、ふくら

雀結びとして背中に高く背負いあげていた。そして中振位の長さの袂が後ろの方へ突き出されていたので、どうやら両手は前結びに縛られているらしい。続いてチューリップやすみれの花を肩から裾にかけて付け下げ風に散らした娘さんは、まだ二十才になるかならぬ位の乙女だが、髪に挿した簪が折柄の陽ざしにキラキラと映えて、とても印象的だった。この娘さんも前結びに両手を縛られて、音も

なくうなだれて眼の前をすうすうと歩いて行く。そのほか、いちいち挙げたらきりが無いが、揃いも揃ってファッションモデル風の美女ばかりは、この際何んとしても痛々しい。

こうなると助平根性を出して、粹な高島田の一人や二人は、きつと現われてくるだろうと心待ちに待っていたが、どういふ風の吹き廻りしか、今回は桃割れ姿一つも見られなかった。考えてみると、ここは太平ムードのきものショウでもなんでもないのだ。態のいい戦場の生地獄なのだ。道理で遠くの方で監視している奴は全然、味方の兵隊ではなく虎の皮の褌をした異様な青鬼赤鬼のようでもあった。白足袋姿の女達は、それでも黙々として車庫の方へ向って、ひたすら歩いて行く。

誰も口をきかない。テレビ・カメラで画面を変えようとして、女達の行列を真正面から別の望遠レンズでとらえてみると、訪問着や振袖の袂が僅かばかり左右に揺れて、うつ向いたひさしのはつれ髪が、心なしに風に流れている。ここで輸送指揮官である私は、手をこまねいて考えた。

一体この世の中に男と女がいて、いつもどうして女ばかりがこのような目に逢わされるんだろう。これでは、どう見たって、そして何処へ行こうと男の玩具ではないか。成程、表向きは軍の命令なのだから、至上命令でも

あり絶対命令である以上、なんびとも服従しなくてはなるまいが、一寸ひねって考えてみると、戦力増強とは笑わせやがる。ハッスルすればする程、戦力減耗となるではないか……

こう思ったから私は馳け出した。精の続く限り走った。そして女達の行列に、やっこのことで追いつくと

「おいッ君達は一体、どうなんだ？ 俺は君達と同じ国の皇軍の将校だ。こんなことって全然、恥と思わないのか。まだ死ぬるのは早い。元へ戻れッ。そして胸に手を当てて、よく考えるのだ。何んだって早やまったことをするんだい。どいつもこいつも美しい顔をしががって……」

と自分でも論旨がよく判らぬことを、しかも大声でどなったのである。

すると小川真由美のような、どこか哀愁味を帯びた女性が意味深にニタツと微笑して、初めて口をきいた。「すべてはお国の為、国策」と云われて、素直に誘拐されました。これでも一時は頑強に勢一杯あちらこちらと逃げ廻ったのですが、どんな処にも追手が現われて、遂に捕えられたのです。皆さん、皆さんもそうでしょう。お国の為ですもの、あたし達、女で出来ることなら何んでも致しますわ。まして兵隊さんの為になることなら……と、すっかり諦めたのです。いえ、諦めさ

せられたのです。もう怖くも何んともありません。どうぞ、このまま、だまって車で運んで下さいまし。でないと、夜が明けてしまします……」

「おい、おいッ、真ひる間だぞ。今は……何んということ云う奴等だ。いや、娘共だ。いやしくも花も恥じろ大和撫子ともあろうものが、虫けら見たいに扱われて自ら進んで竜花屯行を希望するとは……」

「ホッホッホッ……何んて無粋な将校さんでしょう。嫌がっていてもいない者を車に乗せたってバチがあたらないわよ。折角こうやって、おとなしく拐えられたのに……」

誠に赤い気焔、当るべからざるの状況と相なった。すると古参の下士官が、すかさずそばから助言（というよりは軍隊言葉で云う意見具申とやら）をし始めたから、話は長くなる。

「隊長殿、いつそのこと、娘達を後手にひっくくって無蓋車で運んだら、どうでしょう。少々生意気ではありませんか。このままでは軍の威信にもかかわります。兵隊達に手伝わせて、早速ひっくりくりましょう。それが最上策と考えます。それより、もう方法は他にありません。おいッ、山下兵長。竜花屯へ行く途中の松花江の橋梁は敵さんに焼かれたと聞いたが、まだ修理は出来ておらんじやろうか？ 隊長殿、この際、河床強行突破しなければ

なりません。ひょっとすると、女共は一人宛肩車にせんと、あの急流は渡れないかも知れません。面白いじゃありませんか。一つ、私共にやらせて下さい。こりゃ、まるで大井川の川止めみたいなものぞ……」

と独りで喋っている。夢が国境を越えて、あちこちよたり始めたとは、きつとこのようなことを云うのだろう。

「ようし、判った。一切、お前達の希望通りにさせてやる。但し、上官の命により大和撫子達はどんなことがあっても絶対に傷けてはいけない。軍の唯一の貴重品だから……」

と、われながら粋な裁きをしたことに誇りを感じた私は、兎もすれば手中から田んぼの泥鰌や海底の海鼠のようにヌラリクラリと逃げ去ろうとする娘達の前に、通せんぼするよう思い切り両手をあげて突立った。何んの示威をやったのか自分でも判らなかつた。そして、またどなった……

「おい、全体、止まれッ。止まれと云ったら、そのまま止まるんだ。いいね、あなたがたは、これから暫くの間、小官の指揮圈を離れるから冷静に行動して貰いたい。決して黄色い金切声などあげてはいけない。ようし、始め……」

の号令で、バラバラバラッとなんてこのことあるを察し、予め待機していた兵隊達は娘子軍めがけて殺到したのである。

と申しても別に打つ、蹴る、なぐるの儀に及んだのではない。つまり、云うなれば丁寧かつ慎重に輸送隊の精神を発揮し、その面目にかけても……という殊勝な心構えで、娘子軍をよろしく、じわりじわりと梱包し始めたのである。

その詳細は、どうせ判り切ったことであるから、殊更に誌上で力めば力む程嘘が誠になつて話が誇大化して来る。しかし折角の機会だからお許しを頂いて、その誇大化された部分を、ほんのちよっぴりご披露してみたい。ただし、うなされたり、どなったりして見た夢の世界の事だから、空に流れる浮雲みたいに掴みどころの無い処は平らに、ご勘弁願いたいのである。

さて、バラバラバラッと殺到したむくつき兵隊達は、何んとその数二十人近い娘共を即座に銃剣の尻で三等分し、それぞれのグループから一人宛せかすように前方の営庭へ曳き出し、用意のよりのかかった細引で、そらッ両手首だ。おっと、お次は帯の上部を。そして最後は胸をぐるりと二重巻きして、ぐっとしぼって。ハイ、一丁上り……てな具合に、誠に要領よく片づけて行つた。

なんせ十把一からげの大量生産だから、中には手首が余りにもあがり過ぎて背中中の帯のてっぺんにせり上り、美観上好ましくからざる恰好のものも出て来た。また、ひどくおきや

んな娘ッ子は、赤い蹴出しを蹴ったせいでもあるまいが、裾前が乱れて合わず、親切な毛むくじゃらの兵隊の手で下着から一枚一枚直して貰っている。

「嫌だア、そんなことしちゃあ……」などと、半ば嬉し泣きながら存外、黄色いさげび声をはりあげている娘は、そう云えば何処かで見た女のようにもある……。

私は、何んだか男性禁制の大奥で非番の若い腰元衆が、天下無類の御助平でいらっしやる殿様の命令で、ああでもない、しからばこうでもないと弄ぶられているような錯覚に陥っていた。何にしろ指揮権はとうの昔、放棄しているのだから、ただ離れた処から指を咥えて眺めているばかりで、こりゃ何んとかしなくては、次第によつては飛んでもない事になるぞ……と氣ばかりあせつても、手足は重石をつけられたように、ぐうとも動かなかつた。

さあこうなると、指揮官としての致命的な名折れである。今様いざり勝五郎でもあるまいし、五体揃うて何故、下半身がこのように凍りついたンだろう。

いや、もう焦りましたねえ。動かぬ手足をバタバタさせながら、しかも、有りったけの蜜声をはりあげて、

「ご通行の皆さま。この分で行くと、私の部下である兵隊達は多分、即刻に青鬼赤鬼と化

して、純心無垢、汚れを知らぬ無抵抗の娘共を、あれ、あのように後手に縛りあげて……見えますか、あんなに残酷に着物ぐるみ縛りあげて、可哀いそうじゃありませんか。ご同情願います。

それを事もあろうに女衞にも等しい海千山千の日華人の手に渡そうなして……土台、人間のしでかす業ではありません、犬畜生です。私はご覧の通り微力、且つ無能力なのであります。一個人の力で何が出来ますか？ どうか第三国人の手に渡る前に女達を、一人でも多く救つてやって下さい。

くどいようですが女を殺すか、はたまた軍命令を破棄するか、二つのうちのいずれか一つ、この機に及んで重営倉が何んです？ 好き好きと現実には、月とすっぽんのようには違ひます。縛られた女が好きでも、この現実はお互い、同志として断じて許すことは出来ません。どうか、清き助っ人を、ひたすら懇願する次第であります。御清聴を感謝します……」

「ホッホッホッ……貴方ったら、あたしの寝巻をしっぺ剥がして、小脇に抱え込んだりして……政界演説ではあるまいし、何を騒いでいらつしたンですの。おかげで、あたし、お腰一枚で風邪をひいちゃったわよ。馬鹿ねえ女が縛られた夢なんぞ見たりして……」二十年前の日記帳の一頁なのである——。 終り

私のマゾ雑記帳



馬場好男

ベトナムの戦争は、泥沼のような様相を呈している。アメリカは世界の非難をうけながらも、つぎつぎと兵隊を増やしている。北ベトナムの空爆も熾烈をきわめ、かつての帝国陸軍が、中国大陸に兵を送っていた姿とよく似ている。戦いには勝っても国力も国民も疲れ果てた日本と違って、アメリカの国力は巨大だからよいが、国民感情としては平和を求めている声が強いという。

過日の新聞のニュース写真に、撃墜された

アメリカの塔乗員を捕りよとした北ベトナムの婦人兵が、ライフル銃をつきつけて基地に連行してゆく場面があった。

北ベトナム側の提供した写真らしかったがアメリカの中尉は両手を頭にあげたまま、まだ少女のおもかげがぬけきれない婦人兵に、引きたてられている。恐らくは女兵と侮ってはじめは抵抗したのではないかと思うが、ライフルの銃台で撲られたり、蹴られたりしての連行でないかと思う。

このアメリカ兵は、基地に連れ去られると、拷問を加えられることであろう。それを冷やかな眼でこの婦人兵が見るのだろう。戦場には、目をおおうようなサディズムがくりひろげられる。

たとえば、マゾヒストがいて、このような情景に接しても、とても自分が苛められる側にはたてまい。空想は出来ても、現実には接したら、自分が生きるか死ぬかの「どたん場」に追いつめられたら、やはり相手を倒すしかな

い。

ずっと前に、奇譚クラブに出ていたが、この本には犯罪がない、みんな合意性のあるものばかりだが、これだからよいのだという記事を見たことがあった。

これは本当にそうだと思う。サディズムもマゾヒズムも何らかの合意があると、相手を殺したり、傷つけたりはしない。

尤もマゾでない女性を、苦しめるところに面白い点もあるのかも知れないが、これなどはマゾに育てあげる過程の一つということだろうか。最近、平和が続きすぎているせいか、刺げきのものを求める欲望が、残酷、エロ、スリルと走り、サド、マゾも大きくクローズアップされている。

有難い世相ではあるが、サド、マゾの人種としては、戦争のようなサド、マゾでなく、共存共栄の平和なためのものでありたいと希望ものである。

東京の晴海埠頭の会場で、第十四回東京モーターショウが、十月二十六日より開幕された。ニューカーを集めた自動車の祭典だが、ことしの出品はオートバイ、トラックまで含めて六百五十五台という。

然し人気の焦点は、やはり二百二十二台の乗用車で、中でもトヨタ会場では、映画「007は二度死ぬ」に登場して、外人にも人気のある「トヨタ二〇〇〇GT」が、来日中のファッションモデル、ツイッギーに贈られて大評判となった。

ミニの女王、ツイッギーは、二百三十八万円もする「トヨタ二〇〇〇GT」をプレゼントされて大よろこびで、ヒザ上三十センチの相かわらずのミニ・スタイルで会場に現われモデルとしても観衆をわかしっていた。

ツイッギーといえば、十月十八日来日した時、羽田空港で余りの出迎えに驚き、新聞社、雑誌社のカメラの放列に泣き出してしまったエピソードがある。この日、かんじんのミニ・スタイルでなかったことで、みんなを失望させたが、翌日は記者会見でミニ・スタイルとなり本来の姿態をみせて観衆をうならせた。文字通りミニの女王であった。小枝のようなトレードマークで、何となく女性を感じさせないので、そんなに興味はもたなかったが、話を聞いてみると、どうしてどうしてなかなか健康で明るい性格だという。恋人兼マネージャーのジュスタンを従えて、少しも悪びれず、快活なお嬢さんともいえる。

さて、これからが話の本筋だが、最近の新聞紙上に出る自動車の広告のことである。

日産とか、本田技研、三菱重工とかいろいろ数多くあるが、よく気をつけていると、とても面白い。それは、最近の傾向として車体と共に、殆んどがグラマラー的なミニスタイルのモデルを使ったものが多いからだ。

ヒザ上二十センチ位の、若くピチピチしたモデルを、車体を背景にしてカメラを低く、ボリュウムをつけて撮ったもの。これなどは、流行のAラインの通り、両足を大きくひろげて、すくくと立ち、ムッチリした太腿をあらわにした姿態など、その足許にひれ伏したい欲望を感じる。ミニ・スカートにブーツ姿のグラマラーも多く、これらのモデルが足をひろげて、下の方を見ている笑顔の写真を、(本当はタイヤを見ているらしい)プロレスの写真のひっくり返った男の姿をうまく合成したりしてみる。なかなか迫力のある愉快な写真が出来るので楽しみである。

自動車の広告ばかりでなく、ナイロンとか旭化成とかの「せんい」製品の広告、或は婦人靴下、化粧品等の中にもすごい傑作がある。ピアスの広告だと思ったが、レ・ガールズの四人娘の一人、由美かおるが、ビキニ姿

で、跨るように脚をひらいて、片ひざをついている姿などがある。そこには何もなくても、自分がそのお尻の下に敷かれているような空想は楽しいものである。

話が前後したり交ったりするが、ミニスカートの流行は、この夏がピークといわれていたが、婦人服メーカーの大手筋は、むしろこれから本番だとばかり、大量に製造しているそう。ツイッギーの日本での興行権、商品化権を獲得した大手せんいメーカーは、ツイッギーという流行のシンボルを使って、ミニなど、若々しい“装いへのムード”を盛りあげれば、来年の流行色もこれに併せ、必ずピークは来るというわけだ。ヒザ上二十センチ、短いことがミニスカートたるゆえんだが、若々しいこと、誰にも買え、着られる親しみやすさが、ロンドン生れのこのファッションが、みるみるうちにアメリカからソ連にまで拡って日本にも現われた。ミニ・スカートが若さの特権であればこそ、私はこの姿態が好きである。タイト・スカートでは、大きく脚もひろげることが出来ず、歩くのにも小さく、せせこましく歩かなければならない。まして、跨ることは到底、出来ない。

これにくらべてミニ・スカートは、大幅に

活発に歩くことがスタイルよく見せるとなっており、足をあげるのも、開くことも自由であり、中国のてん足のような、ちょこちょこ歩きもなく、堂々と活歩する女性のピチピチとした若さの謳歌である。

ミニ・スカートよ、永遠なれ！

サンケイスポーツの阿木翁助が連載している芸界四季には、ときたま愉快なのがある。四十二年十月二十九日付は「強い女」と題してある。

川崎房五郎氏著「江戸八百八町」という本に、おもしろいことが書いてある。

徳川家康がのりこんで江戸に幕府の出来た当時、アメリカ西部の新開地のように、男ばかりが多く、女は非常に少なかったそう。しかも武家の生活では、主人の身の廻りの世話をするのが男なので、圧倒的に男性人口が多かった。江戸中期、享保の頃でさえ、市民

の男、三十二、三万、女十七万と、女は男の半分なのに加え、大半は男の武家人口を加えると、男女数の差は、ひどかった。

そこで大変な結婚難の結果が吉原の繁栄となり、遊女が大夫職などとあがめられるありさま。運よく結婚出来た江戸っ子デェーも、

カアちゃんにはアタマがあがらず、外でベランメエといばっても、家へかえるとしよんぼりしていたそう。してみると、靴下はともかく、女の強い時期は昔もあったのだナ。というものである。

アメリカのディファスト主義が、西部開拓時代の名残りとされるし、日本もこのようなことに多少、似通っていておもしろい。日本の先祖は、天照大神という女性の神様だし我々が子供の頃、日本で一番偉い人は誰？と聞くと、天照大神と答えが戻ってきた。そして、天照大神は女の神様ということで、女の子と男の子が言い争ったものである。女の方が偉いとか、男の方が偉いと、子供同志が争って、結局、この天照大神で結着がついたことを覚えている。

要するに日本では、天照大神が一番偉いということ、歴史でも、修身でも教えていたのである。

女性の強さを如実に物語るデータがある。それは、昨年（四十一年度）の東京家庭裁判所に持ちこまれた、離婚相談の総数が二九八九件、この内訳はとみると、次の通りだ。

妻の方からの離婚希望は二一三五件。

夫側からは、わずかに八五四件。

この数字をみても、全く世の中の変ったことがわかる。あの吉良の仁吉が、恋女房お菊に涙をもって書いた三下り半は、むかしは、一方的に男が書いたものだが、この頃は堂々と妻の方から離婚宣言がかかってくるのだ。

1. 異性関係 八六四件
 2. 性格の不一致 八二九件
 3. 夫の暴力 二七六件
 4. 夫が家庭をかえりみない 一八六件
 5. しゅうとめなどの不和 一七四件
- となっていて、おめかけの一人や二人は男の甲斐性とされたのは、遠いむかしのこと。夫が愛人でもつくりうものなら、たちまち離婚騒ぎとなる。そのくせ、妻はヨロメキ夫人にひそかに憧れ、精神的不貞を日常茶飯事のごとく犯しているという。

何のことはない。男は結婚と同時に、妻となった女性から、金属の手錠をかけられ、首には首輪をつけられて、鎖でつながれるのである。街を歩く時は、鎖のハシの方を女性の手にしっかりと握られたまま曳かれるのだ。

勤めに出る時は、大きな家庭のムチで、
「ハイヨォッ」とかけ声もろとも、ピシッと打たれて朝の街に走り出す。夕方になれば、

リモコン操作のように家にむかってまっしぐら。そして立関をあけると同時に、ガチャリと手錠をかけられてしまう。ああ、女性よ。若く美しくあれ！

会社の社長が、那須高原に土地を買った。何度か下見に行っていたようだが、私にも行ってみないかというので、よく晴れた日曜日に出かけた。

那須は栃木県北東部の那須郡にある。那須岳は、那須火山群の主峰で、南月山の黒尾谷岳、朝日岳、三本槍岳、茶臼岳を含めて那須五岳といっているが、これらのふもとにかけ雄大な高原が展開し、明るい牧場風景は、とても楽しい。

社長の長男が運転する車で出かけたが、コンクリート化している東京の街と違って、緑の風が吹くこの高原は、自然のいろどりの中に、よごれた魂たましいがきれいになってゆくような感じがするほど、空気がきれいであった。土地をしばらく見ていると、はるか草原の彼方から、色とりどりの服をつけた若い女性が三人、馬に乗ってやってくるのだ。

乗馬服に革の長靴、ひさしだけの帽子をつけて黒髪をなびかせている。逞しい馬に跨っ

た三人の女性は、二十才位で美しい。悠々とうち跨った姿をみて私は胸がなった。

何か談笑しながら、三人と、三頭の馬は私達のいるところまで来た。私は、社長とその長男がいる場所よりちょっと離れて景色を見ていたので、自然に彼女らとは誰よりも早く逢えたことになった。

「今日は、お嬢さん」

私は明るく挨拶をした。

「今日は」

三人は笑顔で私に挨拶を返す。

「小父さま、土地を見に来たのでしょうか？」

一人が私を見下して訊ねた。三人とも美しい。家庭のいいお嬢さん達なのだろう。明るい顔が上品で、身につけている服装も、装飾品も、しろうと目にも高級に見える。私は雲一つない青空に、さわやかな秋の風をうけながら頬笑む彼女らを、まぶしく見上げた。太陽のまぶしさばかりでなく、見下す三人の女性には私にとって、まぶしい位のものであった。そのしょうこに、私は彼女らが乗っている馬は殆んど目に入らなかった。いくらか、草のいろがあせてはいたが、さんさんとふりそそぐ日ざしは暑かった。

「うちの会社の社長が、この辺を買ったもの

ですから見に来たんですよ」

私は本当のことを答えた。

「うわァ、素適。ここに別荘をつくるのね」

「さァ」

私は笑って首をひねったが、その時、社長が私を呼んだ。用意してきた飲物を飲もうというわけだが、よかったら彼女らにもあげてくれという。そのことを伝えると、

「本当にいいんですか。すみません」

と素直なお嬢さん達である。脚を身軽にあげて馬から降りた彼女らは、手にしたムチを持って車のそばに来た。

缶ジュースや果物を、ビニールの風呂敷の上に大きくひろげる。社長はもう六十五才になっているが、無類の好々爺である。

「さァ、みなさん。遠慮なくやって下さい」

男ばかり、しかも中年や年よりの者ばかりの中に、花のような若い女性が同数、これにまじった座は、にぎやかであった。この光景を、シッポを時たまなびかせながら三頭の馬が、やさしそうな眼をして見ていたが、心なしかこの三人の美しい主人をとられまいとしているようにも見えた。私は心の中で、この時ほどつくづく馬がうらやましいと思ったことはなかった。

「君は馬にのるかね」

と社長が突然、私に訊ねた。

「いやァ、まだやったことがないんですよ」

「男のくせにダメだなァ」

と社長は笑ったが、彼は戦前、騎兵隊にいたつわものである。

本当なら「カアちゃん馬ではだめだゾ」といいなかったのだろうが、さすがに娘か、孫のようなお嬢さん連を前にしては言えなかったらしい。

「乗ってみませんか？」

と三人の中の一人が言ってくれた。私がちよっとおっかなそうな顔を見ると、他の二人が、いたずらそうにけしかけた。

「大丈夫よ、私が見てあげる」

「おとなしい馬だから大丈夫よ。だって女の私が乗っても怒らないのよ」

この言葉には社長がすっかりよろこんで、
「乗りなさい、乗りなさい。折角こうおっしゃって下さるんだ」

と同調する。社長の長男氏までが一緒になつてすすめるので、とうとう腰をあげざるを得なくなる。

「はじめてなんでね、しっかりおさえていて下さいよ」

私は、さっきから、いたずらっぽい眼で私を見ていた娘に声をかける。その娘が乗っていた馬に連れて行ってくれる。

ヘンなのが乗るじゃないか、というような顔で、彼女の馬は首をふって空高く顔をあげたが、彼女が鼻すじをおさえるとおとなしくなる。へっぴり腰で片足をかけた姿がおもしろいといって、みんな大笑いだ。

手綱をにぎって威風堂々？と馬上になったが、いやに高く感じて気持が悪い。つとめて平静を装っているが、急に駆けないだろうかと、前足をけって立ち上ることはないかと、よけいな心配ばかりで、さしづめ顔は赤くなったり青くなったりだったことと思う。その辺を、一緒になって歩いてくれたが私はそうそうにおりてしまう。

「もっと乗っていらっしゃいよ」

その娘は明るく誘ってくれたが、
「いや、なかなかいい気分でした。そのうち手綱さばきを教えて頂きに行きます」

と言ってから、誰にも聞えないように冗談を言った。

「僕はどうも乗るより、乗られるほうがラクです。殊にお嬢さんの馬になりたいぐらいです」

その娘は快活に声をたてて笑った。私は冗談に聞えるように真実をいったままだ。寄ってきた他の二人の娘と、社長らとの話でそのままになったが、楽しいひとときであった。しばらくして、彼女らは馬上の人となり、腰をあげさげして、パウンドをとりながら挨拶をかわして遠く駆け去った。

「遊びに行くわよ」

「今度は、私達が御馳走しまアす」

「さよなら」

全く明るく、快活な娘たちであった。

社長は、若い娘達はいいなアと、私とは違った、邪気のない眼で見送っていたが、私は三人の彼女らから、この草原の中でムチで叩かれたり、馬にされたり、しばらくたりすることを考えながら、いつまでも彼女らを見送ったのである。

新婚六カ月の若妻が自殺をした。

十月十八日のあけがたである。台東区浅草のアパートに住んでいた洋裁業の千田清さんの妻、節子さんがガス栓をひねって死んでしまったのだ。睡眠薬の空箱も棄ててあったそうだが、彼女自身、本当に死ぬつもりであったかどうかは別として、というのは今迄、何

度となくケンカをすると、「死んでやる」と演技的な自殺のマネをやっていたからである。

だが、おもしろいのは、亭主の浮気だとか暴力に泣いた妻の自殺でなく、いつも暴力に泣かされていたのは、亭主自身だったというので話が、ややこしくなる。

今どき、全く珍しいタイプの亭主で、仕事熱心ただ一途に働き、かけごとはやらず、女遊びもしない。酒、タバコとも殆んど縁のない、金をためて家を建てることを目標にしていたカタブツなのに、このカタブツにつきあいきれなかった妻の自殺であった。

節子さんは、酒はいけるほうでバーなどでジンフィズをかたむける現代女性だ。社交ダンスはやる、性格は一見、内向性だが、ときどき爆発すると、モノを部屋中に投げちらし亭主の横ヅラをはり倒していたという。容姿は十人なみというし、全くもったいないような女性？ ではある。

亭主は夜半の一時、二時まで注文の婦人服に追われて仕事をしていたらしいが、夫婦ゲンカも毎日行われ、節子さんが自殺する二日前も、亭主の清さんはしたたか節子さんになぐられた。ふがいないのではなく、暴力否定

の男なのである。彼は女房の口と手にいつも圧倒され、カカア天下を地でいったことになった。

自殺をしたときは、亭主の清さんは、自分の実家に逃げ帰り、母親の前で涙を流し、理由は何もいわずに「節子と大ゲンカをした。ただ別れたい、許してもらえるか」といったきりというから、全く珍しい男性でもある。

この暴力妻の兄さんという人が、しばらく一緒にいたらしく、巻ゾエをくって兄妹ゲンカもおこり、兄もその夜は留守にしたことがこの若妻の死を救えなかった原因でもある。夫婦のケンカなど、本当は一夜をあけると何でもないものなのだから惜しい女性を殺したものの。

とにかく、ケンカをふっかけるのも女房なら、いためつけるのも女房。そして謝らせて元におさまっては又、そのくり返して、世の夫婦とは逆のケースであったことはたしか。

この事件は、新聞その他に出たが、アサヒ芸能に出ていた記事の中から引用すると、……新婚世帯らしく、二つの部屋にはテレビや洗たく機など、電気製品はひと通りのものがおいてある。けんかの原因は「経済的な面」にもある。アパートの家賃は一万六千円

月収は二人の働きをあわせて約五万。清さん（二六）は、その中からいくらかでも切りつめて、貯金をしていこうとした。結婚式も、親の金などビタ一文もらわずに盛大にやったほどの男である。財布のヒモは、しっかりしている。若い節子さん（二一）は、派手好みである。バーにでも行って遊びたいようなところがある……。

そして近所のバーのマスターの言葉をいれている。これによるとダンナ氏は余り口もきかず、踊りもせずにいるらしい。節子さんは陽気な素振りを見せていたが、主人がおどらないのを見るとつまらなそうにしていたという。それと、ビル工事が近所であり、日も当らなくて、ノイローゼ気味でなかったかと節子さんに同情的だ。それに亭主の母親もいっている。

……「息子が秋田へ来ていたんで、知らせを聞いて、あわててとんで来ました。息子は田舎へ帰るときに、節子さんに黙って来たらしいです。うちをあけるようなことは、今までに一度もなかったもので、節子さんはさびしかったんでしょう。お兄さんがおもりをしてくれているものとはかり思っていたら、お兄さんともけんかして、ついカーッとなって……

……かわいそうなことをしました」……世の中は、ままたらぬものである。

用事があって埼玉県の大宮に行った。

帰りが遅くなったので、ままたばかり、都条令でしばられている東京では見られない本物のストリップをみる。見せることには、そんなに興味はなかったが、かぶりつきの客の頭に足をつきだしたり、太ももの中に客の顔をはさむのは愉快だった。自分が前の席をとっていたら、あの脚にキスしたいなア等と思っただけだったが、ショーの合間に、イキ抜きのと思うが、客を舞台にあがらせてストリップとじゃんけんをし、負けた方が一枚ずつ着ているものをもってゆくゲームをやった。

最初の若い客は、すんなりと勝ち進み、とうとうパンティ一つにしてしまった。客は背広とワイシャツだけ脱がされていたが遂に又、客の勝ち。ストリップパーは大げさに照れたり笑ったりしていたが、ヤジの方に背をむけて、客にだけ見せるようにしてパンティをずりおろした。我々の方からはストリップパーのお尻だけが見えるしかけだ。両膝ついてたっている客が身をのり出したのをよい機会に

キャアと笑い声をあげてストリップパーは逃げ出してしまった。

又一人、客が選ばれて舞台にあがる。頭のはげた精かんそうな男である。ミニスカートで現われたストリップパーと、じゃんけんが始まったが、今度は男の方が弱い。ストリップパーが、ブラジャーとパンティだけになったときは、男の方はパンツ一枚にされて場内は大笑いである。

最後の一戦も空しく男の負け。男は両手を合わせて許してくれるの仕ぐさ。ストリップパーは首をふって男のパンツに手をかける。男は逃げようとして舞台の上に転び、四つ這って逃げようとするのを、このストリップパーが大きく脚をひろげて馬のりに跨ってしまった。笑い声に消されて聞えなかったが、「じゃ、馬になるのよ」といわれたのか、その男は舞台の上を、ストリップパーをのせたまま這い出す。ピシャ、ピシャと尻を叩かれながら十歩位歩いてストリップパーは腰をあげたが、その客が、脱がされたものをもって下手の方で、あわてて着る恰好に舞台も客も大笑いであつた。

小屋を出て、駅の近くの飲食街を歩く。小料理屋やバーがひしめきあっている中に、客

の入っていない店をみつける。二十七、八才のわりときれいな顔をしたママらしいのがカウンターのなかにかっぽう着をつけてすわっていた。私は、のれんをくぐりながらガラス越しに中が見える戸をあけて中に入った。

いらっしゃいませ、とやさしく声をかけたこのママさん。客が来てよかったといった表情で愛想のいいこと。さしつ、さされつで酒をのみながら話しているうち、ママさんの子供の頃の話になった。「私は元々、京都の生れで、十五才位までは京都で育ちました。兄や姉が多くて、私の下には弟が一人だけです。私のすぐ上は年が離れていたけど、この弟とは二つ違いでしたから、よく遊んだものです。今でも弟だけがよく私を頼って遊びに来るんですよ」

といった話からであったが、姉弟げんかの話のときになって、

「私のことを『ヘチャ子』といって逃げるのよ。私は怒って追いかけるの。つかまえたら馬のりになってしまふのよ。そしてペンペンやるの。もうしないというまで私ってやるタチだから、弟は泣いてしまふのよ。母が来ると、私はすぐ弟の上からおりて、いったら、もつとぶつよ」とおどかすの。でも弟は

何にも言わなかったわ」

私は、はじめての店で、こんな話をきかされようとは思わなかったし、京都生れの若い女性から、たとえ水商売とはいえ、私が馬のりになってという言葉が聞けるとも考えてもいなかったの、楽しくなってしまうた。

「じゃ、ママさんは弟さんには強かったんだね」

「ううん、弟にばかりじゃないのよ。大体、私って男の子みたいだったのよ。弟がいじめられると、すぐ私が加勢に行つてやつつけちゃうの。みんな逃げて行つたわ。私がきかないのを知っているから」

「じゃ、ママさんに、馬のりにされてなぐられたガキ大将がたくさんいるというわけだ」

「そんなにもいないけど、結構いたわね」

「じゃ、弟さんが一番、被害者だね」

「そうね、弟には数えきれないわ。私が小さい時から弟をおさえつけてきたから、大きくなつても私に反抗したりしないわね」

「しつけられたわけだ」

「しつけるってこともないけど、それだけに弟をよく可愛がってるもの」

そんな話のあとでストリップの話をして、「馬のりじゃないけど、ママさんなら僕も

馬になりたいよ」

というと、

「いいえ、私はさんざん弟に乗ったから、私が馬になりますわ」

と笑う。客もずっと私一人で、終電車の時間ちょっと前まで飲んでしまったが、愉快になれた夜であった。

或る夜。新宿のトルコで、

「ね、今日ものむの」

「勿論」

「体、なんともなかった」

「病気をするわけじゃないよ、だって貴女は健康な体だから」

「でも、汚いものだもの」

「僕にはホルモン剤だよ」

「ウソッ、ホルモン液よ」

「あッ、そうだ、そうだ」

「冗談めきにして、やっぱり悪いなあ」

「僕は棄てるものを下さいつていってただけだよ。この間だって、帰る時もそうだけど翌朝、久しぶりにすごい元氣が出てね」

「本当？」

「本当だよ」

「でも、今日はどうかしら」

「駄目？」

「だって、この間はビールをのんでいたでしょ」

「今夜も持ってくればよかったな」

「ううん、いいけどさあ、やっぱりビールをのむと早いわね。それに……」

「え？」

「酔うとやりやすいけど」

「今度は必らず持ってくるよ。でも、今夜もなんとか、頼む」

「お馬だけじゃダメ」

「のみたい」

「紐ならかくしてあるのよ、貴方の持ってきたのを」

「それも頼むけど、のみたい」

「困るなあ」

「まだ？」

「あとで」

「じゃ、紐から先にしよう」

「欲ばりね」

彼女、部屋を出てゆく。自分のロッカーから紐をもってくるためだ。浴室の中においておくと、保健所や警察の検査で、うるさいのだという。

「さあ、手をうしろにして」

「この頃、しびりがたもうまくなったね」

「研究しましたからね。それとも、しつけられたからかしら」

「イタいッ！」

「ぜいたくいってもだめ、ベッドの上でやつてもらえるだけ、有難いと思うのね」

「タイルの上ではダメかね」

「万一、窓から見られたら困るのよ」

「うるさくなったねえ」

「首にも紐を廻すわよ」

「今日は手首がいやにしまるなあ」

「文句をいわないで、ねた、ねた」

「むむむ、くるしいッ」

「乗るわよ。先ず、お腹の上」

「首がしまって、いたいよ」

「だって、そのほうがいいんでしょう」

「ううッ、今日のは苦しい」

「平気、平気。胸の上にずりあがってと。ちよっと待ってよ」

「ううッ、く、くるしい」

「口がきけるのは、くるしくないのよ。口がきけなくしてあげる。さあ、どうだ」

「む、むッ」

「……」

「む……」

「ちょっとイキを吸わせてあげる」

「ハア、ハア、あッ、む……」

「ホラ」

「ハア、むッ……」

「……」

「む……」

「さあ、どうだ。ふふふ、眼が真赤よ」

「フウッ、もうゆるして」

「ダメッ。さあ、タオルを頭の下にしいて、首の方に深くしかないよね。でも、こぼしたら承知しないわよ」

「首がくるしくて」

「大丈夫よ。そのままのみなさい」

「……」

「……」

「さあ、いいか。こぼしちゃ駄目よ」

「……ハイ」

「……」

「ゴク、ゴク、ゴク、ゴク」

「おいしかったか」

「……ハイ、とても……」

「ふふ……」

「……」

（やはりビールをのんでいた方が、プレイにはいいかなあ。味が違うんだなあ）

十一月三日夜のTBSテレビでみた、ザ・

ガードマンの「阿蘇のシンデレラ」は、おもしろかった。

顔に大きなアザのあるアヤ子は、暗い人生を送っていたが、ブラジルに数億の資産をもつ叔父夫婦と連絡がとれ、養女として迎えられることになる。

このことを、やはり貧乏人同志の友達、みつえに知らせる。みつえは美人だが貧乏が身について少々ひねくれており、阿蘇山中の馬のり場の切符きりのようなことをやっている。みつえは、アヤ子の話をきき、シンデレラのような境遇をねたむ。そして、ブラジルから養女引とりのため来日する叔父夫婦が、アヤ子の顔を知らないのを幸いに、自分が身代りになるべくアヤ子を山中の小屋に監禁する。後手にしぼりあげて、石で撲ったりするすさまじさだ。

ガードマンが現われ、何となく違うアヤ子の態度を怪しみながらも、事件は次第にひろがってゆく。みつえは叔父夫婦と逢い、養女縁組の調印もせまる。こんなとき、一度アヤ子を犯したことがあるやくざの西田（ジェリー・藤尾）が現われ、みつえをニセ者と見破るが、みつえに言いふくめられて、二人でブラジル行きの大芝居をうつ約束をする。

だが、みつえは、自分の顔に焼きつけたコルタールをぬって作ったアザまでこしらえているのだ。西田に甘い汁を吸わす気持はない。牛乳とだまして睡眠薬をのませ、なぶり殺しを計画する。

西田の両足に太いロープを巻きつけたみつえは、自分の乗る馬で引きずる。「ハイヨッ」と、馬にムチをあてたみつえは、狂ったように阿蘇の山中を走り廻る。草原や、岩に西田はぶつかり、引きずられながら半死半生だ。やがて小川の中に馬をいれた、みつえは西田を水漬けにして引き廻す。

この引きずり廻す場面がなかなかの迫力で西田の顔が、水面にわずかに出る程度で、文字通り浮きつ沈みつで引廻わされる。それをふり返って眺めては狂ったように哄笑し、更に馬に鞭を当てるみつえの残酷な表情。ドラマとは承知でも視線をそらせられなかった。

このシーンは、茶の間番組としては、どんなものかと思うが、スリルと残酷味満点だ。まして若い女性が、男をいたぶる光景は、すご味をましている。馬上から冷ややかに男を見ているみつえの顔がなかなかいい。アヤ子とみつえに、誰がどの役をやっているのかタレントを余り知らないので不明だが、夏圭子

と高林由紀子の二人の熱演である。

結末は、ガードマンの活躍で、めでたしめでたしとなるが、みつえにいためつけられた西田も生きていたということで、殺人はなかったというオチがついているが、男をこれほどなぶった番組は珍しい。

その翌朝、通勤途中の電車の中で新聞をみている人のを、見るともなしに気づいたのだが、新聞小説の挿絵に、正座している女性の前に、平伏して這いつくばっている男の姿があった。私は、さっと新聞名をみて、電車を降りるや売店に行つて、日本経済新聞を求めた。

題名は「不信のとき」で有吉佐和子作だ。絵は、生沢朗の、やわらかい線画で、和服姿の女性の前にひれ伏す男の絵だ。

ちょっとしたチャンスものがさない我ながらの努力が哀れでもある。

この小説は、題名通り、浮気をみつけた亭主が、女房の前に敗北の姿をさらすくだりらしかったが、こうして私のスクラップ帳は又一頁にこの新聞の切りぬきがはられるのである。

× × ×

稿談性風俗資料入門

(10)

梅原北明とグロテスク社

『芸術市場』とモダン美術研究所

斎藤夜居

昭和三年のことである。その頃時事新報の写真部長だった片岡昇は、カメラで語る社会百景と言われた新しい形式による世相人物風俗史『カメラ社会相』を、梅原北明の文芸市場社より一本にまとめた。(この書は現在でも世相・社会を研究する人々から珍重されている)。書痴少雨荘はその著『三十六人の好色家』(31・2創芸社)に次のようなエピソードを書いている。

「カメラ社会相は北明の社から美装して出版した。この書のなかには、時の大臣連も

無論とり入れてあったので、茶目の北明は議会開会中の大臣室へ押しかけて、一本を献ずると共に、自分用の一冊には大臣に次ぎ次ぎと署名させた。田中義一大将は勿論岡田啓介、白川義則、望月圭介、久原房之助、勝田主計、小川平吉、原嘉道、三土忠造、野田狸庵の十人が、俳句や詩文までかいてくれた、限定第一番本を得々然と抱えて帰って来た。どうだ、おやじが喜ぶだろうと、かかして来たよ、飾っときなさい。と、ぽんと投出して呉れた屈託のない彼で

もあった。恐らく今日の記者にはこれだけの芸当は出来まいし、度胸もあるまいと思うと、戦後に彼を活かしたかったと惜しまれる。」

この記念すべき総革本の『カメラ社会相』(昭和4・1文芸市場社発行四六判四〇五頁特製四円)という本は、少雨荘の歿後に入札競売され古書即売展に出た——勿論、目録にも載ったのだが、以上のいきさつを知らない愛書家が多かったのであろうか、私は午後になつて出掛けたのだが、その本はのこってい

た。私が買った。現在でも持っているが、奇書というには当たらないが、大臣諸公のサインにも別に魅力も感じないが、梅原北明が手に持って歩き、少雨荘が亡くなるまで手放さなかったという意味でも、これを保存する適任者は自分だと思っている。その日の午前中には、城市郎さん（発禁本著者）もこの本を手にとって、買おうか買うまいかとひどく迷ったが、筆禍本ではないので遂に買わなかった——と、後になって私に語ったことがあった。

所で、こと程左様に私は梅原北明に関する記事や事柄には今迄にも随分注意して来ているのだが、今頃気がついたのかと言われそうだが以前に内外タイムスに連載し、単行本のシリーズにもなっている「粹人醉筆」の第一集（27・10）に峯岸義一編の中に「風流紅煙草」というのがあった。峯岸画伯のパリ遊学の送別会が日比谷松本楼で少雨荘・小池夢坊・梅原北明等々当時の軟派のサムライたち主宰で行なわれ、珍談が続出するがそれは省略して、やがて画伯はパリに滞在するようになってから、何を故国の悪童連中にお土産にしたらいいかと考える。ある日、キャバレーの踊り子が灰皿に残していった喫いさしの巻煙

草に口紅がしっとりついていて美しさにうたれ、それからというものはあらゆる階級のパリの女性の煙草の喫いさしを蒐集し、そのう



前代未聞の「グロテスク」発禁珍
広告とその表紙

ちでも珍品は、挟み屋リッシー嬢がああ口にくわえたというまる一本完全に近いもので、これは特別に包装して無事日本に持ち帰った。所が、それらは仕舞忘れたまま戦争になってしまった。日々に物資の窮乏を告げるある日、梅原北明から好色茶会によれば、もう煙草のない頃なので、思い出して口紅タバコのコレクションを土産に持参したところ、北明は説明も聞かずに、別包の例の完全なのをアツと言う間に「大分シケてるね」と云いながらも嬉しそうに、鼻孔からはもう煙を出していた——。という話であるが、人物が北明だけにおかしいよりも哀れを感じるのである。

この梅原北明を代表する最も有名な雑誌は「グロテスク」である。軟書趣味家は一、二冊は必ず現品を所持していることと思う。この雑誌にまつわる挿話のうちでよく人に知られているのは、昭和四年一月号が発売禁止になった際、敵の刃を逆に奪って早速宣伝に利用したという、黒粋の「グロテスク」新年号死亡御通知という前代未聞の、意表をついた珍広告であった——此処に当時の読売新聞からの切抜きと同誌（発禁）の表紙を掲載してみた。現代の新聞の常識だったらいくら金を

出したって、こんな馬鹿げた広告は絶対にのせないであろう。「遺憾（押収された雑誌のこと）の儀は好都合にも、所轄三田署に於て一年間保管の上、茶毘に付してくれる事に相成り居り候へば、こればかりはせめてもの光栄と存じ居り候」と、ふざけているのか正気なのか兎に角この反骨精神たるや大したものである。この軟派における官憲ざらいの伝統は後々までも亨け継がれているが、北明流の大らかなユーモア精神というのは、その後は流石に出てこないようだ。

雑誌『グロテスク』書誌の概略を『現代軟派文献大年表』（7・8）と『日本艶本大集成』（38・6）により左に記す。



「グロテスク」創刊号表紙

『グロテスク』創刊昭和三年十一月（編輯兼発行者鳥山朝太郎／これは北明の筆名）（菊判一七〇頁定価七十銭）グロテスク社昭和五年一月までに十三冊刊。第二巻第六号（4・6）は未頒布というが多少は出ている珍本である。内容は次号七号と殆んど同一である。昭和五年一月号（最終号）は三七五頁の増刊号だった。以上は梅原北明編輯。『グロテスク』復活号（中戸川薫明編輯）は昭和六年四月以降四冊出て終りになった。『復活号』『東洋デカメロン号』『インチキ展覧会』『世界各国魔窟探検集』などとなっている。発禁は第一巻二号（3・11）、昭和四年一月号、二月号、六月号。昭和五年一月増刊号。および中戸川編の復活第一号（通刊四ノ三）だがこれは改訂版が出ている。

『グロテスク』はプロ雑誌から風俗雑誌に変わった『文芸市場』や、会員組織の『変態資料』とも違って、読物雑誌としての特殊風俗雑誌の性格を示していた。何とかして公刊市販雑誌の線を守り抜こうとした努力のあとがあるし、取材も一般的な分り易い奇聞を多角度な視点に立って採り上げている。然し乍ら『梅原北明』といえ度々筆禍事件ばかり起

しているの、特殊な知名度の高い人物なので、事業を起す場合にはどうしても不利であった。（官憲に対する腹いせに、わざと発売禁止を食うような雑誌を作っていた訳ではあるまい。）『グロテスク』創刊とこれに関連した談奇館隨筆叢書その他一連の豪華本出版などは、現在の古書界でもよろこばれておりいわゆる文芸市場社ものと称して相当の高価を呼んでいるし、グロテスク社時代というのは梅原北明の一世一代の花道だったのである。——。それだけに、私はさきに記した凋落期以後における、北明と紅煙草の一件などは、読んでいて傷ましさを覚えたのであった。次に、文芸市場社本（単行本その他）の書名リストを掲げる。主として中野栄三氏の調査による。私見を少し挿し加えた。

「バルカン・クリイゲ」——バルカン戦争——ウィヘルム・マルテル原著 文芸市場社同人訳革装四六判四〇〇頁（昭和2・4）。
「フロッシイ」——十五歳のヴィナス——スインバーン原作 酒井潔・北明共訳（昭和2・4）。
「アラビアン・ナイト」酒井潔訳（昭和2）
「エル・クターブ」原始篇のみ発行 紙装小

型(昭和3・2)。

『明治大正奇談珍聞大集成』菊判革装上巻、中巻および附録の三冊が文芸市場社、下巻は談奇館書局発行(昭和4・3)。

『世界好色文学史』佐々謙自・梅原北明共訳 菊判革装 一二〇〇頁 本文二度刷 第一巻第二巻のみ発行 豪華本である(昭和4)。

『フィルム式性的漫画集』ドイツ漫画複製カード40数枚(昭和4)。

『ピアズレー淫画集』菊倍判15枚 伊太利より直輸入版の会員頒布と称したもの、実は日本製で三〇〇部位頒布した。原画はピアズレーではなくてバイロスである(大正15・12)。

『ロップス艶画集』12枚 アムステルダム直輸入頒布(昭和3)。この種の海外の性的秘画類には左記の如きものがある。

『女天下』(ドイツ)。「バリーの性的見世物画集」。「ベルリン性的見世物画集」。

『上海性的見世物画集』。「カザノフ諷刺画集」(フランス)。「姿態秘戯」24枚(ドイツ)。

『グロッソ画集』。「フックス秘画集」。「裸体ポーズ傑作集」。

『日本猥褻俗謡集』(昭和3・1)。

『しとりこ』(昭和3・4)。

『変態猥褻往来』——一名、夜這奇譚——四

六判 二十六話収めてある(昭和3・4)。

『らぶ・ひるたあ』談奇館随筆第一巻 四六判背革 酒井潔著(昭和4・3)。

『秘戯指南』談奇館随筆第二巻 梅原北明著(昭和4・5)。

『同性愛の種々相』談奇館随筆第三巻 アリベール原作 花房四郎訳(昭和4・4)。

『香具師奥義書』談奇館随筆第四巻 和田信義著 てきや研究書として知られている(昭和4・5)。

『続・秘戯指南』梅原北明著 読物式で内容はつまらないもの(昭和4・8)。

『ナポリの秘密博物館』羽塚隆成著(昭和4・11)。

『ベルシャ・デカメロン』下条雄三訳 全26話所載(昭和4・11)。

『珠林奇縁』支那もの訳本 文芸市場社末期の刊行(昭和4)。

『さめやま』酒井・梅原共訳 フランス人の書いた日本の遊女もの(昭和4)。

梅原北明は昭和三年九月から「文芸市場社」のほかに「談奇館書局」および「史学館書局」を経営している。度重なる禁圧に対する隠れミノであり、出版業務上における作戦

の一部だったのかも知れないが、どうも混乱させられる事柄である。談奇館書局として実現した出版に『世界好色百科辞典』仮綴五冊の未完もの(昭和4・11)があり、史学館書局からは『近世社会大驚異全史』(昭和6・3)北明編纂で、書物としての厚味が12・5センチもある総革本を作ったりした。——雑誌の解題に先立ち文芸市場社の刊行物に就いていろいろと書名をあげたことは、当年の事情を知るのに簡便だと思ったからである。この他に亜流軟派出版社からも山程出ているのであるから、この時代は軟派刊行物に読者層を食われてしまって、正常な出版社や作家たちの生活には大分影響があったのではないか? 勿論、経済的にであるが、私はその様に考えたことがあった。



『グロテスク』創刊号の後記に「毎号本誌は、世の蒐集家、特種研究家の夫々興味ある文献を盛ることに努力します」と言っている通り、口絵に半陰陽者の写真、サパト夜宴、刺青写真など大いに趣向をこらしている。内容は、愛の魔術 酒井潔。くかたち考 高田義一郎。日本文身考 谷井基次郎。非人乞

食考 梅原北明。近代禁書解題 斎藤昌三。菅原將軍と語る 尾高三郎。その他、となっており仲々読みごたえのある文献ものが揃っているが、然し、『変態資料』や『カーマ・シャストラ』を知る者の眼には生ぬるく感じたことであろう。市販雑誌としては此の程度で我慢しなければならなかったが、一般読者にとっては会員制雑誌ではなかったから、別な意味では驚異の眼で迎えられたことでもあったろう。

『グロテスク』一ノ二(昭和3・12)は発禁。内容は前号より続きの斎藤昌三の禁書解題、北明の非人乞食考などのほかに、大曲駒村の川柳浴場志(一)や大泉黒石のもの、「正忍記」という忍術奥義書の紹介で、発禁の対象となつたのは、八世界内房座談会Vと題した昭和三年十月三十日夜に上野翠松園で開催した、寢室の話題を主とした放談会の記録で、雑誌中に31頁も占めたもの——。ずいぶん沢山○の伏字を使つてはいるが駄目だった。出席者は、生方敏郎・高田義一郎・斎藤昌三・尾高三郎・以無天理庵主人・伊藤竹酔・酒井潔・梅原北明で、いずれも粋士としては一流のゲストだった。よく後人の話題にのぼる梅原伝説に、横浜・本牧のチャブ屋「キヨホテ

ル」に於ける、おはま対北明の寢台合戦の顛末はこの座談会記事にある……おはまは海外にまで知れ渡った房戯の名女だが、北明の男性器官を能動状態にすれば勝という五十円賭の試合で「貴方それだけ余分の金を持っているかという、失敬なことをいうな、と目の前に五十円出しお前も五十円置けという。それを、本当に五十円もらっても宜いという。おはまは五十円貰えるものだと思っているのだよ。蓄音器の置いてある其ベッドの机の上に五十円宛を積んだ、これが本当の枕金だろうと思う」と語っている。結果は北明の勝ちだが、これには裏話があつて、当時彼は猛烈な性病を患つていて武器はインポテンツに陥入っていたというのが真相とか。

尚、この座談中に八砂風呂Vに就いて語っているが、これは業態から言えば当今のトルコ風呂みたいなものだが、風俗の記録として砂風呂の説明は珍らしいので次に抄出する、生方 砂風呂に入つて見ようぢやないかと云ふので、姐さん砂風呂沸いて居るかいと云ふとエ、沸いて居ます。これは冗談だったネ。普通の風呂に案内した。只、赤い色している。砂も何もないぢやないかと云ふ、所が人見(東明)が砂風呂といふのは

是だよと、偶然隣に押入れと同じやうなのがあるから明けて見た。するとどうだ。上の天井が窓になって、六尺位な室で、下は全体にシートが布ひてある。それを捲つて見ると下がすっかり砂だ。無論、枕が二つあつて、掛布団があつた。

梅原 オンドル式です。砂の中から蒸気が上ってくる。夏は冷やしてあるから冷たい。併し、寢心地は宜くありませんよ。

この生方敏郎談は大正三年のことを喋つたので、加藤介春・原田譲次・人見東明・若山牧水・土岐善麿・前田夕暮などと共に大森の砂風呂にあそんだ折の話である——。尚、大正四年には砂風呂の女お春が殺された小守疑獄事件というのがあり、一躍世間では砂風呂の存在を注目した。

『グロテスク』二ノ一(昭和4・1)、これまた発禁で、この為に業を煮やした北明が黒枠の新聞広告を出した号だが、三七二頁で定価一円五十銭、口絵・内容・編輯共に粋をこらし、雑誌としては豪華版であつた。表紙にも増大号といれてあり、これの発禁は経済的にも大打撃だったことと思われる。

内容は、連載物のほかに、聖天秘抄 酒井潔。阿片考 梅原北明。瑰奇的合巻物雑考

尾崎久弥。世界惨虐刑罰史 才田礼門。日本惨虐刑罰史 高田義一郎。北明と帝大法医学教室の杉田博士の対談「サディストとマゾヒスト」があり、中司哲蔵の観相奥秘伝があった（この中司師には珍本が一冊あるので別の折に紹介したい）。

聖天秘抄は性神研究であり、亜片考は図版・写真入の麻薬文献、尾崎久弥の稿はのちに国際文献刊行会（竹酔）が「怪奇草雙紙画譜」として単行本にまとめたもの。挿入図版は、江戸末期ものより特にひどい残虐場面を掲出して、残虐血みどろはエロと同じく取締りの対象となったものであるから、この号の発禁理由にかぞえられるであろう。北明と杉田博士の対談は実話で、女性のサディストとその夫を話題にしたもので、その妻が夫に炊きたてのご飯の上に馬糞をのせて食えという恐れ入った話がある。

『グロテスク』二ノ二（昭和4・2）。又々発禁。目次の末尾に——厳父正月号は、華々しく街頭に出ると、伏字及び細心の注意も効なく遂に死去致しました。多くの人々の慰めの言葉に漸く私も生れましたが（この号のこ）今度はピンピンと成長したいと思えます。グロを懐ろに入れた人々の胸に愛と憐れ

みあれ——とあったが……。最近輸入珍書秘画解説史 梅原北明。「強精剤の座談会」出席は徳永保医博、高田博士、酒井、梅原となつてゐるが、特にこれかと思う発禁理由となる程の記事は見当らない。この号までは表紙に必ず「耽奇、探奇、談奇」という字を入れていた。

三月号からは「新旧モダン号」（4・3）。「珍奇文献宝庫号」（4・4）。「談奇痴情文献展覧会」（4・8）。「古今見世物寄席興行大博覧会号」（4・9）。などと一見してその号の特色を示すようになった。

『グロテスク』復活号以下四冊を発行した中



再刊「グロテスク」の表紙
北明とはもう直接関係はない

戸川と北明の關係に就いて詳しいことは分らないが、誌名編輯権を譲渡されたのだから一種のビジネスと解するべきであろう——。以後は梅原北明の対社会活動はしだいに閉鎖されて行くのだが、この復活号（昭和6・4）には、いくら芸がなく奇をてらうにしても、余り氣持のよくない「留置場体験座談会」というのを神田・神保町の魚春で開催（6・2・27）その座談記録を載せている。参加者は布施辰治・江馬修・飯田素之助・小生夢坊・梅原北明・中戸川薫明・肥田琢司・矢部栄吉・松原一夢・鈴木厚・尾高三郎・花房四郎となつてゐる。この中で梅原北明は次のように言っている、

「僕が以前の雑誌グロテスクによってグロテスクとかエロチックと言う様なことをまるで流行させたかの如くに思われるのでありますけれども、然し之は、僕は意識的にグロテスク或いはエロチズムをやったのではなくて、詰り非常に大胆不敵な考えの下から、エロチズムやグロテスクと云ふことを主として、そして世の中を何でも構わぬから、お茶を濁してやろうと言う氣になつて、それを始めたのが丁度世の中に一種の流行を受けたと言う様な訳で、初め

から流行させようとかしないとか言う様な意味でなくして、僕としては何でも構わぬから、やってやろうと言う単純な気持ちでやったわけです。処が、僕が止めた時分に世の中が案外そう言う様な時期になって、実は僕としてはもう今日になってはエロだとかグロだとかの時代ではないと思うのであります。そこで僕の方じゃ好い加減鼻に付いているのです。それで僕は一年許り止めていたので、処が、こっちじゃ好い加減倦いたりしている頃、世の中が漸くエロのグロのと騒いで来たような訳なのです……」

もう今となっては彼がどんな顔をして以上のように喋っていたか、それは分らないけれど、にが笑いしながら、戦い疲れて自己反省している様子は窺われる。政治家、軍人、実業家たちとは違った意味ではあるが、八梅原北明もまた時代の人であった。



尚、この頃梅原北明が活躍した大正末期から昭和六年頃には、実に夥しい数にのぼる特殊風俗雑誌や性通俗雑誌が発刊されている。北明とその党派・分裂派つまり八珍書屋Vのことは別に一章を設けて説明しないが、いず

「芸術市場」創刊号の表紙



れも資本力のバックのない書狂としても資格不十分な当座しのぎの、インチキ事業で金儲けをしたただけでいい仕事は少なかった。マニヤの弱点を利用して商売しようとする連中で、悪どさばかり眼につく……。次に紹介する芸術市場社はその点大分風変わりであるばかりでなく、ユニークな行動派でじめじめしてなかった。

「芸術市場」全七冊創刊昭和二年三月停刊昭和二年十月。編輯発行は玉村善之助(方久斗)・峯岸義一の兩人で共に画家である。誌名は文芸市場をもじったもので、美術家連が主として執筆しているので芸術市場としたもので

あろう。創刊号から発禁を食っているものも似ている。絵入東京黄表紙と称し、「前号発売禁止勅章拝授号」。「紅燈青楼号」。「ラブレター公開号」。「避暑地ロマンス号」。「田園紅恋号」。「戦争恋愛号」。などとなっている。執筆者は多士済済で、

織田一磨。細木原青起。松村英一。高田保。河村目呂二。服部良英。水島爾保布。木村莊八。新井格。小川千甕。井東憲。サトウハチロー。添田さつき。岡本かの子。小寺菊子。青山俊文二。斎藤昌三。高田義一郎。

その他いろいろ通人たちが書いているが、いずれも軽文章で、好色風俗という意味で、裸体写真版が豊富に入れているのが特徴。だが、資料価値はすくない。この雑誌の代表者峯岸義一は美校卒、フランスに遊学し、超現実派絵画を日本に紹介した、二紀会審査員。戦後に、この「芸術市場」時代の体験を生かし、「赤と黒」という仙花紙雑誌で大活躍したりして、一般には画家としてよりも、艶筆作家として知られている。

この雑誌の第四冊目(昭和2・7)に、次の広告が出ている。

モダン美術研究所

美術研究生募集 ○近代美術及美学の研究を志すものは、略歴及志願書を添へ申込まれるべし ○最もモダンティックな自由教育法により近代美術の紹介、美学の講義及スケッチ旅行をなす ○人体研究のモデル使用は一日三時間とし、スケッチ、油、水彩等自由描写の事 ○授業料一日一円、自由出所研究の事 ○初心者に対しては、基礎学および描写法等親切に教授す ○研究所建築中に付、臨時に芸術市場社宛即刻申込まれたし

さて、モダン美術研究所とは一体何かと言うことを語る前に、裸体と美術、裸体と風俗、に就いてちょっと考えてみたい。

わかり易い話をすれば、おんなのはだかは△芸術▽だったらゆるされるが△風俗▽では駄目だということである。明治年代における山田美妙斎の小説「蝴蝶」や露伴の「風流仏」の挿画の裸体画にも論議があったが、何と言っても、明治二十八年の博覧会出品の黒田清輝の裸体美人画事件ほど朝野に審美議論

を沸かしたことはなく、芸術か風俗壊乱かと甲論乙駁の論争がはげしかった。更には、明治三十四年にも下谷警察署長が蛮勇をふるって、白馬会の裸体画・彫刻ぜんぶに腰巻をすることを命じた事件があったりした。今日おもえばまったく馬鹿らしい話であって、もう美術上の裸や陰毛はさういふ問題がすくなくなっている。裸体史は性風俗研究にとっても絶対に欠かせないテーマであるが、はだかは厳密には美術史の領域に属する事柄であるから、美術家でも医者でもない者が△裸▽の論理をまとめるのは骨が折れる話です。所で俗人が、裸のおんなを見たい、という心理を分析すれば△裸▽になれば性器が眺められるという視覚の本能ではないか、と先ず私は単純に考えてみたい。世間に生きて行く常識とか道徳とかが邪魔をしているから、女性の裸や陰部をあからさまに眺めたいなどと言っている、それは大分病理的な神経症気味な発展を示して、イロキチガイ扱いにされてしまうのがオチである。其処でむかしから女性の裸をみるためにはみんな色々苦心してきているのである。

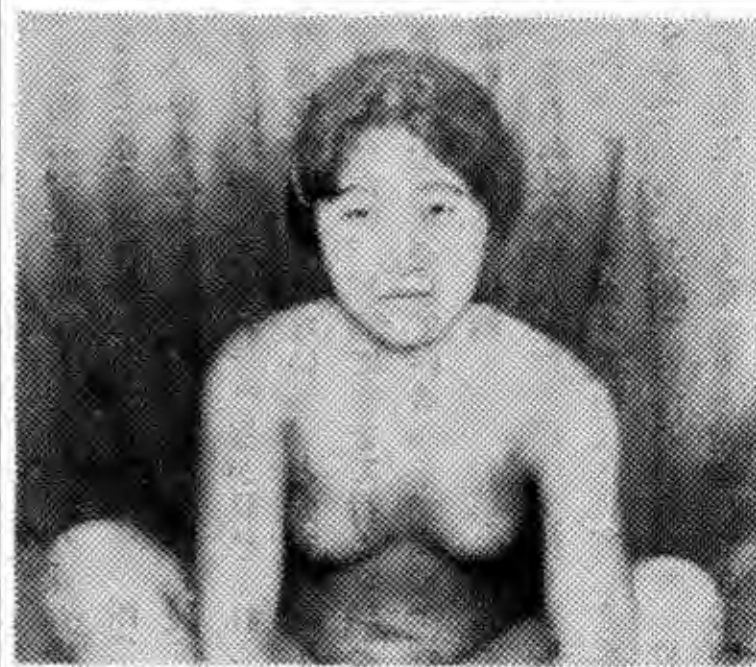
芸者あそびをする通人たちが「浅い川」とか称して、鳴物入りで裾からだんだんにまく

り揚げさせ、脚からしだいに下腹部にと、白壁土蔵にまっくらな蝙蝠がべったりとまっているようなオツな眺めをたのしんだり、またチョンキナというのがあって、らしやめん女郎が遊興の席で踊ったもので、三味線・太鼓に合わせて踊りながら拳をうち、まけると衣服を脱ぎ、赤い腰巻ひとつになり、しまいは生れたまんまの姿になるということ、明治二十四年八月に法令により禁止されたと『明治世相編年辞典』迄にも記載があるが、以上のような事柄が、敗戦後に流行して今日までに及んでいるストリップ・ショウの濫觴と、言えば言えないことでもあるまい。

△裸▽の文化移動で、むかしは特権者だけのお座敷の秘芸が大衆席までうごいてきた訳である――。裸の美を鑑賞するということは、西鶴の作品などに見られるように、国守大名が奥御殿で腰元たちに女相撲を取らせて興に乗じたり、近代の富豪や成金が芸者相手に悦に入ったりして、限られた階級だけが女性を玩具にし、淫蕩生活のたわむれに味つけしていただのである。第一次欧州大戦中に日本では俄成金という連中が沢山できたが、芸者を総揚げして、座敷中に股をひろげてねかせて、百円札を丸めて筒にしたものを一本ずつ

「田植」と称して植えつけたという男の実話があるが、とにかく女を裸にすることは随分お金が掛った。それが戦後になると、強請されないで、食わんがためにじぶんの意志で舞台に立って脱衣する新しいタイプの女性たちが誕生して、ヌードショウとして今日までの隆盛をみるに至った訳だ。むかしは印刷されたヌード美の鑑賞は春画やアブナ絵だけで、それらは全裸も半裸もあるが、つまりハ裸体画Vとしても江戸時代から庶民に親しまれて来たが、徳川幕府はこれの刊行を禁止するという強圧手段を余りとらなかったで（必要悪として認めていたと思う）、性文化資料として貴重な錦画や会本が数多く残されている。明治新政府になって西洋の道徳や法律が移入されると、それらはたちまち発行発売共に禁止されてしまった。明治五年十一月太政官布達の「違式註違条例」という現今の軽犯罪法に似たものの九条に、春画及び其類の諸器物を販売する者、は罰するとあるし、廿二条には裸体又は肌ぬぎになったり股脚を現し醜体をなす者、も処罰するとある——。とたんにハはだかVが一般大衆から眼隠しされてしまったばかりでなく、裸になっても裸（印刷物）を見ることも罪になることとなってし

マイヨールの彫刻と同じポーズをとるモダン美術研究所のモデル嬢



まう。まだ、西洋美術の観念における裸体画が日本には無かった頃で、女がはだかになるのは性交の時であり、はだかの女を描いた画があるのは枕草紙だというのが一般通念だった。江戸時代の日本は現代のセックス天国スウェーデンやデンマークみたいに性文化の先進国だったのに、明治になってから急激にハ性Vを暗闇に閉じ込めてしまった。裸体画

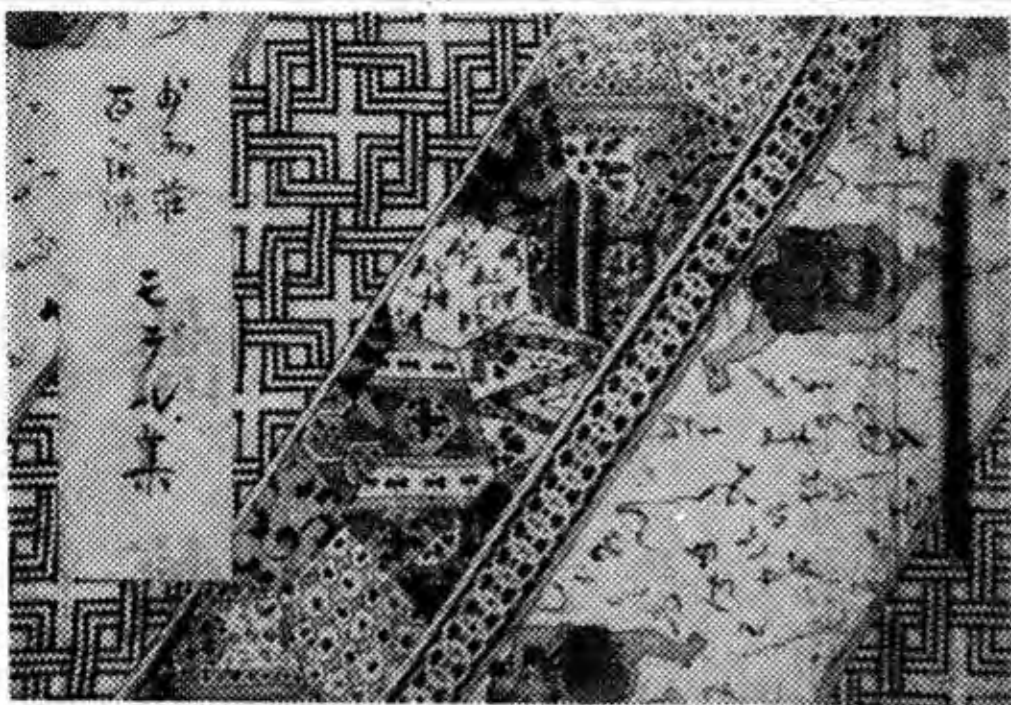
（春画）を罪悪視する思想が生じてしまう……。また裸体そのものに対しても、「外国ノ御交際追々盛ニ相成リ」見苦しいから銭湯にゆくにも賤民共は裸体になつてはいけぬ（東京布達四年十一月）と告示する。裸をいやしむ、という考え方が一般大衆からは仲々離脱できずに、日本敗戦の日まで続くのである。ハ裸Vを大っぴらに税金を払う商売の対象とするのは戦後からだ。

余談があまりにも長すぎた。昭和初頭のモデル鑑賞会を説明するのに脇道し過ぎた。簡略に、「美しいということは快感である」と言えばよかった。



モダン美術研究所という建物はなかった。建築中だということにして、女体研究第一回は峯岸教授主宰で、上野桜木町の山口林治（玄珠）宅で開催した。五日間で会費は五円毎日ちがったモデルがかよって来た。モデルは本職だが、画学生のほうは俄画家志願者ばかりで、女がはだかになったとたんにポーズとしてしまつて、デッサンどころではなく、鉛筆を持つ手がぶるぶる震える……。芸術という神聖な名を借りて、女体美を見学したい

という不逞のやからだから、
「あんたたち、素人さんばかりネー」
と、モデルに冷やかされ、あっさり見破られてしまった。二十分間ポーズをつけ、あとの十分間を休憩。これを数回くりかえした。



斎藤昌三のアルバム

峯岸教授は会員たちの意向を察して、モデルにマイヨールの「棘」と同じポーズをつけさせたりした。

松井清子（モデル嬢）は、夏のことなので休憩中も裸のまま、偽画学生を相手に、洋画壇における重鎮F画伯のモデルも動めたことがあったが、必ず彼女のある部分の匂いがかいであらうと絵筆がとれなかった、などという画伯の奇行を語って、みんなを煙にまいたりした。

第二回は駿河台にあった野場美粧院の二階を会場にして開催。浮世絵のあぶな絵と同じポーズをつけさせ、チラリの美学講義だったという。この時はモデルが二人出たが、写真撮影をしたのは約束がちがう、と後で情夫が強請りに来たりしてうるさくなったので、結局モダン美術研究所の女体美鑑賞会は二度で終了ということになってしまった。二度目の時は会員も心得たもので、スケッチブックを持参した者は一人もいなかった。

この時の記録は斎藤昌三の『少雨荘・百趣味モデル集』にのこされている。モデルを囲んで会員全員（20名）の記念撮影や、ヌード写真その他67枚を貼布したアルバムである――私の記述はこの写真帖と当時研究生の

一人だった銀行家M・A氏の談話によった。次にご参考までに、田村泰次郎著『人間街パリ』（昭和32・7）に左の記述があったので抄出する。

「初心者としての、グラン・ショミエルは、昔から有名であるが、いまでも同じように初心者で、いつも大入満員である。……ずかずかと屋内へはいつて行って、だまって部屋をあけると、そこに裸のモデルが大胆なポーズをしていて、どきまぎする。モデルをとりまいて、老若男女がせつせと絵筆や木炭の筆を走らせている」

流石にフランスは美術王国である。このことは、カメラ流行のブームに乗ってから、東京の都心にも散在するいかがわしいヌード・スタジオなどとは性質を異にするから、此処でも芸術と非芸術における裸体の問題が考えられる。

峯岸義一の雑誌『芸術市場』は、風俗雑誌としては特別に好奇心をそそるべき読物に乏しかったが、彼が画家の特権を生かして、北明も顔負けするような放れ業で、昭和初頭の秘められた風俗史を飾ったことはまことに痛快である。

薔薇と蜜蜂

(2)

第二章 あいのむち

田代俊夫

7

「あーた、まだお起きになりませんか？」

甘ったるい鼻声が朝の静けさにこだましました。日はすでに高く昇って柔らかな日差しが窓から部屋一面に差込んでおります。メロンは、とくに目が覚めています。覚めてはいても起きるのはいやです。まだ眠いし、顔を合せるのが、てれくさい。そと薄目を開けて様子を伺うと、押しかけ女房は大分前に起床したとみえ、てきばきと食事の仕度をしています。掃除はもう済んでいるらしい。

ゆうべは、どうも大変だったなあ、メロンは床の中で狸寝入りを装いながら昨夜の出来事を思い出しました。頬をつねると確かに痛いから間違ひありません。——一時はどうなるかと思ったが、結局においてうまくいったんだからな、うん。思わず会心の笑みが腹の底から湧き起こるのを禁じ得ません。第4及6節できわめて高圧的に振舞ったけれど、サファイヤ姫はまだ糸を知らない真珠であり、だれ一人として鞍を置いたこともない牝馬だったのです。固い薔は花と咲き、メロンとしてはまるで夢のような一夜であったといえる

のでした。

そういった追想を胸の内に反芻しながら、尚しばらく床の中でメロンは、ぐずぐずしておりました。

おじいさんがいなかったからよかったけど、あんな大声は弱っちゃうなあ。もう……。天井のねずみの迷惑には一向気がつかないようです。……そうそう、あんなところに、ほくろがあったっけ、などと不謹慎なことを想起して一人悦に入っていると、

「いつまで寝てるつもり？ さあ、早く起きて頂戴」

と、第二弾の襲来です。今度は鼻声ではありません。その上、敵は射程距離内に迫っているらしい。寝具の中に頭ごと立てこもったメロンが、蚊のなくような声で

「もう少しだけ……。朝ごはん食べたくないんです」

「何いってんの、もうお昼ですよ」

これ以上は許してくれそうもない。メロンは、しぶしぶ床を離れました。目の前に姫が立っています。普段着に身なりを替え、袖をたくし上げているので、むき出しの真白な二の腕が目にも染みるようです。どこから調達してきたのか知らないが、白地に花模様のエプロンなんか掛けています。

と、何がおかしいのか姫は含み笑いを始めるのです。わけも分らず赤くなってメロンは下を向きました。とても眩しくて顔など見ることはできません。暗黒の中の勇士も白日の太陽に照らされると、途端に神通力を失ってしまいました。何事も最初が肝腎というが、昨夜、折角確立したはずの主導権も、たちまち崩壊してしまったようです。が、何といっても実力と貫録の相違いですから仕方ありません。

メロンは、シュンとなりました。

「何ですね、目やになんかつけて。……早く顔を洗ってらっしゃい」

「はい——」

寸時にして支配権を奪回された年下の亭主は不服そうな顔で部屋を出ていきました。それでもいわれたとおり冷たい井戸水でジャブジャブ顔を洗い、ガアガアとやけに大きな音をたて、うがいを済ませました。

部屋に戻ると、すでに食卓の用意ができていて、プーンとおいしそうな香りがしています。メロンは、わざととりすました顔つきで席に着きました。なあに、虚勢を張ってるだけです。姫はまた、くすくす笑い出します。カクン。メロンの内心など、とうに見抜かれていたのです。

「とばけたって、だめ。そんな顔、ちっともこわくありませんよ」

下手な演技も、あっさり見破られ、メロンは仕方なく笑顔を見せましたが、真白い歯が赤い唇の間からチラとこぼれ、それが姉さん女房の母性感情を著しく刺激しました。姫は、いきなりメロンを抱き上げ、膝の上に坐らせてしまったのです。反抗すると、また縛られるからですから、おとなしく姫の意向に従います。

「わたしが食べさせてあげますからね。はい、アーンとお口を開けて……」

一時間以上も要して非常に能率の悪い昼食がすむと、姫は昨夜織り上げた美しいマフラーをとり出してメロンに渡し、市場で売ってくるようにいつけました。その代金の一部で食料品を仕入れてくること。今夜はおじいさんにも御馳走するから材料は多い目に。牛肉は霜降りの特選ロースに限る。大根の葉っぱは不要。玉子は色つやのいいのを選びソースは徳用びんを買ってくる。等々のうるさい附随事項がきます。高貴はお生れであらせられるのに、下々の事情にもお詳しいようです。

「金三十枚以下で売っちゃだめよ、そのマフラー」

「そんなに高く売れるんですか、これ」
「そうよ。……ああ、それから食料品を買った余りで極上の絹糸を七色ほど買ってきてね。今度はシヨールを作りますから」

「行ってきました……」

「箱入りいちごは、下の列のを見るんですよ。上にだけ見ばえのいいやつを乗せて……」
何をいってるのか分らない。メロンは家を飛び出しました。ぐずぐずしてると、また、

ややこしい注文がつきそうだ……。

ちっぽけなマフラーが、姫のいったとおり金四十枚という高い代価で売れたので、メロンは目を丸くしました。驚いたなあ、もう一体どうなってるんだろ？

メロンは、いわれたとおり市場で諸物品及資材を購入しましたが、直ぐ帰るのも業腹なので適当に時間を潰してから、帰路につきました。こっちも惚れた弱みを見せるのは何となく、しゃくだからです。

果して、山の神は低気圧です。

「あれほど念を押したのに、道草を食ってましたね。今、何時だと思ってるの？ ガミガミ……」

「ちがうよ。真直ぐ帰ってきたんだよ。クドクド……。はい、これ買物」

メロンからバスケットを受け取った姫は、その中味を順々に点検します。指示どおりの数量と品質であるかを確認するわけです。

「……このお大根、全部スが入ってるわ。自分で選り分けてきたの、あなた？」

「うん。店員に頼んでいるものだけ……」

「ひどい八百屋ノ 子供を使いにと、こんなものばかり、よこすんだから……」

帰宅時間遅延に対する忿懣の念が、非良心

的営業方針の青果商に飛火しましたが、丁度この時、帰ってきたセツカイ老人がうまくないだめたので、姫の機嫌も直りました。

夕食は昼食と同じです。料理の献立がそうなのではありません。セツカイ老人を目の前に置いて、姫はいやがるメロンを無理やり膝の上に坐らせ、親鳥が雛に餌を与えるときの要領で、手ずから食べさせ、口うつしに飲ませるのです。相伴に預かったセツカイが、何とも渋い笑いを浮べて見ているので、メロンは気が気でなく喉もろくろく通らない状態なのですが、姫は真剣そのものの、他人の思惑など一向頓着する風もありません。若い亭主を抱いて勝手に浮かれ騒ぎ、人目もはばからず戯れるありさまです。

「お肉ばかりだとジンマシンになるわ。たまには人参も食べまちょうねえ。ハイ、アーン」

これでは際限がありません。少しテンポを早めましょう。

要するに、かくのごとき濃密な状態が一週間ほど続きました。昼間、市場へ織物の売却と資材の購入にやらせる以外は、常にメロンを手許に置き、夜のことはもとより、食事、家事、昼寝と、少しでもメロンを離すことを

いやがり、猫の子を可愛がるように、まといつくサファイヤ姫だったのです。あくなき姫の情愛にメロンは窒息しそうになりました。たまには外で遊んでこようと思っても、門限がまた厳しい。日没までと制限し、少しでも遅れると機嫌を損ねるのでした。こうべったりと世話をされると息をするのも苦しいが、下手に口応えなどしたら痛い目にあうだけです。すから、メロンは、いつもハイハイと従順な態度を示しました。

しかし、物いわぬは腹ふくるるわざなり、内攻した不満は、いつかは表面化するもので押しかけ女房の猫かわいがり体制にも、一転機が到来しました。

ある日、門限のことでこっぴどく叱られたメロンは、大層に腹を立てました。よせばいいのにその夜は背中を向けてストライキを敢行し、次の日、殊更に帰宅時間を遅らせたのです。——なにあに、商いに手間どったといえはいいさ。そう何もかも自分の思惑どおりにはいかなんことを思い知らせてやろう。思い知らされるのが自分であることには一向思い至らず、髪結いの亭主は帰宅時間遅延に関する口実を案出し、姫の追及を撃破する想定問答集を作成、暗誦していました。

小智憐れむべし、事態はそんな樂觀を許すものではありませんでした。

「ねえ、おじいさん。少し御相談したいことがあるんですけど」

「どういふことかな、娘さん」

「主人がまだ帰って来ないので、どうしようかと思つて……」

「たまには、そういうこともあるさ。子取りにさらわれるほどの年でもないから心配はいらぬて」

「いいえ、昨日叱つたのでふくれているのです。いつもこんな可愛がつてるのに、何故反抗したりするのでしょうか」

「何事も、ほどほどにせんと。サービスはそこそこで充分じゃ。甘やかすとつけ上る、これがまずあの年頃の習性ですて」

「……少しお灸を据えてやりますわ。……おたくに手ごろな筈はないかしら」

「手荒なことは感心でみんな。それに、お前さんが力まかせに打つと危険じゃ」

「ただ懲しめるだけですから、手加減して使つつもりなの」

「じゃが、反省させるのなら、もっと効果的なやり方がありますよ……」

8

そうとは知らず、メロンは月光の冴え渡るころまで町中をぶらついていました。が、腹はへる、姫も恋しくなる。もうこれくらいでよかろうと、家へ戻ってきました。

「お帰りが遅いので、とても心配していましたのよ」

「うん、実は……」

「そんなお話聞かなくても信用するわ。あなたって正直な方ですもの」

夕食の用意はちゃんとしてあるが、愛するメロンの帰るまで手をつけずに待っていた、などとサファイアはニコニコ笑つて言うのですが、感のいいメロンは何となく剣呑なムードを鋭敏に察知してヒヤリとしました。サファイアはいつもと同じようにメロンを膝の上に坐らせましたが何故か自分だけバクバク食べるのです。情勢は、とみに險惡の度を加えます。びくびくして横目で姫の顔色を伺うと、まるでどこ吹く風といった、おとぼけフェイス。その真意を忖度しかねて、しばしおとなしくしていたものの、空腹には勝てません。勝手に食えということだろう、と希望的観測に基き、おそろおそろ食卓に手を伸ばし

ました。いけない。パンを掴もうとした手首をやんわり押さえられてしまいます。

「そうがさつくもんじゃありませんよ」

「……でも、ぼくだって、おなががすいてるんだから……」

「生憎と、一人分しか作らなかつたの」

「そんな、いつもと同じ分量があるじゃないか！」

「そうかしら？ でもこれで一人分よ」

理不尽なことを言うので、メロンは思わずカッとなり、再度手を伸ばしたのが運のつき、あつという間に利腕をねじ上げられてしまいました。腕の抜けそうな痛みに、メロンは悲鳴を上げます。

「どうして、こうお行儀が悪いのかしら」

「い、いたい……も、もう決して手を出しません……」

「こつちのほうは信用できないわ」

態度を改めるといふメロンの哀願にとりあおうともせず、サファイアは、さっさと後手に縛り上げます。そして有無をいわさず部屋の隅まで引きずっていき、立たせたまま柱を背にして、かっちり括りつけたのです。

「ここで少し頭を冷やさないね」

「何、何でこんなことするんだっ！ ケ、ケ

イサツに訴えてやるから……」

「常識のない人ね。夫婦のトラブルは家庭裁判所ですよ」

センス不足を指摘されたメロンは、尚も必死に抗弁を続け、腕力ではかなわない妻の不法行為の非を鳴らしましたが、所詮ゴマメの歯ぎしりにすぎません。

かくてはならじとゴマメ君は、論点を変更し帰宅時間の遅れた理由を力説しはじめましたが、それがかえって逆効果になることに気づかないのです。しかも相手が終始沈黙を継続するので、折角の想定問答集も何の役にも立ちません。

「……うそじゃないんです。決して」

「たまには遅くなることもあるでしょうよ。

一日くらい当然ですわ」

改悛の情、顕著なる事と認定した女裁判官は口先だけは同情的にあっさりはぐらかします。懲戒措置は、かなり長期戦の様相を呈してきました。いくら弁明しても縄目を解こうとしてくれないので、メロンは、はしたなく大声で喚きました。

とたんに、ピシヤリと痛烈な平手打です。

「おだまりノ、いいかげんにしないと天井から吊るしますよ」

形相すぐく一喝されて、メロンは竦み上りました。カチカチ山の狸君の二の舞を演じたくないので、急に悄然と首うなだれ、沈黙してしまいます。サファイヤは再び柔和な表情に戻り、食卓をメロンのすぐ前まで運んでくると、またおいしそうに食べ始めました。

無論、いやがらせです。いかにもおいしそうに食べびらかします。うまそうな匂いがプンと鼻に来て、メロンは泣きそうな顔付きです。ますます空腹はひどくなってくるし、言い訳は通りそうもないし、柱に括りつけられ身動きもできない。真実、口惜しいかぎり無念やる方ない表情です。

食事が済むと、サファイヤは一人で酒宴を開きました。今度はこれ見よがしに飲みびらかす。恨めしそうなメロンです。ほろ酔い気分になったサファイヤは、幾分かいいように感じたのか、パンや焼肉の残りをメロンの足許に押しやりました。

「やっぱり、あなたの分は残しておくわ。好きなだけ食べて下さいね」

但し、その食べ方までは関知しないという意向です。両手を後手に縛られ立ったまま柱に固定された者が、足下に置かれた食物をいかにして摂取するか、それについては狐君に

招待を受けたイソップの鶴氏にでも聞いてほしいというわけでしょう。

サファイヤ姫は、それからわざとメロンの前に床を伸べると、素知らぬ顔で衣服を脱ぎはじめました。そしてうるわしいヌード姫は就寝前の美容体操にかかります。踊子の衣装や肌に着たい手を触れないで下さい——、場末のストリップ劇場のマイクは、こうガナリ立てるのを慣例としますが、この場合、そのドチラの心配もないわけで、いかに大胆なポーズでも、思いのままにとれるというものです。昨夜のストライキに、今巧妙なロックアウト戦術で対抗されたメロンは、作戦の失敗を感じ、身悶えしていますが縄目は固く肌に食いこむばかり、どうすることもできません。

やがてサファイヤは毛布もかけず背中を向けて、ぐうぐう寝込んでしまいました。それどころでないメロンは、兵糧攻めと挑発戦術の上下二面作戦に逆上して血が頭に昇り、一晩中、まんじりともできませんでした。

朝が来しました。ひばし作戦は依然として継続されます。一晩くらいで許してもらえそうもない。だが、すっかり覚悟はしていても、目の前でムシヤムシヤやられると、とても我

慢できないのは当然でしょう。

「……ああ、後生です、ほんの少しだけ」

「悪いけど、私の分だけしかないのよ。だって、あなたが市場へ買いに行ってくれないものだから、あるわけないでしょう……」

溺れる者は、わらをも掴む。無駄だと分かっていても、

「いきます、いつて買ってきます。……スグ戻ってきますから……」

「どうぞ御自由に。遅くなってもかまいませんよ」

不運なことに、メロンは縄抜け術を習得していません。何とツイテない若者でしょうか。カワイそうですねえ。

「……では、せめて水を一ぱいだけ」

「砂漠の旅人のことも考えてみたら？ ギラギラした太陽に灼かれながら、何日も水一滴飲めないことが多いのよ」

全く無関係の事項を引き合いに出して、囚人の切なる哀願を冷酷な女典獄は一言のもとに却下します。

一るの望みも絶たれてメロンは、がっくりと首をうなだれました。

正午を過ぎると、次に生理的欲求が限界に達しました。しばらくは必死に耐えていたも

の、いつまでも我慢しきれない性質のものではありません。

「どうか、……お願いです。ほんのしばらくだけ縄を……」

もじもじと腿をすり合わせるメロンを眺めたサファイヤは、その美しい眉をひそめて苦笑いします。

「手間のかかる人ね。どっち？」

分つてくせに蛇足的質問を呈して即答を求めます。真赤になったメロンが消え入りそうな小声で、消防活動したい旨、返答するとサファイヤは不要のかめを一つ持ってきて、足許に置きました。縛しめを解くつもりなど全くなさそうです。

「全く、しょうのない子供だこと。……面倒みてあげるけど、一回だけですよ」

自分の責任は、まるで頬かぶり。保護者意識を露骨に示してから、メロンの顔を見て恩に着せるのでした。

「……まあ、昼間から何てはしたない！ 何ですか、この横着な態度は。一体どういうつもりなのですっ！」

アシスタントたるべき業務範囲を故意に逸脱して、意地悪くも優雅に、そして丁寧な面倒の見方に、当然惹起されるべき状況の変化

を生じたのです。自分で導化せしめておきながら当該現象の呈示者を語気鋭くきめつけ、その不心得を叱責するのです。屈辱と羞恥にメロンは、満面朱に染めて身悶えています。ようようのことでメロンは、焦眉の急からは逃れ得ました。すると保護者はまた追打ちを加えます。

「これくらいことは自分でする習慣をつけなとだめよ、わかって？ もう赤ん坊ではな

いんですからね」と母親気どりで、さとすのです。歯を食いしばってメロンが下を向いていると、

「お返事は？……何とか言いなさいっ！」

頬っぺたにバシッとピンタが飛びました。

「——は、はいっ」

「何がハイなの？」

「……自、自分でするよう、心がけます」できないことでも精神力でやり抜く決意を披瀝しました。メロンの悲愴な決心を聞いて、さすがの姫もクスクスと笑います。

「縛られたまま、そんな器用な真似ができるんなら、奇術師にでもおなりなさいよ」

その夜もまた昨夜と同じことで、ねっちりといじめられます。いつになったら許してもらえるかと思うと、メロンは絶望的な気分

なりました。自責の念が湧き起り、ますます悲しくなり、ついにシクシク泣き出しました。泣くと少しは気が静まるとみえます。

サファイヤは一人で夕食を済ますと、また昨夜と同じ位置に寝床を敷きました。ああ、今夜もだめか。縛られた両手首は痺れ切っているし、喉の渇きで死んじまいそうだ……。

「あ、あと何日、このままにしとくつもりなんでしょう？」

やけくそになったメロンは、眠りにつこうとするサファイヤに向って、悲痛な叫び声を挙げました。懲戒権者の返答は、昼間に比較すると幾分、語調が柔らかに感じられます。

「今夜もう一晩ゆっくり考えておきなさい。どうすれば許してもらえるか、をね。明朝になれば、あなたのお気持ちを聞いてみましょうよ……」

そして、しどけない寝姿で床にもぐりこみました。——大体イイ線いってるようだから、明日は許してやろうかな。……それに、五日も続けて一人寝するの、こっちだってつまらないもの……。

兵糧攻め第二夜が明けて、サファイヤがメロンの意向を打診しようとしたとき、飢えと渇きに憔悴しきった若者は、流す涙も涸れ果

てて、哀れにもいじらしく死んだように眠りこけておりました。

「さて、いかがでしょう、いとしの背の君」
肩をゆさぶり、水に濡らしたタオルで顔をふいてやると、メロンはやっと覚醒し、空ろな視線を姫に向けました。

「ゆうべはよくお休みになれたでしょうか。お約束の時間がやって参りましたけれど」

正味四十時間のお仕置に、全身は痺れ切り手首の感覚は、まるでありません。

「もう数日、このままでいることをお望みでしょうか。それとも、わたしと仲直りなさりたいのか」

と、舞台の役者よろしく大見栄を切り、サファイヤは艶然と問いつめました。

「もちろんそれは、あなたのお心掛け次第ですけれど」

そのとたん、メロンはワッと泣き出しました。それまで堪えていたものが堰を切って溢れ出し、わんわんと大声を挙げて泣きふけりました。ポロポロと大粒の涙を絶え間なく流し、見栄も外聞もなく、面子も投げ捨ててサファイヤの許しを求めるのでした。昨夜一晩で深く悟道の境地に達し、人情の機微を会得したものと思われます。もう決して不心得な

料簡は起さないから、今度だけはお慈悲を以って許して下さい。そういつて泣きじゃくりながら、何回も何回も哀願するのです。

サファイヤは腕を組んで、しばらくメロンの反省ぶりを観察しておりました。どうやらお眼鏡にかなったようです。泣き止むのを待って、手にしたハンカチでメロンの涙をふきとってやります。そしてメロンのあごに手をかけ、ぐいと上を向かせ、鋭い眼差しで見据えました。

「どう、少しは骨味に浸みた？」

「は、はい」

「二度と許しませんよ」

「分ってます……」

柱に括りつけた縄を解かれると、長時間拘束されていたメロンは、へたへたとその場にぐずれるように倒れました。両手の縛しめはまだそのままです。

「そこへお坐りなさい」

きちんと膝を揃えて正座したメロンの前にサファイヤは立ちはだかります。

「一体わたしのどこが気に入らないの？ 正直に言ってごらん」

「……いいえ、何もそんなこと……」
「可愛がりようが不足だというの？」

「い、いえ、別にそんな……」

これ以上、溺愛されたら、脳細胞に異常を来たす、おそれがあります。

「では、どうして楯ついたりするんです」

絶対優位の態勢を背景に、三段論法でゴリ押しされると、メロンはただただ恐懼あるのみです。また泣き出し、サファイアの足下に身を投げ出して、しゃくりあげながら足の甲に顔をすりつけました。泣きさえすれば、いいと思っっているようです。果して、そのしぐさにサファイアは大満足のようです。九分どおり機嫌を直し、急にいじらしい思いに駆られたようでした。

「ま、いいでしょう。そんなしおらしい態度がとれるあなたですから、もう許してあげますわ」

と、語調も優しくおうような態度で貫録を示すのでした。そして念のため、駄目を押しておきます。

「これからは、今までみたいに甘やかしませんよ。分りましたね」

「はい——」

サファイアは、ぐったりとなったメロンを抱き上げ、その両手首の縛しめを解き始めました。

9

仲直りした二人は、また、むつまじく暮らすようになりました。間借り生活だから家はない、カーもむろんない。その代りババア抜きだから気楽です。ジジイはいても気をまわしすぎるくらいの善良なお人好しだから、何の気かねもありません。

甘やかしすぎるのはかえって弊害の多いことを認識したサファイアは、メロンの教育方針に部分的改訂を加え、昼と夜とに指導理念を峻別いたしました。

まず昼の部であるが、それまで著一つ持たせなかった盲愛ぶりを敢然と改め、調理、洗濯、掃除等の家事万般をどしどし言いつけてやらせる。メロンはコロッケの作り方など知りませんから、材料の吟味、配合、味つけ、油の適温など、傍につきそって実地指導を行なう。洗濯や掃除にしても、その理念と精神は等しいから同じ要領で教えこむ。こういうことを習得させておけば、自分の病気や出産のときに何かと便利である。

サファイアはまた、各種織物の製法も覚えやすい技法から、順々に伝授してやりました。やさしく指導すると増長するということ

で、常にきびしいスパルタ式教育で臨み、わずかの手抜き、ごまかしも許さない。少しでも間違えると、むろん始めからやり直します。基本段階をいい加減に卒業させると、あとで応用がきかないから、初歩的な技術要領を何回もみっちり叩きこむ。

しかし暴力を振ったり苛酷な体罰を課することは、いたずらに弟子を畏縮させるだけで得策ではない。従って懲罰は故意に怠けた場合に限定するとともに、その方法も平手打や減食程度に止めました。前節で試験的に実施したロックアウト方式は、非常に効果的であるが、反面、自分もつまらない思いをして損だから採用しない、根気が第一である。不必要な賞讃と過度の叱責は等しい……。

指導方針の宜しきを得たか、もともとカンがよく、手先の器用なメロンは、めきめき腕を上げ、上達していきました。

また、門限については、遅くなってもあまり叱らないよう心がけました。時として息抜きに解放してやった方が、教育上より効果的であることを認識したのは一つの収穫だったから、メロンが同じ年頃の若者と遊ぶことも、ハメをはずさない範囲で許容する。小づかい銭も適宜与える。無論、金銭管理権は一

手に掌握し、金庫の鍵は常に肌身離さず持つ。というのも、知らぬ間に大金を持出されて、女遊びなどやられてはたまったものでないからで、この点は特に監視の目を光らせておく。

小づかい銭の消費明細は、必ず書面で報告させる。これを怠ると小額定期積立てにより、浮気用の資金の調達が可能になるからで、その辺はサファイヤに寸毫のぬかりもないのです。もっとも許されたからと、外でいくら羽根を伸そうと思っても、家庭には厳然としたノルマが待っているのです、そんなに遊んでばかりはいられないのでした。

またサファイヤは、自分の身分を他人に明かすことを固く口止めたので、町の人間はもとより、隣室のセツカイすら、サファイヤを本当の女奴隷だと信じて疑いませんでした。

夜の部については特に述べべき点もありません。ただ昼との均衡上、今まで以上に可愛がったのは当然です。そのほうが自分としても楽しい時間ができるわけで、昼の趣味を夜の実益に巧みに結びつけ、メロンを思いのまに操る術に、一層の力がかけました。昼間激しい締めつけを行ない、スバルタ式に

あぶらを搾った代償として、夜になると憶面もなく思想的転向をやったのけ、甘えたり、すねたり、じらしたり等々と、ここにちょっと書けないくらいの手練手管を駆使し始めたのでした。

そのあげく隣室のセツカイ老人から、とても眠れないとの苦情を持ち込まれました。そこで、その時まで貯めこんだ金で借金を返済し、すぐ近くで貸家札の出ていた一軒の瀟洒な庭つきの家へ転居することにしました。やっと家つきになったわけです。その当時は、権利金や敷金などという不愉快な社会慣行は存在せず、それに家財道具といっても、ほとんど何もないのですから引越は楽なものです。

「お前さん方がいなくなると淋しいな。たまには遊びに来ておくれ」

「すぐ御近所ですもの、おじいさんこそ私達のところへ来て下さい。いつでも御馳走しますわ」

「や、それはどうも。ま、何だね、あまりメロン君をいじめないようして……」

「——ええ、とても大切に扱ってますの。……そうでしょ、あーたあ？」

ところで、メロン家の実権は以前、少し触

れたように、全面的に内縁の妻たるサファイヤの掌握下にあり、亭主のほうは単に若いツバメの実質を有するに過ぎませんでした。当世、俸給生活者の大多数も、妻子を養うとの大義名分こそ保持すれ、その実態は給料運搬係に他ならぬことは、世の識者の夙に指摘するところでありました。最近、少しく反動的きざしを見せはじめた世相の推移に対応して、男性復権などと称しつつまらぬダボラを吹きまくる軽佻浮薄なる三流評論家どもの言説に惑わされ、食わせてやってんだから、という点を唯一の論拠として反旗を翻えし、腎敷状態より脱せんとする向き少からずと聞き及ぶは、真に寒心に耐えぬ次第であり、事の本質を毫も理解せざるものと、いわねばなりません。

問題は袋の中味である。中味とは必ずしも枚数のことではない。実質の伴わぬ虚勢はケイベツの視線によって瞬時に鎮圧される。女房に威張る亭主に、ソコハカとなき哀感の漂うは、常に一種の後ろめたさを意識しているからに他ならぬ。

明治の栄光は偽物なり、文明開花は鬼なき鬼ごっこにすぎずと、かの漱石、荷風両先生は鋭く看破されたのであります。よって、明

治百年祭の式典の中止を即刻、政府に勧告する……。

遊び半分にマス目を埋め、ムキになって大風呂敷を拡げていると、必ずボロが出ますからこの辺で切り上げて、アラビアの夜に戻りましょう。

新宅転居後、サファイヤは一層馬力をかけて、年下の亭主の教育、飼育事業に没頭しました。しつけはきびしいけれど、自分が養ってやってるんだという点を強調したり、鼻にかけたりすることは絶えてなかったのです。

事実、サファイヤの作るマフラーやショールなどの織物は、素材の何倍もの高値で売れるので、メロンもセツカイ老人の下仕事などをする必要はなくなりました。メロンの一カ月の給料分をサファイヤはたった一日か二日で稼ぐので、亭主は経済力のある女房の指示に従っておればそれでよかったのです。

こうして内縁の夫婦は楽しい毎日を過ごしておりました。

物を教えるということは面白いもので、これに生徒ができのよい子供ですと、その習慣ぶりに一層興味を覚えます。

調理・洗濯・刺繍・裁縫と、あらかたその技法を教えこんだサファイヤは、メロンの思

いのほか、のみ込みの早いのに気をよくして今度は相当程度の高い課程を履修させ始めました。指導要綱を確定し、時間割りを作成して、歴史・地理・代数・幾何・詩法などを、少しずつ教えていきます。

それまで以上に忙しくなったメロンは、てんでこ舞いのようなものです。それでも姫の教養と博学に、すっかり畏敬の念を抱いたらしく、きびしいシゴキに耐え、あまりグチもこぼさず、真面目に勉強するのはまことにイジラシク、感心でした。といっても、その日の教科を終えないと食事を与えられないのですから真剣にやらざるを得ないのです。

時には試験をして学習成果を確認し、以後の指導針路の資料とします。試験の結果が香ばしくないと、その程度に応じて各種の特訓を行ない、その代りいい点を取ったときには、普段欲しがっている物を惜しまず買ってやりました。

一方、メロンの方も苦しいけれど、張りのある生活に大体、満足しておりました。サファイヤの、教育方針宜しきを得て、その人格に心服し、すっかりなついてしまったからです。苦手の幾何でいつも叱られるのはいやだったけれど、努力して成績さえよくすればそ

れ相当に賞めてもらえるし、好きな楽器や乗物(?)を買ってくれるので、姉さん女房の心証をできるだけよくして、いい子になろうと心がけておりました。

こうして、昼は師弟、夜は夫婦の風変わりな生活を何カ月か続けておりましたが、サファイヤはメロンの飼育に関して、ますます自信を深めるのでした。

が、油断大敵、災難はいつ襲ってくるかわりません。上手の手から水の洩れる事件が、新居に転居後、百日にして突如、勃発したのです。そのためメロンは危うく男性失格の憂目を見るところでした。その事件の顛末を第10節以下に記述します。

10

それは、ある春の日の夕方のことでした。市場で商い^{あきな}を済ませたメロンが食料や花、化粧品などを買っておりますと、一人のデブの小男が声をかけました。

「もうお帰りがな、メロン君。ならば、ちと話があるんだが……」

「何ですか。キンカーンのおじさん」

第3節に登場した油屋の大将です。毎日のように市場へ出入りしているうちに、メロン

はこのカルピスの町の人間とすっかり顔馴染みになっていたのです。

「お前さんに、もうけさせてやろうというのさ」

「へえ。どんなこと？」

あまり評判のよくない男だから、用心しいといけません。

「ここではなんだから、わしの家へお出で」
何やら腹に一物ありそうです。

「ええ……。でも早く帰らないと、家で心配しますから……」

その日は苦手の幾何の試験日なのです。キンカーンはニタニタ笑って、

「感心感心、何しろお前さんは例の女奴隷に首っただけだからな」

「別にそういうわけでは……」

「尻に敷かれてヘラヘラしているとの、もっぱらの噂じゃ」

「うそですよ、そんなこと。……話ってどれくらいかかるんです？」

「なに、ホンの一時間たらずさ。わしの家には腕のいいコックがおるし、うまい酒もあるので、是非一献さし上げながら話したいと思つとるんだよ」

「お酒は、あまり好きじゃないけど……」

「それに、わしはよりぬきの美女ばかり囲ってあってな、客人には、こつてりサーピスさせるならわしなんじゃよ。上はポイン、下はドカーンのグラマー嬢ですぞ、ウヒ、ウヒウヒ……」

「すぐに済むんでしたら……」

——少しくらいいいだろう。試験は明日に延期してもらおう……。鼻の下を長くして、まんまと引っかけたしてしまいました。

してやったりと油屋、横を向いて赤い舌をペロリ。

キンカーンの屋敷というのは町のはずれにあり、高い塀と広い庭に囲まれたおそろしく大きい建物でした。馬鹿でかいのは小男のコンプレックス克服のためとはいえ、成金根性丸出しのケバケバしい門構えが、その趣味の低劣さを如実に立証しているようです。とにかく大将、油を売ってしたたま荒かせぎをしたものと思われまふ。

メロンを奥まった一室に案内すると、そこには胸の高く盛り上った美女が四人、待ち受けておりました。食卓には山海の珍味佳肴がずらりと並んでいます。確かに豊胸美臀のグラマーぞろいで、油屋の宣伝はあながち誇張でもありません。

キンカーンは得意満面の体で、席に着くようメロンを促すと、メロンの様子を横目でみながら、女達に向って言いました。

「この客人はな、メロンさんといって帯や織物売っている商人じゃ。お前達、大いに歓迎してあげなしゃい」

本日の客はと見ると、まるで絵姿から抜け出たような美しい若者なので、四人のグラマーは大喜び。嬌声を挙げてメロンの傍へ殺到しました。

「まあ、可愛いいわねえ」

「お芝居の若衆みたいだこと」

「ね、ちょっとこっち向いて」

われ勝に手を伸し、総がかりで揉みくちやにしてしまいます。

「だめよ、クラブ。この方は私の専属ですからね」

「まあ、ずうずうしい。何いってんのさ、ハート。わたしが……」

ガヤガヤガヤガヤ。デパートの特売場なみの騒々しさです。

「いいかげんにせんか！ わらばい達は大切な話があるんじゃない」

自分の方は、わが家でありながら総スカンなので面白くない油屋、偽ヒゲをしごきなが

ら貫録を示して叱りつけました。

作法どおり食事を始め、酒を酌交すと、アルコール含有率の高い酒だったとみえ、メロンはたちまち酔いが回り、ばら色の顔に赤味が増しました。すると女達は歓声を挙げ、メロンの背中にしなだれかかり、膝の上に乗る、後から抱きつくなど執拗にからんできます。

キンカーンの説明によるといづれも元王族貴族出身の門地の高い貴婦人ばかりだということです、これはあまり当てになりません。右の挙動ではまず二流のバー、アルサロ出身と考えるのが妥当でしょう。美女達の歓迎にすっかり辟易したものの、反面うれしくもあり、メロンはトロンとした目つきで、鼻の下をぐんぐん伸長させました。サファイヤの顔がチラリと脳裡に浮かびましたが、一日くらいいいさ、仕事にはちがいないんだからな、と強いて心を落着かせておりました。

しばらくこの状態が続きました。だがキンカーンは、そのもうけ話とやらを一向、持ち出す気配がありません。メロンは少し心配になってきました。とうとう、しびれを切らして油屋に催促します。

「おじさん、もうけ話というのを早く聞かせ

てよ」

「ああ、それぞれ。それはじゃね」と油屋はすました顔つきで、やおら用件を切り出します。いよいよ風雲急を告げてきました。

「お前さんの女奴隷を、わしに譲ってほしいのさ」

「何いうんだ、そんなこと！」

「むろん、ただとは言わん。お前さんの買値の二倍、いや三倍、出そう。つまり、労せずして金二千枚のもうけというわけだて」

油屋はメロンがサファイヤをいくらで買ったのか知らないようです。

「絶対にいやです！」

キンカーンは気色ばんだ表情のメロンを無視して、段々値をつり上げ、ついに金一万枚を提示しました。

「あまり強欲なこと言っちゃいかんよ、キミ。よく考えてみなしゃい、半年以上、あの娘のしまり肉の雪肌をいやというほど楽しんだはずじゃ。それをボクは十倍の値で買おうというのでしゅよ。世の中にこんなボロイ話はありません」

勝手に断定してメロンに売却を迫ります。

丸ハゲ先生、よくよくサファイヤの色香に執

着のようすです。

「そんな話なら、もう家へ帰ります……」

「おっと、そうはいかん、何が何でも承知するまではな」

油屋はそれまでのうそ笑いと猫なで声を引っこめて、急に陰険な目つきに変わりました。

と、その時、部屋の戸が開いて一人のひげもじやの大男が現われます。第3節で醜態を演じた警備隊長コケオ・ドオシです。つまりこの家にメロンを連れ込んだのは油屋と隊長の仕組んだ共同謀議だったのです。若者から姫を取り上げてよこしまな情欲を満たし、以前市場で赤恥をかかされた、しかえしをせんとする魂胆なのであります。

11

「やい小僧。さっきから手前勝手なごたくばかり並べておるが、そもそも貴様はだれの許しを得て市場で商いをやっとなるんか、アーン」

油屋とダブルスを組んだ隊長。果然、剛球サーブの開始です。メロンは度胆を抜かれ、一時に酔いがすっ飛んでしまいました。

「は、はい。お役所の市場課長の許可を……」と、ふるえ声で言いかけると、

「だまれ、商いはわしの許しなくてはでき
んのだ。不届千万、ブタ箱へぶちこんでやる
から覚悟しろ！」

職権を乱用して、打ち合わせどおり無理難
題を吹掛けてきます。

「……ちゃんとお上^{かみ}には事業税を払ってます
し、市民税も滞納せずに……」

「やかましいっ！ 四の五のほざくとぶった
斬るぞ」

隊長は腰の大刀すらりと抜いて、ぶすりと
食卓に突き刺しました。燭台のあかりに映え
て刀身が鈍く光ります。月並みなおどし文句
も、この場合は効果満点、正に千両役者の貫
録です。憶病なメロンは、もうふるえがとま
りません。どうせ猿芝居だと分ってはいて
も、身体がいうことをきかないのです。四人
のグラマー達は、あっけにとられた表情で見
ています。

「まあまあ、隊長。ここのところは一つ小生
に免じて……」

と、今度は油屋がしたり顔でとりなしを始
めました。

「メロン君。この旦那は、わしと大の仲良し
じゃ。お前さんがうんといいいさえすれば……」

無届営業の件は目玉にみてもらおうよう頼ん

でやる、というわけです。

「な、隊長、どんなもんじゃろう？」

「わしの一存というわけにもいかんが、何せ
油屋クンは親友だから……」

と、柄にもなく謙遜した警備隊長コケオ・

ドオシは、思いいれよろしく胸をたたいてつ
け加えました。

「兄貴が市場組合の副理事長をやっとるか
ら、そちらへ話をつけてやるとしよう。ま、
よく考えてみるんだな、小僧」

カルピス町役場発行の紳士録によると、理
事長というのが第3節に出たハリガ・ネイ

で、副理事長がコケオ隊長の兄フン・ドオシ
となっています。いつも二股かけてワイロを

取ることで定評のある人物です。

メロンは、がたがたふるえながらも、心中
必死に対策を講じております。——サファイ

ヤは奴隷なんかでないと知らせてやろうか？
が、とても信じてくれそうもないし、第一、

証人がいない。だが、いやだといえどどんな
目にあわされるか分らないし……。

「待ってください。とにかく、家に帰って、
とっくり相談しますから」

「奴隷を売るのに、主人が相談するなどとは
初耳じゃ」

キンカーンも一筋縄ではいきません。この
場ではっきり決着をつけようと、以下しばら
く緊迫したやりとりが続きます。

「でも、そういう約束をしてあるんです」

「つべこべ言いおって、……よからぬことを考
えろとためにならんぞ」

ヒゲの隊長が加勢に出ます。——一旦、口

約束する他ないな。明日の朝、奉行所へ訴え
出てやろう。

「で、では売ってもいいです。……あすの朝
お金を持ってくれば引渡します」

「そうかそうか。いや、結構、結構。では明
朝ということにしよう」

「そんならばくもう帰りますから」

「が、とりあえず契約書だけは今作っておこ
う。……あれは冗談だったと言われても困る
からな」

メロンは、みるみる蒼白になりました。書
類を作成されては万事休す。奉行所へ訴え出
てもこちらの言分が通りそうにもない。——

ああ、弱ったなあ、どうしよう……。

「……あ、あの、ぼくは字が書けないから、
ですから契約書、作れません……」

「信用せんぞ。あの娘を買ったとき署名した
はずじゃ」

「いえ、あのときは何もせず無理やり買われちまったんです。み、みんな知ってます」

コケオ隊長ここぞとばかりしゃしゃり出ました。食卓に突き刺した大刀を手に戻して、「小僧、この期に及んで小ざかしい小細工を弄しおるかっ！」

ときめつけ、大ダンビラをほっそりしたメロンの項にヒタヒタ押しあてます。

「い、いえ……う、うそじゃありません」

引くに引けないメロンは恐怖のあまりガチガチ歯を噛み鳴らして必死の抗弁です。とくに腰は抜けています。

頑強な抵抗ぶりにやや手こずったのか。チビとノッポのダブルスコンビはここで暫時作戦タイムです。

「どうしたものか、御同役？」

「うそに決ってましゅよ、隊長。全く手の焼けるヒヨコじゃ」

「では、少し痛めつけるか」

と、コケオ・ドオシは八つ手のような掌を拡げ、指をボキボキ鳴らします。

「いや、体に傷をつけてはまずい。ここは一つ女どもにムシラせよう。なに、まだ子供だから、すぐ落ちましゅよ」

「というと？」

「つまりでしゅね、……ヒソヒソヒソヒソ……」

「……なある、それは名案じゃ」

かくて作戦打ち合せ完了。キンカーンは、四人のグラマー侍女達を部屋の片隅に呼びよせ、何やら秘策を授けます。メロンは相変らず怯えきった表情で、ガタガタ身ぶるいを継続しています。その背後には巨漢の隊長が仁王立ちで監視中、とても逃げられっこありません。

「……という風にな。一つよろしく頼む」

「やってもいいけど、……でも御褒美は何ですの、旦那様？」（グラマーAⅡハート）

「ほら、お前達の欲しがってたあの真珠の首飾りな、あれを……」

「ふん。たったそれっぽっち？」（同BⅡクラブの科白。同CⅡスピードも同旨）

「わしが来月からお好み焼屋を開店するだろ？ そのこのマダムにお前達の中から一人……」

「あとの三人はどうなるんですよ？ プンプン」（同DⅡダイヤ。注・最も器量悪し）

「じゃ、こうしよう。そのあとであの小僧をお前達に……イヒヒヒ」

「ほんと？ モチ、お引受けOKですわ。……フフフ」（AⅡDの全員）

「何て現金なやつらじゃ」

やがて、メロンの前にとって返した油屋のキンカーン、底意地の悪い薄笑いを浮かべてきわめて紳士的態度を表明しました。

「お前さんのいうことが本当かうそか、一つその身体に聞いてみるとしよう」

獲物を狙う群狼の視線をメロンが意識した瞬間、女達は一斉に襲いかかりました。たちまちメロンは床の上に引き倒されてしまいました。

「あ、……な、なにをするんだ！」

仰天したメロンが絶叫して跳ね起きようとするいとまも与えず、四人のグラマー達は、その上に折り重なるようにして押えこみます。多勢に無勢、その上、元来が非力のメロンのこと、暫くじたばたもがき暴れていたものの、すぐ体力を使い果してしまいました。

三分もたたぬ内に、メロンの体は床の上におおむけに押えつけられ、女達によって人字型にしっかりと固定されたのです。一番腕力のあるスピードが背後からフルネルソンの型にメロンの両腕を制し、クラブとダイヤが両脚を一本ずつかかえこみ、大きく左右に開かせ、しっかりと保持する。これで拘束は充分、身動き一つできません。そこへ最ヘビー級のハートが、腹の上にどっかりと馬乗り

跨って、磐石の重みを据えました。

「メロンさん、白ばっくれるとためになりませんよ」

ハートが強迫します。砂丘の下にあえぎながら、メロンは弱々しく必死の語調で

「本、本当に知らないんです……」

「うそいいなさい！　じゃ、こうすればどうなのさ？」

メロンの胸もとをはだけたハートは、やにわにその腋の下をくすぐりはじめました。たちまち、悲鳴とも泣声ともつかぬ絶叫が、部屋中に響き渡ります。

「あ、ああ……う、うふっ、うふふ、く、く

う……いやだ、いやだあ……」

「じゃ、ここならいかが？」

「う、うっ……うわあ……ふふふ……もう、や、やめてっ……」

美しい若者の身悶えと絶叫は、かえって、女を嗜虐的興奮へと駆りたてました。油屋と隊長は、ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべて、洞ガ峠を決めこんでいます。

「さあ、みんな始めましょう。それっ」

四重奏団の開演です。ハートが脇腹へ手をずらすと、他の三人も各自の支配領域を担当します。横腹、足の裏、内腿、首筋、喉の

下と同時に全面攻撃を受けては、その苦しさは言語に絶するといえます。あぶら汗を滲ませ苦悶にのたうつメロンでしたが、女性軍は委細構わず、ここを先途と攻めたて弦を弾き続けるのです。

「……あ、……あ、もう許して、許してえ！」

指揮者のハートは一まず演奏を中止させ、息もたえだえのメロンに再考を促します。

「もういいかげんに白状なさい」

「でも、そんな、そんな無理なこと言っただけ……」

「しぶとい子ねえ。……じゃもう一度やり直すわ」

ハートの合図で第二楽章の開始です。今度は足の裏から始めて、順次一人ずつ演奏に参加していきます。気が狂いそうです。メロンには、これ以上耐えることが不可能でした。

「ここにする？　それともこっち？」

ハートが脇腹と喉の両方に手をあてがった時、メロンは完全に屈伏したのでした。

「も、もうかんにんして……書く、書きます、何でもしますから……」

「それごらん！　じゃ、やっぱりうそをついていたんだね、あんた？」

「は、はい」

冷酷無残に決めつけられて、メロンはあまりの口惜しさに、声を挙げて泣き出しました。ついに攻め落して口を割らせた女性軍は勝誇った表情で凱歌を奏します。

「生意気な子供じゃないの。大人にうそをつくななんて」

「全くだわ。もっと素直な性格に矯正する必要があるわね。とにかく謝ませようよ」

「それよりさ、まずこんな服はむしりにとってから……」

勝手次第な意見をぶちまくり、無条件降伏の小羊をさいなみます。全く親切なグラマー達です。

「まだ早い、まだ早い。……お前達はすぐ暴力に訴えるからいかん。理非を糺し、委曲をつくすのが円満な大人の責務じゃ。さ、もう許してあげなさい」

直接手出しさえしなければ、暴力行為に加担したことにならぬとの見解をとる油屋は、メロンがついに泥をはいたことに気をよくして大人物の風格を示しました。すっかりペソをかけたメロンは、深く反省の心境にあるらしく、鼻水をしゃくりあげて言われるままに売渡証を作成し、署名捺印するのでした。悪意をもって虚偽の事実を固執し、善良な買受

人に迷惑を及ぼしたという理由で、代価は金三百枚に減額です。ふんだりけつたりです。

——……として金三百枚確かに受領いたしました。○月△日 メロン 印

キンカーンは大喜悦。ニコタ、ニコタ……

「や、どうもどうも。みんなごろうしゃんじやったのう。メロン殿、マナーは明朝お前さんとこへ持参するとして、とにかく仲直りの乾杯じゃ」

と虫のいいことを言い、金杯になみなみと緑酒を注いで、悄然と首うなだれるメロンに押しつけます。しかたなく屈辱の苦い杯を飲んで干したとたん、メロンはクラクラと目まいがしてその場に昏倒してしまいました。即効性しびれ薬が入っていたのです。

——今帰してやったら、二人で夜逃げするかも知れん。あの娘を安全な場所へ移してからでないと放免してやるわけにはいかんて。

キンカーンは拷問上手の侍女達に、メロンを別室に引致、監禁してしっかり鍵をかけておくよう命じました。

「で、さっきのお約束はどうなりますの、旦那様？」

「ああ、それか。……あと一時間ほしたら目を醒すさ」

女達は失神中のメロンを抱き上げて部屋を出ていきました。

「うまくいきましたな、隊長。愉快、愉快」
「では、成功を祝して飲み直しといこう」

コケオ・ドオシもまた喜色万端、ヒゲ面をくしゃくしゃにして同慶の意を表します。

「いやいや、そうもいかん。善は急げということから、早速行って連れて来ましょうわい」
昼間だと人目も多い、目的の娘に泣き喚かれたりしたら困るというわけです。悪賢い油屋、なかなか抜け目がありません。

ああ、天も許さじこの人鬼の所業を、などてか神は見過し給うや。絶望の小羊を煉獄よりついに地獄へ落とし給うか、アーメン——
ソーメンは好きだが敬神の念さらにはない無神論者の油屋は、コケオ隊長に一まず帰宅してもらふこととし、ウドタイという屈強な用心棒を伴に、メロンの家へサファイヤを捕獲に出かけました。一人くらい連れていって何の役にも立たないのですが、それ以上の配慮を油屋に要求するのは無理でしょう。

12

哀れなメロンはしばらくして意識を回復しました。薬の効きめがまだ残っているらし

く、目がかすみ頭がズキズキ痛みます。薄暗い部屋の高い天井にある明り通りの窓から、月の光がぼんやり差し込んできます。夜も相更けたようです。

ああ、あの酒に何か入れてあったんだな、とそこではじめて気づきました。案の定、頑丈な部屋の戸には外側から施錠しており、押しても引いても小ゆるぎもありません。悪辣なキンカーンの意図を悟ったメロンは、すっかり悲しくなつて部屋の片隅にしょんぼりと腰を下ろしました。

一方、こちらは邸内ハレム別室、四人のグラマー達が上臈らしからぬだらしない恰好で寝椅子にねそべり、何やらひそひそ密談の最中です。

「……厳正なる抽選の結果、一番スペート、二番ハート、三番ダイヤ、四番クラブの順位と決定いたしました……」

むろん、ランプの切札順位などではありません。

「でも、お目覚めになつてるかしたら、あの坊っちゃん？」

「行けば分るわよ。とにかく少しでも早く賞味しなくっちゃあ……」

と、トップバッターのスピードは気もそぞ

ろ、焼いもを賞味しながら浮き浮きした調子で言います。

「でもさ、おとなしくお相手してくれるかな、あんたがモーションかけたくらいで？」
「フン。みそこなわないでよ、八年前のミス・カルピスですからね、わたしは」

誇りを傷つけられたと見え、スピードは肩を聳やかし、奇妙なしぐさで腰などを振りました。オーミングアップのつもりでしょう。

すると二番手のハートが気がかりな表情で、「それはいいけど、一人で大丈夫？ もし万一、力づくで抵抗されてここから逃げられでもしたら……」

と口を挟みます。コンテスト荒らしというのはこの国にもいるもので、常連出場者たるハートは数年前のミス・重量挙げでやっと第一位の栄冠を獲得したのです。

そうよ、それが心配だわ、とダイヤ、クラブも賛同しました。メロンを明日の昼までは閉じこめておけ、とのキンカーンの厳命なのです。さっきは四人がかりで押えつけたからうまくいったけれど、一人でねじ伏せるだけの力があるかどうか。あんな華奢な体つきでもやはり男にはちがいないので、案外、力を持ってるかもしれない。それに、見るからに

すばしっこそうな感じだから、万一取逃しでもしたら大変だ。

鳩首協議の結果は、こうです。四人を二人ずつ二班に分ける。さして強くもない子供だから、かりに反抗を企てても二人で同時にかければ充分だ。また、一人が戸口を押えれば逃げられるおそれもない。衆議一決。まず第一班のスピードとハートが発射します。メロンの監禁室まで曲りくねった長い廊下を伝っていくわけです。

「……じゃ、ムシリにいつてくるわよ。あんたたち、そんなさもし顔をしなないで留守番してなさいね」

「言っとくけれど、一人一回ずつだよ。おあとがひかえてんだからね」

第二班のクラブとダイヤにとってこの点が最関心事です。砂漠にせつかく見つけた水源を、勝手に枯渇させられてはたまりません。

「分ってるよ。……その代り覗きにくるのはやめとくれ。わらわは慎み深き淑女でありますゆえに、……フフフ……」

「あんた達とは生れがちがうよ、こっちは」
くじ運の悪さを残念がる元貴族令嬢達です。もっとも、トランプにも王様はいるわけですが。

さて場面転換、メロンが我が身の不幸をつらつら嘆き悲しんでいると、何やら足音がして戸の外でガチャガチャ音がしたかと思うと、二人の豊満な美女が室内に闖入してきました。むろん、スピード、ハートの両淑女です。すぐ戸を閉めてメロンの前後に立ちほかります。

「まあ、お可哀相に。こんな所に閉じこめるなんて……」

てっきりまた自分をいじめにきたと早合点したメロンは、怯えた表情で逃場を探しましたが、そんな所のあるはずはありません。止むを得ず。もう決してうそをついたりしないから、これ以上ひどい目にあわせないので下さい、と手を合わせ床に顔をすりつけて泣訴哀願に及びました。すっかり怖気づいたメロンの恭順ぶりに、両淑女は顔を見合わせて大笑い。この調子ならカルク頂けるわね……
「あーら。若君、わたし達お詫びに来たのよ。さっきは心ならずもいじめたりなんかして……」

と、ハート嬢が惱ましく身をくねらせる。
「ほんとうに御免なさあいね、坊ちゃん、……ですからわたし達、今度は、そのお詫びに、ダイナミックにお慰めいたしたいと存じ

ておりますの」

そう言って、スピード嬢も豊臀をゆすりました。危害を加える意思がないと分ってメロンは一安心、現時点における自己の絶望的疎外状態を忘却し、ポカンと間の抜けた顔つきで両グラマーを拝謁しています。すると女達は安手のストリッパーもどきの仕草で、鼻歌をうたいながら身にまとう衣服を獲物の目前で脱ぎ出します。淑女の慎みはここへくる途中どこかへ落してきたらしい。たちまち、うす桃色に映える白い肉塊が二つ、その全容をあらわに展示いたしました。

弱虫のくせにその方面には人一倍興味を持つメロンはその情勢の変化をいぶかるまゝに現金にも、ポカンからニタリへと急速に変化したのです。

——まず八十点かな。サファイヤに較べると格段に落ちるけど、まあたまにはこんなタipyもわるくはないなあ……。

姉さん女房の周到な飼育法も男性本能を抹殺するには至らなかったようです。

若者の目に牡の閃きを見た女は相前後して二人とも飛びかかるべく身構えたのです。

ここで節を改めると第13節が短くなりすぎるので、このまま続行することとします。

右の次第で、ついによこしまな念願を果たしたスピードとハートは、引揚準備にかかります。床の上には、さんざんな目にあわされたメロンが、ダブルヘッダーの完全登板投手よろしく、ぐったりと伸びています。それを横目で見て、

「ま、九十点というところだね、あんた。ジャリにしてはマナーもいいし、こっちもムシリがいがあったというわけさ」

急にぞんざいな口調に変わったスピードがメロンの健闘ぶりに適正な評価を加えました。

「問題はこれからさ、ちよいと坊や、もっとスゴイのがあとまだ二人、お待ちかねなんだよ。あたいみたいにおしとやかでないのがね、フフフ……」

と、これまた育ちのよさを如実に具現したハートが第三試合の開幕を暗示します。メロンは悲痛な顔つきです。下痢と便秘を併発したような表情です。現実の世のきびしさをはつきり思い知らされた若者は、部屋を出ようとするスピードの脚に必死にとりすがりました。ハートよりも幾分脚の線が美しいのです。

「お願い、待って下さい。……いつになったら家へ帰してくれるんですっ？」

「あすの晩だろうよ。あんたの女奴隷を引っさらってどこか別の場所へ移してからさ。何せ、うちの旦那はすぐくて、用意周到な男だからねえ……」

言わずもがなのことを答えたスピードは、とりすがる哀れなメロンをポンと蹴りこみ、すぐさまガチャンと戸を閉めて鍵をかけました。

——あんなカマキリみたいなしつこい女があと二人も来たらどうしよう。殺されてしまうかも知れない。それに、とメロンは推理します。今の話だとキンカーンのやつ、ぼくをこへ閉じこめといてあすの朝にでもサファイヤを掴まえに行くつもりなんだ。ああ、何かいい方法がないかなあ？ 今夜中にこの屋敷から脱出できたら、サファイヤを連れて別の町へ夜逃げしてやるんだが。……となるとチャンスは一度しかない。アルサロとかアズキとかいう油屋の妾がこへ来たときだ。が、おそろくさつき同様、二人一緒にやってくるにちがいない。一人なら、何とかノバしてやるんだが二人相手では勝目はないし、さてどうしたものか……。

突然、戸が開いて二人の貴婦人が姿を現わしました。ダイヤとクラブです。

「お待ちとおさま。メーさん、御指名して下さったんですってね、どおも」

「モチ、腕によりをかけてこってりサービスいたす所存でございます……」

期せずして元の職場の正体を露呈した二人はザラガラと万物を焼きつくす視線でメロンのおびえたような姿を執拗にねめまわします。第一班の連中がその入手した果実を誇大に吹聴したのでしょうか。何が何でも、甘い成功の香りを吸いとるんだという強い決意が、血走った目に伺われます。メロンは別の決意を固めました。とにかく一か八かやるだけはやってみよう……。

「ねえ、お姉さん、ぼくね、お願いがあるんです……」

監禁されて悄然としていたと思ったメロンが、いやに友好ムードを示すので、クラブとダイヤは顔を見合しました。

聞いてみると手洗へ行かせてくれという要求です。なるほど無理もない。

「ま、しかたないわね。これだけは……」

第一関門、無事突破です。だが両嬢とも監視のためメロンの傍に付添い、その入口のところで厳重な見張りをはじめます。着衣を取り上げておかなかったのが女達にとって悔み

てもあまりある不覚でした。ああ、何たる幸福、何たる御都合主義、後架室の正面、肩の高さのところに回転窓がついており、押せば難なく開くではありませんか。月の光にくるぐると、樹木に囲まれた、油屋邸の広大な庭が眼前に現出します。

正に千歳一遇の好機。メロンは窓から身を乗り出し、脚を抜き出してボンと庭の方へ飛び降りました。その物音に気づいて案内嬢が中を覗くと果してもめぬけの殻、しまった、さあ大変と出歯亀嬢は仰天です。血相変えて長い廊下を走り抜け、ハレム別室のスピード、ハート両淑女に知らせます。

「大変、大変なの。逃げられたのよ！ オトイレの窓から庭の方へ……」

「えっ、何だって？」

「ちょっとした隙にズラカリやがったのよ、あの小僧」

「まあショック！ どうしよう、早く掴まないと……」

わいわい、がやがやがやがや。急遽、逃亡者逮捕緊急四者会談が開かれました。

さて、こちらはメロン。広い庭を一気に突ききって塀のところへ駆けつけましたが、おそろしい高さ、むろん何の手がかり足がかり

もありません。そこで慌てて塀伝いに門へ回ると、屈強そうな男がうろろ。さあ弱った、どうしよう。掴まったら、ただでは済まないと思うと、身も竦む思いです。と、どうやら逃亡に気づいたらしく、屋敷内が騒ぎ出しました。ああ、いけない。助けたまえ天理教の命、と異教の神まで引き出して念じつつ塀に沿って走ります。

わんわん、わんわん、とたんに背後より犬の鳴声。仰天して振向けば、小牛ほどもある獐猛なやつが間近に迫っています。

「みつけたわ！ ここよ、ここ。早く」

ああ無情、思わず観念の眼を閉じんとしたとき、目の前に現われたのは幹の曲りくねった百日紅の大樹です。夢中でとりつき必死によじ登ると、命運未だ尽きず、一本の枝が塀越しに外へ伸びています。ツツツと、本職の猿顔負けの敏捷さで身体を移行させ、両手に枝を掴んでぶら下ると、外の地面にボンと身軽に飛び降りました。助かったぞ！ 夜の闇に向ってメロンは一目散に駆け出します。

直後の塀の内側。犬は空しく月に吠え、獲物を取り逃がした淑女達のうつろなわめきが夜の静けさにこだまするばかりです。

(つづく)



【フィクション】

江戸女牢女囚ものがたり

大 喜 多 淳 二

現在のような社会情勢の下で、相変らず貴誌の発行を続けておられる御努力に深く感謝いたします。

ところで最近のスポーツ新聞の芸能欄で見たのですが、大映で現在『秘録おんな牢』の撮影をやっているそうです。主演安田道代。江戸時代のおんな牢の内部の女囚の生態を描くとのこと、今から期待しております。

この種のものには、昨年作られて貴誌にもよく取り上げられた小森監督の「拷問」の第二話があり、全く堪能させられました。私が

思いますのに、日本における、いわゆる苛酷な修羅場が現実におこなわれた筆頭ものは江戸時代の『佐渡の金山』と『江戸伝馬町の牢屋敷』でないかと思えます。殊に伝馬町牢屋敷の女牢では、女性がからむだけにS・Mの対象としては無限の宝庫だと思います。その中で、役人の行う取り調べに附随する拷問に関しては貴誌でも度々取り上げられておりますが、私が最も興味を持つのは女牢の内部での女囚による女囚のリンチです。

本来は残忍だといわれる女性の本質が遺憾なく発揮されて、肉体的には勿論ですが、それに優る精神的な責苦が行われて、サジズムの真随に迫る光景が展開されていたようです。どなたかこれを取り上げてサジズム文学の頂点を示していただきたいと、かねがね思

っております。しかしこのようなものは、あまりリアル過ぎるのか又、他に理由があるのか、今まで余り取り上げられていないので残念に思っています。

大映のような、ある程度公共的性格を帯びた機関でも映画化するのですから、専門の貴誌でも、この分野を取り上げればいかがですか。この件に関しては私は私なりに資料を集めて、それを基に肩のこらないフィクション物の物語にしたいと思って書いたこともありましたが、残念ながら文章力が充分でありませんし構成力もありませんので、意あまって筆足らず、せっかくの好題材を不消化な表現で汚すのもよくないと思い、投稿を控えておりました。でも今度の大映の映画化がありますし、貴誌でも各分野にわたり原稿募集をして

おられますのに刺戟されまして、今回はこのテーマにて原稿応募させていただくつもりであります。

どちらかといえば、女囚の心理的な面を追って書きたいと思います。対象になる中心の女囚も、無実の罪で入牢させられる浪人の娘とか、町家の大店の内儀が主人の囲いものの奸悪な妾の毘にはめられて亭主を殺し、あるいは密通の罪を着せられて放り込まれるとか、また貧家の女房が盗みを働いてつかまるとか、どちらかといえば精神的に初々しい女囚が、身体一杯くりからもんもんの刺青をしたような、手をつけられないアバズレ女、大抵は夜鷹や宿場女郎上りの残虐で冷酷な女囚に、世にも哀れな滑稽な恰好で色々芸をやらされる。

そういった場合の被虐者と加虐者の心理の移り、あるいは同じ牢内でそれを眺める第三者の女囚の心理といったものを描きたいと思っています。たとえば賤しい手伝い女中として奉公していた女が、虐待にたえかねて金を盗んで逃げようとして捕えられて入牢する。そこへ、その家の内儀が、密通の罪で入牢してくる。その場合、当然おきるだろう残虐な復讐心。目の前で、かつて自分を惨々痛めつけた

かつての女主人が、今あわれにも女郎上りの女牢名主の命で囚衣を剥がれようとしている。悲鳴を上げて必死に押さえる裾が、夜鷹の手でだんだんと捲り上げられる。そういった情無用の情景を眺める泥棒女囚のゾクゾクするような期待、そういった面を中心に書きたいと思います。あくまでフィクションですので、リンチの方法も実際にあった兇悪なものとは避けますが、次のようなものはどうかと思います。箇条書にします。

一、入牢の挨拶（キメ板）

新入女囚がつるを持たないと、尻まくりで前かがみにさせ、剥き出しのお尻をキメ板で撲りつける。

一、裸おどり

同じつるなしでも、全然、一文もないものはキメ板を食わされた後、腰巻も剥がれて完全に素裸のまま満座の中で裸おどりをおどらされ真赤な恥をかかされる。これをシャバ忘れ、あるいはスッテン踊りともいう。

一、吊し責め

後手に縛られて牢格子の上の方に腰巻を輪のように吊した中へ、アゴをかけて吊り下げられる。死なないが苦しんで足を盛んにバタバタさせる。

一、詰め止め

詰めといわれる牢内便所の使用を一日一回に制限される。その間にどうしてもという時は、牢内の片隅の落間という土間に置いてある蓋をした樽を持ち出して、詰め役という詰めの監視をする女囚の前に置き、詰め役の目の前に丸出しのお尻を高々と上げて使用することだけは許される。ただし小用だけ。

一、搾り責め

新入りを着衣のまま仰向けに寝かせ大の字にさせ、両手の上に二人の仕置役が尻をおろし押さえつけ、今一人が新入りの胸を跨いで乗り、両手で腋の下を搾り、今一人が片手で髪を押さえつけて片手で首を搾る。簡単なようだが、新入りは苦しさで痒さのあまり、それだけ自由になる両足をバタバタさせ、牢内にあられもない姿を丸出しにする。

一、ビタ銭くわえ

一、ごひろう挨拶

この二つは、新入りが素人女囚だと、代々の女牢名主は好んでこれをやらせた。追いつるの苦面がつくまでやらせるが、新入りにとって、恥かしさ口惜しさの極を味わわれる。そこで大抵は、牢内での反抗が何を意味するか充分に知りながらワアーワアーと赤ん坊

のように泣き叫びながら手向いするので、役付が牢内に秘かに持ち込んだロウソクの火で足の裏やお尻を焼かれるハメになり、揚句の果「恥ずかしい、口惜しい」と泣き叫びながら演じさせられることになる。この中でビタ銭くわえというのは、隅にある防火用の四斗樽の上においてある手桶の握るところの上に少し隙間がある、そこへビタ銭をたてにのせる。それを牢内の真中に置き、囚衣と腰巻をまくり上げた恰好で手足をつかわないでくわえさせられる。大抵の素人女囚は、初めてのことでだから出来そうにもないのを、又お尻を焼くとおどされて泣きの涙で、散々あられない恰好で全身汗びっしょりになり、滑けいなアクロバットを演ずることになる。一日や二日では中々出来ないで、何日も延々と続くことになる。大勢の女囚が笑いこける中で、一人だけが泣きながら道化師となる。

又、ごひろう挨拶というのは、つるなしの新入が裸おどりをおどった後、身上改めといって全裸で牢名主の前に正座させられて、犯した罪や男出入を告白させられる。が、その新入りが美しい上品な娘や初々しい花嫁だったり、牢名主の好みにあった豊満なアブラギツタ年増であったりすると、牢名主の方にお

尻を向けて、いわゆる天の橋立股のぞきという恰好をやらされるのだが、余りの恥ずかしさに身を震わせてためらう。すると牢名主の下知で数名のアバズレがとりかこんで、彼女の腹に巻いた帯を左右に力一ぱい引っぱってヒョウタンにする。その苦しさにたいていは泣く泣くビタ銭くわえを演ずるが、まだためらうとロウソク責めにかけられる。

一、^{かが}屈み責め

反則に対するリンチの一種で、羽目板の一部に高さ四尺ほどの棚がある。その棚の下へ膝を曲げて立たされる。ごく軽いリンチだが大変苦しく、たいていの者は泣き出す。

一、節分祭

江戸城の大奥では、大勢の美女が將軍の寵を競ったものですが、そのため暗斗も激しく高貴な女性が反対側の中老の毘にかけられ、毒害をたくらんだという汚名を着せられ、処刑されることになるが、残忍な中老は、ただ殺しても面白くないと、側女中に相談の上、彼女を非人に落して、その上でこの世の地獄の伝馬町の女牢へ放り込もうとする。普通なら身分制度が厳しく、士分以上の女は女牢へ入れられることはないのだが、そこは権力次第、金次第。こうしてその高貴な女性が、あ

られもない女牢入牢ということになる。こんな女囚は徹底したリンチを受けることになるが、節分祭や、後のうぐいすの谷渡りもその一つである。

この節分祭というのは、腰巻一つで牢の真中に立ち、尻まくりさせられ、一升の大豆を床に撒き散らされる。それを両足を大きく開いて膝を絶対に曲げないで前屈みになり、右手に持った短い箸の先で、左手に持った入れ物の中へ一粒のこさず拾わされる。そして大抵は、後二、三粒というところで、膝が曲つたと因縁をつけられて、又やり直し、ぶっ倒れるまで続けさせられる。

一、うぐいすの谷渡り

これは、ざらざらした麻縄、何人もの不潔な女囚の使用で汚れ切った麻縄の一端を、牢格子にゆわえ、他端を仕置役二人が握り、全裸に剥がれた女囚がそれを跨いで縄をはさむ恰好になり、両手は上に大の字に上げる。縄の痛さに爪先き立ちになりながら、仕置役が、よしというまで、前進、後退、往復する痛さに耐えかねて立ち止ると、又一人の仕置役が針で尻をチクチクとさす。

「ホーホケキョウ、ホーホケキョウ」

悲鳴が牢内にこだまする。

【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

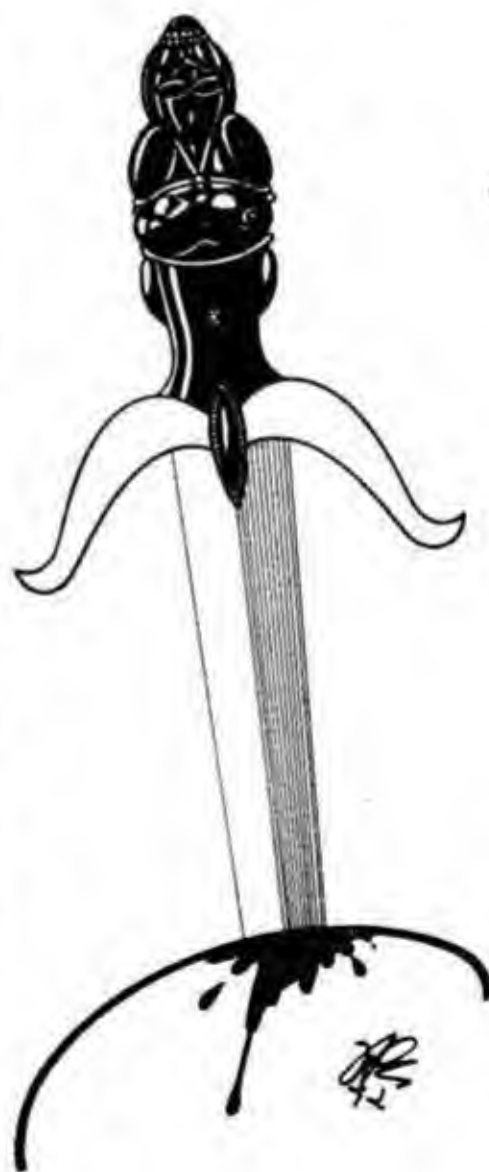
朝 礼

地底の生活に、朝日がさすということは望むべくもない。電灯がついている時が昼間であり、消えている時を夜と思う他はなかった。しかし、それとても新藤の気まぐれで、長くも短かくもなってしまう。恵利香は月日の観念を喪失してしまった。従って、契約の期限にしても、懲罰の都度、何度も延長されたという理由ばかりでなく、いつとなく、何が何やらわからなくなってしまうていた。

復

讐

(その7)



千葉青鬼

つまるところは、有期でも無期でも、実際は大差なかったというべきであろう。

何時間たったか、自分の睡気は一切返上して、恵利香を支えるのに、やっきとなっていた緋紗絵夫人も、いつか、うとうとしてしまったらしいのだが、生暖かい液体が、うなじを濡らすのを感じて、ハッと目を醒した。サメザメと哭く恵利香の声が耳に入る。耐えきれなかったものと見える。

無情な縄のもたらす苦痛は、ただでさえ我

慢に我慢を重ねている生理現象を、一層こらえ難いものにさせる効果を持っていた。緋紗絵夫人とて例外ではない。

冗談では、連れ何とか言うが、この場合、笑うどころの話ではなかった。死にもの狂いで押えようとしてみても急迫した生理的要求を引き延ばすことは不可能だった。とうとう限界が破られる時が来た。おぞましいものは逃れるすべもない恵利香の髪の中に吸いこまれていったのである。

部屋中がまぶしい程あかるくなって、新藤が現れたのは、丁度そのときだった。二人とも全く知らなかったことだが、もう七時間余り経過していたのである。

電灯がついて、二人はホッとすると、逆に、恥かしさで慄えていた。穴があれば這入ってしまいたいと思う。いっそ、もとのまま暗闇の中に放置されていたら、いくらか気が楽だったのにと考える。しかし、ここでは容赦なく新しい生活が、苦難の一日が始まるうとしていたのである。

「くさい、くさい。二人とも何という行儀の悪さだ。二度とこんなことをするとオムツをはかせてしまうぞ」

大げさに言いながら、右足をあげると、恵利香の反りかえった横腹をガンとばかり蹴とばす。組合わされた二人の囚女がグラリと横倒しになった。

「ギャッ」

蛙をつぶしたような恵利香の悲鳴。ギリギリに巻かれ繋がれている細い紐によって、乳首が千切れてしまうかと思われるばかりに、引っぱられたからである。

覆面をかぶっただけの新藤は、互いに責め

あっている、入りくんだ肉塊を、冷ややかに見下していた。

「どうせ同じことだ」

とつぶやきながら、やおらその哀れな荷造りされた塊りに向い長々と放尿しはじめた。数多の異性を悩殺する力を備えた美貌も、美しい曲面に包まれた素晴らしい肉体も、今となっては哀れにも醜悪な便器になり下ってしまったのである。

新藤は、金属製の仮面を用意していた。仮面といっても、眼鼻口のあたりを最少限度に覆って、恵利香に相手が誰であるか覺らせないためのものだった。同時に、口の中に押し込んだ金属球と外からの口蓋をネジでとめることによって猿轡の役を果すようにもなっていた。それを、手早く緋紗絵夫人の頭部に装着すると、後頭部でパチンと施錠してしまっ

た。こうして、はじめて二人は苦しい荷造りを解かれたのである。恵利香の目かくしもとられる。更に、二人ながら、どうにもならない後手錠がかけられる。

すると、それが合図でもあったかのように

恵利香が新藤の足下に身を投げ出すようにしてひざまずくのだった。そして、上ずった声で唱えるように言った。

「ご主人さま。おはようございます。朝のおつとめをさせていただきます。朝の訓練された通りのことを言わなければならぬのである。」

新藤は嗤って

「よし、よし。だが、こんなザマじゃ仕様が

ない。二人とも浴槽の中に入れ」

恵利香の手だけが自由にされる。ホースで冷水をかけながら

「よく頭を洗えよ。シラミがわくぞ」

とからかうのである。次に、緋紗絵夫人の方も洗ってやれと言いつけられる。シャクにさわるけれど、命令とあっては仕方ない。わざと手荒く扱うのが、せめてもの腹いせだった。

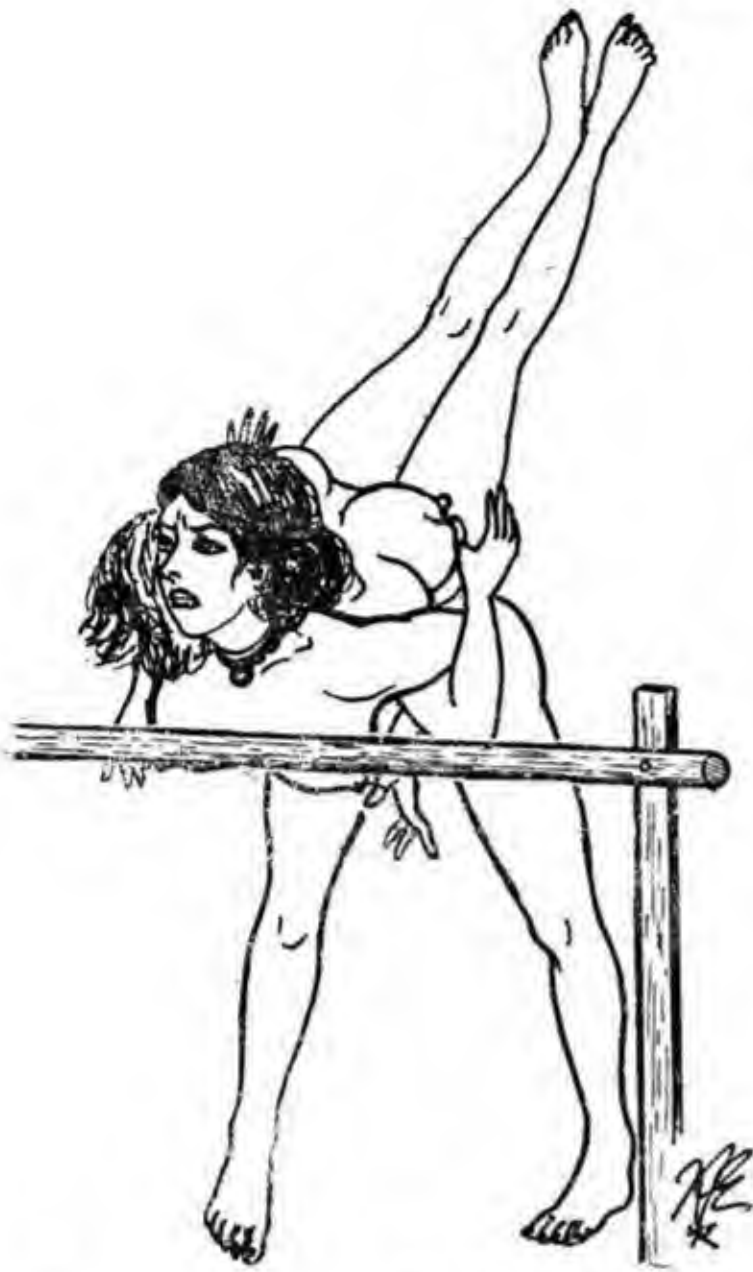
二人の身体がきれいになると、今度は臭くなった洗い場のタイルを磨かされる。これも、何故自分一人にさせるのかと、ひそかに腹だたしく思う恵利香だった。

やがて、再び後手錠をかけられた恵利香と緋紗絵夫人を押し出すようにして、新藤は居

間になっているC室に戻った。何故か、二人の乳首には細紐がぶらさがったままにされていた。

カーペットに、緋紗絵夫人を仰向けに転がし、そのふっくらと盛り上った胸の上にドッキリと腰を据え、立てさせた膝を脇息のようにして肘をのせると、新藤は、さてこう言うのである。

「よからう。朝のつとめをはじめがよい」
恵利香はすぐに、両膝をキチンと揃えて正坐し、床に額をつけて叩頭した。そしてその



まま膝をずらして足許へニジリ寄ると、その足指をなめるようにして、静かに口に含むのであった。絶体随順の証しとして、新藤が要求した朝の儀式だったのである。

暫くすると新藤の手が、恵利香の背中をポンポンとはたたいた。離してよいという合図である。しかし儀式はまだ済んではない。今度は顎を床につけるようにして、新藤の右足を自分の頭に乗せて貰う。つややかな恵利香の頭髮の感触が、新藤の足のうらに快よく使わって来る。こんな屈辱的な姿勢のままで、

お経でもあげるようにして、いつもの誓いの言葉を暗誦させられるのであった。

わたしはご主人様の最下等の奴隷、
わたしはご主人様のみ

すばらしい家畜、

それなのにご主人様はわたしを、あなた様のお持物として、飼育なすって下されます。

ありがたいことでございます。

勿体ないことでございます。

数ならぬわたしの命ですが、

もはや、ご主人様の思いのまま、

わたしのいやしい肉体も、

わたしの貧しい精神も、

すべてをご主人様にお捧げ申し上げます。

かつて人間であったという、

わたしの浅はかな思い上がり、

こころゆくまで罰せられて、

ご主人様の忠実なペットとして、

お気に召しますときの来るまで、

どうか、わたしを徹底的に

調教なさっていただきとうございます。

わたしがご主人様のお持物に

値いしないということは、

わたしが一番知っております。

一生懸命、努力いたしますから、

どうかお見捨てなさないで下さい。

昼も夜も私はご主人様に
絶対服従してお仕えすることを
心からお誓い申し上げます。

何回言わされても、そのたび毎に屈辱で胸
のにえくりかえるような思いになる。途中で
つかえたりすると、又始めから言い直させら
れる。そして、臍を噛むほどの懲罰が待って
いるのである。

その意味で薄氷を踏むような怖しさを覚え
る瞬間でもあった。その上、今朝はくぐられ
たままの乳首が何だか感覚をなくしてしまっ
たような気がする。血が通わなくて、今にも
ポロリと落ちはしないかと思うとゾッとす
るのだった。

漸く暗誦にパスすると、次は身体検査であ
る。新藤の命ずるままの姿勢をとって、その
閲覧に供しなければならぬのである。時
々、全く突然に新藤の脂ぎった手のひらがさ
つと、ところきらず飛んでくることがある
のだ。

「アッ」

と身をすくめると

「動くなッ」

と怒声がとぶ。その都度

「すみません」

と許しを乞ねねばならない哀れな恵利香だ
った。

「こいつはまだ朝のおつとめは無理だろう。
今朝のところは許しておいてやる。オイ、あ
したからは、おまえもやるんだぞ」

緋紗絵夫人の頭を、ピシャピシャ叩きなが
ら新藤は言う。身体検査が終ったという意味
だと覚った恵利香が再びひざまずいて

「では、体操をご覧頂けますでしょうか」

と許しを願うのに

「いや、今日は止めにしよう。その代り二人
で一寸運動して貰うからな」

立ち上りながら新藤が答えた。

体操といっても、結局は新藤を楽しませ、
恵利香をはずかしがらせる一種の裸踊りにす
ぎないのである。恵利香にとって、たまらな
く嫌な日課の一つだったから、やれやれとい
う気がするのだが、一方、又もや二人で何か
苦しめられるのだと思うと、たちまち鳥肌が
立ってくるのだった。

朝の体操

二人が連れ込まれた長方形の部屋、D室の

両隅には、夫々高さ一メートル位のバーが備
え付けてあった。

「二人とも背中合わせに立ってみろ」

有無をいわさぬ新藤の指図である。二人の
美女は凝然として立った。

それは恰も、泰西の名彫刻家が心血を注い
で削り出した大理石像のようであった。美を
少しでも解する者だったら、恐らくハッとし
て暫し我れを忘れてしまうであろうに違いな
いと思える程輝きわたる素晴しさだった。

しかし、新藤はそんなことを全く意に介し
ないといった様子で、こともなげな仕草で二
人の手錠を解き放ち、

「腕を互いに組み合え」

冷ややかに命ずるばかりだった。

そして、組合った手を胸にあてさせ、乳首
からぶらさがっていた例の細紐に、右は右、
左は左と、それぞれ親指をシッカリと結び合
わせるのだった。二人共、両手で自分の乳房
をかかえるようにしながら、背中を合わせて
いなければならなくなってしまう。

こうしておいて、

「朝の体操の代りだ、交替で相手を運びっ
てみせろ」

と無情きわまる運動を言いつける。

部屋の対角線約八メートルばかりを、先ず恵利香が緋紗絵夫人を背負って歩かされる。ヨロヨロと二、三步もあるかないうちに、ダラリと下った緋紗絵夫人の足がもつれる。「背負ってもらった方は、足を垂直にあげるんだ」

ピシッと電気鞭が緋紗絵夫人の足首に炸裂した。ハズミで恵利香の方まで、ぐらぐらしてしまふ。それでも、辛くもバーのところまで行きつくと、それをまたがせられる。大きな荷物背負っているのに、バランスをとるのが大変である。その上、ツマ先で立たなければ、またぎ切れない。しかし、出来ないからといって許してもらえない相手ではないのだ。痛さと恥かしさに顔をゆがめる恵利香だった。

どうにかバーをまたぎ終えると、はじめて緋紗絵夫人は両足を床につけることを許される。しかし、すぐに今度は恵利香を背負わなければならぬ。そして、恵利香の方は、さつき緋紗絵夫人がやっていたように、両足を揃えて帆柱のように天井に向かって立てることを強制されるのであった。そして緋紗絵夫人は、先ずバーをまたいで、反対側のバーまでエッチラと恵利香を運ばせられる。

二、三回往復しただけでも、ハアハアと息を切らしてしまつたほど苦しい運動だった。それなのに、新藤は何回往復しても、もういいとは言ってくれない。とすれば、例によつて、どちらかが気絶するまでやらされてしまふのだと思うと、二人共、悲愴な眼付にならざるを得ない。

鞭と怒声におびえながら、油汗にまみれて頭張つてはみたものの、矢張り緋紗絵夫人の方が、第十七回目でダウンしてしまつた。

当然、緋紗絵夫人は懲罰されなければならなかつた。胸の細紐をほどいて貰い、離された二人は、再び後手錠に。恵利香は居間、すなわちC室の掃除を言いつかつた。緋紗絵夫人は綿のようにクタクタになつた身を鞭うたれながら自転車に乗ることを命ぜられた。

床上に置かれたボディビル用の自転車である。サドルはとり払つてしまつてある。不安定な後手縛りで、絶えず転倒のおそれにビクビクしながら、力一ぱいペダルを踏まねばならぬ。

「もっと早く、もっと早く」

電撃が、ところきらわず火花を散らした。その都度、憑かれたように緋紗絵夫人の脚の回転はピッチをあげて行つたのである。汗は

滝のように流れ、両眼は吊りあがつて、気が狂つたかと思うばかりの凄まじさだった。

二十分程たつて、恵利香が戻つて来た。居間の掃除が終つたという。

新藤は緋紗絵夫人を自転車からおろし、今度は恵利香に乗ることを命じた。そして、緋紗絵夫人の首輪をつかむと、引摺るようにして居間へ引上げて行つた。

自転車にはタコメーターがとりつけてあり、回転数と時間との関係が記録される。怠けてもスグわかつてしまふので、絶対にサボれないのである。

新藤かね

C室は恵利香によってベッドが片づけられ、ペルシャ風のストールなどが体裁よく配置されていた。赤を基調にした室内は、不思議に緋紗絵夫人の薄桃色の肌を引き立て、艶めいた雰囲気醸し出していた。しかし、緋紗絵夫人は、それどころではなかつた。激しい運動に徹底的に筋肉を使い果し、立っていることも出来ない。毛穴という毛穴から噴き出すようにして汗が流れ、適度に脂肪ののつた滑らかな肌を一層つややかに見せている。

息をはずませ、苦しげにうずくまっている緋沙絵夫人の様子を冷ややかに見守りながら、新藤は昨夜と同じような黒いトレーニングシャツとパンツを身につけ、ふっくらしたクッションの間に、ゆったりと腰をおろした。

その前に正座させられる緋沙絵夫人。新藤の手が、つと伸びて鉄仮面を外してくれた。そして、自分も、おもむろに覆面を脱ぐ。その下には、今度こそ本物の新藤の顔があった。ところが一目みるやいなや、緋沙絵夫人は忽ち背を上げて、声をあらげて叫んだ。

「お前は、お前は後藤じゃないか。どうして、私たちをこんな目にあわせるの。人ではない！ 恩を讐でかえす気……」

といいかけて、口惜し涙で喉をつまらせて絶句してしまう。唇がわなわなとふるえていた。新藤は、むしろ愉快そうに

「ハハハハハ。いかにも私は後藤さ。アンタの旦那に拾われて、秘書にまでとりたてて



貰った後藤に間違いないよ」

「それで今までわざと覆面をしていたのね。私や恵利香に知られまいとして」

「いや、お嬢さんは私のことなんか、十把一からげにしか見ていなかったらしい。全然覚えていなかったぜ」

完全に興奮の極に達した緋沙絵夫人は、自分の置かれている悲惨な現状をすっかり忘れさってしまった。それで、以前の社長夫人の積りで威高気になって言った。

「後藤！ はやくこれをほどきなさい。そう

すれば隠便にして許してあげる。サア……」途端に新藤の手から往復ビンタが飛んだ。「バカッ。昔は昔、今は今だ。おまえのザマは何だ。けがらわしい畜生にすぎないんだぞ」

新藤の罵声は、緋沙絵夫人の耳に突きささるようだった。いやでも浅ましい現実を認めざるを得ない。そして、今はもう嘗ての社長夫人の威光は通用しないのだということを改めて思い知らされたのである。急に、張りつめた気が萎え凋んでしまう。そして、新藤の足下にすり寄るようにしながら、

「あなたに少しでも人間の血が流れているのなら、私たち夫婦に、どんなに世話になったか考えてごらんなさい。社長はあなたのことを本当に可愛いがっていて、行く行くは恵利香のお婿さんにしてもいいとさえおっしゃっていたらっしゃったんですよ。そんなにまで、そんなにまで、私たちはあなたのことを思っていてあげたのに……。こんな目にあわせるなんて、あんまりだと思わないの」

膨^{ポウダ}沱と流れる涙を拭うことも出来ないままに、緋沙絵夫人は繰返し、かきくどくのだったが、新藤はそれを無関心に聞き流して、「ところが、私は後藤じゃなかったんだ。今

はじめて本名を教えてやる。私は新藤明だ」
「新藤？」

ややとまどった様に口ごもる緋沙絵夫人。

「おまえにいじめ殺された新藤かねの忘れがたみさ」

緋沙絵夫人がサッと蒼白になった。全身が凍りついたように硬直してしまった。

「かねさんの、かねさんの……」

うわずった声で、紅唇をわななかせて繰り返すばかりである。そういえば、昨夜見せつけられたマスクは確かに新藤かねの顔だった。そして、今見る新藤明の顔にも、かねの面影があった。ゾッと背筋が寒くなって、居ても立ってもいられないほどだった。

「後藤という男は恩知らずだったかも知れないが、新藤という男なら、おまえにふさわしい恩返しをしていると思わないか」

おし殺すような声音で新藤は続けた。

「母が死んだとき、私はやっと九才だった。それから今までの二十年間、どんな思いで生きて来たか、おまえにわかるか。私は母の復讐をすることを誓った。みなし子だった私は苦しい年月をこの誓いだけに支えられて育ってきたのだ。そして今、やっとその時が来た」

「ちがうッ、ちがいます。いえ、私じゃない。あなたのお母さんは気が狂って自殺なすったんじゃないませんか」

緋沙絵夫人の声は悲鳴に近かった。それにかまわず、

「母は死ぬ前に遺書を残している」

冷静な調子である。それがかえって、怒鳴られるより物凄く迫力をもって緋沙絵夫人に迫ってきた。

「これから読んできかせてやろう。そうすれば、母が気狂いだったかどうかハッキリするだろうから」

「いやです。ききたくない。私のせいじゃありません」

思わず金切声をあげて抗弁するのに、

「だまれ、だまって聞け」

と、ドスのきいた声で叱咤される。その激しい調子に圧倒されたのか、緋沙絵夫人は、歯の根も合わず慄えあがったまま黙ってしまふ。

そして、新藤がとり出したのはボロボロになった封筒だった。新藤の母、かねは、彼女の性格そのままに、なよなよした文字で記されていて読みづらかったのだけれども、新藤は何度も何度も読み返えして殆んど空んじて

いるほどだったのである。

遺書

「明さん。どうか、かあさんをゆるして下さい。かあさんがバカだったのです。でも、かあさんはいかに大きな力にひきつけられてしまつて、どうしても、どうしても、ぬけ出せなかったのです。これだけは、明さん、どうかわかって下さいね。」

「明さん。かあさんは、あなたが大人になるまで生きていたい。でも、どうしても生きていくことができないのです。ああ。」

それで死ぬまえに、ほんとうのことを書いておきます。かあさんには死ぬよりもはるかにいいことなのですけれど、書かずにはいられないのです。これを読んで、あなたが、かあさんをきらいになつても仕方ないと思いません。かあさんは悪い女、弱い女だったのですから。でも、どうか、どうか、かあさんを許して下さい。そして、あなたを残して、先に死んで行くかあさんをうらまないで下さい。

「昭和十八年に、軍人だったとうさんが戦死なすつてから、家を下宿にしました。このこ

とは、あなたもおぼえているでしょう。大井海岸で、軍需工場が近くにありましたから、その技師さんが何人か泊ってくれました。その中の一人が、かあさんをひどい目にあわせた三島正義なのです。

空襲で家が焼けたとき一緒に逃げてくれたのも、当時まだ太田正義といていた彼だったのです。そして、焼あとの整理も、バラックを建てるのも、ホントに親身になって助けてくれたのも彼だったのです。あなたは学童疎開に行っていたので、そのときは東京にいませんでしたが、戦争が終って疎開先からあなたが帰ってきた頃には、かあさんと三島とはもう他人ではなくなっておりました。（わかりやすくするために彼のことは三島と書くことにします。）

あなたのような子供をかかえて、三つも年下の三島と、同棲生活することは、ずい分心に抵抗があつて悩みましたけれども、何より戦後の辛い世の中に、女一人では到底生きる勇気がなかったことも理由の一つでした。又、周囲も、皆生きることと夢中で、そんなことなんか問題にもならなかったのです。

「三島は何故か、外では独身だといっており

ました。その頃のかあさんは、きっと年上の、子持女と夫婦みたいになっているのを、他人に知られるのがいやだからだろうと考えておりました。しかし、家では明さんのことをよく可愛がってくれましたし、又、あなたも三島によくなついてくれたので、かあさんは、籍こそ入れて貰えませんでした。結構満足して暮しておりました。

ところが、昭和二十二年頃だったと思います。突然、降って湧いたように災難がやってまいりました。

三島の才能と技術にほれこんだ先代の社長さんが、どうしてもお嬢さんと結婚して婿養子になってくれとおっしゃったのです。狡猾な三島はそれを承諾してしまったのです。

「そうになると、かあさんのことが邪魔になつてきます。当然、先方もかあさんとの関係を調べにまいりました。亡くなった先代の社長は、裸一貫で身代をきずきあげた苦勞人ですから、かあさんとのことがわかってもしも態度を変えようとはしませんでした。かえって、かあさんに大金を払って別れてくれるように人を向けて来たのです。

三島に頼りきっていたかあさんは、すっか

り逆上してしまいました。今になって、籍を入れて貰っていなかった弱身を覚っても、どうにもなりません。それより何より、離れて行く三島の心は、もうどうすることも出来なかったのです。

只一つ、先方の弱点は、かあさんとの関係を知るみに出たくない。マスコミに感づかれたくないということでした。世間的な地位も名誉もある家ではあたりまえのことです。かあさんは、これにとびつきました。三島がかあさんを棄てて、社長のお嬢さんと結婚するなら、一切をバラしてやると開き直ったのです。これには先方も弱ったようでした。

「ところが、社長のお嬢さん、緋沙絵という人が、また、負けずぎらいな性質で、すでに三島のことを好いてもいたことでしょうか。反面、かあさんをひどく憎むようになったのも当然といえば当然だったのです。

卑劣なのは、それをうまく利用した三島の方です。この悪魔は、かあさんをおとし入れようと、ひそかに爪をといでいたのです。

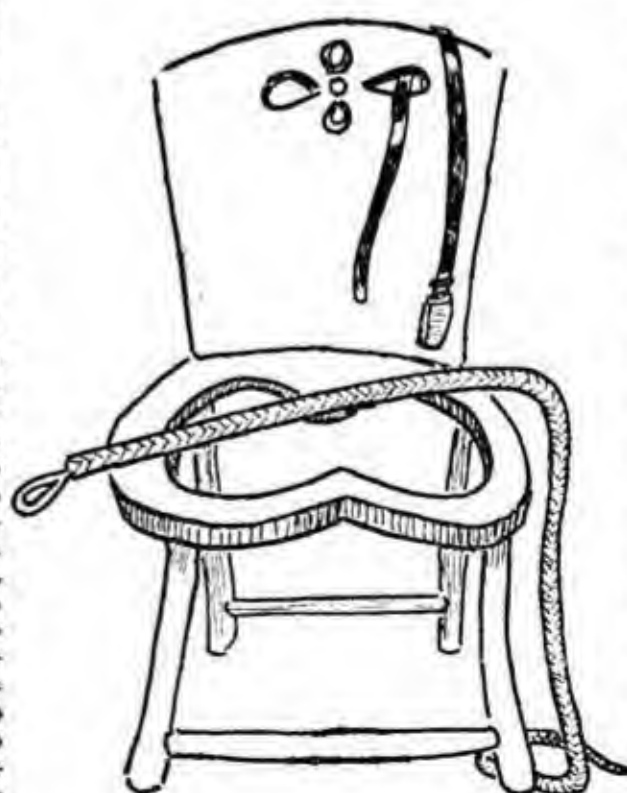
「ある日、明さんのことで話があるからというので、あなたを隣のおばさんに預けて緋沙絵のよこした車に乗ったのが、かあさんの運の尽きでした。

（未完）

心傷^{こころ}たむ^い遍^{へん}歴^{れき}

第三十八章 仮釈放審査 (三) V

西 条 操



「明日、縞馬女たちを十名ばかり貸して欲しいんだがね、コリンヌ」

総務課長がコリンヌに談じ込んだ。

「明日!! どこで何させるの?」

「寮の工事の後始末だよ。清掃や床磨きやなんかは契約に含んでない、と云いやがるんだよな、請負業者の奴。なにしろ予算はギリギリだし……」

「ちょっと待って。頭を下げて追加予算を貰って来たのは私よ」

「そうだったなあ。だけど、お住まいになつてお嬢さんがたの注文がうるさくてね。内

装工事を念入りにやらせたもんだから——」

「ま、そりゃいいわよ。でも、寮にはワンピースたちが居るでしょ? たしか、四名配属してある筈だわ」

「ワンピース」とは、釈放を控えて監舎暮らしから離れた女囚のことで、股布はもとより、MOMPEスタイルを解かれていた。

「彼女たちは忙しいんだなあ。お嬢さんがたのお世話で手一杯らしい。寮の主任女史が泣きついて来たんだ。頼むよ、コマメで従順なのをね。一ダースほど行きや一日で……」

「仕様がないわねえ。だいたい、コマメで従

順な女がこんなところに十人も居ると思う?

昼食は喰べさせてやってくれるわね? えーと、明日の舎外労役は三監か——」

かくて、七月初旬の朝、第三監舎から選ばれた八名は監舎の広間に整列させられ、出向いて来たコリンヌ課長を迎えて正座した。

「——今日は、お前たちを塀のそとで労役させます。いいわね? よく分ってるだろうから、くどくどとは云わないわよ。お前たちはあと僅かの者ばかりだし、服役成績も悪くないんだし、不心得なことをするような者は居ないと信じます。労役の都合上、腰の鎖はか

けません。それだけに、よく自戒して、一生懸命に精出して来るのよ。いいわね？」

女囚たちの顔に喜びの色が浮んだ。

「——あの、課長さま。だったら、あのイヤな革バンドもカンニンして貰えますの？」

コリンヌはうなずき、女囚たちは更に喜んだ。ミシュリーヌがおずおずと訊ねる。

「——あの——それで、どこへ行きますのかしら？ すみません——」

「黙って連れてって頂ければ分ることよ」

「——は、はい。すみません」

「ホホホ。気にかかるのね。じゃ、教えたげるわ。コンピエーヌ駅前広場のお掃除よ」

ミシュリーヌは色を失ない、女囚たちの間に悲痛な溜息が湧いた。

「あれは冗談よ。この寮のお掃除。安心した？ さ、立ってッ」

マリー婦人看守が命令し、女囚たちはホッとして立ち並んだ。

「ああ、やっぱり——」

一番端に立つ中年女囚が、見やって悲しげに咳き、鼻を吸って両手をそろえた。

「バカね。ここへ来るのよッ、ひとりずつ」

と、マリーが台のそばに立った。台上にはロープやら手錠やらが並べられている。

「さ、来なさい。私に持って来させる気？」

女囚たちは打ちしおれて、ひとりずつ手錠と腰ロープをかけて貰いに行った。

「——あの、課長さま」

三五八号の無理心中娘が哀願を絞った。

「決して——決して逃げません。ですから、手錠かけないで——。おねがい」

コリンヌ課長が半月形の眉を寄せる。

「お慈悲ですから——。手錠付きを見られると、もう恥かしくって恥かしくって、死ぬ思いなんです。おねがい——」

元文部省秘書嬢も涙を浮べた。この三七四号は、あと二カ月ほどで満期出獄だ。年季が明ける頃になって、かえって屈辱が身に沁み

るようになってたらしい。

「どこまでツケあがるのッ」

コリンヌ課長が紅唇を引き締めた。

「腰連鎖を免除してやりや、こんどは手錠もと云うのね。次には、赤縞服がイヤだと云い

出すんだろ。ワンピース着せてやりや、こんどはお化粧したいと来るんだわ。甘い顔して

るとキリがありやしない。これ、お前たち。受刑者が塀のそとへ出して貰うのよ。どう考

えてるんだろ。受刑者といえは少しは体裁が良いけど、世間さまじゃ懲役人とおっしゃる

わ。手錠が最小限の処置です。バカねッ」

身のほど知らずなことを願ひあげた二人はもとより、ほかの女囚たちも今更のようにシ

ュンとした。既に手錠腰縄の三人は両手を腹の前で握り、一人がまつげしばたいて鎖をま

さぐる。模範囚だから免除されているモンペの錠を、監外労役の故にかけられたのだ。

「こら、懲役ッ。さっさとおいでッたら」

マリーが台のかたわらで床を踏み、捕縄を結びつけた手錠をカチャカチャ打ち振る。お

給料なんかはお小遣いのマリーだから、女囚の気持などはもとより、上司の思惑なんか気

にも留めない。ことに、コリンヌ課長とは友人づき合いの仲だ。

元秘書嬢がビクリとし、泣きそうな顔で台に寄った。そりやまあ、世間さまで赤縞服と

おぞましがられる身には相違ないが、こうもずけずけ「懲役」呼ばわりされると悲しい。

モンペの締め革に錠がかけられ、若い女囚は吸りあげた。彼女もスレスレの模範囚だ。

「お前、汗掻きのタチなのね。臭いわ」

と、マリーが鼻を寄せた。純白の衿の胸許あたりから、身だしなみの香が匂い立つ。女

囚は肩をふるわせる。

「早くおしよ。とは云うものの、まあそこら

あたりの風情がモードのポイントだものね。済んだの？ 念入りなドレスアップだこと」

若い女囚は忍び泣きを洩らしつつ、顔をそむけて両手をそろえた。

「おや？ そんなに忌々しいの？ そんな心掛けだから、満期一杯勤めることになるのよ。ま、こんなものの御厄介になるのもあと二カ月、よく肝に銘じておくことね」

「——はい。すみません、手錠、入れて下さいます」

三七四号は哀しく咳いた。

手錠に結びつけられた細目のロープが腰に二巻きされ、締めつけられて後ろ腰で結ばれた。ミシュリーヌが、いと神妙に台へ寄る。

「お前は錠前付きドレスね？」

「——はい」と、並等女囚はうなだれた。

「見せてッ。確認しとくわ」

マリーの手が延びて締め革をゆすぶった。

今日のマリーはことのほか御気嫌斜めだ。

ミシュリーヌはみじめさに鼻を吸り、お調べを受け終えて深々と首を垂れて、両手をそろっとさし出した。

「お前の仕草は、いつもながらいわね。いと神妙で気に入ってるのよ」

「そう。この四五三号の戒具受け態度は満点

だわ。痛々しくなるくらい——」

フィリスが当直デスクを離れて来て、眺めてそう云った。

ミシュリーヌは、わが両手に嵌められる鋼鉄環の銀色と音を悲しい想いで見詰めた。逮捕されてこのかた、ずっと御厄介になり通しの手錠だが、これを両手首に光らせたまま連れ出されるのは悲しかった。それに、台上には太いロープが束ねられている。おそらく、珠数繋ぎの憂き目を味わうことだろう。

マリーの手が鋼鉄環を掴み、一つずつ手首でゆすぶった。縛に就く態度を褒めた矢先にこの仕草だ。マリーは気まぐれだから、手錠の弛みからの事故を戒めたフランソワーズ矯正局員の講話を思い出したのかも知れない。

ミシュリーヌは制服娘に背を向け、きつく腰縄を打たれた。

「革ロープより扱い易いと思う？ マリー」

「そうね。結ぶのはともかく、解き易いわ。」

第一、革よりもエレガントよ。女性向きね」

携帯戒具の革ロープは順次廃されて行き、木綿とナイロン混紡のロープに取り替えられる予定だ。コリンヌとしては、そのロープを監舎別に色分けしたい意向だが、色の割当てを茶飲み話に持ち出しているという段階であ

った。しかし、革ロープの鞭を失なうことになるので、峻厳派は全面切り替えに反対だ。

「あなた。えーと、フィリスだったわね？」

デスクをお留守にしちゃ駄目じゃないの」

コリンヌに注意されて、フィリスは舌を出しながらデスクに戻った。

八名の女囚は首を垂れ、横一列に並んで立ち、珠数繋ぎのロープを哀れに待った。

口ほどには器用でないマリーが長いロープと格闘し、ときどき捌き悩みながらも、女囚たちの後ろ腰を一つずつ一米半に繋いで行った。眺めてコリンヌが頬をほころばせ、ミシュリーヌの腰縄を掴んだマリーが舌打ちをする。珠数繋ぎ用のロープはいささか太いし、腰縄がくびれこんでいるものだから、折ったロープを潜らせ難いのだ。しかし、きつくびったのは自分なのだから仕方がない。ミシュリーヌは腹を凹ませ、腰を動かし、自分が珠数繋ぎにされるのを手伝った。後ろ腰で固い結び目がこさえられ、二、三度グイグイとゆすぶられる。ミシュリーヌは思わず吸りあげた。錠とちがって永いから、みじめさもひとしお募るのだ。

「どうやら荷造りも済んだわね？ マリー」

「手間がかかるったら、もう——。東洋かぶ

れもいい加減にしてよ、コリンヌ。私はジャポネじゃないんだから、鎖と錠でガチンガチンの方が性に合ってるのよ」

「ま、おいおいと馴れて来るわ。馴れりゃ、ロープの方が便利よ、融通が利くから——」

それに、いくら受刑者だからって、体中に鎖と錠じゃ殺伐過ぎやしない？ 女ですもの」

「妙なところで仏心出しちゃうのねえ。ま、今日は仕方ないわ。でも、私、いつもロープだったら辞めるわよ。指がすりむけちゃう」

マリーはコリンヌ課長にボンボン云い、コリンヌは苦笑して立ち去りかけた。

入れちがいに、保安課のレダが現われる。

「あら、レダにやって貰えばよかったわ」

「そうとも、マリー。おやまあ、なんと見事な結び目だろ。あれじゃ、赤縞たちが恥かしがって泣くのも無理ないね」

捕縄術の達人レダは、眺めて笑った。

「あら、でも、絶対に解けたりはしなくてよ。それでいいじゃないの。私の苦心の作を笑わないで。その代り、ホラ……」

マリーはスカートの右裾をサツとハネあげるや、右腿のホルダーから手錠を抜き出し、鮮やかな手際で自分の左手に叩き込んだ。キヤスリーヌあたりと競争で練習しているだけ

のことはあって、まずは抜群の速度だ。

「ねッ——」と、鍵を取り出して自慢顔。

「ああ、ああ、分ったよ。無邪気なもんだこと。笑ったりして悪かったね」

レダは苦笑いしながら、それでも保安課の職責上、珠数繋ぎの結び目あたりを一つずつ点検し、ゆすぶって肩をすくめ、半分ほどは結び直した。

「こら、懲役ども。今日は、これからいいとこへ行けるよ。駅のお掃除。嬉しいだろね」

「あら、それはもうダメよ、レダ。マリーがバラしちゃってるんだから」

レダは両手をひろげ、コリンヌは笑いながら去った。

「ポチポチ行くかね、マリー。そう、そう。例の件どうなった？ うまく行ったかい」

「全然マズイのよ、それが。やっぱり罰金だって。でも、罰金なんかいいのよ。口惜しいのは一カ月の免許停止。頭に来てんの」

「ウインクのお稽古が足りなかったねえ。そりゃお気の毒。ま、せいぜい当り散らかしてやることね。せめてもの役得さ」

マリーが不機嫌なのは、先週やらかした速度違反をマルに出来なかったせいだ。彼女はここの職員の中で、数少ないマイカー族の一

人だった。

ミシユリーヌは立ちうなだれて号令を待ちながら、先刻のコリンヌ課長の言葉を嬉しく思い返していた。

あと僅かの者ばかりだし——コリンヌは確かにそう云った。まさか、二年の月日を僅かとは云わないだろう。とすれば、やはり仮釈放間近かと思ってい。

ミシユリーヌは両手を腹に握り合わせ、そっと手錠をまさぐりながら、胸ふくらむ思いだった。あのときには恨みに思ったシユバリエ老夫人だが、思い返して今となると、済まなさとともに感謝の気持ちさえ泌々と湧く。必ずや、思い直して赦してくれているに相違ない。

ミシユリーヌはイヴェットやマジョーリに對しても、済まないと思うのだった。

仮釈放の夢破れての独房謹慎——その一週間の間というもの、イヴェットとマジョーリとモレシエンヌたちはこもごもやって来て、悲嘆に暮れるミシユリーヌを慰さめ続けてくれたものだった。あれを思いこれを想うミシユリーヌは、床に身もだえし、甘え拗ねて泣きじゃくり、ときには恨みがましいことすら口走ったのだったが、三人は怒りもせずにな

だめ励ましてくれたのであった。

八名の珠数繫ぎは深々と顔伏せて、塀のそとを息詰めて曳かれた。夏の朝陽は既に高く昇り、明るい道にロープの影が揺れる。

「お前たち、人通りが少なくて残念なこと。折角の晴れ姿なのにねえ」

珠数繫ぎたちは唇を噛み、忽ち深々と屈み込んで脚をもつらせた。

「おや、多勢さまが賑々しくおいでだね。嬉しいかい？　こら、もっとわきへ寄りな」

レダはそう命じるが、珠数繫ぎの列は、これ以上は寄れないというほどに端っこを歩いている。女囚たちが悲痛な肩ふるわせるのも道理で、向うからやって来るのは女学生の一隊だった。数人の先生たちに引卒された二百名以上の少女の群は、パリの下町からやって来た遠足姿——リュックなどを背に楽しげなその一隊は、衰れた珠数繫ぎを眺めて鳴りをひそめ、おぞまじげな表情ですれちがう。

ミシュリーヌは必死に眸をあげて、少女の群を盗み見た。切れ切れに聞える言葉使いはパリジェンヌの卵で、いずれも十二、三から十五、六才までの娘たちは下町風——。

ミシュリーヌは最後尾の団に眸を投げ、若い女の先生にきつい眼で睨まれ、落胆と屈

辱を噛みしめつつ首を垂れた。

居なかったわ。でも、当り前よ。だってパリには、あの年頃の娘は何万人と居るんだもの。バカね、私ったら。見付けたところでどうするっていうの？　諦めましょう——。

しかし、ジュヌビエーはやはり居た。

「あのおばさんたち、泥棒なのね」

「そうよ。可哀想に、ああやって牢屋へ連れて行かれるんだわ。あたしテレビで見たことあるのよ。でも、あんな服じゃなかったわ。アレ、妙な服ね」

少女の群の後尾あたりで、あどけない眸がクルクルとふり返って囁く。

「あら、泥棒ばかりとは限らないわ。人殺しもあるし、ウソの小切手こさえたり、家に火をつけたり——」

崇拜者たちに囲まれて、一群のリーダー格のジュヌビエーが利発げに教えた。

「——それに、あれはね、どこかへお仕事させられに行くのよ。ホラ、あすこの高い塀、あれはケイムショじゃないかしら。あすこに入られてるひとたちでしょ、きつと」

夏の朝陽がジュヌビエーの金髪にきらめき、それと全く同じ色の金髪が深々と垂れうなだれて、少女の背後十米で一瞬輝やいた。

ミシュリーヌは涙を滲ませて、閉じた臉の裏に、かけがえなく美しい者の姿を描く。

女囚ミシュリーヌは、灰色の獄舎暮しの明け暮れに、臉の我が子を珠と撫でいとおしんで、その面影を、その姿を、描いては消し、消しては描き直し、ひしと取り縋って胸に育くんで来たのであった。彼女はジュヌビエーの後ろ姿をのみ見た。されど、ミシュリーヌは生みの母なれば、彼女が心こめて刷く筆は、いとしい者の面影を完全無欠に仕上げていた。わが子恋しの一念で揮うのみは、その柔らかな金髪から足の爪先まで、いや、そのえくぼの一つ一つや生ぶ毛の一本々々に至るまで、天使のような愛くるしさに彫りあげていた。

舌をさえ出して喘ぐ酷暑の苦役場。あかぎれの手足が床に凍てつく厳冬の監房——一日は永く、時間はタッパーとあった。ミシュリーヌは、その金髪を一本一本数え、心ゆくまでくしけずってやり、愛らしいリボンや帽子で飾ってやった。あれこれと選んだ四季のドレスを、心のたけをこめて着せてやり、脱がせては着せ替えてやるのであった。それだけが、そんな幻の世界のみが、鉄鎖に繋がれた女囚の楽しみであった。唯一つの慰さめであ

り、心の灯であった。

いまや、生みの母ミシュリーヌの胸に安住する面影は、姿は、その名を胸に呼べば微笑みかけ、愛くるしく立ち居して応えてくれるのだ。眼閉じれば瞼の裏に、眸見上げれば雲流るる果てに、あるときはロココ風の少女服姿で、またあるときは、純白の襷も深いローブゆらめく乙女のたたずまいで、母ミシュリーヌの心のままに振舞ってくれるのだった。

おお、私のジュヌビエーブ——。

女囚ミシュリーヌは、一瞬、耳朶に灼きついて忘れじの声を聞いた。珠数繋ぎの列を背にして再び賑やかな少女の群の中に、過ぐるあの日のノール駅頭での声を聴いたのだ。それは聴覚ではなく、母と子のみが交わし得るチャンネルであったのかも知れぬ。

ミシュリーヌの胸が高鳴り、彼女は我れを忘れた。珠数繋ぎのロープがそこで「ぐ」の字に折れ、前方の一米半がピンと張り、後ろの方が垂れさがる。ミシュリーヌが横ざまに飛び出して立ち止まり、ひたと振り返って眸を凝らしたのだ。

全身全霊をこめて彫りあげた面影とは云えど、他人の空似ということもあろう。

しかし、後ろ姿ならば、子鹿のようなあの

脚ならば、千人の少女の中からでも一目で見付け得る——。

マリー婦人看守が忽ち近寄ってそばに立った。叱責より先に肩を小突かれ、お尻のあたりに平手打ちが飛ぶ。

「なにしてんのッ。さっさと歩きなさいッ」

「——すみません。は、はい——」

女囚は身のほどを思い出し、かぼそく詫びて金髪を垂れ、思い諦めて列に戻った。

「手錠がいじるんじゃないッ」

「——は、はい」

ミシュリーヌは、深々と握り合っていた両手を離し、ガクリと肩を落としたのだった。

きびしい叱責の声と平手打ちの音に、またも少女たちが振り向いた。

「ね、叱られてるわ、あの小母さん」

「まあ!! おとなの癖にお尻なんか叩かれてる。あの若い小母さんの方が偉いのね」

「肩ふるわせてるじゃない? 泣いてるんだわ。可哀想ね。でも、どうしたのかしら」

ちらと振り向いたジュヌビエーブが、すぐに金髪を戻してハネあげ、色褪せた日除け帽子をかぶり直す。

「列を乱したからだわ。キチンと歩かないからよ。私たちもお行儀よく歩かなきゃ」

「あら、ジュヌビエーブったら、おっかない小母さんみたい」

「チャンと並んで歩かないとお尻をぶつってさ。ね、ねえ、このキャンディあげるわ、級長さん。だから、お尻ポンポンはカンニン」

「もう、あんな遠くへ行ってしまったわ、可哀想な小母さんたち。みんな顔を横に向けて泣き出しそうだったわね。両手に嵌められてるの、あれ、テジョウでしょ? 一生懸命に隠してたわ。どんな気持かしら? 悪いことって出来ないわよねえ」

「あたし、戸棚探してお菓子を盗むのは、もうやめたっ」と

「そうよ」とジュヌビエーブは眉をあげた。

「悪いことしたら罰を受けるんだわ。当り前のことよ」

「またジュヌビエーブが意気こんでる。よっぽど口惜しいのね、マンデューさんたちのことが——」

マンデュー商店の夫妻が白昼殺害されたのは一昨年の今頃だった。育ての母レイモンドの内職の刺繍——それを届けに行ったジュヌビエーブは、犯人らしき男が逃げるのを目撃した。そして、彼女が懸命の証言も空しく、犯人は今に至るも捕まらない。そしてまた、

マンデュー商店を失ったレイモンドの内職は益々苦しくなる一方であった。

「探偵になったらどう？ ジュヌビエーブ」

「ウウン。私、婦人警官になるのよ。悪いひとを片端から捕まえてやるんだわ」

「残念ね、ジュヌビエーブ。ちょっと背が足りないし、可愛らし過ぎるわ」

「こら——。お尻ぶつわよ」

年の頃にしては大柄な少女が、キャアキャア笑って逃げ出した。

さて、コンピエーヌ婦人刑務所の独身寮の一角は、たったいま工事が出来ましたという風な有様だった。窓ガラスには紙を貼ったままだし、そこらには残材が積んである。ロビイと、それに隣接する娯楽室やなんかを増改築したのだ。そして、調度品なんかを入れる前に、床や窓ガラスを磨いたり、片付けたりしておかねばならないというわけだった。

「ほう、えらくまた豪勢になっちゃったじゃないの。飾り立てりゃスゴイ按配になるね。おや、プールの大理石、いつ張り替えたんだい？ ちょいとしたホテルじゃないか」

レダはあたりを見回して肩をすくめた。大きな窓のそとは近代風なテラス、そして美しい芝生——その向うには、綺麗な水を湛えた

プールが夏空を映している。

女囚たちは砂利の上に並ばされて、珠数繋ぎを後ろ腰から解かれた。

「だけど、ずいぶんと贅沢なんだねえ、このひとは」世帯持ちのレダが羨ましがった。

「だったら、御亭主と別れて入寮したらどうお？ 贅沢っていうほどのことじゃないわ。私たち、碌に休暇も取れないんだものね。リビエラあたりのホテル並みにして貰わなくちゃ。自動扉、とうとうダメだったのよ」

「あ、マリーっ。両手ともはずしちゃ駄目よ。こないだの、事故防止講話を聞いただろ？」

「なによ、あんな本省のコマーシャル。私、居眠ってたわ。じゃ、どうするの？ え？ 片手に重ねろって？ 捕縄がついてんのよ。そこらへ巻きつけといてやろうかしら」

「マリーのお嬢さまには敵わないよ。少しは厳肅におやり、厳肅に——。やれやれ」

レダはこぼしながら、手錠に結んだ捕縄を解いて手伝った。女囚たちの左手首に、鋼鉄環二個が重ねて嵌められる。黙々と受けながら、女囚たちは鼻を吸った。

「泣くこたないだろ。立派な腕時計を二個も持たせて貰ってさ。セイコーシャの特大型」

寮の主任と若い娘とが、眺め聞いて笑う。

「ここは塀のそとなんだ。身のほどをわきまえないや駄目だね。囚人てものは、体に錠なしではそとを歩けないんだよ」

ミシユリーヌは唇噛んで両手をさし出し、マリーが面倒げに解く捕縄を見詰めた。抜き取られる捕縄が鎖にきしみ、鋼鉄環が手首にこじる。右手首からはずされ、そのまま左手首に叩き込まれた。

「動かないように出来ない？ このお手々。しっかりおしよ、バカね。お前、これで何百回目？」

「——すみません、マリーさま」

マリーは捕縄の束をミシユリーヌの右手に握らせながら、回り切らなかつた環をジジ、ジ、と縮めた。

「あら、それじゃ駄目よ、マリー」

と、レダが溜息を吐いた。グルリと回して外側から叩き込んだものだから、環の上下がそれぞれ逆になっているし、おまけに鍵穴が向かい合って内側になってしまっている。

「戒具取扱規程のとおりにおやりなよ」

「ほんと、うるさいのねえ。これでいいじゃない？ それ、腰に巻いて持ってるのよッ」

ミシユリーヌは、手渡された捕縄を自分の

腰に巻いて締めた。みんなそうさせられている。ことさらにきつく巻かないと叱られる。「締まって来たらコトだよ。鍵が使えなくなるよ。いつか四監で往生したんだから」

「大丈夫だったら!! そんなの、よっぽどの骨太女よ。この元貴婦人のお手々はふくよかなんだから、こじりやどうにかなるわ。手錠が締まるのは本人の責任よ、レダ」

マリーは澄まして次へ移り、後ろ腰の結び目を解くべく顎をしゃくった。

「靴を脱ぐッ」

女囚たちはハダシになってテラスに並ぶ。

「十人と頼んだのに八人しきや寄越してないじゃない? ケチね、刑務課って」

「自分が賃金払うわけじゃないのにねえ」

「なあに、大丈夫よ」

と、レダが寮の職員たちに受け合った。

「追い立ててキリキリ舞いさせりゃ、八人でおつりが来るわよ」

と、マリーも云い、水しぶき数個が涼しげなプールを眺めやった。勤務中なのが腹立たしげな面持ちだ。

「こら、お前たち」と、レダが睨み回す。

「その赤毛ッ。姿勢が悪いよ。模範囚を取消して貰いたいのかいッ」

若い女囚が、わなないて背を伸ばした。

「お前たちはこのお掃除をするッ。どんなことがあっても今日中にさせるからねッ。ここがどういふところか知ってるだろ? 日頃お世話になってる方々のお住まいだよ。性根を入れて、心こめてやるんだ。鎖をかけないのは、お家に傷がつくといけないからだよ。でも、あたりにいらっしやるひとたちがひとたちだから、不心得な真似をこれっぽちでもヤラかすと……。分ったかいッ」

「——は、はい」女囚たちは声をそろえた。

寮の主任が指図し、掃除道具が持ち出されて、女囚たちは仕事を与えられた。

レダは忽ち姿を消し、マリーはあくびしてぶらぶらし、若い娘が独り張り切って追い回す。配属されている女囚をコキ使い慣れているせいか、若い癖にビシビシと要領がいい。

女囚たちは額に汗して這いずり回った。寮の主任女史は年の割りに派手なホームドレスを一着におよび、ときどき現われて監督する。

若い娘と主任女史は、顔見合わせてクスクス笑った。モンペ姿だけでも結構不恰好なのに、締めあげた腰布と来るのだから、それを見慣れない二人にとっては滑稽でもあろう。

ミシュリーヌは床を磨き立て、壁際で戸惑

った。木屑やクロス屑なんか散らばり、かなり堆高く積んでもある。掃き役の連中が何故か見落としてやり残したのだろうか、その連中は既に窓ガラスに取りついていた。

ミシュリーヌは屑を集めてバケツに入れ、バケツ二個を両手に提げて、残材置き場へとテラスを降りた。

「これッ」と、マリーがスカートを翻えす。

「どこへ行こうっていうの?」

ミシュリーヌは立ちすくんでおののき、足裏に芝生を踏みしめる。

「——あ、あの——。すみません」

「こら、芝生を踏んで。このワンピースだって立ち入り禁止なのよ、芝生には。降りなさいッ。バカね。身分をわきまえてッ」

ミシュリーヌはうろたえて砂利の上に急ぎ寄り、マリーは制靴に芝生を踏んで睨んだ。

「バケツをおかないでッ。提げてるのよッ」

「はい。す、すみません。あの、これを捨てに行こうと思ったんです。すみません」

「何故、私に許可を乞わないの? 駄目じゃないのッ。こそこそすると逃走予備よ」

ミシュリーヌはふるえあがった。彼女には逃走予備に準ずる前科がある。

「——もうしわけございません。おゆるしく

「ださいまし。今後気をつけますから、はい」

「そう。じゃ、行きなさい。あすこね」

女囚は背を向け、マリリーが監視した。

「ああら、ダメよッ。そこじゃないったら」

と、花模様スカートの娘が駆け寄る。

「そこは不燃物だけよ。可燃物の廃棄場は、ずっとあっちよ」と、言葉もムズカシイ。

「あら、そうなの。遠い？ え、ガレージの横手だって？ あんなとこまで！」

マリリーも寄って来て、女囚たちだけになったあたりを、気がかりげに振りかえった。

「じゃ、誰かが戒護しなきゃ。ほんと、レダったら、もう——。あなた一緒に行ってよ。赤縞はワンピースとはわけがちがうのよ。面倒だけど仕方ないわ」

マリリーは革ロープを取り出し、女囚の腰繩の後ろ腰にカチリと取り付けた。金具の類이었다ら、マリリーは手際よく扱う。

「頼むわ」

「あら、こんなの握っちゃって行くの？ 初めてだわ」娘はロープ尻をこわごわ握った。

「大丈夫よ。おとなしいから」

「なら、こんなの、いいじゃないの？」

「ケジメってもののよ。威風堂々とシヨ引いて行ってよ、保安官代理どの。ホホホ」

「ね、ねッ。妙なことにしたらぶっていい？

手でじゃなくってロープでよ」と勢い込む。

「お尻ならいいわ。金具に気を付けて」

「分った。さ、キリキリお行きッ。なんだかスゴクいい気持。やっぱしこうしなきゃね」

ミシュリーヌはみじめな心地で、ハダシの足裏に砂利を踏んだ。

「こっちよ」と、まず腰ロープがゆすぶられてから指示が飛ぶ。

「ああら、アリスったら——」

涼やかなドレスの二人組がすれちがった。

「あんまりそっくり返るとコロぶわよ。いつから私たちの仲間入りしたの？」

「ウフン。私、婦人刑事なの」

「へえ？ ゴミ箱あさりのメス犬を捕まえてわけね。ホホホ」

アリスは口惜しがり、ロープ尻を打ち振って女囚のお尻をぶった。ミシュリーヌは、痛さよりも情けなさに唇を噛む。

「むやみに囚人を撲っちゃダメよ、アリス」

「だって、キリキリ歩かないんだもん」

アリスは舌を出し、そして、ガレージを覗き込んだ。

「マリリーも折角いい車を買ったとこなのに、当分、運転出来なくなっちゃったのね。さ、

ここだよ、キッチンと捨てて——」

ミシュリーヌは、ついでに、そこらのゴミを拾われた。バツジもない若い娘に腰繩を取られ、暑いコンクリートを這い回っていると、汗とともに涙がにじんだ。

「お前、何年？ どのくらい残ってんの？」

女囚は、規則を楯に黙り返す。

「お前、ツンボ？ 唾？ ふてくされるといつけちゃうから。あ、そうだわ、痛い目に逢いたい？ 頬ぺたぶつのは慣れてんのよ」

「ふてくされてるわけじゃございせんわ。私どもは社会の方々と口を利くことを許されてませんの。御存知でしょ？ すみませんけど、ちょっとこっちへおいで下さいまし」

ミシュリーヌはキツパリと云い、遠くに散らばる紙屑に這い寄った。鉄の規律の獄内とはちがって、娑婆の隅々にはルーズなところが目立つ。アリスは腰ロープ一杯について来た。だから、腰繩がきつく、くびれ込む。

「あら、そうお。おんなじ懲役さんでもワンピース組とはえらくちがうのね。でもそういう口の下から、結構しゃべったじゃない？」

女囚は最後の一片を拾いあげ、額を押し拭いた。

「許したげるから答えなさい。何年？」

「はい。あの——四年ですの。あと、二年」
 「そうお。ま、一生懸命に勤めることね。手錠入れられちゃったら、もう仕方がないじゃん。あらま、立ちあがるとキュッと締まっちゃう。這ってるときはタルんでたけど」

アリスは、女囚が最も情けなく思う股布をば、しげしげと眺めた。

「でも、上衣がタクレなくって便利ねえ。冬は暖かいし。あら、なにか気に障ったの？」

「いえ。これしか着せて頂くものがありませんもの。さ、連れて戻って下さいましな」

ミシュリーヌは唇噛んで云い、左手首に重い鋼鉄環をそっといじり、空バケツを両手に提げた。

「神妙ね。ウン、お前、おトイレは？」

アリスは、ガレージ付属の便所を指さす。

「懲役さんが入っても、まあまあお尻はハレないだろうってとこのおトイレ。このワンピースたちだって使ってるのよ。ホラ。お前もあんな服を着せて欲しいだろねえ」

灰色ワンピースが小走りにやって来て、素足を翻えして飛び込んだ。このワンピースにしたところで女囚は女囚——おトイレは峻別されているし、調度品の椅子に掛けることは許されないし、廊下の敷物を踏むことも御

法度だ。ワンピースにしたって、哀しさはタップリとある。

ミシュリーヌは僅かに眸をあげた。

「ありがとうございます。でも、結構です。だって、これですもの」

と、股布の腹部を手で押えて見せる。モンペにかけられた錠が盛り上った。なんだか哀しくて情けなくて、自虐的な心地だ。

「あらま、そうお。ちょっと見せて」

ミシュリーヌはさらに自虐的な感情のままに、ボタンをはずして腰縄の下から引き摺りおろした。

「まあ!! 私、話は聞いてたけど、初めて見たわ。錠がなきゃ絶対に脱げないのね。フーン。初めてこれをかけられると、大抵は泣き出すそうじゃない? もういいから納って」

ミシュリーヌは吸りあげ、腰縄の下を潜らせようとお腹を凹ませて一汗掻き、左右両端のシワを直し、腰をくねらせて引張りあげ、思い切り締めあげて頬を染めた。ほんとに情けない恰好と仕草だが、こういう工合にやらないと、ボタンに穴が届かないのだ。自分で巻いて結んだ腰縄だが、結び目には恐くてさわれない。

「身繕ろいはキチンとやらなきゃね」

アリスが眺めて云い、固いボタンをかけながら女囚は臉を熱くした。

「とっても優雅なポーズとスタイル。ま、そうねえ、ダブダブで寸足らずのスキーズボンとどこ。惚れた男に見せたいわねえ。ホホホ」

女囚の指先に力が入り過ぎ、ボタンの一つが切れて飛んだ。ころころとコンクリートをころがり、下水の鉄格子蓋から落ちて消え、ミシュリーヌは蒼くなった。

「一大事じゃない? 三、四日は餌又キねえ? 探すって!! 冗談云わないで。さ、おいで。さっさと戻ってお仕事よッ。その恨めしげなツラはなによ? お前の不注意だわ」

女囚は下水蓋を未練氣に眺め、曳かれる腰ロープによろけた。哀願したところで無駄だろうし、探したところで見付かりはしない。ミシュリーヌは再びバケツを両手に、哀しく思い定めた。すぐにマリー婦人看守に申告するのだ。あとは先様の御心次第だ。

女囚ミシュリーヌはうなだれて曳かれ、砂利の鋭さと熱さに足指を曲げた。芝生の緑の中に撒水栓が一つ、チョロチョロと水を滴たらせている。横目で眺めて、女囚はカラカラの咽喉をひきつらせ、僅かに唾

を呑み込んで喘いだ。

「アリスさま。おねがいです。お水を飲ませて下さいませんか？ 一口でもいいんです。おねがいでございます。おねがい——」

「へーえ。こんどは自分から口を利くのね？ ずいぶんと勝手な懲役人なこと」

娘はフンと鼻を鳴らした。

「すみません。でも、もう咽喉がカラカラですの。ほんの一口だけ飲ませて頂けたら——」

埃っぽい仕事に朝から精を出し、いまは重い物を運んだ上に、灼けつくコンクリートの上を這いずり回って来たのだから、獄内での戸外労役とはちがう。精神的苦痛も大きい。

「駄目だと云ったらどうお？ 泣き出す？」

「お許し頂けなければ致し方ございません。

辛抱するほかはない身ですもの」

「そう。じゃ、辛抱することね。いくら横目で睨んだって無駄よ。シブキ一つ飛んで来やしないから。ホホホ。懲役って情けないわねえ。キリキリ歩いてッ。マリーさまが答持ってお待ちかねよ」

女囚は獄衣の肩で頬を拭い、娘のロープ尻をお尻に受け、そんなミシユリーヌをマリーがきびしく迎えた。

「おそいじゃないのッ」

「すみません——」

余分の仕事をさせられたせいだが、こんな場合ですら、ただひたすらに詫びるしかないのが囚われの身の哀しさだ。アリスは説明もしてくれないで舌を出し、革ロープの金具をガチガチと後ろ腰でいじる。革ロープの両端の金具は、扱い馴れないと、はずすコツが難しい仕掛になっている。

マリーが苦笑いして近寄り、ミシユリーヌは、おそろおそろ口を切った。

「——あの、担当さま——」

しかし、女囚が申告するより早く、婦人看守は「囚衣の異常」を発見してしまった。

「おやッ。ボタンは？」

と指で押え、忽ち「囚衣毀損」を責める。ミシユリーヌはふるえあがって両手を合わせた。必死になって、おくれればせながらも申告を終える。糸屑一本のことで蹴り倒される境涯なのだ。

漸くのこと革ロープが腰から離れ、待ちかねた女囚は跪いた。

「——お、おゆるし下さいまし。いえ、懲罰をお願い申しあげます——かんにんして」

「トンチンカンなこと云わないで。ゆるして欲しいの？ それとも二、三週間謹慎させて

欲しい？ どっち？」

「弁償させたらいいじゃないの。街を歩けばボタン一つぐらい落ちてるわよ」

アリスの言葉に、切々と這い回る女囚たちが怒りの色を浮かべた。

「——お、おゆるし下さいましッ」

「そう。立ってッ」

数発のビンタが鳴り、女囚は健気に耐え忍ぶ。マリーは、案外とあっさり赦した。

「これで赦したげる。だけど、怠けると駄目よッ。仕事を続けなさい」

「はい——」

女囚は嬉しさのあまり、バケツにつまづいて地に這った。

「なあんだ。靴の底を舐めさせるのかと思ってたのに」

アリスはそう呟いて詰まらなそうだった。おひるが近くなり、プールのほとりが賑やかになった。女囚たちは疲れて喘ぎ、マリー婦人看守が容赦なく追い立てる。豊かに育ったマリーには、肉体労働の苦しさは分らない。まして、飢いさや渇きの味などが理解できよう筈もなく、コリンヌのジャポネ土産たる細竹の筥を右手に、僅かの怠惰も見逃がさず、尻を腿を、ピシピシと打ち据えるのだった。

女囚たちにとっては涎れの出そうな匂いが流れて来て、レダが悠然と現われた。典型的なキセル勤務だ。入れ替ってマリーが消えて行った。マリーは、大抵の場合、女囚たちより先に食事をする。そのマリーが戻った。

「労役やめッ。整列ッ」

レダが号令をかけ、女囚たちは手足をバタリと停めた。すぐには立ち上がれず、両手両膝を床について一息入れ、漸くにして起きあがった。

テラスの下の砂利の上に追われ、横一列にプールに向って立ち並ぶ。女囚たちは悲しげに嚙りあげた。ともかくこれから食事だというのに、またしても後ろ腰を珠数繋ぎだ。レダのロープ捌きはテキパキと早い。

「本来なら両手錠を入れるとこだけど、わり合いと精を出したようだから楽にさせてあげる。午後も気をゆるめずにやるんだよ」

レダは、ずっと姿を消していた癖に、いうことだけは尤もらしい。

「そのまま正座ッ」

号令を聞きつけたか、プールサイドの水着姿がふり向き、眺めて指さし、肩をすくめ合った。見に行こうとする子供たちをママ連中が引き止める。女囚たちは泣きたい思い――

砂利の痛さを脛に耐え忍び、うなだれて鼻を嚙った。

「なんだえ？ シュルシュルと鼻ばかり嚙って。この暑いのに風邪かい？ こら、背をまっすぐにするんだ。正しい心は正しい姿勢から、だよ」

「あら、手を洗わせないの？ レダ」

「いっぺんぐらいいいサ。下水やトイレを触ったわけじゃなし――」

マリーが引張って来たワンピースが水碗をそれぞれの背後におき、それに並べて黒パンのかたまりを一個ずつ、ためらい勝ちに砂利の上において回る。そのワンピースは五二五号の女中殺しマダムだ。ミシユリーヌは劣等感と羨ましさに唇を噛んだ。

「あら、やっとな餌よ、赤縞たちも」

ホームドレスの寮主任女史とアリスが現われた。アリスはアイスクリームのコーンをしやぶっている。

「お前さん、煙草は毒だよ。シワがふえちゃうわよ」

「なあに、レダ。食後の一服がシワの二本や三本に代えられるものかね。それに、もっと痩せなきゃ」

マリーが吹き出し、アリスの三倍はある脚

の太さに眺め入った。

「私の煙草はほっというて貰うとしてだね、レダ。ちょっとこれじゃあんまりだわ。砂利に坐らせて珠数繋ぎ――そうやって黒パンかじらせるなんて、私、胸が痛くなっちゃう」

「なら、見に来なくてもいいじゃないの？」

「お黙り、アリス。お前さん、そんなものを見せびらかして舐めなくてもいいだろ」

アリスは首をすくめ、背に回していた片手を突き出した。その手にもコーンを持っていた。食べ盛りは過ぎたろうに、仕様のない娘だ。

「アキレタ娘だこと。太ったって知らないからねッ。だけどさ、これじゃワンピースとの違いがひど過ぎるわ」

「分っちゃいないんだね。このくらいにしてやっておいて丁度いいんだ。ワンピース組にして頂けたときに、有難味が身に泌みるってものよ。要するに比較と対比感の問題――」

「そう。これ、刑罰と矯正と規律の維持の妙諦なり。コリンヌのオハコよ。でも、陽当りが良過ぎやしない？ レダ」

「そうよ。私もそう思ってる。ねえマリー」

「そうかい。ところがさ、こいつたちたら風邪気味らしいのよ。鼻っ風邪。フフフ」

「ま、いいでしょ。みんなッ、静かに後ろ向いて」

赤縞女囚たちは脛の痛みに顔歪ませつつ、砂利を膝に踏んで向き直った。まといつくロープを腿の上でいじり、叱られるかと制服を盗み仰ぎ、砂利の上の黒パンと水に溜息を洩らした。

「こら、不服そうなツラするんじゃない。朝から晩まで飲まで喰わずでシャチホコ張ってる連中も多勢いるんだよ、毎日、毎日——。ホラ、検事局の仮監。お前たち、みんな覚えがあるだろッ。さ、お祈りをしなさい」

女囚たちは頭をさらに垂れ、いと神妙に十字を切り、恵みの食物に感謝を捧げた。制服の二人は規程上沈黙し、気楽な二人も流石に哀れに思うのか、黙って眺めやる。

「では、食事はじめッ」

女囚たちは水碗に武者ぶりついた。全部飲んでしまうと、カサカサの黒パンに難儀するだろうが、分っていても飲み干してしまう渴きようだった。ミシュリーヌは僅かに飲み残し、黒パンをかじって涙を滲ませた。

「ウン、そうそう。今日の仔牛のカツレツ、飛び切りの味だったよ、ほんとに。どこの店で仕入れたの？ 葡萄酒は相変らずだけど、

料理はおいしくなったねえ、ここも——」

「ふん。葉巻の一箱でも持って来たらどう？ そしたら教えたげる。でもさ、レダ。あんたたち、塀の中で毎日こんな仕打ちしてるんだね。私なんか、可哀想になっちゃって——」

「あら、お仕事よ、小母さん」

と、アリスがアイスクリームを啜り込む。

「慣れりや全然平気だって。毎日、真裸にしちゃってサ、体中を調べるのよ。四つ這わせて検査するんだって。エディスが云ってたけど、そんな恰好してるのを毎日毎日見てたらさア、まともに人間扱いしてやる気がしなくなるって——。そんなもんじゃない？」

「エディス？ ああ、あの三監の新米だね。

あの娘、ほんとに仕様がなないんだ。うちのワンプイスたちを一日に三度は撲り倒すんだから。私、お帳面つけなきゃ。ねえ、バツじさんたち。なにも今日中にどうしても、というわけじゃないのよ。明日に残ってもいいわ。意地悪しないで日陰に坐らせておやりなよ」

寮主任の女史は去り、食事やめの号令がかり、ミシュリーヌは黒パンの残りを水碗に捨てた。日陰で立っていたワンプイスが碗を集めて持ち去る。そのワンプイスが提げる大きなヤカン——それには、まだタップリと水

が残っている筈だ。赤縞女囚たちの列は生唾を呑んで、そのヤカンを恨めしく見送った。

マリイが見かねたか、珠数繋ぎの一隊を樹陰に移した。そして、威丈高に言い渡す。

「ここは監外だから、キチンと正座よ。交話も許しません。十五分間の休憩ッ」

女囚たちは膝をそろえ、両手を腿におき、プールのほとりを哀しく眺めながら、ときどき左手の鋼鉄環をまさぐる。

「これッ、お尻を動かさないでッ」

「だって——」と、元秘書嬢が泣き声だ。

「ずいぶんと答で打たれたんですもの」

「口答えする気？ こら、膝小僧を合せて」

「——す、すみません。ああ、痛い——」

「怠けるからよ。答は痛いに決まってるわ」

正座の膝に答が降り、元秘書嬢はヒーツと呻いた。芝生を渡って答音が届き、プールサイドからの視線が集まる。この寮の住人なら興味もないだろうが、近所近辺の一般人たちが伝手を求めての水着姿も多いのだ。

ミシュリーヌはそっと右手をあげ、顔を指先に持って行き、滲み出る涙を眼頭におさえた。そして、あわてて居住まいを正す。眼の隅に、制服のスカートが見えたからだ。

「なに悲しがってるの？ なけなしのお水を

流しちゃ勿体ないじゃない？」

ミシュリーヌは詫びて姿勢を正した。

「あの——」と、中年女囚が訴えかけた。

「ああ、用便かい」と、レダが先手を打つ。

「昼食の前にはおトイレ行くと決まってるからねえ。さっきからウロタエてるのは分かるよ。条件反射してもんさ、フフフ。調子狂ったかい？ 我慢するんだね。あいにくと、このおトイレは全部個室になっててねえ。お前たちが用を足せるようなのはないんだよ」

「辛抱しなさい。そのつもりでお水も控えてあるし——。どうでもっていうんなら別だけど、様子調べてウソだったらひどいわよ」

「また、そんなジャラジャラしたことばっかり云って——。マリー、辛抱させるのよ。出来ない筈ないわよ。キリキリ働いて汗を流しやいいんだ、汗を——」

中年女囚は諦らめて首を垂れた。監視された上、丈夫なモンペに鍵かけられているのだから、駄目と云われればどうしようもない。

ミシュリーヌは眸をあげて、プールに湛えられた青い水を望み見た。一瞬、過ぎし日のコモ湖が幻と浮かぶ——。

ミシュリーヌは湖岸を離れて水と戯れ、ふり返って岸边に手を振った。あずまやに憩

うシャルルが眸を凝らし、若き妻ミシュリーヌの人魚ぶりに眼を細める。美しい人魚は湖水に飽き、水着姿を恥じらいつつ、それでも嬉しげに夫のかたわらへ寄り添った。エプロン姿も愛らしく似合うイヴェットが、銀盆捧げて飲物を運び来て、涼やかに濡れた水着姿を憧憬の瞳で見やる——。

あどけない少女が二人、水遊びの玩具を奪い合って追っかけっこをし、逃げる一人がプールに飛び込んだ。女囚の想いは一転する。

——おお、ジュヌビエーブ。お前も夏には水遊びぐらいはしてるだろうねえ。どんなところに住んでるのか知らないけど、汚ない水に入るんじゃないかってよ。あんまり永く遊んでるとダメよ。深いところには行かないで——。

「なに思い詰めてるの？ え？」

珠数繋ぎの女囚ミシュリーヌは我れに返った。マリーが顔を覗き込み、珍らしく深い声で尋ねてやり、スカートを押えてしゃがみ込む。マリーは呑気で陽気なお天気娘だが、妙に深刻ぶった思いやりを示すこともちょいちょいある。

「すみません——御心配かけて」

「あら、謝まることないのよ。切なくなったのね。気持、分るわ。でも辛抱するのよ。心

配させないで。あら、まだ見詰めてるのね」
「——は、はい。あの——プールのみなさんたち、楽しそうにしていらっしゃる。みんなお仕合わせですね。あのピンクの水着召してるひと、男の子が二人に女の子が一人——」

ミシュリーヌは憑かれたように呟き、真珠のような粒を頬に落としたりした。

「よく見てるのね、お前は。でも、他人の幸わせを憎むもんじゃないわ。綺麗な体になったら出直しなさいな。きっと仕合わせになれるわよ。赤ちゃんだって産めるし——ね」

「——はい。でも——仕合わせって、いったい何でしょうかしら？ 教えて下さいまし」
マリーは返答に窮して立ちあがり、スカートを払った。

「さっきは痛かった？ あんなことで撲られちゃって、悲しかったでしょ？ でも——」
「担当さま。そんなこと——。私が悪うございました。そりゃ痛うございましたわ。でも当り前のことです」

マリーはしばし女囚を見下ろし、そして、号令をかけたのだった。

監舎での終業時刻をだいぶ過ぎた頃、やっと、労役が何とか幕になった。



雑想

孕み女の魅力

瀬沼四郎

約一年前には増田みゆき夫人の各月妊婦ヌードフォトが続々分譲中だったことを思い出す。その後、高野原美氏や小生などの投稿が一しきりあったが、最近、妊婦に関するものがバツタリ載らなくなったのは残念である。

昭和四十二年春から秋にかけて、丙午解禁のベビーブームがずっと続いているというのに新しい分譲もなく、一足先に出発した奇ク誌上の妊婦ブームは早くも途絶えたかの感じである。高野氏はともかく、羽鳥水江夫人など何か一言あって然るべきものと思うのだが、一向に沈黙を守っておられるのは、どうしたことか。

ところで「小説宝石」の最新号（昭和42年

11月発行）の「値段別ハッスルコーナー」なる欄に、次のような記事が載っているのに気がついた。早速引用すると、

「大阪・曾根崎近くの兎我野町は温泉マークの密集地。たいていはアベックで門をくぐるが、なかに男のひとり歩きがいると、闇のなかから、

『たのしいこととして遊ばへん？』

プロの数は少ないが、比較的上玉ばかり。

本ものの人妻やBGがいるとも聞いたが、証明できず。そういえば珍種がおった。ハラミ女。

『あんた何カ月？』

『そやなあ、四、五カ月かしらん』

『ノーマルなポーズじゃあかな』

『そやそや、あんたにまかすさかい、刺激のある型考えてや。スリルがあってええやろ』
ひどいな、どうせヒモにしばらくられている女だろうが」

この調子だと、どうやら同誌の探訪記者氏は、この珍種のハラミ女に食指を動かさず、多分敬遠してしまっただけと思われる。モッタイないことだ、と小生などは思う。

妊娠六カ月または七カ月以上だったら、と小生は思うが、女の方は余り月が進んでいると敬遠されると思って、控え目に言ったのかも知れぬ。八カ月以上、殊に臨月ともなればつづいたらパンクするおそれがあり、その点

が心配で尻ごみする男もあるかと思う。でも妊娠五カ月から八カ月位までなら、妊婦の体の不快も去り、分娩にもまだ間があるので、体の恰好が変って夫から何となく構われなくなった欲求不満を解消するため、思い切って街角に立とうという人妻があっても不思議ではない。誤って妊娠する心配もないし、おそらく悪い病気もないだろうから、大変好都合である。その上「ハラミ女は味がよい」というのも、いろいろと都合よく考えれば、まんだら嘘でもあるまい。しかし臨月ともなれば流石に無理であろう。

「ウチ、今九カ月なんよ。もうじき臨月になるわ。もうこんなに大きいやろ」

「ほんまにドえらいハラしとるわ。そいで臨月になってしもたら、もうとてものこと、大事にせなあかんのやろな？」

「ウチ、かめへんけど、生れてしもたら困るさかい……」

「すぐ病院に行ったらええ。困ることあらへんで。どや」

「いややわ。ウチ、ほんまに困るやないの」
ハラミ女によけい魅かれる、などというのは余程変っているのかも知れない。

これは本屋で立読みしたのだが、いわゆる

チンレッツ屋——温泉場などで大ぜいの観客の前で例のあやしげな実演をして見せる商売の夫婦が、妻が妊娠してしまったために商売が出来なくなる、ところが、女がハラんでいてもいいから、という注文でチンレッツ屋商売を続ける話。何でも、

「ハラミ女でもええで。ハラが大きい女ちゅうもんも、かえってまた妙に刺激があるさかいな。是非ハラんだ嫁はんをつれて来て演って見せてくれや」

ということになったという話。

妊娠六カ月から九カ月まで、ずっとそのままその商売を続けて、最後には特別に祝儀まで貰ったというから、「有難い話で……」ということになる。ハラんだ女相手のそんな芝居？ を見て妙な刺激を感じ、魅力を感じるのが、小生だけではないとしたら、大変心強い話である。妊娠九カ月ともなれば、なかなか珍しい変った見せ物になるかも知れない。別の週刊誌で、割り切って結婚した若い女が、妊娠すると、

「妊娠中だからあげてもいいの」

と、独身時代のボーイフレンドを呼んで妊娠期間中、浮気をする話を読んだ。

亭主こそいい面の皮だが、なるほど、誰の

子か分らなくなる心配はないわけ。安心して浮気が出来るわけである。もっとも、このボーイフレンド君、かつての恋人の大きいハラを見て、どう思ったかは知らない。妊娠六カ月から九カ月まで、とある。

「ね、すごいでしょ。女のハラってこんなになるのよ。よく見てほしいわ」

などと、観賞させられたのだろう。

その後、修学旅行中に汽車の便所で成熟した男児を分娩した女子高校生の話とか、双児を人に知られず産み落して殺し、トランクに入れて持ち運んでいた温泉芸者の話とか、週刊誌の絶好の話題となるような事件が起っているの、それらについて書きたいこともあるが、詳しいことは割愛しておこう。女子高校生の場合も温泉芸者の場合も、まわりの人に気づかれなかったというのも妙だが、温泉芸者は分娩二カ月前まで座敷に出ていたという。双胎でもあるし、客に誘われることもあっただろうから、妊娠していることがどうして分らなかったのか。もっとも本人は腹膜炎と称していたらしい。ハラが膨れていたのは分っていたわけである。

以上は小生のおそまつな空想である。ヒモでなければ亭主か、とにかくハラミ女には、

男がいるわけで、以上のように行くかどうか、保証の限りではない。

近頃「ポイン・ポイン」などという妙な言葉が流行っている。女の子の大きな乳房、それもむしろ畸形的にバカでかいということを言うらしい。美しいというより醜悪だと評する人もある位だが、要するにセクシイだということになるのだろう。週刊誌などのグラビアに載っているのを見ると、非常に極端なのもあって、無茶苦茶に大きいのはよく売れるのだそうだが、人間の女というより何か人間以外の動物——といっても人間以外にない動物はいない——という気がするのだ。座敷で飼う犬や猫、愛玩用の動物、つまりペットなのである。観賞用なのである。むしろ適切な例としては、熱帯魚などと似通っていると言えよう。そういう大きな熱帯魚みたいな乳房ばかりがバカでかい女のヌードが、人工照明に照らされて遊ぎまわっているという感じである。少なくとも余り実用的ではない。

セックスに関係あると言っても直接にはなく、いわば象徴の部分が異様に大きいことが、それがグロテスクであることによって、かえって異常にセクシイだというのは、いか

にも現代的だと思う。ドッジボールの球のようにとてつもなく大きな乳房、まるで大きな椰子の実を二つ胸にぶら下げたような肉体美というものは、人間の女と言うには余り誇張されすぎてしまっている。欧米では乳房が大きすぎて悩む女性のために、小さくする美容整形があるそうだが、巨大乳房崇拜は、いかにも日本人らしいコンプレックスかも知れない。

オッパイ崇拜とともに、巨臀崇拜というものもある。これも「ポイン」と言っただけなのか「プリン・プリン」と言っただけがよいかは知らぬが、異常に発達した腰部と臀部——これはマゾ画などに、典型的に見られるように思う。しかし、小生としてはこれの方が、一層動物的であると思えるのだ。観賞用ではなくむしろ、下等動物的と言った方がよいのか、人工的でなく自然的と言えるのだろうか、後肢で立って胸を正面から見せるようになる前の、四つ足で歩行する動物に関係がありそうである。こういう形のものを好む人たちは案外多いわけで、潜在的には誰でもこういう要素を持っていると言っただけかも知れない。原始的なものに憧れるという傾向である。

さて、本題の腹の方だが、蛙のように腹が

膨れた女のハダカなどというものに、ひどく惹かれる小生の性を、自分でも本当に奇妙なものだとつくづく思っている。以前、小児的な傾向——マザー・コンプレックスかも知れないなどと自分でも書いたが、理由づけはともかく、とんでもないものに興味を持ったものだ、われながら不思議に思う。他人から見たら呆れた物好きだと嘲笑されても致し方ない。ところがよく似たものでこういう変わった好みに応じて、妊婦ヌードフォトなるものがちゃんとあるんだから嬉しい。そして、妊婦モデルとして腹が膨れたヌードをマニアの観賞に提供しようという妊婦がいるのだから、ますます愉快ではないか。感謝感激、お礼の言いやうもない、というところである。

増田みゆきさんも魅力のある若妻だったが、中河恵子さんという何人ものファンのハントの対象として好評だった美女が、いよいよ妊婦モデルとして、ピクピクと胎動する胎児を腹の中に持って、ブクブクと腹が膨れ上った妊婦の裸身をカメラの前にさらして下さるとは、小生の予期しなかった嬉しいことである。どうか月満ちて産まれるまで、無事でおられるよう心からお願ひせずにはいられない。出来れば臨月の妊婦の逆さ吊るしなどと

いう最高の逸品も残してほしいとは思わなければならない。臨月近くともなれば、妊娠による母体への負担も相当なものだろうから、危険なことを無理にお願いするわけには行かないだろう。ただ希望として、出来れば……ということである。

小生の友人で昔、下宿の(二階の)窓から隣の若夫妻のプライバシーを、夏の間覗いたという男がある。隣の二階の窓から覗かれていて気がつかないというのも不用意な話だ

が、カンぐれば見られていることを承知でわざと見せつけたとも取れる。若い独身の男が異常に興味を持って覗くのを予期して、かえって面白がっていたのかも知れぬ。——などとひねくれるのは、わが田へ水を引きたい小生の独りよがりか?

ところで、たまたまその細君が妊娠中だったと言うのである。

「大きな腹をしてるくせに、電灯をつけっ放して毎日長い時間をかけて……」

というのである。見てる方も毎日なのである。結構楽しんでいたわけである。その時ほど小生はその友人を羨しく思ったことはなかった。

小生なら望遠レンズで撮影したかも知れない。惜しいことである。

どうもいろいろ書き出すと、妙な話ばかり思い出して、いささか自嘲気味やケクソみたいなところがある。

反社会的な行動に走りはないかと心配して下さる向きもあるかも知れない。しかし小生は至ってマジメ、気の小さい男で、コワイお兄さんが現われはしまいかと無益な心配をして、街娼に誘われても容易に応じないし、辻村さんなどから交際を求められても、天衣無縫のかかる大人とはとうてい互角におつき合いし切れないからと、気弱に尻ごみする男である。

せめて誌上に幾分かのウツプンのはけ口を求めて、偽悪的につまらぬことを書いて心を慰めているに過ぎない。どうか悪人だなどときめつけないで、弱いあわれな奴だとさげすんでほしい位のものである。どうも情ない次第である。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

花 中 水

＝＜最終回＞＝



美 眉 野 芳

す い ち ゅ う か

厚 物

午後三時。

流行のタバコブラウンのキュロットスカートのスーツは、日本人の肌に合わせたのかも

しれない。幅の広いベルトのメタリックな止め金がきらきら光って目立つ。ストッキングのようなしなやかなロングブーツもよく似合った。

そのきびきびした女の子がクラブハ麻耶

でのハプニングのとき、全裸になって少年たちを難ぎ倒したりリリだと思いだして、勘解油小路公博は笑顔を向けた。

グリーンハウスを追われ、夏の終りとともに地下にもぐったフーテンたちの其中に、リリは立っていたのである。

フーテン、風天、山かば吹け、吹かねば行かぬ浮き雲の、風にまかする身こそ安けれ、行雲流水。が、この境地は、フーテン変じてモグラ族になった彼等とは、なんの関係もなさそうである。

無関心三昧に、遊戯三昧に超然と生きることは、むづかしい。

地下道に突っ立っている公博にリリが気がついて、にこにこしながら近寄ってきた。

「あら、おじさま」

と今日は言葉使いまで違っている。新調の服のせいかもしれない。クラブハ麻耶で話をした記憶はないが、顔だけはリリもおぼえていたらしい。地下道の流れが二人を離れ島にする。

「リリちゃんもモグラ族なのかい」

新聞で読んで、その程度のこととは知っていた。

「違うわ、夏だけのインスタント・フーテン

族よ」

明解な答が、はね返ってきた。

「インスタントは現代の象徴だからね」

「ねえ、おじさま」

リリが鼻にかかった甘い声をだした。危険信号。

「おねだりしていい」

これまた明解であった。

「リリちゃんのヌードを観せてもらった一人だから、いやとはいえないな」

「あら、やだ」

リリが自然に公博の腕を組み、肩を並べて商店街に向かって歩いた。

「なにがほしいの、麻薬は買ってあげられないよ」

麻薬とフリーセックスが現代のフーテンであれば、赤とんぼとすすきが昔の風天。

「それとも避妊薬」

公博はいいようにリリをからかっている。

「おじさまってステキね。ママが惚れるわけだわ」

リリが意外なことをいった。

「誰が惚れたって」

「しらばっくれてもだめ。ちゃんとしてるんだから」

「ちゃんとか」

「そうよ、クラブ／＼麻耶＼のママ。……あたった」

「それはうれしいね」

「だから中年の男ってキライ。すぐに、はぐらかす」

リリの、つんとした顔は可愛い。

「リリちゃんみたいに、そうはつきりといわれると、恥ずかしいんでね」

公博は、つられて、つい本音を吐いた。

「おじさま、好きよ」

「有難う」

「リリのおねだり、わかる」

「さあ」

「おじさまがほしいの」

リリは、どきりとするようなことを平気でいう。寄り添ったリリの熱い頬が、公博の顔に触れた。リリの熱気に公博は狼狽した。

「それは困ったな」

「困ることないじゃない。リリをおじさまにあげる」

「男として、リリちゃんはほしいけど……」

「けど、なあに」

「今は困る」

リリが食料品店の前で止まった。

「食料でかんべんしてあげるわ」

あっさりしている。公博はリリのひたいをこづいた。

「こいつ」

リリは首をすくめた。リリの目的は、はじめから食料の買いだだったのである。

「モグラ族の諸君にくぼるのかね」

リリはうなずいた。食うや食わずのモグラ族諸氏は、さぞおなかをすかしていることだろう。リリはカンパする獲物をねらっていたのである。

食パンやら、チーズやら、ハム、ソーセージ、りんごまで買いこんだ大きな紙袋を公博にあずけると、何を思ったのか、リリは隣りの花屋に飛び込んだ。公博の財布を持っていた。

大菊の花弁が盛りあがっている黄の厚物ばかり、ひとかかえも束ねて、リリは紙袋とひきかえに公博にわたした。

「おデートなさるのでしょうか」

公博に何もいわせず、

「今は困る」

公博の真似をして、ペロリと舌をだした。

「ママによろしく」

すばやく公博の唇にキスをする、紙袋を

かかえてリリは走り去った。

堤麻耶のマンションは駅の裏にある。クラブにもアトリエ兼用の寝室があるが、ここは麻耶のプライベートルームになっていた。

ドアに鍵がかかっていたが、公博は合鍵を持っている。妻の香葉夫人は夫の持物をうるさく監視するひとではない。夫が外で浮気をしていることなど考えてもないのかもしれない。夫を信じているのか、それとも無視しているのかわからない。

麻耶は浴室であった。一瞬、戸惑ったが、公博は浴室のドアを開けた。

「あら」

顔がかくれるほどの菊の花束をかかえた公博に、麻耶は驚いたようであった。

「いらしていたの」

湯に全身をひたした麻耶は、弾んだ声をあげて公博を迎えた。

公博は大菊を一本浴槽の中に投げ入れた。

続いて一本。急に麻耶の裸身を菊人形のように飾ってみたくなったのである。

大きな水盤に菊はいけられる。麻耶の輝くような艶めいた裸身が、絢爛と咲きほこる厚物で埋まった。

菊の下水

午後三時。

勘解油小路香葉夫人が鬼頭三郎太老人を訪ねたとき、老人は黄、白、紫と色彩もあざやかな菊に囲まれて鉢の音をさせていた。花卉が筒状の管物、単弁で幅の広い広熨斗、いずれも大輪の花が見事であった。

「菊のお手入れですか」

香葉夫人の声に老人は枯れ枝のような腰をあげた。

「香葉さんか、驚いたよ。この頃、急に耳が遠くなったようだ。足音がわからない」

「そんなお年ではありませんわ」

「それより、香葉さんが猫のように足音を殺してしまうのかな」

「そうかもしれないせんわ。奥様に内緒でそつと忍んでくるのですから」

「わしのところにかね」

老人は大笑した。菊の香に老人の心もなごやからしい。秋晴れであった。雲一つない。

「それは有難い」

「奥様は」

「いつもの生花の稽古だろう」

牧二郎は予備校の午後部にでかけまだ帰っ

ていない。老人は一人であった。

花が簪をたてたような形の中菊を指して、これが嵯峨菊ですか、と香葉夫人はきいた。

江戸菊というのは、お花が開くに從って位置をかえるそうですね。

「ところで、御主人は御在宅かね」

枯れ葉を除きながら老人は、きいた。

「ついさっき、でかけたようすわ」

「ほほう、いいひとでもいるのかな」

「まさか。いつもの書店にでも行ったのでしよう。女より本のほうが好きなひとですから」

「そうかね」

「浮気するぐらいの甲斐性があればうれしいのですけど」

「スタナミじゃないのかね」

「知りません」

老人は白の厚物を一本切ると、

「菊の雫は長寿の秘薬という古来からの言伝えがある」

香葉夫人に差し出した。

「菊におかれた露を吸ってみたいのだが」

老人はそこまでいうとにやりとした。大輪の菊で香葉夫人の着物の裾を蹴っている。

「わたくしのでよろしいの」

媚びを含んだ声であった。香葉夫人の老人を見る眼差が潤んでいる。

花が盛りあがった美しい厚物を、香葉夫人は着物の奥深くかくした。しなやかな指が静かに動く。老人の眼の前で、大胆な姿態をとりながら、香葉夫人はくなくと身体をくねらせた。老人の眼が大きく見開かれる。

繊細な淑やかな香葉夫人は、露骨な欲望をむきだしにする女に変貌する。

「もういい」

老人は呻めいた。香葉夫人の手から大菊を奪い取った。

老人は菊の雫を吸った。

「菊の下水、長寿のお薬と申しますわ」

と香葉夫人が老人にいった。

菊のはえているあたりを流れる水を、菊水とも、菊の下水ともいう。

香葉夫人は老人を野菊の咲き乱れる池のほとりに導いた。老人を野菊の中に跪かせ、花の香の中に顔を埋めさせた。

「これから下水が出来ますからどうぞ」

香葉夫人は着物の裾を翻して野菊の真中に立った。かすかにせせらぎの音がした――

菊の下水は老人の顔を濡らして野菊をぬい、細い流れをつくる。老人の口が動いた。

香葉夫人が急に何か叫んだようだ。

「抱いて」

野菊を臥所に二人の身体が激しくぶつかりあった。柔かい、と老人は思った。まるで骨のない真綿のような身体だが、ただふわっと軽いだけではない。

枯渇しようとしている老人の欲望がめらめらと燃えあがった。

今まで真綿のように柔かった香葉夫人の身体が、突然凝縮したように強い弾力ある身体に変化した。

老人が放撃を加えれば加えるほど、強力な反撃があり、老人の胸が急に苦しくなった。

おかしい。息が途絶えるのではないかという不安が老人を襲った。老人は戦慄した。まだ死にたくない。老人は顔を伏せた。

「どうかなさったの」

不意の老人の変化に、香葉夫人は怪訝な顔で眼をひらいた。老人の青褪めた顔に油汗が浮かんでいる。香葉夫人はあわてて身体を起こした。

「大丈夫だ」

と老人はいった。が、その声は重く、弱々しかった。心配そうに香葉夫人は老人の背中をさすった。

「すまんが、水を持ってきてくれないか」

野菊の上に坐ったまま、老人は深く首を垂れた。動かない。

香葉夫人は離れの老人の寝室に布団を敷いた。

す す き

午前三時。

庭園をそぞろ歩きしながら、秋の七草を見てまわった鬼頭寿美麗夫人与収二郎は、あかい毛氈に古風な煙草盆が置かれてある野外の茶屋で休んだ。寿美麗夫人が予備校に行く二郎に耳打ちして、出掛け先から二人は落ち合ったのである。

茶屋は群生したすすきに囲まれて、二人は黄茶色や紫茶色の尾花に埋没した。

日本髪茶屋の娘がお茶と味噌おでんを運んでくる。黄八丈が新鮮で美しい。

「主人が、二郎さんを養子にしたいって」

甘味噌がぬられていくしざしのこんにゃくを二郎にわたしながら、寿美麗は静かにいった。二郎は、はっとした。

「お味噌がたれるわよ」

二郎はあわててこんにゃくを口にほうばった。急にいわれても、どう返事していいのか

わからない。用件はこれだったのか。

「あの年になって、子供も、近親者もいないことが淋しいのね」

人ごとのように寿美麗夫人は話す。感情を殺しているようでもない。お茶を音をたてずにする。

「一月も前から、機会をみて二郎さんと相談してみてくれと主人からいわれていたの。主人は二郎さんに直接話をするのが、なんだか恥ずかしいのね」

「――」

「二郎さんの御両親の了解を得てからと思つて、いままでだまっていたの」

「それで、父や母の返事は……」

「二郎さんの意志にまかすそうよ」

自由放任主義の両親のことである。相談相手にもならない。自分で決めることだ。

「御主人が、なんでぼくなどを養子にしようと思ったのでしょうか。大学をすべった浪人ですよ、ぼくは。もっと立派な人が、ほかにいるでしょうに」

「立派」

寿美麗夫人は微笑した。

「そんなこと関係ないわ。主人は二郎さんが好きになったのよ。家の仕事は几帳面にかた

づけるし、夜遊びもあまりしないで勉強もしているし……」

「それ、皮肉に聞こえます」

二郎は憤然となって抗議した。予備校の勉強は、リリや貝塚絵馬のおかげで脱線しがちだし、老人の命じる仕事はいやでもしなければ家を追われる結果になる。別に勉強に熱心な男とも、几帳面で義理固い男とも思っていない。環境に従順なのが、唯一の取り柄なのかもしれない。寿美麗夫人はただ笑っている。

「ひとに好かれるということはすばらしいことね」

すすきの花穂が風になびく。黄八丈の娘がお茶のおかわりを運んできた。やたらにのどが乾く。二郎の一生の問題がこともなげに話されている。

「二郎さんがわたくしの子供になるなんてうれしいわ、とても」

二郎が養子を承諾すれば、義母と養子に関係を持つことになる。はっきりと口にだすが何故か躊躇われる。

「主人はわたくしたちのこと、何も知らないわ」

寿美麗夫人は二郎の不安を読んでいる。そ

うはつきり断言できるのだろうか。二郎は老人の真意がどうしても納得できない。寿美麗夫人が恐ろしくも思える。

「返事はしなくてもいいのよ。主人とわたくしでもう決めてしまったのですもの」

二郎に返事を保留する余裕もあたえない。寿美麗夫人は二郎が老人の養子になるものと決めている。

それならそれでいい。

「おまかせします」

寿美麗夫人が好きなのだから仕方がない。

すすきの尾花を折りながらそう思った。単純すぎるかもしれないが、二郎の決断も早い。

「海のスキを知っている、二郎さん」

寿美麗夫人がほがらかな声でいった。荷をおろして安堵したのだらう。拒絶されることも考えていたのに違いない。

「フジツボ」

「よく船底や岩にしがみついている、あれですか」

「そうよ」

「よくわからない」

「秋になるとあの醜いフジツボが、急に美しくなるのよ、緑褐色の十二の手をひろげてゆるやかにゆれ動き、海の底に秋を告げるの」

寿美麗夫人は十二の手といったが、フジツボはエビやカニと同じ節足動物だから、十二の足が正しいが、十二の足ではススキの感じがでない。

美しい海のススキに魅せられて近寄った二千あまりのプラントンは、ススキの穂のひとそよぎにフジツボの腹中に誘い込まれてしまう。

貧乏な生活者の水中花、フジツボ。海のススキの誘惑に負けるプラントンのようなものだと思つた。

寿美麗夫人が帰宅したとき、老人は香葉夫人の手を握ったまま、離れの寝室で眼をつぶっていた。菊の手入れをなさっていて、気持ちが悪くなられたそうなので、お医者さまをお呼びしました、と香葉夫人は告げた。胸に手をあてて少し弱っておいでようですから、お大事に。寿美麗夫人は香葉夫人とかわって老人のしなびた手を握った。老人の顔が急に小さくなったように見えた。

その夜、寿美麗夫人は胸を圧迫されて眼をさました。いつのまにか裸にされていた。すすきの庭園を歩いたのと、その帰り道、つい二郎とホテルで休んだ疲れがでたらしく、熟

睡していて老人の動きに気がつかなかったのは迂闊であつた。老人の吐く息は荒く、そして乱れていた。

「いけません」

寿美麗夫人はあわてて老人を押しつけようともがいた。

「身体にさわります」

「はなさないでくれ」

老人は息もたえだえにいった。

「わしをはなさないでくれ」

力が失せた。寿美麗夫人は老人を優しく抱いた。老人の激情が少しやわらいだようであつた。

が、老人は寿美麗夫人に次から次へと違ったことを要求した。老人の顔に死神がのりうつたような奇怪な形相であつた。老人の露骨な欲望に、寿美麗夫人のまっ白な裸身は、海老のように、なまめいた夜具にはね、そりかへつた。

真二つに裂かれるのではないかと恐怖にかけられ、思わず悲鳴をあげたほど、老人の気魄はすさまじかつた。死にたくない、と老人は叫んだようであつた。

「もういいでしょう、許して」

寿美麗夫人は幾度か老人の身体をはねのけ

ようとした。どうかしている、と寿美麗夫人は思った。憑かれてゐる。老人の乱暴な、粗野な行為は異常であつた。こわい。

「やめて、もう沢山」

あくことのない責めに、恐怖が繰り返し寿美麗夫人を襲つた。気が狂いそうであつた。

寿美麗夫人は老人に抱きすくめられて呻めいた。どうなっているのかわからない。

「ああ」

老人の薄くなった背中に寿美麗夫人は強く爪を立てた。血がにじむ。寿美麗夫人は再び、老人の死にものぐるいの攻撃に、荒々しく身悶えた。気が遠くなる。

と、がくつと老人が倒れた。胸が苦しい。寿美麗夫人は老人をゆさぶつた。老人の動きは完全に止まっている。

水際に打ちあげられた魚のようにぐったりした老人から、ついに胸の鼓動はきこえなかつた。老人の顔には満足した微笑が浮かんでいた。やすらかな寝顔であつた。

寿美麗夫人は鬼頭老人の身支度をととのえ、と、枕もとに青磁の陶器を置き、老人が好きだつた白檀の香をたきしめた。涙がこぼれた。

寿美麗夫人は主治医に電話をかけた。

(終)



SMカメラ・ハント

三好留美の巻

甘美なる羞らい

辻村 隆

大抵のことなら即決してくれる箕田編集長が、この度許りは珍らしく返事を渋った。私が十二月号奇クサロンの、『ひそかなる私の願い』の手記を寄せてきた三好留美さんに、一眼惚れにも似た触手を動かして、早速彼に三好さんへの連絡を頼んだところ、何時もなら、よしきたとばかり、すぐ詳細を教えてくれるのだが、今回はそうは参らない。彼の応答はそのうちとか、いずれ連絡するとかで、仲々においそれとはゆかない。どうやら編集長自身、かなり彼女に対して興味を抱いてい

る様子であった。名古屋まで出掛けて、まず会ってみたいのかも知れない。いきなり私に易々と紹介するのが惜しくなる彼の気持も分るようであった。サロンのフォトで見るかぎり、さほどに三好留美さんはポチャポチャと愛らしく、彼女自身謂うように、檜山文枝によく似ていた。一年間、多忙の合間を割いて、『おはなはん』を見続けて来た編集長にとっては、三好留美の中に現代のおはなはんのイメージを、そっくりと見出したに違いなかった。

早急に返事をもらうことで、私は渋々納得して電話をきったが、彼女の可悪いイメージが、網膜にしっかり焼きついてしまった。私自身も亦、檜山文枝に似た彼女に、『おはなはん』の夢を追っていたのかも知れない。彼女の簡単な手記の最後に、

(辻村先生、私をカメラ・ハントにいかがでしょう。夢と実際とは違うかも知れませんが、今の私の願いです)という三下り半(縁起でもない——)が、私にとっては強味であり、彼女が私に呼びかけているようにもとら

れたのである。

同月号の『モデル志願の投書』の清野勝子さんは、私より山本章氏を希んでいるようであったが、人みなそれぞれの好みによって呼びかける人も違うのだ。三好留美さんの場合は私の名前を指名している様に思えた。

奇クの十二月号が私の家に届いた十月二十日にすぐさま電話して、私は二、三日彼女の返事を待っていた。箕田氏からはその後一向に連絡がない。待ち焦れて五日目に私は再び催促の電話をする。私にしては近頃になく性急になっていた。

「えらく御執心だね。日頃のあんたにも似合わないよ。今、仕事の方忙がいんだろう」

「ああ、忙がいよ。でも、この道は別らしい、そう焦らさないで知らせてよ」

「ああ、あんたに呼び掛けてるんだから紹介しますよ。でもヤケにせくんだね」

「フオトを見て一眼惚れしたらしい」

「あんたにも似合わんことだ。お膳立てしておこうと思ったのだが、じゃあ、あんた自分でやるかね」

「いいとも」

「電話番号知らせておこう。会社の方らしいが、かけてみるかね。番号は名古屋局（九七

一）の三×五×番——市内中区のS商事株式会社だ」

「かけてもいい？」

「いいって、あんた連絡したいから散々聞いたのだろう」

「それはそうだけど」

私は絶句した。彼の意向も考えぬまま、意馬心猿になってねだったのだが、いざあつさりと言げられると、編集長に一寸悪い気がしてきたのだった。

「まあうまくやってくれよ。可愛いらしい子だから、私も分譲用に撮ってみたい食指を動かしたのだが、ハントを書いて貰ってからでもいい。しかしあとに続くように頼むよ」

これが彼の本音かも知れなかった。

私は感謝し、喜び勇んで電話をきった。これで三好留美とのルートがついたと思うと、もう矢も楯も耐らない。平日のことだし、彼女はきつとビジネスセンター街の一劃で、熱心に事務をとっているかも知れない。いきなり突然に彼女に電話したら、どんな反響があるだろうか。腕時計を覗くと午後二時半。

私は衝動的にダイヤルを廻していた。

〇五二——九七一——三……。二度許りの呼出の発信音が響いて、すぐ交換がでた。

私は彼女の名を告げて、呼んで貰うよう伝えた。

「総務課の三好ですね」

「ええ、そうだと思います。三好ルミさんです」

ジジッと接続音がきこえて、直接、課につながったらしい。

「もしもし、三好でございますが……」。透きとおるような美しい声だ、いい音色だなあ。

「三好ルミさんですね。私、辻村——辻村隆です。分りますか？」

「辻村さん？ ああ例の？」

「カメラ・ハントの辻村です」

「……………」

声が途切れた。咄嗟で、突然で、急には返事も出来なかったらしい。場所柄もあり、交換もあるう。突込んだ話は避けるべきだ。

「一度、お目にかかりたいのですが」

「はあ、私も実は……」

「日曜でないとダメでしょうね」

「はあ、いいえ。有給休暇もとれますが」

「電話では精しく言えないでしょうね。私の方から名古屋へ行きますが、いつでもいいのでしょいか？」



「ええ、いつでも。でも、ひよっとすると月末から五日ぐらいまでは無理かも知れませんが、それからあとですと……」

多分生理ではなからうか。これは私の推察であるが。彼女は努めて冷静を装おっているが、拒否している声ではなかった。辺りを憚かっているに違いない。

「じゃあ、十一月の十五日にどうでしょう。時間は正午きっかり、場所はどこにしましょうか。名古屋方面は実の処、余りくわしくはないんですが」

「わたくし、市内ならどこだっていいんですが。分り易い処でしたら、テレビ塔でもよろ

しいし、何でしたらナゴヤ・スポーツランドなどでいかがでしょうか」

「スポーツランドというと、どの辺りなんです？」

「もとの金山体育館なんです。正面入口でお待ちしますが、わたくし辻村さんが分るでしょうかしら」

「私はフオートであなたを存じていますが、しかし私が分らないとすれば、何なら車でまいりましょうか。車は……」

私は車種やナンバーを伝えた。万一支障があった場合のことを考えて私の電話と住所を告げて、惜しい電話をきる。はじめての電話

早々から、つつ込んだ長話も、反って彼女には迷惑であるかも知れない。（お待ち致して居ります……）という、彼女の澄み切った余音を、私はしばし噛みしめていた。

私の胸はときめき、激しく疼いてきた。未だ会合の日までには二十日近くもあるというのに、心は既に、その日の三好ルミとのプレイの想念に走っていた。黒く輝やく円らな瞳、豊かな頬にふかぶか

と浮ぶ謎めいた微笑み。身長一六〇センチ、体重五一キロ、若さみなぎる二十一才の、パツと開いた真赤な薔烈の大花一輪にも似た、均整のとれた三好ルミの鮮烈な妖しい肢態が、まざまざと私の脳裡をよぎって、未だ見ぬ幻の女体が、ありありと残滓となって残った。

熱い感銘にひたり乍ら、私はいつまでも電話の前で佇立していた。電話台の前に開かれた、奇クサロンの彼女が、フト私に微笑みかけている様な錯覚に襲われ乍ら……。

× × ×

名四国道を今、私は走っている。秋空は爽やかに晴れわたり、伊勢湾から、開け放った窓に汐風が吹き込んでくる。もう間もなく車は名古屋市内に入ろうとしている。名阪国道のお蔭で、名古屋へも随分スムーズに行けるようになったものだ。亀山より国道一号線に入り、四日市の中心で右折すると、名四国道を通じて一直線に名古屋に続いている。たった一人で名古屋を往復する物足りなさはあるが、市中での動きを考えると、新幹線を利用するより自由だった。いやそれよりも、三好ルミとの二人きりの時間が少しでも多かれと望んでのこともあった。

時間を測って出発したので、名四国道の終点では午前十一時を少し過ぎた頃だった。

市電の通りに出て地図を拡げる。右折して市電に沿ってゆくと名古屋港にすぐだった。そこを左折して名港通りをゆるゆると走る。この辺り都心に外れているので車は少ない。西効通りを直進し、市電八熊通を右折して、地図を頼りに行くと、目指す金山体育館はすぐ分った。今は変貌してナゴヤ。スポーツランドになっている。ボーリング、温水プール、娯楽場のセンターだ。約束の時間に未だ三十分近くある。スポーツランドの前に駐車してある十数台の車の列に、並んで駐車させて車を降りる。十一月の半ば近く、若い娘が二人、スラックス姿で、ビーチウェアを抱えて通り過ぎたのか、奇異な印象を与えた。三好ルミも、時には若さを持て余してこのスポーツランドへ足を運び、ボーリングや水泳に興じているのかも知れない。なればこそ、咄嗟のデートの場所にも、こんな個処を告げたのではなからうか。私の先輩にはいささか縁遠い場所に思えた。

二、三度大きく伸びをして、私は車中に戻った。時間になって彼女が来たならば、ナンバーと車体を探し求めてくれるだろう。危惧

はなかった。それは、電話の日より数日ならずして届いた。彼女の手紙によるものだった。私は徒然なる儘に、背広の内ポケットから、二つに折り畳んだ三好ルミの封筒をとり出した。円い顔に似ぬ小じんまりした、四角ばった、几帳面な字面が並んでいる。私は改めて、これで何度目かの読み返しを始めた。

「前文御免下さいませ。菊かおるさわやかな秋、辻村様には御健祥のこととお慶び申し上げます。昨日の午後、仕事でいくらかの疲労をおぼえ、なんとなくぼんやりしていました。時、思いも掛けぬ本当に思い掛けない辻村様のお電話をいただき、余りのことに唯もう呆然として、何を申しあげましたやら無我夢中でお話いたしました。ルミは本当に嬉しくて嬉しくて、天にも昇りたい気持ちで一ぱいでございます。わたくしの拙ない一文が奇巧に発表されたのでございますね。わたくしはまだ奇巧を買う機会がなくて見ておりませんが、何処かの本屋で見つけ次第すぐ買求めます。自分では文学少女ぶっていますが、ボキャブラリーも貧弱で、書きたいという本能的な慾望だけで、ロクな小説を書いたこともございません。人生経験もちろん稀薄ですし、も

っともっと勉強しないとダメでしょうね。あら、わたくし何を書いているのかしら。

辻村様――、あの時たしか十一月十五日の正午、スポーツランドの正面入口でお目にかかるとお約束したようにおぼえておりますが、間違いないでしょうか。もしわたくしの記憶違いであれば、左記の勤務先あてに折返しお知らせ下さいませ。お返事のない時は、絶対間違いなくまいります。

わたくしコレクトされる日を、今日か今日かと、夢にまで見て待ちうけておりました。わたくしの願いが果される日がいよいよ近づいてまいりましたのですね。いまだ一度も異性より縛られた経験もなく、又、わたくし自身でそんな秘かなプレイにひたつたこともございませんが、幻想や夢魔には、いつもさまたまに縛られたり、つるされたり、口では到底言いつくせぬ羞かしいめにあわされているのでございます。多分おそらく、現実と想像ではずい分違ったものだと思いますが、想像が間もなく現実になるかと思うと、ルミのハートは怖さにふるえ、恥かしさいっぱいになります。その時になって、いやだと駄々をこねたり、恥かしさに逃げ出そうとするかも知れませんが、それはルミの若い娘としての

テクニックでございますから、強くわたくしを押えつけ、逃げださぬよう掴まえて下さいませ。辻村様が紳士になられて、わたくしがいやというので、そのままお止しにはならないで下さい。なんとすれば、ルミはきつとあとで自殺したいくらい後悔するからです。あらかじめそのことを申しあげないと、何だか自信がないからでございます。

わたくしという女は、そんな女でございます。素直に言われるようにハイハイについてゆけないと思います。夢中で暴れたり引っ掻いたりするかも知れません。でも力強く圧迫して下さい。

とうとうわたくしの心を告白してしまいました。ヘンな女とお思いでしょうが、もしも不成立の場合を考え、そうせずにはいられたかったのでございます。芝居めいた女だとお笑いにならず、何卒お許し下さいませ。では十五日にお会いできることを神かけて信じつつ、拙ないペンをおきます。お体くれぐれもお大切に。

ひたすら待つルミより

辻村 隆さま みもとへ

大切な宝もののように、私は読み終って再びポケットへ戻す。時間の切迫と共に胸は急

速に燃え始めてきた。自分勝手に早く来ながら、待つ時間が待遠しかった。プレイの構想は際限もなく膨らみ、限られた時間内では、到底はかききれぬと知りつつも、幻想は更に抬頭して累積していった。先刻からまるで分秒を刻むように、数度時計を見ている。針の動きが今日に限ってバカに遅く感じられた。水曜日でレジャーの若者も少ないのか、スポーツランドの入口は、比較的閑散であった。にらめっこする時計が、午前十一時五十六分になった、その時――。

車の窓が暗くかげって、そこに人の気配があった。のぞきこんで来た瞳、まぎれもなく三好留美のかぐわしいはにかみの笑顔がそこにあった。お互いに確認し合わなくても分っている。私は弾む胸をじっと鎮めて、無言の俤を押した。

ピチピチした、はち切れそうなポリウムのある体が私の横に遠慮勝ちに座を占める。「どっかへ食事に行きましょう。御存知のところがあったら案内して下さい」

挨拶も何もかも一切抜きである。初めて出会って、既に知己のような口吻であった。なまじ空々しい言葉で挨拶を交すより、この方が遥かに親近感をつくるものだ、私は過去

の経験から割出していた。いきなりそう言われて、彼女も流石に一寸驚いた様子であったが、初対面の異和感は予定通りすぐ消えた。「さあ、私あまり存じませんのよ。お気に入るかどうかわ存じませんが、じゃあ御案内しますわ」

彼女の指図通りに走ると広小路通へ出た。この辺り一帯駐車禁止である。彼女は一寸途迷っていたが、そのままテレビ塔の聳える百米道路を横断して、市電の武平町電停辺りで右へ折れる様告げた。全くチンプンカンプンである。通りからそれた裏道の、とあるレストランの前で車を止める。

「この地下に一寸したレストランがあるのですが、いいでしょうか」

「ああ結構ですよ」

車を降りて、『ピーコック』と書かれたレストランの入口の扉を開く。階段は地下に通じて、静かな雰囲気のレストランがそこにあった。昼食時で数組の客があったが、ボーイの物腰も丁寧だし、客筋もいいのか静かであった。スペシャルランチを二人前注文して、始めて面と向って彼女と顔を見合せた。

「何てお呼びしましょう？」

「ルミで結構ですわ」

「じゃあ、ルミちゃん」

「ハイ」

彼女は、あどけなく笑った。髪を無難作にアップに結び上げてある。よくよく見れば見るほど彼女は近代的な美人であった。豊頬というのか、その頬は若さでつやつやと光っていた。フォトの感じからでは、榎山文枝に似ているが、今こうして眼近くみると、若き日の团令子そっくりだし、角度を変えると梓みちよにも似ていた。要するにこの三人を足して三で割った容貌というにふさわしかった。

私達はランチのくる迄の、しばらくの間、声を秘めながら、短い会話をつづける。

「勤務先はこの近くなんでしょう？」

「ええ、錦通りなんです。歩いて、ここから十分ぐらいですわ」

「お住居は？」

「千種区の東市民病院の近くなんです。と申しあげてもお分りになる？」

「分りませんよ、全然。唯きいてみたかっただけ——」

「わたくし辻村さんのこと、おききしてもいいでしょうか？」

「いいですよ、何なりと」

彼女は、かなり私の素性を掘り下げてきき



ただしてきた。質問は壺を心得ていて一応は戸籍抄本に近いことを言わざるを得ない羽目に追い込まれていた。質問から、彼女の聡明さが泌み出ていた。私が大正十年生れだと知ると、彼女は撫然とした態度で、

「まあ、それじゃ私の父と同じ年ですわ。私が長女で兄弟は外に弟二人なんですけど、まるで親子ですのね」

と照れた様に笑った。彼女と私の長女とは年が一つしか違わない。親子といわれても、正にこれは親子にふさわしい年令の隔たりであった。親子にも等しい娘を私は今ハントしようとしている。しかし若し、私の娘が同様

な状態で第三者の誰かに、こうした秘密を持っていたとしたら、到底私は平静でいられたかったであろう。他人様の娘ならどうなっても構わないが、自分の娘では困る——、これが私ぐらいの年配の、中年にかかる男の、エゴイズムな共通の考えであったかも知れない。(このピチピチと成熟した娘に比して、何と私の娘のウブなことよ。年は一つしか違わないのに、肉体の発育の隔たりは比すべくもない)

そんな想念で、私はまじまじとルミを舐め廻すように見つめているが、私の娘とて、父親たる私の前で、ボーイフレンドの品定めを云々する近頃、父親以外の眼からみれば、案外成熟しているのかも知れない。いつまでも子供のように思っているのは、親のみかも知れなかった。

私は内心忸怩たるものありながら、その癖この若さに溢れた、三好ルミをハント出来る喜びに心は躍り、逸り、弾みに弾んでいた。やがて数刻ならずして、この近代美人の象徴のようなルミの裸を、心ゆくまで眺め、縛ることが出来るのだ。これが弾まずにはいら



れようか。幸か不幸か料理は暇がかかった。
「編集長がね、分譲フォトとして、若し差支えなければ、ルミちゃんを撮りたいそうですよ。都合はどう？」

「まあ、編集長さんが私を。お撮りになるのは構いませんけど、分譲などされたら困りますわ、お嫁入りまえですもの」

「都合悪いんだね」

「ええ、だって若しですよ、若しも万一私の会社の男の方に、内緒の奇クのファンの人がおられたら、いっぺんに私の秘密はばれて

しまいますもの」

「そうなる、カメラ・ハントも具合わるいということになりますよ」

「でしょうね。辻村さんが御自分のコレクションにお使いになるだけが一番理想なんですけど、それじゃつまりませんし、まあ考えておきますわ。でも撮ったフォト、私にはいただけるのでしょうか」

「構わないけど、送っても大丈夫なの？ お家の方」

「会社宛の書留なら大丈夫だと思います。だって私、みたいんですもの」

「ルミちゃんのお手紙によると、初めての経験だそうだけど、あとで後悔しない？」

「するかも知れませんが。或いはしないかも知れないし、分りませんわ、やってみなくちゃあ」

「そりやそうだ。でも若いあんたにしては随分大胆なプロポーズだったね」

「まさか、奇クのサロンにのるなんてこと、考えていませんでした。誰にも知られず辻村さんにお会いしたかったのですわ。でも書いて送った以上、のせられても仕方ありませんけど」

「こんなことルミちゃんにきくの変だけど、

この近くにプレイするのにふさわしいホテルあるかしら」

「知りませんわ。でも温泉マークのホテルやデラックスなホテルは、この近くに沢山ありますわ。このピーコックの上が、弁天閣観光ホテルなんですよ。アベックが沢山利用してるそうですわ」

言ってルミは一寸顔を赤らめて伏せた。ホテル利用者の一人にとられても困るという困惑と、アベックの行為を想像しての赤らみであつたのかも知れない。

「車さえ駐車出来たらどこでもいいんだよ。まあ近くを探してみしよう」

「辻村さん、奇クに書かれてもう随分になるのでしょうか」

「二十年以上になりますよ」

「まあ、じゃあ私が生れたての赤ん坊時代からですわ。すごいわ」

「いやいや、ただいたずらに雑文書きに憂身をやつして来ただけですわ。ロクなものありやしない」

「随分いろんな女の方にお目にかかったでしょう」

「そりやね。だけど、私が緊縛フォトを撮影するために最初に編集部の人と同行したのは

昭和二十七年ですよ。もう十五年も前になりますが、川端多奈子という人が緊縛モデルの第一号だった」

喋りながら私はうたた感慨にひたった。よく飽きもせず撮り続けてきたが、川端多奈子を撮った年、この娘は幼稚園にいていた頃だ。元気旺盛だった私の肉体にも、いつしか衰えが見え始め、もう髪に交る白髪も抜くすべもない程殖えている。それでも尚、私はSMを探求して、千里の道も遠しとせず、今こうして名古屋の市中の見知らぬ街の一劃で若い娘を相手にして、あくこの執念を燃やしている。もう五年、いや十年経っても、激しく厳しい言論統制の時代のこぬ限り、私はハントを続けているに違いないのだ。

給仕が料理を運んで来た。丁寧なものごしだし、料理もよかった。何より雰囲気のしつくりとした静かさがよかった。

「いただきますわ」

彼女は軽く会釈すると、馴れた手付でホークとナイフを使い、手際よくつつましく口に運んでいった。

バスから三好ルミの湯を使う音が、サラサ

ラと微かに聞こえてくる。

ホテルのこの洋間で、私はもどかしげに煙草をくらませていた。

あれから——。ルミに訊ねるまでもなく、食事をすませて車を当てなく走らせると、デラックスなホテルが、この近辺のそこかしこに、偉容を誇って林立していた。ドライバーの心理を心得てか、ホテルの地下へ車が吸い込まれる様に滑り込むと、眼前に地上の各階へ通ずるエレベーターが、人待顔に扉を開いていた。どう連絡してあるのか、若い事務服の娘が案内してくれる。何階であるか知らない。エレベーターの扉が自動的に開いて、数歩あるくと、もうそこに秘かな部屋が暗い照明の中にある。

その一室である。

応接セットとバス・トイレ、テレビのおきまりの洋間の奥、厚いカーテンの彼方にダブルベッドが大きく占められてある。

ホテルへ入ってから、ルミは一言も発しない。いよいよ目前に迫りつつあるプレイへの開幕に彼女のハートは極度に膨張しているに違いなかった。柔和な頬も、心なしか硬ばっている。ルミにとって、こうした経験は恐らく始めてであるに違いない。いや始めてだと



私は信じていた。かたく硬ばった心を私はときほぐしてやらねばならない。

案内ガールが、ポットとちっぽけな茶菓子置いて去ったあとも、ルミはうつむいて、しきりにハンドバッグの提げ紐を、いじっていた。

「お風呂へ入っていらっしゃいよ」「ええ」

彼女は依然として、もじもじしている。

「よかったら、少しプレイのフォトみせてあげようか？」

「ええ、見たいですわ」

やっとルミは顔を挙げた。頬が赤い。眼許に乙女の羞恥がありありと漂っていた、私は印画紙の黒い袋に入れてきた、なるべくオーソドックスなプレイのものを、数十枚無難作に机上に並べた。彼女は遠慮勝ちにフォトをとりあげた。喰い入るようにみつめるルミの視線を、私はそつと観察していた。明らかに彼女は動揺し、色めき始めていた。重い吐息が数度洩れ、消えも入りげなポーズは急速に固まり始めた。謂うなればプレイに対する心構えが、フォトの観察と共に醸し出されていったのである。

「随分、お撮りになられましたのネ。これ、誰方？」

うるんだような瞳で、私に問いかけてきた時、私はもう占めたと思った。すっかりプレイの雰囲気にとけ込んできたのである。

「どれどれ、ああこれね。もう数年も前に撮ったのだが、梨花悠起子という人。いい娘でしょう」

「可愛い方ね。この方は？」

「青柳千紗というんだけど——」

「若い方、許りね。これは？」

「一宮ユリ子」

「どの人も、皆カメラ・ハント書かれましたの？」

「ああ、一通りはね」

「皆、自分からプレイを希望されるの？」

「その人、人によっていろいろあるけれど、究極はそうなりますよ」

「私、何だか怖くなってきましたわ」

そら来た。これを額面通り受取ってはならないのだ。彼女自身の手紙にもあったように一応はそんな立場をとってみたいのかも知れない。私は黙っていた。

「こんな非道いことなさないでネ」

ルミは一枚のフォトを私に示した。笹原八千子の、強烈きわまる逆屈曲の大胆な露出ポーズの一枚である。

「ああ、しないよ。これはこの人だから出来たので、誰でもとはゆかないでしょう。その人のM性によってプレイも自ずから異なりますよ」

彼女は数十枚のフォトを一通り見終ると、キチンと揃えて、裏向けて置いた。

「もう湯が一杯になる頃だよ。入ってきなさいよ」

「いよ」

「じゃあ、そうしますわ」

今度は易々と立上った。ルミにとって自ら求めた道であれば、どうやら覚悟は出来たらしい。

「あのう……」

「何だね」

「お風呂から上ったら、下着つけていいんでしょうか」

「じかにこれを着てくれると有難いけど」

私は片隅の浴衣を手渡した。

「矢っ張り、全部脱ぐのでしょうか」

これだけは聞いておかねばという、ルミの真剣な表情に、私は幼稚な彼女のこの言葉を可愛いと思えた。私の本心は勿論、三好ルミの全裸を見たい衝動と欲望に駆られていた。しかしこの際、そうズバリとも言切れない。私は苦笑して、

「ああ、ルミちゃんの好きなようにしていいよ。でもね、あんたが自分の体に自信あったら脱いで貰えると有難いね。じっくりと拝みたいものね」

何も知らない少女から、やっと成人したという、素直な感じが、殊更に好感がもてて、私は、この愛すべき娘を抱きしめたくなっ



た。

ルミは自分で訊ねながら、この言葉に恥じらいを感じてか、ペロリと舌を出して、はにかんで笑った。

「さあ、早く温まっていっちゃい」

ストロボとカメラ、使い馴れたダンダラ縄などとり出し、手早く準備をすます。

私は煙草をくゆらし乍ら、唯もうルミのバ

スから上ってくるのを待つのみとなった。

この若い娘は、ピチピチとはじけそうな裸を、丹念に磨いているのだろうか、予想外に長かった。

今も、かすかな湯の流れる音が、辺りのしじまを、そっと破っている。

私は長い車の行程の緊張から、幾分疲労を覚えていたのか、二本の指に煙草を挟んだまま、瞬時うとうとしていたらしい。

その時間は、極く僅かであったか、数分間であったかは分らない。

「あっ、煙草の灰が落ちますわ」

という声に、ハッと我に返った。あわてて手を振ったので、長い灰殻が、ポトリとジュータンの床に落ちた。

上気した笑顔でルミが、近々と私の眼前に、かぐわしい石鹸の匂いとローションの香をふりまいて立っていた。

「あの、車の疲れが出たらしい。つい待ちくたびれてウトウトしたんだね」

「私、やっぱり恥かしいですわ。御免なさいね。この次は、きつと……」

乙女の羞恥が、入浴中にそんな結論に達したのだろうか。彼女はプレイを拒否しようとしていた。

私は黙っていた。黙ってじっと彼女の顔をみつめていた。にらむつもりはなかったが、彼女にとっては、にらみつけられている様にとったに違いなかった。

「生れて始めてですもの……」

呟やくようにいったが、それは自己弁護の言葉であった。ひそかなる自分の願望も、いざ達成出来得る段階に至ると、恐怖と羞恥が先に立って、どうしてもフンギリがつきかねるらしい。私はこの迷いに迷う三好ルミの心が手にとるように分った。昔の私なら、恐らくこんな場合、根気よく、プレイの初歩から徐々に飼育していったに違いなかった。しかし年令と共に、又私自身プレイずれて来ると共に、こんな厄介な、煩雑なルートは近來頓にうるさくなってきていた。駄目なら駄目でいい、といったあっさりした諦観の念の方が先走ってしまうのである。

「本当にプレイしないの？」

「え、私……」

「残念だなあ、折角ここまで来乍ら。しかしルミちゃんが気が向かないなら、無理とはいわないよ。まあゆっくりしていくがいいさ。じゃあ、私も一風呂浴びてくるよ」

「あのう……」

ルミは何か言わうとした。

「いいんだ、いいんだ。まあお菓子でもたべるか、のどが渴いたら、冷蔵庫からのみものでも出してのんでいてくれ給え」

敢えて言訳をきかず、私はさっさとバスに向って歩く。バスにつかる間の、ルミの気持の変化に私は最後の希みを托していたのだ。この場まで来て、しかも名古屋までわざわざ呼んで、何もしないで出た場合、反って彼女自身みじめになるのではなからうか。括弧たる態度を見せなければいけない。

思ったより広いバスであった。桃色の間接照明でアベックホテルにふさわしく、いかにもなまめいていて、情緒を誘った。

バスに入る時気付いたが、ルミの下着はどこにもなかった。恐らく、浴衣の下に纏っているに違いない。

私はわざと長い時間をかけて湯を使った。のぼせそうになり乍ら、ルミの心境の変化の僥倖を願っていた。その癖、心のどこかでは手紙の文句がちらついてきて、この言葉もルミの手紙にあったように一種の逆説的な言葉を弄したのではなからうかという思いが拭えなかった。本心か、それとも逆説の羞恥を偽瞞する言動か——。いずれにしてもこの儘、

何もせず帰るという手はない。

私はパンツ一枚に、浴衣をじかに身につける。暖房の軽きいたルーム内は汗ばむ暖かさであった。

私の気配で、何か慌てる音がした。バスの扉を開くと、ルミが大急ぎでフォートを印刷紙の袋にしまいこむのが見えた。もう一度ゆっくり眺め直していたらしい。

私は顔を拭い乍ら戻る。気まり悪げにルミは居坐いを直した。

さりげなく近よると、私は目測で縄の位置を確かめ、矢庭にルミのうしろから彼女を羽搔じめに抱きしめた。



「あッ、いけませんわ。やめて、お願い」

さっと顔面を硬ばらせて、ルミは必死に拒もうともがいた。私はたぐりよせるように縄を手にする、ルミの両手を後手にねじ上げ、手早く、両手を合せて縛った。

「いやですわ。やめて、やめて、ね」

いややというように、ルミは体をくねらせて私をにらんだ。私は一切無言である。浴衣の袖がよじれて、左肩の襟がずれて、白い肌がのぞける。両手で抱きかかえて、押えつけるように椅子に坐らせる。椅子のうしろに縄を巻いて立上らないにして、私は彼女と向い合せに、どっかと椅子に腰を落した。

怒ったのだろうか、ルミは眼を閉じてじっとしていた。若い娘にとって、この突如の暴力は、激しい屈辱となつてルミの心を荒々しくゆさぶりつづけているのではなからうか。

「どうなさるおつもり？」

「……」

私は返事をしない。やっこらさと立ち上って冷蔵庫を開くと、コカコーラを一本とり出してきて、栓をぬくと、瓶ごとラップのみにした。私の心の奥底に潜む、パーバリズムな

行為が現われていた。

「ねえ、本当に御免なさい。だから解いて」

ルミは何を感じたのか謝まってきた。

私はニヤリとした。尚も黙って立った儘、ルミの乱れた浴衣姿をみつめていた。彼女と視線が会うと、しばし空間に四つの眼がチカチカとかち合ったが、すぐルミは弱々しく眼を外らせた。

無雑作にアップにしてあった髪が、いつの間にか崩れて、ルミのひたいに振りかかっている。

「ねえ——、ねえったら……」

辻村さんとも、おじさんとも未だに呼ばない。いや呼べないのだろう。ねえで訴えている。心では私という人間を許容し乍ら、現実では出会って未だ二時間にも足りない、この未知の中年の男をうけ入れる態勢が出来ていないというのが、ルミの偽わらざる本心ではなかったか。私にしても些さか短兵急に過ぎたきらいがないでもない。しかし今、このあどけない、豊頬の美女の心身を、肉体的、精神的に虐めているのが、Sの探求者としての本来の姿ではなからうか。

私は洋服ダンスの、服のポケットから彼女の手紙をとり出すと、ゆっくりと封筒から中

味を抜き出す。眼で内容を追って、ある個所から声をあげてよみ出した。

「……いやだと駄々をこねたり、恥かしさに逃げ出そうとするかも……」

私は読み終ると、おもむろに手紙をしまった。

「ということなので、少々乱暴だったが、自殺されると困るのでね」

三好ルミは真赤になってうつつむいていた。

「さて、どう料理しましょうかね」

「いいわ、脱ぎますわ。だから解いて——」

私は手早く解いた。ルミはさっと立ち上ると身をひるがえそうとした。そのルミの右手を掴んで、私はかなり乱暴に浴衣をとる。胸を抱えこむようにした体を押えつけ、シュミーズを剥がし、ガードルをとる。ついでブラジャーを、むしりとる。

「あッ、あッ、止めて……」

ルミは必死になって、身をくねらせ、あるいはかがめて拒んだ。精一杯の抵抗をした。燃えに燃えたる私の情念は既に矢を放たれていた。容赦なく私は、いどんでいった。

真白い絨のような柔肌の胸に、ポツテリとした豊満な娘盛りの乳房が妖しくブルンブルンと震えて揺れた。灼きつくような私の視線

は、射るようにそれに注がれる。

愛用のダンダラの縄が、彼女の胸に蛇のように素早くまといついていった。こうなるともう追う者の強味であった。私は我を忘れてしかと彼女の白磁の肌を押えこんでいた。

乳房を強調させるべく、両乳房を挟んで8の字を描いて胸縄をしめ、縄の余白で両手をさして強くない程度に後手で縛り合す。ほんの僅かな隙間に、事態は一変して、そこに裸に剥がされたルミの縛りのポーズが現出していた。ルミの背を押すようにして、部屋の片隅のソファにドサリと転がす。ハアハアと私の喘ぐ呼吸以上に、彼女は切迫して喘いでいた。仰向けに転がったルミの胸を圧して、両乳房がポツカリと、大きなお腕を伏せたように高々と盛り上っていた。それは唯もう見事としか言いようのない素晴らしさであった。

桃色に色づいた乳首、それにつながる乳暈が、処女の象徴のように艶々と張切って光っていた。私はしばし、その胸の隆起の余りの壮大さにしばし見とれていた。若しミス・オッパイコンクールというような催しがあれば、ルミは必ずや、優勝出来たであらう。さほどに大きさも均整がとれ、申し分なかった。しゃぶりつきたいような衝動にかられる

のだ。

使い古しのダンダラ縄が、千切れかかり、綻びて芯もあらわにむき出ているのが醜くこんな素晴らしいオッパイを縛るにはふさわしくなかった。

彼女は半ば観念したのか、ソファに転んでじっとしていた。予想にたがわず、ルミの裸体は、ヴィナスもかくやと思われる許りに白々と輝やき、均整がとれていた。ぜい肉もつかず、かた太りの肌に、凝脂を浮かべて柔らかく、処女の羞らいを体一杯にみなぎらせて清潔そのものであった。

私のこの唐突な行為に対して、ルミはかなりショックを受けた様子であった。幻想や夢魔には、緊縛のプレイは度々出てきたとしても、今現実、こうして裸の肌に縄をかけられたのは、恐らくルミにとっては生れて始めてのことではなかったであろうか。彼女の眸に苦渋に似たかげりが走った。かたく閉じた眼はいつかな開こうとはしない。自分のこのポーズをその眼でみつめるのが怖かったのだ。

私の心は煮えたぎっていた。薄い水色のパステルが私の眼には邪魔ものにうつってきただ。もうここまで行動した以上、今更遡す

ることもあるまい。私のハイドの心は更にその秘奥を確かめろと促がしてくる。もはや私の、探求しようとするSの心は止めようもなかった。

「いやッ、やめて……」

ときれぎれに叫ぶのにも構わず、私はルミの最後の一枚を勢よく剥ぎとっていた。今ここにパッと開花したての紅バラにも似た、青春のかたまりのような、若くみずみずしい女体が、蔽いようもなく眼前に開いていた。

檜山文枝に似た、あの可憐な表情は消えて無慚にお花畑を踏みにじられたような、赤裸々がそこにあった。悔恨と恐怖の交錯した憂愁の表情がルミを支配していった。

私はそこで始めてカメラをとり上げた。今のパイントマイムの格闘で、ルミの豊かな黒髪は更に崩れて、顔の半面を蔽っていた。

ストロボを発火させる構えになると、ルミはついと顔を反けた。私はやむなく三脚にカメラを据え、長尺レリーズを使って、ソファに横転させたり、床のジュータンに転がしたり、ソファに体を立てかけさせたりして、辛うじて数枚をものにする。柔和な笑顔に代って、悲しみと嘆きと恨みに似た表情が、カメラのレンズに納まっていた。

私の手が彼女の体に触れる度毎に、ビクリと小刻みに体が震える。処女の本能がプレイ以上の行為に対して、極度に怖れているかにみえた。私の飽くなき執念は、その本能の根源をたしかめたくなった。衝動にかられた行為であると知りつつ自制出来なかったのだ。

「あッ、それだけは……」

ルミは膝を固く閉じて必死に両腿に力を入れたが、私の男の力の方が強かった。両膝の辺りにそれぞれ一本ずつ縄を結びつけると、ソファの底を廻して無理矢理に拡げてゆく。

憎悪に似た表情が、刹那、ルミの眉間に浮んでできた。最も羞かしいポーズが、今の私の手によってとられようとしているのだ。顔をそむけようとした瞬間、ストロボが光っている。数発を私は夢中でとっていた。望遠レンズで拡大したかったが、それは許されなかったであろう。これ以上の屈辱は、恐らくルミとしても、耐えられぬことであつたらうから。

縛り方としては、緊縛ともいえぬ、ごく初歩のものに過ぎなかったが、ルミにとっては強烈なショックであつたに違いない。しかし私はこの機会を逃さず、兎も角もルミのすべてを、凡ゆる角度から一応、撮り終った。

けれど、そのプレイは半ば暴力的ともいえる行為の結果であった。私はもう酔ったようになつて、この美女に次の緊縛を求めて、やっと縄をときにかかった。素早く膝の縄を外して、羞恥の肢態から解放した上、後手の縄を解いていった。

「いやッ、もうきらいッ」

彼女はいきなり叫ぶと、ピョンとソファから栗鼠のように跳躍して飛び降りると、豊かな胸を抱えて、さっと身をひるがえして、衣服の群れに突進した。あわててパンティを穿き、ブラジャーをつけている。

私はそれを止めるでもなく、虚脱したように彼女の様子をながめていた。じりじりとプレイに導入すればいいものを、いきなり極端なポーズをとらせたことは、確かに失敗であった。三好ルミならずとも、他のどんなモデルでも、こうした極端なポーズは忌避するにきまっている。激しい悔恨が襲うてきた。しかしもう遅かった。もっとうまく手なづけてゆけば自分から希望したルミだもの、どの様にでも協力してくれたに違いなかったのに。

編集長の苦りきった顔が浮かんで消えた。これで彼との約束もすっかりオジャンになつてしまったことだろう。そしてルミとも恐ら

くは、これが最初の最後になるかも知れないであろう。私自身、余りにもまずいプレイの導入に腹立たしくなっていた。若く美しいこの何も知らぬ娘を、徐々に手なづけ、飼育してゆくだけの根気のなくなった自分が、うとましくさえ思われてきた。先日、南紀の椿温泉で、フト知り合った三浦一美にも、私は同様の手段で強行して失敗しているのに、又しても二の舞を踏んでしまった様だ。フェミニストであり、紳士であることを自らも認めているのは、やはり仮面の私なのであろうか。私のSMの本心は、年と共に短慮になってゆくのを、私自身認めずにはいられなかった。既に三好留美は着々と服装をととのえていた。私は放心したようになって、ボンヤリと拱手してそれを眺めていたのだった。

彼女の「ひそかなる私の願い」は、余りにも無慚な行為となつて打ちくだかれてしまったのではなからうか。思いやりと雰囲気の間を掛け、徐々に彼女の心の窓を開いてゆくという配慮に、確かに私は欠けていた。

ラブズゴーン（夢去りぬ）そんな古い歌詩がフト私の心に浮んだ。私の夢は去った、と共に、ルミの夢は果敢なくも、現実の粗暴な一連の行為で破られたとみても間違いな



った。

彼女は、みなりをととのえて部屋の片隅でうなだれて佇立していた。

白けた空気の中で、私は気まずげに煙草に火をつけ、のろのろとカメラ道具や縄を、バッグにしまい始めた。

「そろそろ、引揚げましょうか」

長い沈黙を破って私はそれだけ言った。私の顔を窺うように、ルミはゆるゆる近附い

てくると、耐えがたい困惑の表情を泛べた。

「御免なさいね、全然協力しないで——。でも私も、こんなこと本当に始めてなものだからもうすっかりアガってしまつて……」

「そりゃ当然ですよ。ルミちゃんの承諾も求めないで、いきなりやり始めた私の方が悪いんだよ。君には、ちっとも悪いところなんかありません」

「でも、わざわざ名古屋まで呼びしておきながら、こんなことになって、本当に御免なさいね」

ルミは、しきりに気の毒がつている。私は意外な気がした。どうして詫びるのだろう。むしろ、怒っていい筈ではないか。

「怒っていないの？」

彼女は大きくコクリと、うなずいた。

「そう、それなら私もホッとしたよ。いきなり服を着だしたものだから、もうてっきり怒ったのかと思つたよ」

「その覚悟でいましたのに、いざとなると、どうしても羞かしさが先に立つて……。私ってダメなのですわね。でも、この次ならきつと」

ルミは、うつむいて微かに笑つたようだった。今更乍ら乙女心の微妙な複雑さを、私は

眼の辺りに、まざまざと見た。

挙げた顔に残る微笑のはじらいに、粹みちよ、そっくりの柔和な顔を私はそこに見た。

私の悲嘆とは凡そ違つた、思いもかけぬ方に事態は好転していたのだ。

結局プレイは一度の簡単な縛りで終つたがルミにそうした笑顔を泛べさせたのは、処女の本能が、無事に何事もなく終つたことに對して、安堵感をもたらせたのかも知れなかつた。と共に、一応はプレイするということを前提のもとに、こうしてホテルへ同行してきながら、僅か三十分そこそこで、取り乱してしまつた自分が、私に對して申訳ないという気の毒さとなつて現われたのかも知れない。

「あのう……」

「何？ どうしたの？」

「わたし、もう一度、脱いでも……」

「いいよ、いいよ。又という日もあるよ」

私はかなり力を籠めてルミの肩を抱いた。

× × ×

そつと手渡そうとした紙幣を、ルミはどうしても受取らなかつた。未熟なプレイの代償を受取るうとする貪慾さは、さらさらなかつたらしい。

彼女の案内で、車をモータープールへ預け

て、丸栄デパートから西へ百米ばかり歩いた

ところの独乙風のレストランへ私達は入つた。感じのいいレストランで、広告マッチにはハイデルベルグとあつた。ビーフステーキのコーナーを注文し、ドイツビールを傾け乍ら、私達は陳列の見本より遙かに大きい、良心的なビフテキを頬ばっていた。

心のわだかまりは確かに春の淡雪のように解けていた。

「今日のことにハントにお書きになりますか？」

「ああ、差支えなければね」

「でも、フォト全然でしょう」

「余りいいのはないと思うけど、顔が出ていても構わない」

「少しぐらい構いませんわ。私、何故もっと協力出来なかつたのでしょうか。自分で自分が情ないですわ」

「いきなり無理だつたのだよ。私も悪かつたし——」

「この次には、もっともっと協力しますわ。だから又会つて下さいね。でないとルミ悲しいわ」

「本当にいいの？」

「大阪の方へ出掛けても構いませんし、何でしたら、何処か温泉へでも連れて行って下さ



い

「それはいいけど、家の方、大丈夫？」

ルミは一寸淋しい顔付になった。

「母が亡くなって四年経つのですが、最近、父の処へちよくちよく母でない女の人に来て近頃では泊ってゆくのです。父も淋しいのでしょうが、何だかイヤなんです。だから私、一度何もかも忘れて、パアッと遊んでみたいのです。御迷惑でなかったら連れて行って下さい」

「ルミちゃんのお父さんと私は同年輩だけど私だって男だよ。危くなるかも知れないよ。それも承知？ 聖人君子では、いられないと

思うからね」

「私、二回お見合いしたのです。だけど若くて頼りない様で、断わったのです。いいおじさんになって欲しいですわ」

ルミは、おじさんというところに力を入れた。若い娘の火遊びに似た感情ではあろうが、ルミにSMを通じて、秘かな想いを抱いている私が、いいおじさんで

居られるかどうかは、自分で保証出来なかった。しかし私はウキウキとし、改めて、この澁刺とした娘と二人、温泉に行きたい欲望に燃え始めていた。

「又、乱暴するかも知れないよ」

「どうぞ、どうぞ。今度は喜んでラれますわ」

「えッ？」

ルミは声を秘めて囁やいた。

「縛ラれますわ、といいましたのよ」

「解剖するぞ」

「いいわ。お好きなように——」

彼女の笑顔は美しく若やいで光っていた。

テーブルの上に立てられた赤いローソクの光に笑顔は映じて、私はルミの眸にニンフの面影を見た。

「大分、時間経ちましたけど、今からお帰りにされるかしら？」

「夜を走るよ。暗いけれど未だ午後六時前だ。日の暮れが早いからね」

「本当はね、今日、私の一番親しいお友達の結婚式に招待されていましたの。大安吉日ですのよ、今日は——」

「ああ、それで二度許り、花嫁姿をのせた車を見掛けただね」

「でも、お友達の結婚式よりは有意義でしたわ。とても愉しい一日でしたもの」

この娘は、愉しいと言うのだろうか。あの時、あの裸、あのプレイの模様が、刹那まざまざと蘇って私の脳裡に浮んだ。

プレイの進行中は、それどころでなくてもそれが過去のものになると、すべてが懐しく悦ばしく愉しい行為として、残影を留めているに違いなかった。苦い体験というよりも、スリルと甘い羞恥いっぱいひとときとして、ルミの心を占めているのであろうか。

「次の時は本物だよ。今日のプレイなんか、実の処、プレイとも呼べやしない。真似事に

倒錯人間の世界

丸 鬼 土 佐 渡

過ぎなかったんだよ」

「あらッ、でも私にとっては、それこそ生れて始めての事ですのよ。まして知らぬ男の人の前で、ハダカになったなんてこと、それこそ一生一度の覚悟でしたのよ」

そういわれれば、そうに違いない、ルミにとっては、正にかけがえのない一大アヴァンチュールであったかも知れないのだ。

満腹でレストランを出て、ネオン輝やく宵の広小路を歩く。彼女が毛皮を飾るショールウインドウをうっとりとして見とれている間に、私は一個の婦人時計を手早く買った。淡いサラリーのオフィスガールに過ぎぬ三好留

美にとって、この瀟洒な腕時計は、アクセサリとして、きつと喜ばれるに違いない。

モータープールに戻ると、私は歩道に立ってタクシーに手を振った。私の腕にルミは自分の腕をしっかりと絡ませていた。絡んだ腕の掌に私は、リボンで飾った小箱を握らせた。

「何、これ？」

「帰ってから開いて御覧。プレゼントだよ」

「困りますわ、こんなもの貰っては——」

「いいんだよ、つまらぬものだから」

敢えて私は中味を言わなかった。タクシーが止る。

「又、お手紙差上げます。いいでしょう」

「ああ、じゃあ又」

「きつとね」

ほつれ毛をかき上げて、ルミは車に乗込んだ。運転手に一枚握らせて、おつりを渡すようにいいつけると、私は一歩、下った。

闇にタクシーは、赤いテールランプの曳光を残して、忽ち車の浪へ消えていった。

又、逢う日まで、さらばミルよ。

私は紛れもなく、三好留美との続カメラ・ハントを書く自信に溢れていた。その時、私ははしなくもルミを一人占めしたい独占慾にかられた。それ程に彼女は可愛い娘であつたから——。

「生贄」で物議をかもした梶山季之作の風変わりな推理小説に「遊戯の報酬」がある。これは41年3月の『小説現代』に載ったものだ。

○……○……○

……「耐性皮革研究所」とは、実は会員制の秘密クラブで、サド、マゾの集合場所だったのだ。今日は、ひどく肉感的な顔立ちな女性教授、社長など四人の男にいじめられる日である。そして今日は教授がフランスから持ち帰った皮革の拘束衣を彼女のためそうとしている。……

……むきだしになった太い梁からは、幾本ものマニラ・ロープやチェーンブロックの鉄鎖がたれさがっており、一方の壁には大きな鏡がはめこまれているかと思うと、床には釘を打ちつけた厚い板が投げ出されているという、プレイの部屋である。……

……夫人を囲んでプレイがはじまる。しなやかな皮鞭、あるいは先が三つにわかれた乗馬用の革鞭でピシリ、ピシリとうたれたり、六尺のまま夫人の顔の上に馬乗りになって、その夫人の鼻の穴へ二本の指を突込んだり夫人の乳房を左右の手でがっしりとばかりつかんで揺さぶる。……

……夫人は、洋服を剥がれ、あられもない姿となった。そして、乳房には黒い厚いゴム製のブラジャーがあてられ、脚には膝の上まである編上式のハイヒール・ブーツ、腕には真紅の長い皮手袋、そうしてゴム製の三角パンティという姿である。……夫人は室内を逃げまわり、四人の男達から鞭打たれ、突きとばされ、腋の下を擦られたり、小水を飲まされたりした挙句、今度は両手錠をはめられ、天井から吊り下げられたり、足を左右に拡げさせられ、壁に逆さ吊りにされたりする。

次は責の新兵器だ。教授が、真赤に染めら

れ、いろんな穴や、複雑なバンドが幾組もついたフランス製の皮製拘衣をとりだすと、芋虫のようにぐるぐる巻きにされ、額に三本のローソクを立てられている夫人は悲鳴に近い声を立てる。すると一人の男が、先刻、夫人の脱いだ汚れたパンティがあるのを手にとつて、夫人の口の中に押し込み、ストッキングで猿轡をかませる。

ロープを解かれた夫人は、首から下半身までをすっぽり包むようにデザインされたその拘衣を着せられる。

三十分後、夫人は両腕を背中に廻され、ハイヒールブーツに包まれた脚も、同じく背中で固く緊縛されて、床の上に転がった。それは、象亀が甲羅を下にして、転がされているように、憐れな醜い姿である。……

「ふっふっふ……。こいつにたっぷり水をかけて、三時間ばかり転がしておくんです。水を吸った皮が、肌のぬくもりで、次第に縮み上ってくる。女は次第に体を締めつけられて、最後には、お臍の先だけで立つような海老なりの恰好になるそうですよ……」

と教授がいった。……夫人の体は、荷物のように室内の一隅にあるタイル貼りの床の上に引きずられ、バケツで水を何杯もかぶせら

れた。

教授は反射式の赤外線ストープを、三方から夫人の背中にあてるように装置した。……

三時間後に……夫人は、両手両足を縛られて、まるで天井から吊り下げられているような、醜い恰好になっていた。

「なるほど、見事なもんだ……」

○……○……○

とまあ、奇ク顔負けの描写である。御一読をおすすめる。

古い話だが四十一年九月、川口小枝の「白昼の通り魔」を見た。この映画はその後何回も上映され、最近でもされているが紹介は奇ク誌上ではなかったように思う。川口小枝が佐藤慶に後手にしばられ、猿轡をされ二階へかつぎ上げられる途中、踊場にある大鏡に自分をうつされ、猿轡の自分の顔をながめるシーンがあった。併映でその時小森白の「毛」と「私は見られた」があった。「毛」の方は女高生二人が髪の毛を縛られて天井からぶら下げられたり、裸にされ鎖につながれて、干乾責にされたり、色々新しい責が見られた。「私は見られた」は香取環がベッドに四肢を縛られて責められたり、助手の女がハシゴを

横にした上に縛りつけられて、その両側に幾本ものローソクを立てられてローソク責めに合うシーンがあった。

テレビで最近、川口小枝等が出る「戦国無宿」では、既に二回目に女が縛られ、猿轡をされるシーンがあったが、今後が楽しみだ。毎週水曜日夜。

この間見た「信じられぬ世界」という映画の中で、天才写真家G・ストレッカーの場面が興味深かった。台八車の車輪様の上に白人モデルが車輪の軸を股にはさんだ恰好でうつむけにされ、そうしておいて、鎖で女を車輪に縛りつける場面、黒人女の太い乳房の上をロープで縛るシーン、等あった。他は残酷すぎて見られたものではない。我々の興味があるのは残酷でない残酷、珍奇なのであって、屠殺場等は、見るにたえない。こんな映画は二度と見る気はしない。天才写真家の部分を除いては。

TVの眠狂四郎も時々エロチック場面があって面白かった。七月三日の「悪魔祭」には堀井永子が、邪宗を改めさせようとする代官

に拷問される場面が出る。日本拷問刑罰史と同じような場面、彼女が全裸にされて鞭打たれるシーンは見ごたえがあった。

鬼六氏の「鞭と肌」もよかった。「惨忍」もよかった。これには、雪の積んでいる林の中で女が木に縛りつけられ、太ももを、先を尖らせた竹で突かれて拷問され、血がスーッと女の足を流れる場面、鉄のパイプの脚に両手両足を広げて縛られた女がさかさまにされるシーン、天然色で見事だった。

十月十六日のTV、ご存知からず堂「江戸の凶賊」で扇千景が乳房の上下をしばられているシーンがあった。さらわれて駕籠におしこまれるときには猿轡をされて「ムムム」と、うめき声が聞かれた。

奇クの白表紙時代に縛り映画専門に紹介する人がおられた（小生のミカン箱につまんでいる筈）が、その時の一覧表には扇千景は縛られたことがないことになっていた。しかし、これまで彼女がTVだけで最低三回縛られたのを見た。一回は前述のとおり、二回目は、「鳴門秘帖」のはじめの方で木の根に縛られているシーン、終りの時にも女スリであ

ったために縛られるシーンがあった。

三回は長谷川一夫の「半七捕物帖」が放送されはじめて間もない、御座敷で悪代官だったかに奥女中の彼女が高手小手で猿轡をされなぐさみものにされるのがあった。これは縛りシーンでも逸品だった。悪代官にそういう状態でだきすくめられ、もがくシーンがあった。

「性犯」が上映されたが、すばらしかった。新人の井上幸子は超グラマーで、乳房も非常に大きい。竹越ひろ子をいく分細目にし、その乳房を二まわり程太くしたような女だ。

人気のない谷川で真裸で泳いでいる幸子が二人の男におそわれ、逃げまわるが、結局捕えられ、顔を何度も川の中につけられ、大分水を飲まされる。そして最後は犯される。

そこを写真家に助けられ、彼の宿っているホテルにとめてもらう、この写真家は、女の極限の表情を撮影することをモットーにしている、幸子が彼の部屋をそっとのぞいてみると、モデルが裸で縛り上げられ、鞭うたれ、蛇を顔におしつけられていた。実はこの写真家は幸子が襲われるシーンをかくれて撮影し

ていたのだ。その夜見たシーンが幸子のマゾ性を呼び起こす。そして彼女がモデルとなつてあの谷川に行き、撮影される。全裸で乳房の上下を縛られ、後手で水につけられたり後手に縛ったロープを連結されて谷川にうつぶせにおかれたり、川辺の木に両手を高々とつるし上げられたり。また写真家の彼女を責める想像場面として胴かせをして両手両足を夫々固定された彼女がつき出している尻を鞭打つ場面がある、一打毎に尻を動かしてなまめかしい。針を植えた台の上に乳房強調型に縛られ、後手で、乳房が針の山におしつけられるような恰好にされる。実際に針が彼女の乳房をいじめている場面もある。

次は外人にブルーフィルムをとられる場面があり、逆エビにされたり、色々な縛りが展開され、後手に縛ったロープが天井につるされて彼女の大きな乳房が一層強調される場面がある。

この映画の最後は圧巻である。先の外人のボスが現われ、電気室のうなりの中で彼女はバナナを口にねじこまれ、服をはぎとられてパンティ一枚にされ、四肢を夫々パイプに固定されて大の字型にされ、その上猿轡まできっちりされて、電気アンマ器で体全体を責め

られる。特に彼女の大きな乳房が責められるときは、思わずぞくぞくとする程だった。体には汗が噴き出し、それを写真におさめる。

この場面は、単なるピンク映画として見た場合でも、結構通用するし、個々の縛り写真も夫々値打があると思う。井上幸子という新人は、このいじめられ方をどう受けとったのだろうか。

又同じ小川欽也監督の「泣きどころ」も泉ユリが色々な縛りの型を見せてくれた。小川監督はどうも縛りの専門家のようだ。あの縛りの型はいく度か見たし、「性犯」中で写真家が、自作のアルバムを見るところがあるが、それは数年前、さる雑誌に全部出ていたものと思えるのだが……。

七月十四日TV ザ・ガードマン怪奇シリーズ「すすり泣く美女」は美女の剝製作りに打ち込む狂気の彫刻家を描く。その彫刻家の家は鉄格子に囲まれ、真昼間からアトリエにはカーテンがひいてある。そして、家人が寝静まってから、どこからか女のすすり泣きが聞えてくる。三人の美女はいずれも剝製にされてからくりで開く地下室に飾られていたのだ。新聞の予告では四人とも剝製にされ

たシーンが出てくることになっていた(写真にはそのシーンがあった)が、刺激が強すぎるとして自粛したのか、その問題のシーンは画面に表われて来ず、明らかにすりかえの場面が出て結論が分らなくなってしまった。

剝製にされる第四人目の女には芸能界に復帰した真理明美がゲスト出演する。

マカロニ・ウエスタン、「五匹の用心棒」では半裸の女が手足をクイに大の字に縛られたが「続さすらいの一匹狼」では集団凌辱された女が炎熱の砂の上に全裸にされて手足を出来るだけひきのばされてクイに大の字にくくられているシーンがある。

六月十八日TV O〇二ニアンクルの女「ピラニアはそれを待っていたか」では、アンクルの女が捕えられてピラニアを沢山入れた水槽の上に彼女をさかさづりにつるし、そのロープが一定時間たつと火で焼き切れて彼女が水槽の中におち、ピラニアに食われるという死刑場面があった。彼女が後手にしばられてさかさ吊りにされ、長い髪がバサッと下にたれて、恐怖の目が魅力的だった。

春太郎はそんな事を云って、夏次郎と一緒に笑った。

京子は、悲しげに長い睫毛をそよがせて、顔をそむける。

「フフフ、何もそう照れなくなっているじゃない。これで、ようやく一つの芸を京子は覚えてたってわけね。さ、如何が、もう一杯」

春太郎は、再びコップになみなみとビールを注ぎ、京子の口の前へ持っていた。

京子は、ためらわず、再びコップに口を当て、ゴクゴクと一息に飲み乾す。酔って神経を麻痺させようと懸命になっているようであった。

その時、ノックの音。

春太郎が内鍵を外し、顔を出すと、津村義雄がニヤリと口元を歪めて立っている。

「どうかね」

春太郎は、ま、どうぞ、中へお入りになつて、と上機嫌で、義雄を中へ招き入れた。

「津村さん。とうとう京子、コツを呑みこんでくれたのよ。そら」

春太郎は、果物の切端を義雄に見せた。

「へへえ。なるほどねえ」

義雄は、春太郎が突き出したものと、柱に立縛りにされている京子とを見くらべるよう

にした。

京子は初々しい羞恥を頬に浮かべ、軽く瞑目して顔をそむけ、ムチムチと肉の乗った官能的な太腿をびったりと閉じ合わせている。

数本の麻縄をきびしく巻きつかせている京子の豊かな乳房に、キラキラと脂汗が光っているのは、シスターボーイ二人の何時間かにわたる屈辱の調教を、全身で必死に取組んだ証拠とも受取られる。

義雄は満足げにうなずいて、横に伏せている京子の頬を指で、くすぐるようにした。

「空手二段の鉄火姐さんも、とうとう予定のコースと取り組まされるに至ったか」

義雄は、声をあげて笑い、次に二人のシスターボーイの方へ顔を向けた。

「この鉄火娘が肉体的に成長してきた事は嬉しいが、根性の方はどうなんだ」

「そりゃもう、昨日、一昨日の京子とは、まるで人間が変わったようよ。それだけ、私達のリードがうまくいったという事ね。お客様方を喜ばせる可愛い女になります、と何度も誓いながら、嬉し涙を流して、私達の調教を受けたのよ」

と、春太郎が楽しそうに義雄に話すのだ。「そうか、そりゃよかった。今、弟の清次達

が来たんだが――」

義雄が、片頬を歪めるようにして、そういうと、今まで、精も根も尽き果てたように、がっくり首を落していた京子は、うろたえ気味に、さっと顔を上げる。

「どうしたい、京子。今更、うろたえる事はないだろう。弟達は、二年前の恨みを返すんだと大いに、いきまいてるよ」

義雄が、せせら笑うようにいうと、京子は再び眼を閉ざし、一切を観念した冷たい表情に戻った。

そんな京子に春太郎は、チラと視線を走らせ、義雄にいう。

「大丈夫よ、津村さん。京子はお仕置を受ける覚悟は充分出来ているわ。それで、弟さん達は今、何処に？」

「酒場で社長達に挨拶をしているよ。二年前京子に痛めつけられた事情を話して、社長の許可をとっているという所だ」

義雄は、口にした煙草に火をつけ、プーと京子の顔に煙を吐きかける。

「そっちの覚悟は出来ていると思うが、おとなしく清次達のお仕置を受けるんだぞ。奴等を手古ずらせたりすりゃ、圍マに似たあんなの可愛い妹まで、とばっちりを喰う事に

なる。念のためにいっておくよ」

京子は、そっと濡れた美しい瞳を上げ、義雄の顔を見た。

「わかっています。どんなお仕置でも、京子、喜んで受けますわ。そのかわり、お願いです。美津子を私の巻き添えにするような事はなさらないで——」

「わかってはいるさ。だが、弟達に心から二年前の事を謝まり、奴等を満足させなきゃ駄目だぜ。いいな」

京子は、悲しげに濡れた睫毛をしばたかせ承諾の意志を示した。そして

「——さ、清次さん達のいらっしゃる所へ連れて行って下さい」

と、顔を伏せながらも、はっきりと覚悟を示したのである。

「よし、いい度胸だ。さすがは、鉄火姐さん往生際がきれいだぜ」

と、義雄は喜色を顔に浮かべたが

「だが、最初から、そういう風に素っ裸のまま、清次達の前へ引っぱり出すのは興味が薄いな。風呂に入れ、化粧をしてやり、ちゃんと服を着せてやった方がいい」

清次達の前へ出て、自分の手で衣服を脱ぎ二年前暴力を振った詫びを入れさす、という

のが義雄の狙いであった。

「そうね。その方が、弟さん達も喜ぶと思うわ。それじゃ、お見合にでも行くような調子で、パリッとした身なりをさせてあげるわ、京子」

春太郎と夏次郎は、調教柱に縛りつけられている京子の縄を解きにかかる。

「いいわね、京子。しばらく自由にして、お風呂なんかへ入れてあげるけど、空手なんか使わないでよ。フフフ、もっとも、そういう悪い量見は今の京子にゃ爪の垢程もないとは思うけどね」

「変な気を起しそうになったら、可愛い妹の事を考えるのよ」

二人のシスターボーイは、そんな事をいいながら、京子の縄を解き放った。

全身が自由になると、京子は、フラフラとその場に腰を落とし、縄の跡のついた白い両腕を前に交錯させるようにして、二つの乳房を抱きしめる。全身が綿のように疲れ切っていた。

「さ、お風呂へ入って、きれいにお化粧しましょう」

春太郎と夏次郎は、京子のふくよかな肩へ左右から手をかけた。

——その頃——二階のホーム酒場では、義雄の弟の清次、その仲間の耕三、幹夫の三人が、田代のすすめるウイスキーを恐縮しペコペコ頭を下げて飲んでいた。

「社長、何か、俺達に出来る事があったら、何なりと遠慮なくおっしゃって下さい。殺しの経験だけはねえが、その他の事なら、大抵やって来たつもりです」

などと清次は、田代のグラスにウイスキーを注ぎながら愛想笑いしているのである。

津村清次。年は二十二、三、兄の義雄と似て青白んだ薄手の皮膚を持つ背の高い男で、どこことなくコセついてチンピラくさい。

「京子に対し、恨み骨髓に達しているというわけかね」

田代は、三人の不良を面白そうに見廻しながら、グラスを口へ運んだ。

「そりゃ、もう——とにかく、これを見て下さいよ、社長」

清次は、二の腕をまくり上げて、田代の眼に示した。

「あの女に空手でやられた痣が二年たった今でも、こうしてはっきり残っているんです。それだけじゃねえ。俺達三人は、あの女のために臭い飯まで食わされちまったんですぜ。」

これが恨まずにおられますか、社長」

清次は、いらいらした口調になって、そう
いったが、

「でもね、社長。京子がシスターボーイの女
になったっていうのは、そりゃ、本当なんで
すか」

「ああ、今の京子は君達が想像している女と
はまるで違うかも知れないな。彼女は今や、
このわしの奴隷みたいなもんだ。生かすも殺
すも、こちらの自由。ハハハ」

田代は、大口を開けて、愉快そうに笑い、
「ただし、奴隷といっても、さっきいったよ
うに大切な商品なんだからな。津村氏の顔を
立てて君達に一旦、京子の身柄を引渡すが、
あのきれいな体に傷をつけるような乱暴な真似
はしてもらいたくない。いいね」

そう田代がいった時、ドアが開いて、鬼源
が大きく伸びをするようにして入って来た。
「調教は、そのへんにして、そろそろ今夜の
段どりをつけようじゃないか、鬼源。賭場の
方も、間もなく一段落しそうだからな」

ふと、鬼源は田代の方を見て、「ああ、社
長ここにいらしゃったんですかい」と卑屈
に愛想笑いをする。

田代が、津村氏の弟だ、と清次達を紹介す

ると鬼源は、

「わかってますよ。二年前の仇を討つため、
京子と対決しにおいでになったんでしょ」

鬼源は、スタンドに坐って、煙草を口にし
た。

「ま、京子も、今となりや、楯つく事もなく
皆さんのお仕置を受けると思いますよ」

そして、鬼源は、懐から何枚かの半紙を取
り出して、田代の前に並べて見せた。

「どうです、社長。こいつは静子夫人のお習
字なんです。へへへ、あのおしとやかな令夫
人がとうとうあの見事なおヒップをくねらせ
て——」

鬼源は、半紙を手にして眺める田代の顔を
見ながら、クスクス笑い出した。

「成程、最初にしっちゃ仲間うまいもんじゃな
いか」

「あの令夫人は、書道の道も極めておいでで
すからね。教えこむのが楽ですよ」

清次達三人は半紙に書かれた文字と鬼源と
田代とのやりとりを興味深げに眺めている。

「よし、君達三人に、この屋敷内にいる美女
を拝ませてやろう。来給え」

田代は立ち上った。

「じゃ、まず元遠山財閥の令夫人、遠山静子

夫人だ。これは、山本富士子ばりの天下の美
女だぜ。じゃ、鬼源、案内してくれ」

田代は、妙にこの三人の不良が気に入った
らしく、酒気を帯びてはてった赤ら顔をつる
りとなぜ、彼等を美女調教の場へ案内しよう
とするのである。

時代劇ムード

調教室の隣にある広い日本間の襖が、そっ
と開き、鬼源に案内されて来た田代と清次達
三人が足音を忍ばせるようにして、中へ入っ
て来る。座敷の中央で行われている、いわゆ
る調教というものを始めて見た三人の不良は
思わず、へえ、とうめき、ニヤニヤとして顔
を見合wasのだった。

天井の梁から垂れ下がったゴム紐に、紫の
しごきで後手に縛られた裸身を支えられてい
る年増盛りの眼もさめるように美しい人妻風
の美女。しかも、彼女は、その美しい曲線を
持つ双臀をくねくねと動かしつつ、うしろに
しゃがんでいる女が持ち添えた半紙の上に、
筆の穂先を動かしているのだ。その筆が夫人
のたくましいばかりに量感のあるヒップにと
りつけられたものである事を知った田代は、

こらえ切れなくなつて大きく口を開け笑い出す。

半紙を持ち添えていた和服姿のギスギスした女——千代が、田代の方を見て、「あらまあ、何時の間に、社長」と金歯を見せて、ニ——と笑った。

「鬼源さんが大分お疲れになつたようなので、私が代つて、この奥様を指導しているんですよ。大分、お上手になつたわよ。そら」千代は、手に持った半紙を田代の眼の前に差し出した。

「俺も色々この種の見世物を見たが、おヒツプというのは始めてだね」

田代が舌を巻くと、鬼源は、したり顔になり、

「こいつは鬼源の秘伝なんですよ。へへへ、何しろ、この奥様は、わっしが昔、手がけたパン助達と違って、御聡明な上に、すべてが全く見事なもんだ。だから、こうも早くコツを呑みこんで下さるんですよ」

田代は、ウムウム、と楽しそうにうなずきながら、全身にべっとり脂汗を浮かべて、軽く眼を閉じ合わせている静子夫人の美しい横顔を見つめていたが、清次達を手招きして呼ぶと、まるで自分の宝でも自慢するような

調子で

「どうだ、凄い美人だろ。こんな見事な肉体を持った女を君達、今まで見た事あるかね。

ただ、それだけじゃないぞ。フランスの大学へ留学した事もあるインテリであり、大財閥の令夫人なんだ。それをわしは、このような芸当の出来る女に仕込み上げた」

そういつて、田代は鼻をふくらませる。

静子夫人は、ただ黙つたまま、夢見るように呆然と、長い美しい睫毛を閉じ合わせているだけであつた。一度、屈辱の中に死に、また屈辱の中から命をつくつて立ち直つたともいうような、凄惨なばかりの冷静さを静子夫人は全身に漲らせている。

「さ、社長の御覧になつてゐる所で、奥様、も一度、お習字をしてみましようね」

千代は、そういつて、夫人のうしろへ廻わり静かに筆を取り始める。

静子夫人は、真珠のような美しい歯並びを見せ、切なげに仰向いて、艶やかなうなじをくつきりと浮き立たせた。

硯の墨にたつぷり筆の穂先を浸した千代は再び、夫人にとりつけ始めた。

合図されると静子夫人は操り人形のように、定められた所作を演じなければならない

のだ。いや、いや、とすねるように甘い声を出し、柔かい白い大きな尻をモジモジ動かせる。

「そ、そんな乱暴ななさり方は嫌。痛いわ、千代子さん」

「ヤレヤレ、手数のかかる奥様だこと」

「だって、だって——お願い、も一度、なんとか優しく——ねえ、千代子さん」

静子夫人は、すすり泣くようにいい、全身をもじつかせるのだ。

「ハイハイ、長い間、面倒を見て頂いた奥様のためだもの、サービスさせて頂きますわ」

千代は、そんな事をいつて、チラと田代の方を見、片眼をつぶつて見せた。

そんな光景を清次達三人は、ごくりと唾を飲みこみ眼をギラギラさせて凝視している。

鬼源は、清次の何かに憑かれたような横顔を見て、ニヤリと笑った。

「こんなもの、まだ序の口という所ですぜ。一寸、調教室の方へ行ってみましようか」

鬼源は、田代の方にも、眼くばせして、先に歩き始めた。

廊下へ出て、調教室のドアを開けると、すぐ傍の壁に腕組みして、もたれていた銀子と朱美が、唇に指をあて、静かにしろ、と合図

する。

「今、小夜子がね、スターとして、開眼している所なの。気が散るといけないから、そっ
としておいてよ」

銀子が含み笑いしながらいうので、鬼源と田代は眼をパチパチさせ、足音を忍ばせて部屋の中へ入った。そのあとについて、そっと足を踏み入れた清次達は、調教室の中央あたりで行われている事を見た途端、再び、固唾を呑んだ。

桃色のしごきで後手に縛られている裸身を一本のロープにつながれて立っているのは、華奢な象牙色のきらめくように白い肌をした如何にも令嬢風といった感じの美女である。それを人相の悪いチンピラ風の男が二人、奇妙な方法で責めつづけているのだ。

「ね、鬼源さん。怒らないでやってよ。あの二人、小夜子に恋しているんだもの。いいでしょ。あの二人に小夜子の調教を任しても」「ま、いいだろ」

田代が、二人のチンピラの調教を受けている小夜子の方を眼を細めて眺めながら銀子にいった。そして、清次達の方を振り返り、「あのお嬢さんはね、宝石商の箱入娘なんだよ。それがどうだ、今じゃああいう事を実に

楽しそうにやっってるじゃないか。女って奴はね、生まれがどう、育ちがどうといったってこっちがその気になって仕込みあげりゃ、あいう事だって見事にやっけてのける事が出来るんだ。ハハハ、もっと傍へ寄って、よく見て来給え」

おぞましい調教を受けている小夜子も、調教をつづけている竹田と堀川も、夢中になっている故か、入口の近くでこっちを見ている田代や鬼源達に気がつかない。

小夜子は、美しい眉を切なげに寄せ、象牙色の艶やかなうなじをくつきり見せて顔を仰向かせながら、ハア、ハア、と苦しい吐息を吐きつづけているのだ。

竹田と堀川も、荒い息を吐きながら、額の汗を時々、手で拭きつつ、小夜子の陶器のよう
に白い、麗わしい太腿に左右から手をからませるよう
にして、それでも真剣にその調教に打ちこんでいるのである。

「どうだい、お嬢さん。楽しいだろう。こんな風にして卵と遊ぶ気分てえのは——」
竹田と堀川は、一区切つたたびにニヤツとして、小夜子の顔を見るのだ。

小夜子は光のなくなった空虚な眼をぼんやり前に向けながら、あえぐように唇を開く。

「——口、口惜しいわ。とうとう小夜子、こんな事を——」

そういうと、小夜子は、切なげに眼を閉ざし、うなだれた顔を横へそらすのだった。

強引に呑みこまれたものが、竹田の出す掌の上へぼとりと落ちた。

——やがて——鬼源と田代のあとにつき、調教室を出た清次達は、そのまま、地下室へ案内される。そこには、京子の妹の美津子がすでに川田や吉沢達の手で調教されている筈だと鬼源はいう。

地下の階段を降り始めると、うしろから、銀子と朱美が、追うように降りて来た。

「ね、鬼源さん。この方達、一体、誰なの。紹介してよ」

銀子と朱美は、清次達三人の顔をまじまじと見つめながら、鬼源にいった。

「津村さんの弟さんだ」
と鬼源に聞かされると、銀子は納得した顔つきになり、

「随分とハンサムな方ね。津村さんにそっくりだわ。私、銀子。そして、これは朱美。よろしくね」

と、銀子は、わざとらしく淫靡な微笑を口元に浮かべるのだった。

「清次と申します。一つ、よろしくお願い致します」

と、清次が丁寧に頭を下げたのが、ますます気に入って、銀子は

「貴方が恨みに思っている京子には、あたいたちも色々恨みがあるのよ。つまり、京子は貴方と私にとって共通の敵ってわけね。色々私達も手を貸すわ」

妙に色っぽい眼つきになって、銀子は清次にそんな事をいうのだった。

鬼源が、ニヤニヤして、

「銀子、清次さんに対して馬鹿に親切じゃないか。おめえ、一眼惚れしたんじゃないか」とからかうと、銀子は柄にもなく真っ赤になって、

「嫌な事いわないでよ」

と、鬼源を睨むのである。そして、すぐ、

清次に、

「京子の事だけだね。あの女を一番泣かせる方法を教えてあげましょうか。フフフ、何といても妹の美津子をいじめてやる事よ。あの女、すぐく妹思いなのよ。将を射んとすれば馬という事もあるじゃない」

などと銀子は、得意そうな顔つきになって云った。

そんな事をいいながら、地下室へ降りるとそこには、川田、吉沢、井上の三人が、立ったまま、何か小声で話し合っては、クスクス笑っている。

「あ、社長。いい所へ来ましたぜ。一寸、見て下せえ」

井上が、牢舎の方へ走って行くと、桂子を引き立てて来た。

はほう、と田代は溜息を洩らし、顎のあたりを手でさする。

桂子は前髪の若衆姿に扮装させられていたのである。若侍が旅装束に身をかためたといった具合に、二枚重ねた道中袴、脚絆草鞋まではかせたといった念の入ったもの。細紐で後手に縛り上げられている前髪姿の桂子は、何ら抵抗する事なく井上に縄尻を引かれて、田代の前に立つのであった。

「色々考えましてね。桂子を男装させて、今夜のショーに出演させる事にしましたよ。その方が、岩崎親分も喜ばれるだろうと思ひましてね」

「なるほど、そいつは名案だ。ところで、一体、どういう風なショーになるんだね」

「そいつは、今夜のお楽しみ、へへへ。今まで、吉沢兄貴や川田兄貴と打合わせし、稽古

も一通りすませた所なんですよ」

井上と吉沢、川田は何か三人だけの秘密を楽しんでいるかのよう眼で笑い合っている。

「男装の麗人か。ハハハ、今夜のショーが楽しみだな」

田代は、赤ら顔を皺だらけにくずして、若衆姿の桂子を見つめる。

「まあ、可愛いいわ。水もしたたる若衆姿とは、この事ね」

銀子と朱美は、桂子の傍へ寄り添い、溜息をつくようにして、しげしげと前髪姿の桂子の横顔を見つめるのだった。

「少し、化粧をしてやってくんな。お前達の仕事だ」

と、井上にいわれて、銀子と朱美は、あいよ、と桂子の縄尻をとり、

「さ、桂之進様、お化粧へお歩き遊ばせ」と笑いながら引き立てて行く。

そのあと、田代は、川田達に清次を紹介し美津子と文夫を連れて来るようにいった。

身も心も無残に打ち砕かれた美少年と美少女が、奥から縄尻を川田にとられ、よろけるようにして歩いて来る。

田代は清次の方を振り返っていった。「今の男装の麗人は、大財閥の令嬢。そして

このお坊っちゃん、さっきの宝石商の令嬢小夜子の弟君だよ。そして、彼に寄り添っている可愛いお嬢ちゃんが、君達には恨みのある京子の妹なんだ。といっても、その文夫君と美津子嬢は、今じゃ、れっきとした夫婦で、このショーの若い花形スターでもあるんだよ」

川田が縄尻を手から離すと、美少年と美少女は、すぐにその場へ身を小さくかがめ、かばい合うように体を寄せ合う。

「どうだい。実に仲のいい若夫婦だろ」

田代は、愉快そうに腹を揺すって笑った。

清次達は、文夫と美津子の美貌にまず眼を見はったが、何よりも彼等を驚かせたのは、眼の前で羞恥と恐怖に打震えて後手に緊縛された美しい二人が、その身を縛しめた縄以外是一片の布も許されていないことであつた。

「さすがに若い客の前に出ると二人とも羞しくて体が固くなってしまうようだな」

田代が口元を歪めて、鬼源にいった。

「今夜のショーは、この二人も時代劇調で出演するんですよ」

と、鬼源がいう。

文夫を今の桂子みたいに前髪のかつらをのせた小姓姿、美津子には、桃割れをつけさ

せ、時代劇調に仕立てての実演ですよ、と鬼源は得意そうに鼻をピクピク動かしながら田代に云うのであつた。

「昨日の実演とまるで同じじゃ芸がなさ過ぎるから、一つ趣向を変えてみようというわけです」

と、鬼源は云い、すでに、この二人のかぶるかつらの用意も出来ている、と吉沢がつけ加えて、田代に云う。

田代は満足げに幾度もうなずいた。

「そいつはいい。岩崎親分も、きっと喜ぶよ。——清次君、京子のお仕置なんか何時だつて出来る。まず、京子の妹のショーを見物してみちゃどうかね」

牢獄にて

それから、一時間ばかりの後——静子夫人と小夜子は、銀子と朱美に縄尻をとられ、地下牢につづく石の階段を歩まされていた。銀子と朱美のうしろに、千代が煙草をふかしながら、陰湿な笑いを口元に浮かべてついて来る。

桂子、文夫、美津子の三人は、今夜のショーの稽古に取りかかるため、鬼源や川田達に

竹藪の密室へ運ばれて行ったらしく、地下室の中はがらんとしていた。

静子夫人と小夜子は、共に並ぶようにして首を垂れ、地下の階段を素足で踏みしめ、おぼつかない足どりで降りて来たが、二人はもう全身綿のように疲れ切り、共に^{いた}労わりの言葉をかわし合う気力もないようであつた。

千代は、吸っていた煙草を石段の上へ捨てて踏み消すと、前に引き立てられて行く静子夫人と小夜子に対していう。

「お二人とも、今日は随分と練習をつんだわね。ショーが始まるまでにはまだ時間があるわ。ゆっくりと牢屋の中で休んで下さいね」

地下室の中の牢舎は横に三つに分かれていて。その一番最初の牢舎の前に来ると朱美は「ここが小夜子のお家だったわね」

鉄格子の錠前をガチャガチャ外した。

「フフフ、静子おねえ様と一緒にしてあげたけれど、おねえ様は、あと二、三時間でショーに出演しなきゃならないのよ。だから、今夜は一人でおとなしくおねえねするのよ」

銀子と朱美は、静子夫人の縄尻を千代にあずけて、小夜子の縛しめを解き始める。

両手がやっと自由になった小夜子は、腰をかがめ、胸を押さえ、ふと悲しげな表情で、

千代に縄尻を取られて立っている静子夫人の顔を見上げた。

静子夫人も、その翳の深い切長の瞳に、悲痛な色を沈ませて小夜子を見つめる。だが、深い疲労のため、口をきく気力もない夫人と小夜子であった。

「さ、入るのよ」

銀子に陶器のように白い艶やかな背中をどんと押されて、小夜子は両手で乳房を覆ったまま、フラフラと石牢の中へ押しこまれた。

すぐに朱美が、ガチャンと扉を閉め、錠をかける。

わずか三坪ばかりの石牢の中で、一糸まとわぬ美女が出来る限り身をかばい、小さくなっているのを、ズベ公二人は、鉄格子の間から楽しそうに眺めていたが、

「よく練習に励んだから、小夜子の今夜のショーの出演は、特別に勘弁してやれと鬼源さんのお許しが出たのよ。そのかわり、明日は朝八時からお稽古を始めるからね」

銀子はそういって、ジーパンのポケットからピンポン玉を取出すと、鉄格子の間から小夜子に向かって投げつけた。それは、立膝をして小さくなっている小夜子の尻のあたりに当り、石で出来た床の上を転がっていく。

「寝る前に、そいつを使って、よく鍛えておくのよ。これからは自分でも每晚勉強しなくちゃ駄目よ。いいわね」

そういって、二人のズベ公は、地下の隅に積み重ねてある毛布を一枚取ってくると、それも鉄格子の間から中へ押しこんで、

「勉強がすんだら、これにくるまってぐっすり寝るのよ。昔の彼氏の夢でも見ながらね」

キャッキャッと笑い合った銀子と朱美は、今度は静子夫人の縄尻を千代から受取った。

「さ、奥様は、夜中のショーが始まるまで約三時間、牢屋の中で休憩よ。お歩き遊ばせ」

静子夫人は、銀子に背を押され、気を取り直したように凍りついた美しい顔を上げ、石畳の上を歩き始める。

先程まで、墨をつけた筆で、徹底していじめ抜いた夫人の量感のある尻が、歩くにつれ、かすかに左右へ揺れ動くのを、千代は舌でも出したい気持で、面白そうに見つめるのだった。

「さて、ここよ」

突き当りの錆びついた鉄格子の前まで来ると、朱美は、腰をかがめ、扉の錠前をガチャガチャ外し、力を入れて引張った。錆びついた鉄の扉が金属音を軋ませて開くと、

「さ、入りな」

朱美と銀子は、低い牢の入口に夫人をかがませるようにして、中へ押しこみ、そのままだ。自分達も扉をくぐって、牢の中へ入るのだった。

「鬼源さんの命令で、彼がここへ来るまで奥さんの縄は解いてあげるわけにはいかないのよ。がまんしてね」

二人は、夫人の乳白色の肩や背を押すようにして、四坪ぐらいしかない牢屋の隅の、レングで出来た壁の所まで連れて行くと、石の床へ毛布を敷き、そこへ夫人を坐らせた。レングの壁には鉄の輪がついていて、それに夫人を縛っているしごきの縄尻をくくりつける。銀子は、ジーパンのポケットから、捕縄のようなものを出すと、夫人に云った。

「足をあぐらに組みな、奥さん」

静子夫人は、柔順に、ぴったりと正座していた肢をモソモソ動かし始める。

「フッフ、ほんとに聞きわけが良くなったわね、奥様」

千代も、牢内へ入って来て、肢をあぐらに組もうと努力している静子夫人を心地良さそうに見下している。

ようやく、夫人が肢をあぐらに組ませると

銀子は、夫人の両足首をびったりと重ね合わせ、キリキリと縄で縛り始めた。

「ホホホ、奥様、大分、お疲れになったようね。無理もないわ。随分とお習字のお稽古をなさったもの。如何が、お尻の痛みは直りまして——」

千代は、そんな事を楽しそうに云いながらあぐら縛りにされた夫人の前に身をかがめ、夫人の高貴な感のする鼻筋を指で突ついた。

今まで、醜悪無残なあいう芸当を行ったとはどうしても感じられない静子夫人の美しく整った端正な容貌と、ふと気だるそうに物悲しげな視線をぼんやり前に向けている静子夫人の濡れ輝くばかりの抒情的な瞳——そうしたものを千代は、不可思議な思いで、じっと見つめている。

少し、度を越したと千代自身、ふと、顔をそむけたくなるような残酷な責めを静子夫人の身に加えた事が幾度となくあったが、この宝石のように美しい静子夫人は、その輝きを失わないばかりか、思いなしに責めれば責める程、夫人の美しさは一層、光を増してくるような感じさえるのである。

艶やかな静子夫人の首筋から肩、紫のしごきで緊め上げられている二つの美しい豊満な

乳房、柔らかそうな腹部、あぐらに組まされている、ねっとり脂肪をのせた太腿、すべて、光沢のあるミルク色に艶々と包まれている幻想的なまでに美しい肉体——。

千代は、またもや、静子夫人の美しい肢態に圧倒され出し、そんな自分が苦々しくもなつて来て、思わず、発作的に夫人の頬をびしやりと平手打ちしてしまったのである。

静子夫人は、千代にぶたれても、さして、動揺はしなかった。研ぎすましたように冷静な表情に戻り、唇を噛みしめ、眼を閉ざしている。

千代は、静子夫人が現世の望みは一切捨てこの地獄の中に身も心も溶けこませようとする覚悟が出来て来た事を知っている。夫人が人間である事をも放棄し、牛馬よりも劣った生物として、運命に身を任せる心境に立ち至った事も知っていた。そんな静子夫人に対して、なおも、虐待してやれという念が起るのは、やはり、静子夫人の天性の美貌に対する嫉妬なのか——そう思うと、千代は、自分が小さく情なく思われ出し、逆に敗北感を味あうのだった。

いらいらして来た千代は、たまりかねたように、凍りついたように冷静な美しい横顔を

見せている夫人の頸に手をかけ、ぐいと顔を上へこじ上げる。

「泣いても笑っても、あんたは、今夜、捨太郎の女になるのよ。ホホホ、それもね、岩崎親分以下、やくざ達がわんさと見物している前だね」

「——覚悟は出来ていますと、私、千代さんに申上げましたわ」

静子夫人は、冷たく冴えた綺麗な瞳を千代に向けて口を開いた。

いらいらしている千代を、まるでたしなめているような落着いた冷静な口調の静子夫人である。

フン、と千代は、そっぽを向き、ムカムカする思いで立ち上った。

そんな千代のヒステリックな気持をなだめるように銀子が口元に微笑を浮かべて、千代の肩に手をかける。

「ここでブツブツいってたって、仕様がないじゃありませんか。この奥様が捨太郎と実演する時、大いに溜飲を下げる事にしましょうよ。ね、千代夫人」

「そうね。あんたのいう通りだわ」

千代は、軽く瞑目して口を閉ざしている。

あぐら縛りにされた美女の方へちらと白い眼

を向け、銀子達と一緒に牢舎から出た。

ガタンと鉄の扉をしめ、鍵をかけた銀子は鉄格子の間から、夫人をのぞいて、

「それじゃ奥様、今夜のショーで、またお逢いしましょうね。フフフ」

そういつて、千代の肩に手をかけるようにし、鼻唄をうたいながら地下室を出て行くのだった。

千代や銀子の姿が眼前から消えると、静子夫人は、急に疲れを覚えたのか、冷たい壁に背をもたれさすようにし、吸いこまれるように深い眠りの中へ入って行った。

——どれ位、時間が流れたのか、ふと、夫人が眼を開くと、誰かがじっと鉄格子の間から、こちらを見ている。はっとして、眼をこらすと、それは悦子であった。

静子夫人は、のぞいているのが、最近、何かにつけて自分を庇うような態度に出てくれる悦子一人だけであるのを知り、ほっとしたのか、淋しげな微笑を口に浮かべて、悦子の方へ視線を向けた。

悦子も、微笑する。

「私ね、奥様。さっきからここにいて、奥様の美しい寝顔に見とれていたのよ」

静子夫人は、頬を染め、

「悦子さん。私、どれ位眠りましたかしら」

「そうね。二時間ぐらい——」

そう、と夫人は、気品のある優美な頬をふと曇らせる。

「それじゃ、私、もう行かなきゃならないんですよ」

静子夫人は、悦子が自分をショーの舞台に連れに来たのを知って、物悲しげな翳の深い瞳を悦子に向けた。

悦子は、悲しげな顔をして、うなづく。

「まだ少しは時間があるけど、間もなく鬼源さん達が奥様を迎えに、ここへ来るわ」

そういつて、悦子は、手に持っていた化粧箱を持ち上げ、夫人に見せた。

「私、社長と鬼源さんにいわれて、奥様にお化粧するため、ここへ来たのよ」

静子夫人は、柔かな睫毛を悲しげにしばたいて、うなずいた。そして、微笑ともいえない微笑を頬に浮かべて、すでに観念している事を示した。

「じゃ、悦子さんは、死刑囚に対する宣教師さんみたいな役なのね」

と、軽く冗談が出たのも、夫人の観念を示すものである。悦子は、それで安心したように扉の錠を外し、中へ入って来る。

「ね、奥様。私、何だか、奥様が可哀そうで仕方がないようになったわ。だって、考えりゃ、奥様は何の罪もないんですからね」

「悦子さん。もうそんな事はおっしゃらないで。静子は、貴女達の奴隷なんですわ」

静子夫人は、しつとりと翳のある美貌を悲しげに曇らせて、ふと、顔をそむける。

「今、縄を解いてあげるわ。銀子さんがブツブツいうかも知れないけど、かまうもんか」「いけないわ。そんな事すれば、貴女が皆んなにいじめられるかも知れません。このままでかまいませんわ。さ、お化粧して下さい」

静子夫人は、そういつて、静かに眼を閉じ合す。

悦子は、腰に巻いていたネッカチーフを取ると、そっと、あぐらに組まされている夫人の膝に開けて掛けてやった。

「すみません、悦子さん」

夫人は眼を開き、濡れてうるんだような瞳を悦子に向けた。

悦子は、夫人の横へ身をかがめ、化粧箱を開き始める。静子夫人は、甘く匂うような微笑を口元に浮かべ、

「うんときれいにしてね、悦子さん」
柔かいくすぐるような笑い声を、わざと出

した。甘えかかるように顔を悦子に預けた静子夫人の、そうした無理に平静を装う姿は、悦子の胸をしめつけたようだ。

「辛いでしょうね、奥様」

「辛い？」

静子夫人は、片頬に微妙な微笑を浮かべて、

「辛い、とか、苦しいとかいうより、私も」

う自分が自分であるのか、ないのか、わから

なくなってしまうわ。ここまで生きてきたのが不思議なくらい」

静子夫人は、うっとりとして目を閉ざして、悦子の手で、妖しいばかりの美しさに化粧されていく。

「ね、奥様。私、奥様にお願ひがあるのよ」

悦子は、静子夫人の眼に薄くアイシャドウをひきながらいった。

「何ですの、悦子さん」

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部二〇〇〇円
略号 八美7V

全部最近撮影の力作！

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版（思わず息をのむ凄じポーズばかり満載）

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。〈内容〉全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

「私ね、こんな事をいうと笑われるかも知れないけれど、今、色々な事を勉強したくて仕様がないうのよ。奥様の持っている教養の何十分の一、いえ、何百分の一でも、自分のものにしたいのよ」

悦子は、自分が女子高校まで行き、家庭の貧困が原因で中退し、それからぐれ出して不良仲間に加わったいきさつを夫人に話した。

「何とかして、私、外国へ行きたかったのよそのため、一時、フランス語を勉強しようとして塾へ通った事もあったわ」

悦子の手で、輝くように美しく化粧された静子夫人は、不思議そうに悦子の顔を見た。

「ね、奥様。お願い、私にフランス語を教えてください」

悦子は、急に激しい口調で、いどみかかるように夫人に云ったのである。

静子夫人は、啞然とし、まじまじと悦子の顔を見た。

「そ、そんな事おっしゃっても、悦子さん、無理だわ。静子は、こうして捕われの身、それに今夜は、いよいよ最後の破壊へ追いこまれる身となったのよ。そんな静子に、一体、何が出来るんです」

そういった静子夫人は、何か胸に悲しいも

のが急にこみ上って来て、顔を横へ伏せるのだった。

悦子は、急にがっくりと肩の力を落とす。「そうね。何の希望もなくなった奥様に、こんな事をお願いした私が馬鹿だったわ。ごめんなさいね。かえって、奥様を悲しませたりしてしまつて——」

悦子は悄然として、夫人の髪の毛に櫛を入れ始める。

「悦子さん」

静子夫人は、柔らく澄んだ瞳をふと悦子に向けた。

「貴女、それ程までに勉強がなさりたいの」

「ええ、私、語学だけじゃなく、歴史や文学、そうしたものをうんと勉強したいのよ。もうこういう下らない生活が私、たまらなく嫌になつてきたの」

「わ、わかったわ」

静子夫人は、表情を柔かくほころばせた。

「静子はもう何の希望もなく、現在を転落していく運命の女。でも、貴女にはまだ希望というものがあるわ。私が貴女の何かお役に立つ事が出来るなら、何なりと利用して下さいまし」

「ほんと、奥様」

悦子は嬉々として、夫人の肩に額をすりつけ始めた。

「じゃ、これから奥様は、私の語学の先生になつて下さるわけね」

「先生だなんて、そんな——」

これから毎日、鬼源達の調教が終つたそのあと、暗い牢舎の中などで、悦子相手にフランス語や英語を教える——そんな自分が、たまらなくみじめに思われ出したが、静子夫人は悦子のひたむきな氣持に押されてしまったのだ。また、考えれば、それが地獄の底にあえぎ続ける自分の精神的な救いとなるかも知れない。

そう決心した静子夫人は、鬼源達がここへ現れるまでのわずかな時間を利用し、悦子のこれからの勉強方針について、悦子と語り合つたのである。

「私、早速、明日、街へ出て、フランス語のリーダーを買つてくるわ」

そういう悦子に対し、静子夫人は、どういふ種のことを本屋で求めばいいかを悦子に指示した。

そして、夫人は、しきりにフランス語を勉強したがる悦子に対し、初歩の教養として、フランスの文明開発の事を簡単に語り聞かせ

たりするのだった。

「嫌だわ。こんな羞しい姿を貴女に向けながら、文明開発のお話なんかしちゃつて——」

静子夫人は、長い睫毛をそよがせて羞かしそうに微笑した。

——ローマ帝国以来、フランスには、イタリア、スペインの文化、その他、国つづきの諸国文明が集まり、ループルが出来、それを基礎として今日のフランス文明が出来たこと——悦子の希望にに応じて、そういう話を語り始めた夫人は、その瞬間、数々の地獄の苦痛を味わわれている現実をふと忘れた氣持になる事が出来た。同時に、夫人の脳裡には、遠山隆義と結婚する前後何回かにわたつて留学したり遊学したりしたヨーロッパの風物が浮かび上つて来たのである。

パリーから、ベルサイユへ行く途中のバリー郊外の美しさ、物さびた冬の自然や風物が何か胸に沁み入るよう走馬燈の如く、夫人の記憶の中をかけめぐり出したのである。

ああ、あの時の自分は何という幸せだったのだろう——懐かしい想い出に夫人の眼頭が熱くなり出す。

その時、突然、鬼源のガラガラ声が響いて来た。

「よ、何を二人でしみじみ話し合ってやがるんだ」

はっとして、夫人と悦子が同時に顔を上げると、何時の間にか鬼源と千代が鉄格子の間からこっちをのぞきニヤニヤと笑っている。「ベルサイユがどうか、モンパルナスがどうか、そりや一体何の話だね。こっちは、これから奥様と捨太郎がおっぱじめるシックスラインについて打合わせに来たんだがね」鬼源は、そういつて笑い、千代と一緒に牢舎の中へ入って来た。

悦子の手で眼もさめるように美しく化粧された静子夫人を見た千代は、

「まあ、きれい。今夜のお客様の大喝采を受ける事と思うわ」

千代と鬼源はあぐら縛りにされた静子夫人の両側にニタニタ笑いながら腰をかがめる。

夫人の羞恥をすこしでもやわらげるために、悦子が拡げてかけておいた夫人の膝の上のネックチーフを、千代はひったくるようにさっと取り上げ、少し離れた所に突っ立っている悦子に険しい眼を向けるのだった。

「私の許可なしに、この女に情をかけるような事はしないで頂戴」

悦子は、千代に睨まれるとおどおどして、

「情をかけてもらったのは、私の方なのよ」悦子は、眼をキヨロキヨロ動かしながら、

静子夫人にフランス語などを今後、調教の間を見て教わる事になった、といったので、鬼源と千代は、顔を見合わせ、声を立てて笑い出した。

「へえ、おめえが静子夫人にフランス語をねえ。そりや傑作だ」

鬼源は、ゲラゲラ笑いながら、白蛾のように白い優雅な横顔を見せ、固く口をつぐんで眼を閉じ合わせている静子夫人を見つめる。

「よ、奥さん、悦子にフランス語を教えるのも結構だが、御自分の勉強の方をおろそかにしてもらっちゃ困るぜ」

鬼源は片手に抱えていた風呂敷包みの中から、ゴムで作られた太い棒状のものを出した。

「さっき、社長達の意見が出てよ。今夜のおめえと捨太郎のショーは、まず最初、六九番をさせろ、という事になったんだ。ええ、知ってるだろう。六九番ってのは？」

鬼源は、掌と掌を反対に曲げて、ぴったりと合わし、夫人の眼に見せる。

「こういう夫婦遊びは、ヨーロッパの方が本場というじゃねえか。となりや、フランスで

長い間暮した奥さんにゃ打ってつけの実演という事になる」

静子夫人は、唇を噛みしめ、自分と必死に戦っている。

千代が横から口を出した。

「ホホホ、ですからね、奥様。お客様の前で実演を始めるまで、まだ三四十分、時間がありますので、それまでの間、一寸、その優雅な奥様のお口の練習をさせておきたい。そう鬼源さんはおっしゃってますのよ」

「これは捨太郎の型に合わせて、俺が以前、作っておいたものなんだがね。どうでい、一寸、立派なもんだと思わねえか。おめえのよいうな令夫人のおしとやかさに釣合うかどうか一寸、心配なんだよ」

鬼源は、ニヤリとして静子夫人の高貴な線を持つ鼻先へ押しつける。

押し黙ったまま、冷静さを装っていた静子夫人であったが、首筋から耳のあたりまでが熱く朱に染まり出した。

「さ、少し、コーチしてやろう。舞台上で手古ずっちゃ可哀そうだからな」

夫人の右側にしゃがんでいた鬼源は、ぴたりと夫人の傍らに身体を寄せつけ、左手で夫人のミルク色の肩を抱き、右手に握りしめ

た自慢の作品を夫人の目の前へ持っていく。

「おい、どうしたい。そんなに照れる事はねえだろう。美津子だって、文夫と上手にやれるようになってるんだぜ。さ、アーンと大きく口を開けてみな」

「ね、奥様、しっかりお稽古なさってよ。そんなにもう時間はないのよ。会場の方は、もうお客で一杯。奥様の御出場を皆んな首を長くして待っているんですからね」

千代はクスクス笑いながら、夫人の右側にぴったりと体を押しつけるようにして、坐りこみ、紫のしごきで緊め上げられている夫人の豊かな乳房をつついたり、乳首を指ではじいたりするのである。

フランス式

しばらくは深く首を垂れ、シクシクとすすり泣きながら、鬼源と千代を手古ずらせていた静子夫人であったが、遂に、心のふんぎりをつけたよう夫人は、すくくと顔を上げた。

「よ、俺は、おめえが上手に舞台を務められるようこうして骨折っているんだぜ。それにこいつはおめえの亭主も一番喜ぶんだ」

と、鬼源は、夫人の決心を見てとって、追

討ちをかけるようにいう。

「夫婦じゃありませんか。何も羞かしい事じやありませんわ、奥様。旦那様に対し、心からの愛情を示して頂きたいと思うわ」

などと、千代も、静子夫人の臆たけたといった感じのする美しい象牙色の横顔を見つめながら云った。絶世の美女だといわれ一世を風靡した静子夫人が満座の中で醜惡な白痴男と組み犬のように……やぶり合う。それを想像すると千代は、たまらないおかしさと倒錯した快感がこみ上ってきて、夫人の冷たく冴えた美しい横顔に向かって、うんと吠面をかぐがいのさ、と心の中で吐き捨てるようにいう。

静子夫人は、柔かい睫毛で煙るうるんだ黒眼をそっと鬼源に向ける。

「わかりました。お稽古致しますわ」

消え入るようにか細い声を夫人が出すと、千代はホクホクした思いで、うなずき、壁にもたれて、ふくれ面をしている悦子の方へ顔を向けた。

「悦子さん。そんな所に突っ立っていないで貴女も手伝ってよ。もう少し、奥様に濃い口紅をつけてあげて——。何しろ、今夜は奥様のこの唇が主役みたいなものですからね」

悦子が口をとがらしているのを見た鬼源は

「よ、悦子、何をそんなにふてくされていやるんだ。おめえ、これからはこの奥さんにフランス語を教えて頂けるんだろう。なら、先生がショーに出演なさる時ぐらい、色々お手伝いしたら、どうなんだ」

と大声をはり上げる。

悦子は、不服そうな顔つきでやって来ると化粧箱からルージュを取り出し、夫人の前に腰をかがめた。

「奥様、悪く思わないでね」

悦子は、そういつて苦しそうな顔をする。

静子夫人は、悲しみの翳を含んだ眼を開き悦子に軽く微笑して見せた。

「いいのよ、悦子さん。これが私の運命なんですもの——」

そして、夫人は軽く眼を閉ざし、唇をそっと悦子の方へ押し出すようにした。

悦子は、夫人の顎にそっと手をかけ、ピンクの口紅を、柔かい夫人の形よい唇へ丹念にひき始める。

仕事をすまして、悦子が身を引くと、鬼源は、早速、調教にとりかかった。

夫人の柔かい紅唇にゴムを押しつけた鬼源は、

「いいか、最初は、何度も何度も接吻しまくるんだ」

鬼源の微に入り、細にわたるコーチが始まる。それを忠実に、そして、必死なうて繰り返す静子夫人。口元を手で覆い、クスクス笑いつづける千代。

「いいな。この実演は、捨太郎の奴が一番、おめえの口——やがるまで続くんだからな。そうならねえ限り、一時間でも二時間でも続けなきゃならないんだぜ。だから出来るだけ早く、捨太郎の奴を追い込まなきゃいけない」

そんな事を鬼源はいったが、静子夫人は、もう自分という人間を捨て切ったよう狼狽の色もとどろしも示さず、鬼源に教示された事を実行している。

鬼源は、笠にかかったような調子で、静子夫人に次から次と命令した。

「へへへ、仲々うまいじゃないか。だが、黙りこくってちゃあ、芸がなさ過ぎるぜ。こんな調子で、甘くささやいてみな」

観念したとはいえ、あくことのないいたぶりに夫人の閉じ合わせた眼尻から一筋二筋、熱い涙が頬を伝わって流れ落ちる。

「黙っていいっちゃ駄目。さ、今、鬼源さんが教

えて下さったような事を旦那に甘く云って下さいましな、奥様」

と、千代も鬼源に調子を合わせて、夫人に浴びせかけた。

静子夫人は思いきったかのような眼を閉ざしながら上の空のようなハスキイな声を出すのである。

「ああ、静子、こんなに、こんなに、どうしようもない位、貴方を愛してしまったわ」

そして、静子夫人は、鬼源に命じられるまま柔らかい花びらのような紅唇を震わせて、強いられたことを繰り返さねばならなかった。

「そうそう。仲々うめえぞ」

鬼源も異常なばかりの熱の入れようでギラギラ眼が光り出す。

鬼源の熱の入ったコーチを受ける静子夫人は、何分かの後には、傍目からは全く没我の境地へ落ち込んでしまったようにも見えた。

「ホホホ、お上手になられたわ、奥様。こういうの、昔、ヨーロッパで御勉強なさってきたんじやない。フランス式というのじやなくて。え、奥様」

千代は、痛快でならないようである。

そこへ、コツコツと地下の石段を降りる音

がして、川田が入って来た。

鉄格子の中をのぞいた川田は、

「支度はすっかり出来て、客人達がお待ち兼ねだぜ。そろそろスターに登場して頂きたいんですがね」

千代が川田の方を見て、いたずらっぽく笑う。

「今、静子奥様、フランス式のお稽古の最中なのよ。調教する方もされる方も今、脂が乗っているところなの。もう少し、待ってね」

「フランス式？」
川田は、不思議そうな顔つきになって、鬼源と静子夫人の方をも一度見たが、ははあ、成程、と口元を歪めた。

静子夫人もそうだが、夫人をコーチしている鬼源も夢中になっているため、川田が静子夫人を迎えに来た事にまだ気づかない。ああしろとか、こうするんだとか、夫人に口やかましく指示をくり返しているのだが、その度に夫人は、優雅で柔かい唇を発音練習でもしているように無我夢中で反応を示しているのだ。

べっとりと美しい額に脂汗をにじませ、そのややうすら冷たい端正な容貌をさも悲しげに歪めて、口をモグモグ動かしている静子夫

人を隅の方でチラチラ横眼で見つめていた悦子は、たまらなくなつたよう鬼源の背後へツカツカと歩み寄つて云つた。

「鬼源さん、もういい加減にしたらどう。川田さんが奥様を迎えに来てるじゃないの」

鬼源のあまりに執拗な調教ぶりに、たまらない嫌悪感を抱いた悦子は、吐き出すように鬼源に云つた。

ええ？ と振返つた鬼源は、川田が何時の間にか牢舎の中へ入つて来て、ニヤニヤして見物しているのに気づき、

「もう、そんな時間になつたのかい」

と、照れ臭そうに笑い、ようやく、夫人に止めていいぜ、と合図をする。

静子夫人は、ハアと深く熱い息を吐いて汗にまみれた美しい顔を横に伏せた。

鬼源の手にあるゴムは、夫人の唾液で光り、湯気まで立っているように見えた。

鬼源は、悦子に、「奥さんの汗を拭いてやるな」と云い、川田の方を見て、

「時間のたつのは早いものだね。これから少し俺で調教してやろうと思つたんだがー」

「ハハハ、調教師の役得というやつだな。そんな事なら、俺のものを立用立てて下すつても結構だぜ」

鬼源と川田は、顔を見合わせ笑い合つた。

それから、鬼源は、いよいよこれから大勢の客の前へ引出され、捨太郎とコンビを組んで醜悪無残な芸を披露する事になつた静子夫人に対し、なおも幾つかのその芸に対する細かい指示を与えてから、夫人の両手を縛つたしごき、両足を縛つた細縄を解いてやる。

「さ、立ちな。お客人がお待ち兼ねだ」

鬼源は夫人の肩に手をかけて引起そうとしたが、長時間、あぐら縛りにされていた夫人はまともに立つ事が出来ない。やっとの思いで立上つたものの、フラフラと足元が乱れて夫人は、その場へ両手をついてしまった。

「仕様がねえな。おい、しっかりしろよ」

石畳に手をついてゐる夫人を引起そうとする鬼源と川田の間へ悦子が割つて入る。

「少し、休ませてあげてよ。長い間、あぐら縛りにされていたんだもの。手も足も痺れ切っているわ。これじゃ満足なことは出来ないわよ」

「それもそうだな。よし、十分間、休憩させてやるぜ」

と、鬼源がうなづく。

「——悦子さん、す、すみません」

静子夫人は、自由になつた両手で乳房を隠

し、その場へ小さく立膝するように、かがみこみながら、翳の深い瞳に感謝の色をにじませ、悦子をそつと見上げた。

「どこか痛い所があるんじゃない？」

「——いいえ、少し休ませて頂ければ直りますわ。有難う、悦子さん」

人の心まで濡らさせるような夫人の潤んだ美しい瞳を見た悦子は、胸が急に熱くなり出して、夫人の背後へ坐ると、そのミルク色のスベスベした背中をさすり始めた。

「——ああ、悦子さん。いけないわ。奴隷の私に、そんな事までなさっては」

「いいのよ。まあ、ここ痛くない。紐のあとがくつきりついているわ」

静子夫人をあれこれ介抱し始めた悦子を川田が小首をかしげて見つめているので、千代が口を寄せて小声で云つた。

「悦子がね、これから静子夫人を先生としてフランス語の勉強を始めるんですって。だから、ああしてゴマをすっているのよ」

「成程、そういうわけか。それに、静子夫人を先生にするとはいい思いつきだぜ。何しろ、奥さんの語学は本場で鍛えた本物なんだからな。いい先生を見つけたものだ」

そういった川田は、ふと、腕時計に眼をや

って、

「いけねえ。大分、時間をオーバーしたじやねえか」

と、あわて出す。

「よし、それだけ休めば充分だ。さ立ちな」

鬼源が紫のしごきを取り上げて、夫人の肩を突く。

静子夫人は、それでも、背をさすり、縄目のあとを水で冷やしてくれる悦子に、

「——すみません、悦子さん。貴女の御親切は忘れないわ」

と、声をかけ、そっと立ち上った。

そして、鬼源の方に潤んだ瞳を向けて、

「——両手は、やはり、お縛りになるのですか」

「当り前さ。さ、時間がないんだ。早く両手をうしろへ廻わさないか」

両手の自由が許されれば、この道のスター

〔伝言板〕○分譲品目録は作成が大変遅れておりますが予約お申し込み下さった方には出来次第間違いなく発送申し上げます。○分譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本誌上に広告しておりました代理分譲品は、ここ二年乃至三年ぐらい以前のものは在庫

として、かなりの肉体変化を持った静子夫人

であるのに、やはり本能的に片手で両乳房、片手で前を覆うという初々しい羞恥だけは、

その心から消えないようである。それは鬼源や川田にとっては嬉しくもあり、時には腹立しい事もある。

「早くしろ、社長がいらいらしてるかも知れねえぜ」

川田もどなり、両腕をやっとうしろへ廻わし手首を背中であさった夫人を、鬼源と一緒にキリキリしごきで縛り始めた。

「さ、悦子、先生を引立てな」

川田がニヤリとして、しごきの縄尻を悦子の手に握らせた。

静子夫人は、涙も未練もきっぱり断ち切ったよう優雅な美しい顔をすくくと上に上げて歩き出したのである。

牢舎を出、冷たい石の階段を品位を帯びた

しておりますから未入手の方はお申し込み下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にてお願い致します。○切手代用にての御送金も結構ですが高額切手や紙に貼りつけたものはお断りいたします。○本誌旧号の在庫は漸次減少しておりますから、御希望の方はお早目にお願致します。第二希望品がございましたら、お書き添え下されば幸いです。

夫人の素足が踏んで行く。

夫人は、断頭台に登る死刑囚のように悟りきった心境にあるようで、途中でためらった、悲しんだりして歩調を止めるような事もなかった。夫人を引き立ていく悦子の方が、むしろ、とまどったり、ためらったりする感がある。

今夜のショーは、二つに分ける事になったと、夫人を、硬化した表情でのおおずと引き立ている悦子が、廊下から庭の方へ静かに足を運ばせていく夫人にいった。

「賭場のお客だけじゃなく、社長の懇意にしているバイヤーや高利貸達がつめかけて来たので、離れだけじゃ収容出来なくなったのです。だから奥様は、三階の大広間へ——」

悦子は、恐縮しきったように、チラチラ上眼づかいに夫人の横顔を見ながら云い、しごきの縄尻をひいて夫人の足を止めた。

庭の竹籬の中にある密室は、これから、桂子、それから、文夫と美津子のショーが行われる事になっているという。

静子夫人は、そっと端正な顔を上げ、悲しそうな影のさす潤んだ瞳を庭の密室の方へ漂わせた。あそこでは間もなく、桂子達のショーがぎっしりとつめかけた男達の前で展開し

ようとしている。それを思うと、夫人は自分の置かれた立場も忘れて、優雅な白い頬をひきつらせ、小さくすすり泣くのである。

「おい、何処へ行くんだ。奥さんの舞台は三階の大広間だぜ」

と、少し離れたところから、何か賑やかに談笑し合って、夫人と悦子のあとについて来た川田達が声をかける。

「さ、急いで、急いで——」

夫人を取り巻くようにした川田、鬼源、千代の三人は、柔軟な乳白色の夫人の肩や背に手をかけて、更に廊下を歩ませ、階段を登らせる。

夢も望みも投げ捨て、この地獄の底で狂い果てようという決心と観念を、その美しい凍りついたような横顔の中に透き通らせて、悪魔の待ち受けている広間へ一步一步、足を運ぶ静子夫人。

川田は、そんな荘厳な感じさえする静子夫人の、研ぎすまされた冷たい表情と、静かに歩み続ける艶めかしく優美な雪白の下肢、そして官能美を盛り上げて、むっちり肉の乗った艶やかな太腿などにニヤけた眼を注いでいたが、

「全く元通り、きれいになったじゃねえか。」

え、奥さん、嬉しいだろう」

と云い、その凍りついたような冷淡な夫人の表情を何とかくずそうとして、夫人の頬を指でついたが、夫人は、思いつめたように潤んだ瞳をじっと前方に向けたまま何の動揺も示さなかった。

千代が、夫人のたくましいばかりに盛り上った豊かな双臀を急にピシャリと平手打ちした。夫人の悟り切ったようなすまし顔が気に入らないのである。

「何よ、そのすまし顔。これからあの薄馬鹿と、犬か猫よりも劣る浅ましい事をさせられるというのに——」

千代は、夫人が周章狼狽すればするで腹が立ち、観念しきればしきったで腹が立つものらしい。

悦子が、千代をさえぎって云った。

「ね、千代奥様。静子夫人は、もう自分人間じゃなく、貴女の奴隷として生き抜く事を決心されているのよ。犬か猫以下の実演をする心境になった静子夫人をぶったりするなんて、まるで気狂いだわ」

「な、なんだって」

千代が眼をつりあげると、今まで、押し黙っていた静子夫人が、

「待って、千代子さん。静子が悪いのです。」

悦子さんには何もおっしゃらないで」

と、線の綺麗な顔を悲しげに曇らせて、千代の方へ気弱な眼差しを向けるのだった。

まあ、まあ、と鬼源が仲裁を買って出たように三人の中へ割って入る。

「ここで、ガミガミ云い合っている時間はねえ。話はショーが終ってからだ」

鬼源は、悦子の手から、しごきの縄尻をひたたくように取って、夫人を押し立て始めた。

三階の廊下の突き当りは、静子夫人と捨太郎のショーを始める大広間になっていて、襖越しに、広間の中にたむろしている客の笑声や怒号が賑やかに聞こえて来る。

「よ、何時まで待たす気なんだ」

「酒が足らねえぞ、酒が——」

襖越しに人いきれが、むっと鼻にくるようだ。

夫人を引立てて来た鬼源達は、そっと、襖の隙間から中をのぞいた。

「随分待たせたもんだから、大分、客が荒れてるぜ」

川田は襖から眼を離すと苦り切った顔つきになる。これから何十人もの客の前へ引き出

されるのだと思うと、観念し切ったとはいへ
やはり、全身が硬化し、膝のあたりが、がく
がく慄え出す静子夫人。

急に襖が中から開いて、田代がそわそわと出て来た。

「ああ、間に合って良かった。間もなく、こ
こへ岩崎親分もお越しになるんだ。今、カー

テンを仕切つて広間の隅に四坪ばかりの楽屋を作つたからな。一まず、そこへ静子夫人を運び入れろ。捨太郎も待機しているからね」

「くさ」

と、鬼源と川田が夫人の身体に手をかけて

広間の中へ運び入れようとする、田代は、「一寸、待て」とそれを制し、

◎躍進記念◎
百萬元懸賞
△原稿募集▽

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文献紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱ってない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲などで、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚の原稿用紙まで。必ず二百字詰又は四百字詰の締切日は、毎月十五日。入選作品は順次、懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別する。ため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。返信料同封の上、その旨添記して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

「酒を飲んで、やくざ連中が大分、荒れてい
るようなんだ。こういう美人の、しかも、こ
んな体をまともに見せられちゃ何をするかわ
からん。まるで、さかりのついた野良犬みた
いな奴がいるからな」

こいつを夫人に頭からすっぽりかぶせて樂屋まで連れて行け、と田代は小脇に抱えていた白いカーテンを鬼源に渡した。

田代に云われた通り、夫人をカーテンで包むと、鬼源、川田、千代、悦子は、田代に案内された恰好で広間の中へ足を踏み入れた。

二十帖ぐらいの中に十数人のやくざがひしめき合っていたが、何人かの男と女が、白いカーテンを頭からすっぽりかぶせた女らしいものを取り巻いて入って来たので、わっと歓声を上げた。カーテンを頭からかぶせたのが女とわかったのは、妖しい悩ましさを持った雪のように白い足首から膝頭のあたりまでがカーテンの下からのぞいていたからで、女は、ひよっとしたら素っ裸。そう思い立つと、何人かの酒ぐせの良くないやくざらしいのが、妙にすわった眼つきになって、部屋の前隅に作った楽屋へ急ごうとする田代達の前へ、フラフラ立ち塞いだのである。



女性切腹随想

女月形半平太

文・写真 六角京之介

「真葛ヶ原女腹切」は有名で映画や芝居にもなっている。「女平手造酒」「白浪五人女」の女弁天小僧、変ったものでは「エロ手本忠臣蔵」の女判官など戦後、女性切腹のクライマックスを中心とした演劇は、かなりあった。いずれも「カタストロフ」としての激しい剣戟で、女主人公が美しい盛装から乳房まで巻きしめた白い晒の腹巻だけといった大肌脱ぎで、裾も露わに、ときとしては刺客の背中を踏みつけ大見得を切り、観客が眼をみはっている中に、物かげからくり出された手槍を受けて重傷を負う。それでも大刀杖に、のけぞり、よろけつつ必死に斗い、最後に「いま



はこれまで」と、刀を逆手に、ふくよかな腹にこれを突き立て、齒をくいしばりつつ、ギリギリと一文字に割っさばいて、息はずませ

つつ台詞を吐いて倒れ伏す。といったストーリーで、観客は全く我を忘れて昂奮し、感動し、嘆息したものである。

そこで、私は多年の持論、行友李風原作「月形半平太」を「女月形半平太」として脚色し演出したならば、来年は明治百年でもあり、時宜を得るのではないかと思う。

月形半平太は、例の人斬り半蔵ら数名の刺客に、薩長連合結成の直前、両派からスパイとして疑われ、晩春の小雨の宵、四条小橋の袋小路で凄惨な斗いの末、斬殺された北越の浪士、本間精四郎と、土州藩士で後に藩政派閥抗争の責任を負って切腹し果てた武市半平太の史実を、行友李風氏が劇化し、故沢田正次郎の時代劇新レアリズム運動実践の脚本として上演し当ったもの。この本間精四郎は背丈高く、仲々の美男子で、ずい分、祇園の芸妓にもてたという。たしかに維新ものとしては「月形半平太」の右に出る優秀作品は、少なからうと考えられる。時代も場も背景もよく、起伏に富み、盛り上がりがあった。

で、月形半平太という主人公は、実は男装をした美人、上背のある年輩の婦人で、免許皆伝の腕前をもつ立派な女剣士であり、熱心な勤皇の志士であった。



という想定にして、とくに本番である大乗院乗込みの場で、陣笠をとり羽織を脱ぎ、死装束下着一枚で乱刃の中に裾ふり乱して斗ううち、髪のもとどりが切れて長いザンバラ髪となり、遂に下着をとって双肌大肌脱ぎとなったとき、白い乱房の下に巻きつけた晒が眼を射る。女としての一切が露われ、刺客のかざす煌々たる「がん灯」の光は、蒼白い豊満な半裸身で大小刀を両手に構える悲壮凄絶の姿をとらえる。そして激斗の末、ふすま越しに繰り出した敵将の長槍に腹を深く突き刺され、千段巻をしっかりと握りしめつつ、のけぞる。が、崩れ落ちる瞬間、転がりながらその敵を一刀のもとに薙ぎ、大刀を杖に齒をく

いしばりつつ、よろよろと立ち上り、柱に身体から噴き出す血潮をぬぐって「尽忠報国」と血書、背を柱にもたせながら息はずませ「今は、こ、これまで。さ、さらば」と恋人の名を呼びつつ、ガックリと首を垂れ、ギリギリとなおも刀を腹中極めて深くえぐりながら一文字に回し、ドッと倒れ伏す。

まず、こういった設定のクライ・マックス中心の一篇を、と思い、いろいろフォトもつくってきた。しかし全くのアマチュアで、脚本は無難のこと、撮影のためのモデルから場所、衣裳、そして写真技術など、今の段階では実に稚拙であり心もとない。

願わくば、変な「ヌード現代もの」に終始

しているプロダクションあたりで、以上のようなストーリーの「女月形半平太」を映画としてつくれないものだろうか。餅は餅屋で、やる気があれば斯界の人々にとっては、さして難事ではなからうし、興行としても立派に新機軸として、企画的にも大いに意義があらうと、私は確信して止まない。

問題は女主人公のあり方で、凄絶な悲壮極まる最期を遂げるヒロイン



「女月形半平太」になりきるだけの演技以上のもの、つまり迫力の要素となる悲痛な恍惚感への精神的昇華が望ましいと思う。乱刃、奮戦の中の、女性の倒錯的セックス・アピールは、長槍に刺されたとき、そして柱に背をもたせ腹一文字にカッさばいたポーズのとき、女性切腹としてのナルシズム、マゾヒズムの一体化が必要であり、眉間に縦じわをつくり、齒をくいしばって虚空をにらんだ瞬間、演ずる主人公の一切を支配する深層心理としての切腹への憧憬、没入を求めたい。

写真は、そのためのコンテの代りといった意味でご覧願いたい。決して完全なものではないこと勿論であり、あらゆる点でこの表題の大きさに応えていないのは承知の上である。



(一) 夢と現実と

「これで君は、もう完全に僕の思いのままだ
——。気持ちはどうだい」
柿の実が色づき始めた庭を望む日本間の一

告

白

病 床 に て

橘 雅 美

つい先刻まで彼女の身にしていたものが、
残らず積み重ねられ、床の間の前でひっそり
とひかえている。マナイタの上にのせられた
人魚は、これから始まるであろう生きづくり
の料理に、胸をはずませ、満足げにはほえん
だ。私は腕のいいコックというわけである。
両の手を左右に広げ、座敷机のはしを、に
ぎりしめる。その手首にはしっかりとロープ
がまかれ、机の裏側で交叉し、引きしぼられ
て止められていた。大きなマナイタからはみ
出た肩があえぎ、鎖骨が痛々しく、柔らかな
肌を突き破らんばかりに飛び出ている。

大盛りのアイスクリームにさくらんぼをの
せたような豊かな胸が、堂々と私を挑発する
ように目をうばった。ろっ骨の境あたりから
深く落ち込んだみぞおちの下で、可愛らし
い臍が息を殺していた。肉づきの良い腰の線
が、思わずウットリさせるようなカーブを描
く。

若アユにも似た下肢の自由を奪っているの
は、両足首だけだ。あっさりした手間のかか
らぬ拘束ぶりではあるが、それが一番彼女に
とってつらいことであり、また、料理される
ことを願っている彼女自身の望みでもあっ
た。

室で、芝居じみたせりふを、ジュエチャーた
っぷりにしゃべりながら、私は彼女を見下ろ
しているのである。
「何もかも、みんな君のお望みどおりにして
やったんだぜ」

足首を別々のロープでくくり、それぞれ机の足につながれている。マナイトを背にした大の字ハリツケ縛りだ。あられもない姿のはずかしさに、人魚は自ら望んだとはいえ、消え入らなばかりにふるえていた。

がつくりと落ちた首から上。覗き込む私の顔はおろか、彼女の目に写るものは全て逆さまだ。それなのに、顔にはどんだん血がのぼって行く。

のけぞる白いのど。突き出た愛くるしいアゴ。口もとのほくろが小さくふるえ、型の良い鼻がすっかり上を向き、荒い息づかいをみせる。じつと空間を見つめるひとみ、ひきつった長いマユがしきりに何かをいたげに動く。柔らかな黒髪が、長々と畳の上をせつなく、はっていた。

自ら求め、とび込んだ無防備な姿だ。やがて彼女は、あがこうともせず目を見開いた。

「どうだい。こんなお仕置き？」

私の声に、はっとしたように目を見開く彼女の前に、ぬっと出されたのは秋の七草のひとつだ。一しゅん曇る顔の表情。しかし、開かれた口もとからは、同意と思えるほころびしか、もれなかった。

そり気味にピンと張ったポリウラムのある

胸許が、期待に息をはずませて、私を待ちうける。そして私の手にした一本のススキの穂が、まだ誰の侵略をも許したことの無い絹のような肌にいどむのだ。

料理人の私には、それがどんなに切れ味の良い庖丁よりも、すぐれた料理道具だと分っている。誰もが食欲をそそるような素晴らしい料理を願っている人魚は、私の心をこめてふるう腕に、歓声を挙げ、マナイトがわりの座敷机をきしませて、手足の縛めに不自由な身を、喜びに精一杯ふるわすだろう。

ススキの穂は、我が意を得たりと彼女の肌をはいまわり、吹き出る涙と汗を吸い取っては更にまた新たに誘い出すのだ。想像しただけでも楽しいじゃないか。

「はじめるよ」

胸の谷間に、全神経が集中する。緊張の一時、彼女はブルンと一度、身ぶるいをした。

(ここで私は、届いたばかりの『奇ク』に目をやった。私は今、現実には料理人どころか、床の中で身をかかめているのだ)

『奇ク』の十二月号に目を通す。他に誰もいない部屋の中で、単行本でも見るかのように、私はやすやすとS・Mの世界に身をまかせようとしている。

空想に描いた彼女のこと。しかしそれは単なる夢物語りではない。私が『奇ク』を読んでいるのも、そして、読んでいる内に、その活字の並んだ薄っぺらな紙の中に引きずり込まれてしまいたいようになるのも、ちゃんとした私なりの理由があるのだ。

神を恐れぬ者が人でないように、S・Mの世界をべつに冒瀆する者も人ではない(ちよっとオーバーかな……)と私は、若年ながらに信じた。が、あえて、私は『悪い夢』を見たといいたい。遠い昔、私を今日のようにしてしまったあることを、どうしても忘れられずにいるのだ。『悪夢』でなくて、何であらう。

私は床に伏すと、すぐ考え込む悪いクセがある。そして今もまたしかりだ。考え込んだら、思い切ってペンを取る。そして気の向くままに走らせる。書き終えてスッキリした気分になれば、うれしいのだが――。

(二) 思い出したこと

はなしは十年前に戻り、中学一年の春のことになる。

私がまだ、詰衿の金ボタン、黒いズボンにバスケットシューズをはき、坊っちゃん刈り

にした髪の毛が少しばかり気になりかけた頃のことだった——。

私の住んでいた家の一軒隣りに、同級生の女子学生がいた。もの静かな顔立ちに似合わない運動が好きで、小学生時代からいつも駆けっことは一番だった。別に友達という程の仲でもなく、ただそんな娘が近くにいたのだ。

この年の春、中学校で開かれた運動会で、私は思いがけない、いや、むしろ異様な出来事に出合い、驚きの声を上げた。

それは、呼び物のクラス対抗リレーで、彼女が最終ランナーとして登場した時のことである。リレーの方かというと、彼女のチームが一番うしろを走り続けていた。クラス対抗ともなると、走る方も応援する方も、皆が必死であった。それだけに、生徒も父兄も、総立ちになって声をはり上げて応援をする。

「ワァーッ」という歓声の中で、最後にバトンタッチをした黒いブルマーがスタートをおこす。スピーカーから流れるテンポの早いメロディーに乗り、ぐんぐんスピードをつけて走り出すと、他のランナーの動きはガタッと鈍った。

ひとりぬき、ふたりぬき、あつという間に二位に躍りあがった。人々の声援がどよめき

に変る内に、彼女は残った一人にもぐいぐいと迫って行く。先頭が第四コーナーを廻り、最後の直線コースに入った。

「やったぞ！」

私が、いや誰もがそう大声を上げた瞬間である。耳鳴りがする程にがり立てる皆の目前で、ツバメを思わせる素晴らしい前傾姿勢で風を切って走っていた彼女が、残った一人を追い抜いたとたん、顔を空に向け、のけぞるように身を延ばしたかと思うと、そのままグラウンドにくずれた。

——リレーは終わっていた。拍手がいっせいにあがる。しかし、彼女はトラックの片はしにつっ伏したままだった。私を含む幾人かの者が、あわてて駆け寄る。

「どうした？ 大丈夫か」

答えはなかった。が、抱き起こした汗まみれのその顔は、相当に興奮している。カッと見開られた瞳が怪しく輝き、平手でホホを二、三度たたいても反応がなかった。彼女の肩が息をするたびに大きくゆれ、こぶしが力強くにぎられていたのを、私は記憶している。

彼女が平静に戻ったのは、医務室のベッドの上だった。とうに運動会も終り、会場のあ

と始末が行なわれていたが、私はなかなかそばを離れずに様子をうかがっていた。

(三) 訪れたS・Mの使い

彼女が私の家へ遊びに来るようになったのは、確かこの時からだったと思う。お互いの家が近かったせいもあり、学校でも二人のウワサは、たつことはなかった。何をしていたのか、当時のことは覚えていない。きっと、おままごとの延長のようなことをしていたのだろう。

しかし、この一日のことだけは、一分一秒たりとも逃がすことなく、はっきりと私の脳裡に焼きついていて。ともかく、その日は家の者が出かけ、私は一人で留守をしていた。夏休みも間近い、ミンミン蟬が裏庭の葉かげで鳴き始めた日曜のことだった。

ぼつんと一人きりになってからすぐ、示し合わせたように彼女がやって来た。

「こんにちは。留守番なの？」

ガラス戸の向うから、おどけた顔が覗く。おとなしい紺のセーラー服に、お下げの髪が胸のあたりで踊っていた。

家にあがると、スラリとした素足が家中を丁度、暗い夜道の街灯に灯りをともすように

飛び廻った。私は、意味もなくその後を追いつ続けた。まだ、二人とも無邪気だった。

「学校ごっこしない？」

私の勉強部屋へ追い込まれた彼女が、突然にこういった。

この誘いが、実は今の自分を生む結果となることなど、中学一年生だった私には想像もつかなかった。ただ、勉強机に向かい、私の教科書を勝手に開けながら準備を始める彼女につられ、いわれるままに部屋をかたづけ、庭に面した障子を閉めた。

「数学の時間にしましょう。雅美君は先生、私は生徒よ、いいわね」

私の学校にいる数学の先生といえば、いつも無精ヒゲを生やし、べらんめえ調で、女生徒でもかまわずに、しかりつける人だった。一寸こわいので有名だった。

セリフもなければストーリーもどうなるか解らない、二人だけの芝居が始まる。

「先生、私、宿題忘れしました」

「よし、そこに立ってろ」

「つまらないワ。あの先生ならもっとこわいのに。ネエ、何かバツを与えるのよ。それがいいわ」

——私は困ってしまった。

「教室の掃除か何かかい」

「意味ないわ。そうね——。おしりなんか叩けば？」

「よせやい、君は女の子だぜ」

悪い夢は、しかし去ろうとしなかった。

「さ、早く」

幼い女王様は、私に催促する。この年頃では急激に女の子の方が大人になってしまい、常に男の子よりも先にいるのは、今も昔も同じである。

両手と両ヒザを畳につけると、彼女はもう頭を下げ、ヒョイとお尻を上げた。

「ねえ、どうしたの」

足許で声がする。上気した心を私は押さえることが出来ないまま、未知の世界へ飛び込んでしまったのだ。悪夢は駆け足でやって来た。

バツとスカートをめくる。同じ女性でも、母にはなかった甘ったるいにおりが広がる。汚れを知らぬ真っ白いズロースが目射た。身ぶるいも止まらぬまま、一回、二回と手のひらで打つ。あまり良い音がしない。

「本気出して。チツともイタくないわ」

「こっちの手の方が感じなくなっちゃうよ」

私の手のひらは、うす赤くなっていた。

「いいわ、物差しを持って来て」

私はかばんの中から、三十センチの竹で出来た物差しを取り出す。今度はこれで叩けというのか——。変なの、女の子って。

「おい、どうしてそんな恰好……」

素っ頓狂な声を私はあげた。振り向いた目の前で、彼女は身に纏った白いズロースをずり下げようとしていたのだ。

子供とはいえ、異性をまるで感じないわけがない。ピーナスを思わせるシミひとつない白い肌の輝きは、今でも目に浮かぶほど私にはまぶしかった。

「いや、エッチー」

発育した白肌に、私の手が自然と吸い寄せられた。さわるとエッチで、ぶつのはエッチじゃないのかと、その時私は「女心」は複雑なんだなと思った。

いわれるままに彼女の背に馬乗りになると、前かがみになり、少しばかり力を入れ、手にした物差しを振りおろした。双丘の片方で、ピシャリと冷たい音がする。

「イタッ」

「そらみろ。いたいクセに」

「もういいわない。もっと叩いて、先生」

「宿題を忘れたバツはこれからだぞ」

「ハイ、先生」

おかしな芝居は続けられた。ひと振り毎に腕に伝わる響きが快いものになっていくのを私は覚えた。Sの血が彼女の指導よろしきを得て、私の体内でくすぶり始めたのか。

しかし赤く物差し跡が残り、恐ろしくなった私は、叩く手を止めた。次に彼女が申し出たお仕置きは、ナワで縛ることだった。いわれた通りに私は行動を続けた。

押し入れから寝まきのヒモを取り出し、後に組んだ手首をくくる。別のヒモをセーラー服の上からまきつけた。全て、彼女の言葉どおりであった。

今、考えてみれば何のことはない、私はていの良い彼女のドレイのようなものだ。もう少し早くS・Mの世界を知っていたらと、唯一のチャンスを失ったのが残念である。鏡を所持され、縛られた我が身を写して一人悦に入っている彼女を、その時の私は指を咥えて（いや、鏡を持っていたのだからおかしい表現の仕方かも知れない。まあ、そのようないうことだ）見ていたことになる。

しかし、細ヒモの間に息づく胸元に触れ、固くしこった小さなふくらみの感覚をその手に収めたことと、立ち上がるうとした時、ず

り下げた自分の下着に足を取られてひっくり返り、私の鼻先でむっちりしたピンク色の太モモが躍ったことは、現在の私のS的な性格を決定的にしたようである。

その日の結果や、後のことは何ひとつ記憶にない。私はそれから自慰という言葉を知った。それから数年後に、神田の古本屋で『奇ク』や『画報風奇』を発見した——。お決まりのコースを経て、今日を迎えたことだけは事実である。

（四）そして私はいま

何度かのきびしい寒さを過ごし、まぶしい陽の輝きを幾回か迎えた。そして現在は、私も彼女も社会人として毎日を迎えている。家も昔と同じ、一軒置いたとなりだ。時々街の中で出会うこともある。何度かコーヒーに誘ったこともある。それでも、今の私の気持ちを伝えたり、二人だけの幼ない頃の秘密を話し合ったりすることはない。

その彼女が最近、急に私をさけるようになった。私の素行があやしいからなのか、それとも無理に昔のことを思い出そうとしないのか、どちらか知らない。が、私はかえってそれが自分のためにも良いと考えている。

ところが、私の部屋に置いてある奇クは毎月毎月着実にその数を増している。無言のまま、冷たい目つきで私はニラまれているのだろうか。使ったことのないロープが、空しく引き出しの奥にねわっている。

ものを書くことは好きだ。当然のように、私はS・Mの世界を書いてみた。それが何カ月か前の『千恵子という女』であり、私の机の中にある『未完成の凡作』である。正常な（というと、S・Mの世界が異常となってしまうが……）人間にない複雑な性や、本能やウソや誠が、果たして書けているだろうか。とうてい私に出来るわけがない。私自身すら、文字に表わすことが出来ないのだから——。これからの『奇ク』に、私はひとつだけお願いがある。

読者の中には、優等生ばかりではなく、私と同じような迷いを持つ者も少なくないのではなかろうか。S・M小説も良からう、カメラハントも良からう。ただ、それだけに止まることなく、読者の本心を隠さずに書きなぐったもの（例えば、十一月号にあった『憎縄の記』のようなもの）や、教育科目の初等科編を毎号、いくらかでも続けて載せて頂ければと思う。



恥かしめて！

村 まり子

今までに何回この文章を書きかけたかわかりません。思ったまま、経験したままの正直な告白を書き綴るより他はないと思い、一年半前迄の、あの思っただけで体がはててくるような恥かしい記録を、何回か書きかけ、そして私の筆ではとてもその何分の一も表現出来ないいらだたしさで、破ってしまうというのを繰り返して来ました。いいえ、そのことずばりなら、たとえどんなに下手でも良いのでしょうか、途中で、これが誰かに読まれるのだと思うと、とても複雑な恥かしさがこみ上げてきて、終りまで書ききれなかったのです。

私に、忘れられない恥かしい責めを教えてください。くれたのは女の人——K子——でした。たとえば彼女が、どんな激しい乱暴な言葉で私を罵ろうと、暴力で私を羞恥にのたうちまわらせ

ようと、私は美しいK子に愛されていると思っていました。そして幸せでした。他人はSだというでしょう。私もそう思っていました。

ところで、去年のはじめ、はじめてK子の下宿でこの雑誌を見、その一頁、一頁を読むにつれ、その妖しい、しかし全く新しい刺激に胸がふるえ、すっかりとりつかれてしまったのです。こういえばK子は怒るでしょう。しかし、もし男の人にそうされたらと思う、両手で顔を覆ってしまう程の激しいショックを感じたことを今でも忘れることが出来ません。それとも私が、女の人に愛されるというよりも、徹底的に、野獣のような男にはずかしめられることを求める女だと気がついたのは、一つ大人になったせいでしょうか。前おきが長分長くなってしまうましたが：

……。私がK子と別れ、ほとんど毎日ボーッと空想にふける瞬間が多くなっていた頃、今年の春頃「花と蛇」の特集号にふれました。私はその大半を読んでいませんでしたから、読み切るまで神経がくたくたになってしまった程、その強引で執拗な描写に、全身がぐったりしてしまいました。本誌には詳細な分析がでておりますし、今なお絶賛をほくしている小説故、私などの感想は蛇足でしょうが、平凡な女の読者の声として書いてみますと、唯の一度？ も「鞭打ち」とか「猿轡」とかいふ、肉体的苦痛を甚だしく伴う責めがないことは他の小説に比して特徴的です。きっと多くの読者の方の中に、それが不満な方も多いでしょう。

勿論、私でも関谷富佐子さんの打たれているシーンを拝見して感じるのは、嫌悪と恐怖

感だけ、という嘘になりますし、「逆さ吊り」などきつと大変な苦痛を伴うものでしょうが、痺れるような衝動を感じます。でも実際は、肉体的汚辱や傷つけられる責めをひどく恐れるため、サディストと自称する男の方が少し怖いのです。

ところが「花と蛇」ではそれどころか縛ることさえほとんど補助的で、あくまでも目的は、空想の世界でさえ身もよじる程の恥かしい羞恥責めが冷酷無残に遂行されていることです。賞讃を惜まない男性の方々は、こんな凄い想像をいつもなさっているのでしょうか。私はこの小説の中の美しい女性達のように、思いきり肌を露出され、折りまげられ、死ぬ程恥かしい姿勢を強いられる場面の数々を、いつもうっとり夢みます。それが徹底的で、計画的であればある程……。

「花と蛇」に比べればそれはママごとのようなものかも知れませんが、かつてK子の下宿で白昼、衣服のすべてを自分の手で脱がされ、激しい叱責の下で立たされたことがしばしばありました。

縄一本用いず「手を上げなさい」「足を開げなさい！ もっと」と命じられ、私がおもじもじする度に、意地悪な命令で気も狂う程の

屈辱的な恰好にされ、泣かされたことがあります。それが何と甘美な思い出の数々だったことでしょう。ムチも縄も用いない責めなんであるかとおっしゃる方ばかりでしょうか。

「花と蛇」の、美女達を悩ませるもう一つの責めに、女体に加える愛撫による好色的な色責めというのがあります。これをやられたら、どんな女性でも魅せられてしまうにちがいありません。「京子」に加えられた二人のシスターボーイによる攻撃は、私の読んだ限りの、そして空想した限りのとばしい範囲の中ですが、これ程、女にとって残酷で淫らないじめ方はないと信じます。この作者は随分、物凄いことを思いつくものですね。

K子は女性同志のせいとか、或いは男性よりもデリケートで、複雑で、女の弱点のポイントをこれでもかこれでもかと、時々ハツとするような大たんな手段で私を弄るのです。そのためこの時は必ず紐を用います。辻村さんや山本さんの写真のように、僅かの縄であんな見事に縛られたことはありませんが、着物を着る時に用いるピンク色の紐を沢山使って「絶対に動いては駄目！」といって、一度、乳房の部分だけ除いて全身をほとんどぎっちり縛られたことがありました。彼女は時

々目かくしはしますが、口だけは決して縛りません。この時は顔は完全に自由でしたが、両足をそろえて、柱の前で両足全部からお腹まで、すっかり紐で覆われた程の状態では、息をするのも苦しい位でした。女の乳房は、根元を縛られて突出した時、その先端は、最も敏感になるのではないのでしょうか。生花で使用する孔雀の羽根とか、綿糸のような穂で彼女に操り責めにされますが、この時は全く往生しました。一度女性のS的経験をすると男では満足しなくなると何かで読みましたが、そうかも知れません。

「まだそんなこと喋ってるの！」「駄目！ まだまだこんなことでは許さないから」とか「この強情娘！ 泣いてあやまりなさい」など次々とひどい言葉でいじめるのですが、大體、泣きわめくとか失神するとかいうことは、そんなに簡単に演技でさえ出来るものではありません。それでも、とうとうこの甘い拷問に、私は一匹の牝のように羞しい声を上げてしまいました。そのためしばらく彼女と顔も合わせられない日々が続いた程です。こういう責めは女の最後の、そして最高の責めだと思えます。「花と蛇」が私をとりこにしたのはこれらがあるためです。

前に読者通信でも一寸書きましたが、この小説が少々私にとって恐ろしいのは、あたり前のようですが、次々と、どうして女の人の貞操をけがすのでしょうか。そういうものなのでしょう。それがないと男の読者の方は面白くないのでしょうか。辻村さんが、読者通信で呼びかけてくる男の人は或いは体は保証出来ないかも知れない、と、河森真理子さんに話すのを読みました。S・M派のプレイボーイに徹する辻村、山本両紳士なら大丈夫というわけでしょうか。

私は、平凡な日本の女のようにセックスにばかり神経質で、男の人にはそれだけつまらない人間かも知れませんが、これだけは不安と恐怖があることを、かくすことが出来ません。

時々、私は次のような情景を空想することがあります。若い健康な青年ではなく、淫らな中年、いや老年の性的不能者に、金で一定の時期買われることです。もしやどこかで、不能の男ほど、異常に淫虐でエロチック・サディズムの趣味を女体に対して抱いている、という知識を聞きかじったのかも知れませんが、第一週より第二週へと次第に、着実に羞恥責の度を増し、彼の淫らな責め方にのたう

ちまわる私の白い裸の姿をうつとりと見つめてかべます。処女の体内のものは不能者の回春のために良いなどと、またヘンな知識から、何も彼に与えない償いとして、緊縛された体から絞り取られてゆくのを歯を喰いしばってこらえる瞬間を夢想して、ねむれぬ夜を過ごすことがあります。

11月号の「快楽の紋章」はやっぱりこんな世界もこの世にあったのかと思いをのむ思いで読みました。三月号の「春の花園に遊ぶ」や辻村カメラハント「陶酔の乳房」などは、自分がそうなっているような気持ちで、最も私にピッタリと味わるものでした。

私にはとてもそんな経験はありませんが、椅子に坐らせた開股縛りとか、尻立縛りなどという気も遠くなるような恥かしいポーズが、カメラハントで必ず行われておりますが、私だったら、よほどの暴力の強制なしには、たとえ自らすすんでモデルになったとしても、体がいうことを利かないと思います。魔子さんはSだそうですが、女性を責めるのには興味はないのですか。彼女には随分長い間恋い焦がれております。あんなに美しい、こわい方になら、少々鞭で打たれても我慢出来るように思いますし、私の最も敏感で羞恥

の強い責め方と想像しているようなことをして貰えたら、もう死んでもよいと思うのではないかしら。

私も河森真理子さんのように、もう結婚のことを考えなければと思います。二、三人のボーイフレンドは、とても真面目なように見えます。もし運命の神のさそいがあって、私の愛する夫となる人が「縄のある蜜月」の猛のような、昼は天使のようにやさしく、夜は女奴隷を罵る暴君のような方にめぐりあえたら、と勝手な夢を見ております。女にとって愛する人に縋てをゆだねる初夜の思いは、まだ十代の頃からバラ色に描かれているものですが、日々形作られてゆく、私のその時の夢は、最高の、そして複雑なバリエーションをもって、私を責め恥かしめる情景なのです。そのため女体にかけての練達者？である方を望みます。こちらがどんなにもだえようと、女の甘い哀願の声などにビクともせず、明るい光の下で、花嫁の裸身を冷やかに觀賞するような男を求めます。女の羞恥心を最大限に引き出させたポーズのままギリギリと縛り上げ、全く一方的に、暴虐の渦に投げ込まれる恍惚の初夜の思いに陶酔する、近頃の私なのです。



ピンク映画シナリオ(団 鬼六・提供)
製作・ヤマベ・プロダクション

お姉ちゃん蒸発

脚本・団 鬼六

監督・藤田 潤八

登場人物

和枝	艶子	道子	礼子	義子	悦子	青木	伊沢	宮本	佐々木	管理	運転	仙吉	刑事	＼
辰己典子	山吹ゆかり	泉ゆり	祝まり	藤ひろ子	立花瑛子	山本昌平	二階堂浩	岸信太郎	沢田実	松田仙三	植直樹	木南清	司健	滝雅夫

1 画面一杯に吉川町子の写真

(吉川和枝のN)

これは私の姉、吉川町子の写真です。年令二十五才。昭和四十年、滋賀県、大津市より上京、日英商事BGを経て、渋谷の酒場「春岡」のホステスとなりました。二カ月前より行方不明、今もって実家の方へは何

の連絡ありません。

2 渋谷の盛り場

ひしめき合う人混みの中を、如何にも田舎から出て来たという感じの吉川和枝が、キョロキョロしながら歩いている。

3 酒場「春岡」その前

表の戸にホステス募集の張紙がしてある。その前で、酒場の看板を見上げる和枝。

4 同 酒場の内部

開店前らしく客はいない。

ホステスの道子、礼子、ボックスに坐って化粧をしている。

マダムの艶子、スタンドに寄りかかり、熱心に本を読んでいる。

その横で、カウンターを拭き、グラスの手入れをしているのは、バーテンの青木だ。

酒場のドアが開き、和枝がおずおずとして入ってくる。

和枝 あの一

ホステス達、一せいに振向く。

道子 はい。何でしょうか。

和枝 あの一 実は……

青木 ああ、ホステス募集の広告を見て来たんだね。どうぞ。そこへ坐って下さい。



道子と礼子、立上って、和枝のために席をあける。和枝、二人のホステスにペコペコ頭を下げながらボックスに坐る。

青木 ママさん。

と、本を読み耽っているマダムの艶子に声をかけるが、艶子は本から眼を離さない。

青木 (艶子の本をふとのぞいて) また推理小説ですか。まるで気狂いだね、マダムは(笑う)。

艶子 (本から眼を離さず) 今、一番、大事なものよ。少し、黙っていて頂戴。

青木 ホステス志願の子が来てるんです。

艶子 ええ？

艶子、ようやく顔を上げ、眼鏡をとってボ

ックスの和枝の方を見る。

艶子 仲々いい娘じゃないの。

青木 僕もそう思いますね。

青木と艶子、スタンドから離れて、ボックスに坐る。和枝、二人に深く頭を下げる。

和枝 あの一 私。

艶子 まあ、そう固くならず、楽にして頂戴よ。道子さん、この方にジュースを作ってもらって。

和枝 あの一、私、ホステスになりたくて、ここへ来たんじゃないんです。

艶子 ええ？

艶子、青木と顔を見合す。

和枝 私、このお店で働いていた吉川町子の妹です。和枝と申します。

艶子 ええ、あんた、町子さんの妹さんなの。

和枝 はあ——実は姉の事で参ったのですけど、一体、姉はどうしたんでしょう。もう二カ月近く便りがないんです。週に一度は私に手紙を

くれていたんですが——

艶子 聞きたいのは私の方なのよ。急にバツタリと店へ来

なくなつて何の連絡もしてこないのよ。ねえ、青木さん。

青木 そうなんだよ。これまで無断で店を休むつて事もなかったし、何かの都合で故郷に帰つたと思つていたんだけど。

艶子 故郷の方へも帰つてないとなると、一体、町子さんはどこへ行っちゃったんだろ。

道子 スタンドの方に坐つてゐる道子が、今、流行の人間蒸発つてやつじゃない、フフフ。

青木 馬鹿っ、笑い事じゃないぞ。妹さんの氣にもなつてみる。

艶子 困つたわね。——ね、青木さん、警察へ一応捜査願ひを出した方がいいんじゃないかしら。

青木 ええ。でも、行方不明ぐらいじゃ警察の方も本腰になつてくれませんかからね。こちらで出来るだけの手は尽してみましようよ。

艶子 そうね。(和枝に) 私達も町子さんの居所を探してみるわ。あまり、思いつめない方がいいわよ。

和枝 (消えいるように) すみません。

5 長者丸マンション 其の前(朝)

青木と和枝が立つてゐる。管理人の息子、信吉が鍵束を持ってやつてくる。

信吉 お待たせしました。さ、どうぞ。

信吉のあとについて、青木と和枝、マンションの階段を上つて行く。

6 同 マンションの廊下

信吉 (キョロキョロしながら) えーと、

吉川さんの部屋はどこだったけな。皆んな表札を出さないんで困るんですよ。

7 同 マンションの一室

遊び人の佐々木と情婦の悦子、濃厚な抱擁をつづけている。

廊下のガタガタいう音が氣になつて、

悦子 うるさいわね。何してんのかしら。

佐々木 氣にすんなよ。

佐々木、悦子に再び、まといつく。

ドアが開いて、信吉、青木と和枝をともにつて入つて来る。

信吉 さ、どうぞ——随分、散らかしたもんです。

信吉、カーテンを開き、ギョッとする。

青木も和枝も啞然と突っ立つ。

悦子の上に覆いかぶさるようにして、愛欲

図を展開させていた佐々木、ふと、カーテンの方を見て、これもびっくりする。

佐々木 な、な、なんでえ、手前達。

信吉 (うろたえて) あの、ここは吉川さんの部屋では？

佐々木 馬鹿野郎っ、吉川つての隣りだ。

信吉 ああ、どうもこりゃ、とんだ事しまして。

信吉、青木と和枝をせかし、あわてて引き返す。

佐々木 頭にきちゃったな、この野郎。人のベッドシーンを見物しやがって。

佐々木、枕を三人の方へ投げつける。

佐々木 今月の家賃は払わねえからな、おぼえとけ。

8 同 廊下

佐々木の部屋から逃げ出して来た三人。

信吉、額の汗をハンカチでふきながらドアを閉める。

信吉 失礼しました。どうも僕はそそっかしいもんで。(冷汗を拭う)

青木 どういう仕事の人ですか。

信吉 今の人ですか。はっきりはわからないけど、コールガールの斡旋のような事をしてるようですね。



青木 コールガール？

信吉 ええ、とにかく、ここのマンション

にや得体の知れない人が住んでいま
すよ——ああ、ここだ。今度は間違
いなし——。

信吉、隣の部屋のドアに鍵を差しこむ。

9 同 町子の部屋

信吉を先頭に青木、和枝、入って来る。

青木、周囲を見廻して、

青木 これだけの荷物をこのままにして姿
を消すっていうのはおかしいな。

信吉 ええ。一カ月以上も部屋を空けると
いうのは、あまり例がありませんか
らね。

信吉 ああ、この部屋代の件ですが。こ
のままじゃ、こっちも困りますし。

青木 この部屋に

は、人の出入

りがかなりあ

ったようです

か。

信吉 はあ、時々男

の人が出入り

していたよう

ですね。——

もっとも商売

が酒場のホス

テスですから、不思議な事じゃない

ですが、ハハハ。

青木 この人は、吉川さんの妹さんだよ。

信吉 ああ、そうですか、こりゃどうも。

信吉、恐縮して、和枝に頭を下げる。

青木 どんな人が出入りしていたのか覚え

てませんか。

信吉 さあ、そこまでは。管理人といっ

ても、部屋に出入りする人まで管理は

してませんからね、ハハハ。

青木 成程。いやどうも有難うございま

した。

信吉 ああ、この部屋代の件ですが。こ
のままじゃ、こっちも困りますし。

青木 ああ、それもそうですね。今日から

この妹さんが、姉さんの留守を預り

ますよ。

青木、ポケットから財布をとり出す。

信吉 そうですか。そうして頂ければこっ

ちも助ります。何しろ、このままじ

ゃ不用心ですからね。

青木 たまっている部屋代を払っておきま

すよ。いくらですか。

和枝 いけませんわ、そんな事までして頂

いては。

青木 いいんだよ。競馬で少しばかり当て

たんだ。

信吉 じゃ、先月分だけ頂く事に致しまし

よう。二万円です。

青木 それじゃ、これ。

青木、信吉に二万円を渡す。

信吉 どうも。じゃ、すぐに受取りを——。

信吉、外へ出て行く。

和枝 何から何まで、ほんとにすみませ

ん。

青木 いいんだよ。それより、姉さんが早

く見つかりゃいいがな。

和枝 ええ。(元氣なく肩を落す)

青木 まあ氣長に待つ事だよ。そのうちひ

和 枝 よっこり顔を出すかも知れない。
あの、昨夜のお話なんですけど。

青 木 ー。

和 枝 私、あのお店で使って頂けるでしょか。

青 木 そりゃ大歓迎だよ。ママもきっと喜ぶさ。人手不足で困ってるんだからね。(腕時計を見て) じゃ、僕はこれで失礼するよ。

和 枝 もうお帰りなんですか。

青 木 うん、これから店の集金で走り廻らなくちゃならないんだ。今夜からでもよかったら店へおいでよ。

和 枝 はあ、どうぞよろしくお願い致します。

青 木 じゃ、また。

青 木 外へ出て行く。

和 枝 そのあと、ぼんやり部屋の中でたたずむ。

三面鏡の前にある姉の写真と和枝、ぼんやりと手にとる。

和 枝 姉さん、教えて。一体、貴女、どこへ行ったの。

10 酒場「春風」その内部

熱気を充満させている店内。

笑声、嬌声、煙草のけむり、ジャズ音楽。バーテンの青木が笑顔振りまきながら、シェッカーを振っている。

ホステスになりきっている感じの和枝が、ボックスからカウンターへやって来る。

和 枝 チーフ、ビール二本にカクテル三つお願いします。

青 木 ハイ。

青 木 調子よくビールの栓を抜きながら、
青 木 どうだい和ちゃん。今夜でもう十日目だが、少しはなれたかね。

和 枝 ええ、何とか。

青 木 そうかい。そりゃよかった。
ビールとカクテルを盆に乗せ、ボックスに運んで行く和枝のうしろ姿を青木、頼もしげに見つめる。

客の間を抜けて、スタンドに一服して腰かけたマダム、煙草を口に咥える。

青 木、ライターの火を近づける。

艶 子 (煙を吐いて) ほんとに和ちゃん、よく働いてくれるわ。お客にも評判がいいし。

青 木 そうですね。これで姉の町子が見つかって、姉妹して働いてくれりゃ店も大助りなんですがね。

艶 子 あんた、昼間は和ちゃんと一緒に、町子さんの行方を探し廻ってるそうじゃないの。

青 木 ええ、一寸、私立探偵の真似事をやってるんですけどね。

艶 子 町子さんが何処へ行ったかという事よりも、彼女が蒸発した理由をまず探らなきゃ駄目よ。あんたも少しは推理小説を読んだ方がいいわよ。

青 木 ハハハ、ママのお仕込みで、僕も段々とミステリーマニヤになってきましたよ。

11 店の看板の灯が消える

12 同 酒場店内

客も帰って閑散となった店内、ボックスのテーブルを囲んで、艶子、和枝、道子、礼子、それにバーテンの青木が坐る。

艶 子 (青木に) 店は閉めた?

青 木 ええ、全部、戸締りもすませました。

艶 子 (道子に) 一寸、あんた、これをその辺に貼りつけてよ。

艶 子、テーブルの上にある大きな紙筒を道子に渡す。

道 子 何ですの、これ。

紙を拡げると、「吉川町子蒸発事件捜査本部」と墨字で大きく書いてある。

道子 (読んで) これを貼りつけるんですか。

艶子 そう。こいつを貼ると一寸気分が出るじゃないの。

道子、呆れた顔をし、そのポスターを近く
の壁に貼りつける。

艶子 さて、本題に入るわ。和ちゃん青木

組とは別に、私も別の方向から町子さんの行方を探ったのだけれど、町子さんは九月三日の日曜日、午後四時頃、東京駅から蒸発した事が判明したのよ。

和枝 九月三日の午後四時ですか。

艶子 そう。東京駅でその日、町子さんを見かけた店のお客がいるのよ。男と一緒にだったらしいけど、相手の顔ははっきりわからなかったというの。

和枝 (大きく息を呑んでうなずく)

礼子 一体、どこへ行ったのですか。

艶子 それがわかったら苦労しないわよ。

とにかく、今日より数えて七十五日前の午後四時、彼女は東京駅から蒸発した事はたしかね。



道子 何処へ何の目的で出かけたか、それが問題ね。

艶子 そういう事。そこで俗にいうでしょう、犯罪の裏には男ありって。

青木 女ありですよ、マダム。

艶子 まあ、同じようなものじゃない。そこで私は町子さんの男関係を洗う事が、決め手になるんじゃないかと考えたの。

そこで浮び上ったのが、東南金融の伊沢専務と三星商事の宮本部長(道子と礼子を見て)この二人が町子さんを張り合っていたのは、あんだ達

も知ってるでしょう。

道子 ええ。それじゃ、マダムの推理は、町子さんがこの二人のどちらかに、九月三日に連れ出されたという事なの。

艶子 ま、いってみればそういう事よ。

礼子 だってマダム、その二人が連れ出したという事と町子さんの蒸発とは何の関係があるんです。あの二人は、昨日だってお店へ飲みに来ていたじゃないませんか。

艶子 馬鹿ね、推理小説風に考えてみなさいよ。彼等のどちらかに町子さんがどこかで殺され――。

艶子、和枝の表情が硬化しているのに気づいてうろたえる。

艶子 ごめんなさいね、和枝さん。これは推理小説風な想像なのよ。気にしないでね。

青木、煙草を灰皿にねじこんで

青木 とにかく伊沢さんと宮本さんの九月三日におけるアリバイをさぐってみましよう。

13 長者丸マンションの前(夜)

タクシーが止り、和枝と青木、降り立つ。



14 同 マンションの廊下

青木、部屋の前まで和枝を送ってくる。

青木 じゃ、お休み。

和枝 ねえ、青木さん。

青木 ——。

和枝 私、何だか今夜、一人でいるのがこわいの。ね、お願い、しばらく一緒にいて下さらない。

15 同 部屋の中

和枝と青木、入って来る。

和枝 今、お茶を入れますわ。どうぞ。

青木、卓の前に坐って、煙草をとり出す。

和枝、湯わかしを手にするが、急に投げ出し、たまたまなくなったよう、坐る。

和枝 ね、青木さん。姉は殺されたんじゃないでしうか。

ないでしうか。

青木 何をいうんだ、藪から棒に。マダム

のいった事なんか気にしない方がいいよ。ありゃミステリー気狂いなんだから。

和枝 だって。

青木 ただし、伊沢さんと宮本さんの九月三日におけるアリバイだけはたしかに調べてみる必要があるね。

和枝 ほんとに私、青木さんには何といってお礼したらいいか。

青木 いいんだよ。和ちゃん。

青木、和枝の手をそっと握る。

青木 正直にいうとね。僕は和ちゃんに惚れちまったんだよ。

和枝 ——青木さん。

青木、和枝をいきなり抱きすくめる。

和枝 い、いけないわ。青木さん。

青木 僕は始めて君を見た日から——。ね、いいだろ。愛してるんだ。

和枝、反抗の気力は喪失し、青木に抱かれるままとなる。

青木の手が、和枝の衣類を剥ぎ出す。

和枝、両手で顔を覆い、すすり泣く。

16 長者丸マンションの近く(朝)

艶子が道子と一緒に歩いて来る。

道子、ふと足を止めて、

道子 あら、あれは青木さんじゃないの。マンションから出て来た青木、艶子や道子には気づかず、歩き去る。

道子 あきれた。昨夜、和ちゃんの所へ泊ったのだけ。

艶子 いいじゃない。若い者同志なんだから。——さ、急いで。

艶子、道子をせきたてるようにして、マンションに入っていく。

17 和枝の部屋

和枝、三面鏡の前で髪をといっている。

思いつめた表情で、鏡にうつる自分の顔を見つめる和枝。

ノックの音。

和枝 はい。

ドアが開いて、艶子と道子が入って来る。

和枝 まあ、ママさんじゃありませんか。さ、どうぞ。

和枝、あわてて、布団など出す。

艶子 朝早くからごめんなさいね。至急、

あんたの耳に入れておきたい事があるの。

艶子、布団に坐ると煙草を口に咥える。

道子、急にしょんぼりした表情を作り、わざとらしくうなだれる。

和枝 あ、一寸。今、お茶を――。

艶子 いいわよ。お茶なんか、それより、ここへお坐りなさいよ。

和枝 はい。（と、二人の前に坐る）

艶子 伊沢さんと宮本さんのうち、一人のアリバイは完全に成立したわ。

和枝――。

艶子 何とこの道子がね。九月三日、伊沢さんとホテルへ泊ってるのよ。あきれちゃうじゃないの、全く。

道子 御免なさいね。恥しくて、昨夜はどうしてもいえなかったのよ。でも、人の生死に関する問題だと思うと――。

艶子 黙ってる事が出来なくなって、今朝早く私の所へ告白に来たというわけなの。（道子に）あんた、伊沢さんと浮気した日は九月三日に間違いないわね。

道子 間違いないわ。私ね、変なくせで、

浮気した日はちゃんと手帖に書きこむ事になっているの。

艶子 （大きく口を開けて笑う）

和枝 あ、その時、伊沢さんは何か姉の事を――。

道子 別に何ともいわなかったわ。

艶子 もう少し、その日の事をくわしく話しなさいよ。

道子 ええ。（情なさそうな顔つき）私ね。呉服屋に借金が出来て、どうしても五万円ばかりのお金が欲しかったのよ。それで、伊沢さんと新宿の青柳という旅館で待合せたの。時間、午後一時――。

そこから、回想が――。

18 旅館・青柳、その一室

縁なし眼鏡をかけた気障な感じの伊沢。札を何度も数えて、ボンと卓の上におく。その向こうに道子、小さくなって坐っている。

伊沢 五万円だ。

道子 どうも――。（札をとろうとする）

伊沢 こら、商品を見せないうち金をとる奴があるか。

道子 ええ？

伊沢 裸になれよ。

道子 嫌だわ。伊沢さん。そんなムードのない云い方。

伊沢 何いってるんだ。これは取引なんだから。俺もこうして金を出した。お前も出せよ。出せたら。

道子 出せ出せって、でんでん虫の角じゃあるまいし、隣にベッドがあるじゃないの。

伊沢 いや、つまらない代物だったら、俺は手をつけずに帰る気だ。それが取引というんだよ。

道子、ぶーとふくれる。

道子のN（ま、感じの悪い事、最高ね。伊沢って男は）

道子（ふてくされたように）わかったわ。脱ぎやいいんでしょ、脱ぎや。

道子、服を脱ぎスリッパの紐を肩から外し始める。

伊沢、眼を細めて見ている。

全裸になり、乳房を押さえて伊沢の前に立つ道子。

伊沢 一寸、部屋の中を歩いてみる。

道子、ふくれ顔で歩き始める。

伊沢 もっと元気よく、ヒップを振って。

一、二、一、二、（と、号令をかけ始める）はい、よろしい。

道子（動きを止める）

伊沢 商談成立だ。ベッドへ行き給え。

道子、ふくれ顔でベッドへ入る。

伊沢、ワイシャツを脱ぎながら、

伊沢 気に入ったよ。よし、取引しよう。

伊沢、道子を抱擁し始める。

19 酒場「春風」の店内（現実）

閉店後の店内。壁に「吉川町子蒸発事件捜査本部」のポスターが張られ、道子の話に艶子、青木達、どっと哄笑する。

店内には、客はなく、艶子、青木、道子、礼子、和枝の五人が、スタンドやボックスにそれぞれ腰かけ、この夜も、町子の行方を話題にしているようだ。

艶子（笑いながら）ああおかしい。取引を始めよう、とはよかったわね。

道子 そう笑わないでよ、マダム。私、大いに反省してるんだから。お金が出来たらあいつの顔にたたきつけてやるわ。

艶子 でも、これで伊沢さんのアリバイははっきりしたわけね。どう思う、青木さん。

青木

いや、そうともいえませんよ。道子は伊沢さんと三時前に旅館を出て別れたんでしょう。町子が東京駅に姿を見せたのは四時、一時間あれば新宿から東京駅にかけつける事は出来ますからね。

艶子

そうね。三時以後の伊沢さんのアリバイが必要というわけだわ。

艶子、妙に元気のない礼子の横顔を見て、

艶子 礼子さん、どうしたの。

礼子 ごめんなさい、マダム。私、隠して

いたんです。

艶子 ええ？ 何を？

礼子 私、あの日の午後三時、伊沢さんと

コマ劇場裏の大月という旅館で逢いました。どうしても五万ばかりのお金が必要だったもので――。

艶子

何ですって。じゃ、伊沢さんは、道子とホテルへ行ったすぐそのあとで、あんたともホテルへ行ったっていう事なの。



礼子 そういう事になりますかしら。

礼子と道子、互いに平目のような眼つきで視線をかわし合う。

青木（笑い出す）すごい精力家なんだな、伊沢さんは。

艶子 ほんとに三時に伊沢さんと旅館で逢ったのね、礼子さん。

礼子 ええ。間違いありません。

礼子、眼をしょぼしょぼさせる。

そこから、回想が――。

20 旅館・大月荘の一室

伊沢と礼子、激しく抱擁し合っている。

伊沢 お前は道子なんかよりずっときれいな体しているよ。五万とられても損

な気はしないな。

礼子 フフフ。じゃ、私と町子さんとをくらべたら。

伊沢 町子か、あいつは別格だ。あれだけの女を渋谷の小さな酒場へおいておくのは惜しいよ。

礼子 大変なお熱ね。ああ、妬けるわ。

礼子、伊沢の首に手をからませる。

伊沢、枕の下から一枚の写真を出す。

伊沢 な、礼子、こんなポーズはどうだ。

礼子 まあ、いやーね。

伊沢 (ニヤニヤして) な、いいだろ。

礼子 嫌っ。

伊沢 いいじゃないか、礼子。

礼子 嫌っ、変態よ、そんなの。

21 酒場・春風の店内「現実」

元の位置

呆れた顔して礼子を見ている艶子と青木。

礼子 (手や腰をひねりながら) 嫌っ、嫌

っといって私、あの人の顔をひっかいてやったわ。本当にいやらしいんですもの。

艶子 何いってんの。そんな事聞してるんじゃないわよ。道子も礼子も、少しだらしなさ過ぎると思わない。

礼子 (悄然として) すみません。マダム。

道子 もうなだれたが、ふと何かに気づいたよう首をあげてキッと礼子を睨む。

道子 一寸、礼子。伊沢さんが私よりあなたのほうがきれいといったなんて、いい加減な事いわないですよ。

礼子 だって、たしかにそうだったのだから、仕方ないじゃないの。

道子 うそおつき。

礼子 うそじゃないわ。

道子 (立ち上る) 何よっ。

礼子 (立ち上る) 何さっ。

艶子 (立ち上る) みっともないわよ。やめなさい。

道子と礼子、艶子を中に置いて、つかみ合いを始める。

22 ××ビルの前

青木と和枝、立っている。

青木 (煙草を吸いながら) 伊沢さんのアリバイが成立したとなると、残りは、この宮本さんだ——。

ビルの中から宮本、出て来る。

宮本 ああ、待たせたね。何か用かい。
青木 お忙しい所すみません。実は、一

寸、町子さんの事で——。

宮本 そうか。じゃ、喫茶へでも行こう。

23 喫茶店の中

宮本、複雑な表情でコーヒーをすすする。

青木と和枝、宮本の顔を凝視している。

宮本 僕は町子を旅行に連れ出したなんて事は一度だってないよ。

青木 じゃ、九月三日の三時頃、つまり、

九月の第一日曜日なんですが、宮本さんは何をなさっていたか、覚えておられませんか。

宮本 (苦笑して) なんだ、まるで刑事気取りだね。

青木 いや(頭をかいて笑う)とにかく僕達、町子の行方を探す事で今必死なんです。

和枝 お願いします。何か姉の事で御存知の事があったら教えて下さい。

宮本 姉?

和枝 吉川町子は、私の実の姉なんです。

宮本 へえ、君は町子の妹さんか。そういえば成程、良く似ているよ。

青木 ね、宮本さん。町子と特に親しかったのは東南金融の伊沢さんと貴方の二人なんですよ。伊沢さんの方の

リバイは成立したんです。

宮本 (むっとしたように) だから俺のアリバイも欲しいというのかね。そいつは困るよ。

青木 困る？

宮本 じゃ、君達に聞こう。二カ月前の今日、そして、今の時間、君達は何処で何をしていたかね。

青木 —。

宮本 二カ月前の自分の行動を一々記憶している人間がいるかね。刑事の猿真似はやめたまえ。不愉快だ。(腕時計を見て) 僕は忙がしいんだ。これで失礼する。

宮本、不機嫌な顔つきで、出て行く。そのあとを茫然と見送る青木と和枝。

24 和枝の部屋

ベッドで、青木、和枝を抱擁している。

和枝、無感動に抱かれているという感じ。

青木 何を考えてるんだい。和ちゃん。

和枝 姉さんの行方を見つけ出さないまま、私、青木さんとこんな事になっってしまったのね。

青木 そんないい方はやめてくれよ、和ちゃん。僕達、するだけの努力はした

じゃないか。

和枝 (すすり泣く)

青木 あせらない事だよ。そのうち、必ず姉さんは見つかるさ。

青木、上体を起す。

和枝 何処へ行くの、青木さん。

青木 (服を着ながら) あの宮本が、どうも臭いと思うんだ。もう少し、調べ

てみるよ。

和枝 待って、私も行くわ。

青木 いいよ、君は疲れている。店へ出る時間まで寝ていたまえ。

青木、ドアを開け、振返って、

青木 (微笑して) 愛しているよ、和ちゃん。

和枝 (微笑する)

青木、外へ出て行く。

和枝、ベッドの中へぐったりと体を横たえる。

じっと、天井を見ながら独り言。

和枝 姉さん。貴女、生きているの、死んでいるの。

和枝、眼を閉じる。眼尻から涙が流れる。

その時、隣の佐々木の部屋で、電話の鳴る音がする。

和枝、ふっと眼を開く。

佐々木の声が、和枝の耳に入ってくる。

佐々木の声 もしもし、なにい。違うよ。うるせえな。違うったら。ここはそば屋じゃねえ。

(ガチャリと電話を切る音)

和子、ベッドから上体を起す。

和子の心の声 隣の部屋には電話がある。ど



うして、これに早く気づかなかったのだろう。

ひょっとして、九月三日に、姉に何処からか呼出し電話がかかってきたのでは――。

和枝、ベッドを出ると、ネグリジエを脱ぎ、服に着がえる。

25 隣の佐々木の部屋

佐々木、情婦の悦子と抱擁し合っている。ノックの音。

悦子 うるさいわね、全く。

佐々木 こういう時に限って何時もだ、ちえっ。

佐々木、立上ってドアを開ける。

和枝が立っている。

佐々木 (ぶっきら棒に) 何か用ですか。

和枝 すみません、一寸、お聞きしたい事があるのですが。

佐々木 あんた、隣に越して来た人だね。

和枝 御挨拶がおくれて申訳ありませんが私、吉川町子の妹なんです。

佐々木 ほう、あんた吉川さんの妹さんかい。ま、入りなよ。

和枝 いえ、ここでもいいんです。

佐々木、部屋の方へ戻って乱雑に散らかっ

ている週刊誌や新聞など足で蹴って隅へ押しやる。夜具にまだ寝そべっている悦子。

佐々木 よ、起きろよ。

悦子 (ふくれ面で) 何よ。――ふん、若い娘見るとすぐこうなんだから。

佐々木 (和枝に) さ入んなよ。

和枝 あ、姉の京子に呼び出し電話のお世話、下さった事はないでしょうか。

佐々木 呼び出し電話ねえ、普通なら断るんだが、彼女は特別に取次いでやったよ。だが、そう度々はなかったようだぜ。電話が鳴る。

佐々木 一寸、待ってくれよ。

と、和枝にいい、電話に出る佐々木。

佐々木 (電話) ああ、もしもし、ええ、今夜、七時、千鳥ですか、はい、わかりました。

佐々木、電話を切って、悦子に。

佐々木 おい、悦子、仕事だ。七時、渋谷道玄坂の千鳥だ。

悦子 あいよ。(気だるそうに啞え煙草して立上り、隣の部屋へ行つて着がえる)

和枝、不思議そうにそんな悦子を眺める。

佐々木 へへへ、俺はこうして女を男に斡旋する仕事をしてるんでね、商売柄、電話を部屋にひいてるんだよ。

和枝 あ、九月三日、姉に電話がかかって来たような様子はなかったでしうか。

佐々木 九月三日? 二カ月前の話じゃないか、覚えちゃいねえね。(悦子の方を向いて) おい早くしねえか。先様はそろそろ旅館につくぜ。

悦子 わかったわよ。悦子、ハンドバッグをかかえて出て行こうとし、ふと、振返る。

悦子 九月三日は確かに電話があったわよ。

和枝 えっ(驚いた表情) 本当ですか。

悦子 九月三日は私の誕生日でさ。ここで仲間の者達と朝から飲んでいたから覚えてるわよ。二時頃だったかしら、男の声だったわ。

佐々木 そうだ、思い出したぜ。こいつが電話を聞いて、俺があんたの姉さんを呼びに行った。

和枝 (せきこんで) あ、それで、姉は、その男の人とどういふ話を話し

ていたでしょうか。

悦子 さてね、一寸、待ってよ。(考える)

和枝 お願いです、どんな事でもいいんです、思い出して頂けませんか。

佐々木 思い出せったって、俺もこいつもそう頭のいい方じゃねえからな、二カ月前の話なんて――。

悦子 思い出したっ。

和枝、唾を呑みこむ。

悦子 あんたの姉さん、こんな事いってたわ――下田なんて、随分と遠い所へ行くのね、熱海ぐらいにしたらどうなのって。

和枝 (大きく眼を開いて)――下田。

26 酒場「春風」店内

スタンドの電話が鳴る。

青木、受話器を取る。

青木 (電話) はい、もしもし、春風でございます――ああ、和ちゃんか、どうしたんだよ。今夜、店を休むのかい。ええ？ 下田へ行くって。うん、うん成程、そうか。でもさ、下田だけじゃまるで雲をつかむような話じゃないか。

マダムの艶子、やって来る。

艶子 誰なの？

青木 和ちゃんです。九月三日、町子が誰かと下田へ出かけたという事がわかったそうです。

艶子 へえ、いよいよ面白くなってきたじゃないの。一寸、電話かわって。

艶子、青木から受話器をとる。

艶子 (電話) もしもし、和ちゃん。そう

私。うん、うん、成程そうよ。とにかく行ってみる事よ、犬も歩けば何とやらというからね。一寸、待って(受話器を耳から外して青木に)青木さん、あんたも和ちゃんと一緒に下田へ行きなさい。

青木 ええ？ 僕もですか。

艶子 そうよ、和ちゃん一人じゃ心配だわ。(ニヤリとして) あんた、和ちゃんともう出来てるんでしょ。水入らずで旅行させてあげるといってるのよ。

青木 (うるたえて) はあ、で、でも、お店の方が――。

艶子 いいわよ、二日や三日位、私達だけで何とかお茶をにごすから。

青木 はあ。

27 走る電車

28 下田の旅館の一室

和枝、疲れ切ったようにベランダの椅子に腰をかけている。

和枝のN 丸二日、青木と私は手分けし姉の写真を持って下田近辺の旅館を一つ一つ尋ね廻った。結果はすべて無駄な努力に終わった。

襖が開いて、青木が疲労の色を表情に見せて入って来る。

和枝 お帰りなさい。やっぱり駄目？

青木 駅前に行って客引きに当たってみたよ。タクシー会社にも問合わせてみたが無駄だったね。

和枝 私も今日は二十軒ばかりの旅館へ行って見たわ、やっぱり駄目。

青木 二カ月以上も前の客の顔を覚えているかという方が無理なんだね。

和枝 そうね。(と元気がない)

青木 どうしたんだ、しっかりしろよ。

和枝 私、もうこれ以上、貴方に迷惑かけるのが辛くて。

青木 何いってるんだよ今更――だが、マダムが心配していると思うよ。明日は一旦、東京へ帰ろうか。



和枝 ええ。
青木 気長に待つんだよ。そのうち、きっと何かの手がかりがつかめると思うよ。

29 同 浴室

和枝、湯に浸っている。

和枝のN 姉はこの土地に本当に来たのだからか。一緒に来た男は、伊沢なのか、宮本なのか。そして姉は生きているのか。それとも――。

和枝、青ざめた表情になり、湯から上る。

30 同 二人の部屋

青木、夜具の上に腹這いになり、煙草を吸っている。
和枝、鏡台の前に坐り、化粧をしている。

青木 (煙草を灰皿に押しこんで) ね和ちゃん、僕と結婚してくれないか。
和枝 ええ? (驚いて振り向く)

青木 だしめけなので驚いたろうけど、僕はもう君を――。

和枝 でも、青木さん、私の事がはつきりしないうちは自分の事を考えるゆとりがないんです。それはわかってるよ。でもさ、結婚してからだって、姉さんの行方は探す事が出来るじゃないか。

和枝 (不思議そうに青木の顔を見て) というと、姉さんの居所は当分見つかりそうじゃないという事――。

青木 いや、別にそう悲観的な見方をしているんじゃないよ、ただ僕は、どうしても君が欲しいんだよ、な。

青木、和子の肩に手をかける。

青木 約束だけしてくれ、お願いだ、和ちゃん。

和枝 わかったわ、私だって、青木さんが好きだもの。

青木 じゃ、承知してくれるんだね。

和枝 (うなづく)

青木 (和枝を力強く抱擁して) 好きだよ、好きだよ、和ちゃん。

青木、和枝を夜具の上へ押し倒し、濃厚な愛欲図を展開させる。

31 同 旅館の前

立関から帰り支度して出て来る青木と和枝。

力のない足どりで歩く和枝を青木、振返って。

青木 どうかしたの。

和枝 私ね、青木さん、もう一日、この町の近くを調べてみたいの。

青木 ええ!? でも僕は今日帰るとさっきマダムへ電話したんだよ。

和枝 お願い青木さん。私一人、もう一日この町において頂戴。昨夜、私――。

青木――。

和枝 姉さんの夢を見たのよ。

青木 姉さんの夢?

和枝 ええ、姉さんが、私の手をとって涙を流すの。きっとこの町で私を呼んでいるのだけ。

青木 馬鹿な。まるで姉さんが死んだようない方じゃないか。

和枝 何だか嫌な予感がするの。ですからお願い。マダムが心配しているから青木さんはこのまま帰って。今日は私一人で廻ってみるわ。

青木 でもね、君。

和枝 そうすれば私の気がすむわ。明日は必ず東京へ帰ります。

和枝、近くに駐車しているタクシーを見つけて、その方へ走り出す。

青木 和ちゃんっ。

和枝、青木に手を振り、タクシーに乗りこむ。和枝を乗せたタクシー走り出す。

32 走る車の中

和枝、ぼんやり、窓の外へ眼を向けている。

運転手 あ、お客さん何処へ行くんです。

和枝 (ふっと気づいて)



ああ、すみません。ここから近い温泉場の方へ、やって欲しいのですけれど――。

運転手 温泉場ねえ、連台寺か河内ぐらいいう所ですか。

和枝 ええ、行先はお任せするわ(ふと気づいたようハンドバッグから写真を取り出す)運転手さん。無駄な事を聞くようですけど、こういう女の人を車に乗せた記憶はないですか。

運転手 はあ？

運転手、写真を和枝から受取って眺める。

運転手 えーと、ああ見覚えがありますよ、この人は。

和枝 ええ？(喜色を顔に現わし)ね、車

を止めて、よく見て下さい。三カ月ばかり前、その写真の女はこの近くに来ていた筈なんです。

運転手、停車させ、写真にじっと見入る。

運転手 ええ、たしかにこの人です。背の高い男の人と一緒にいたが。

和枝 どんな男だったか、はっきり覚えておられますか。

運転手 さあ、男の方まではね。たしかサングラスをかけていましたよ。

和枝 (せきこんで)二人はどこまで車に乗ったのですか。

運転手 一寸待って下さいよ。そう性急にいわれても、何しろ三カ月も前の事なんですからね。

和枝、ハンドバッグの中から何枚かの千円札を出し運転手に握らせる。

和枝 お願いです、何とか思い出して下さい。

運転手 えーと、えーと、ああそうだ。下賀茂の石河旅館だったっけ。

和枝 下賀茂――石河旅館――。

33 石河旅館の前

タクシー止る。

運転手、車窓から首を出し。

運転手 ここなんですがね、大分前から休業

してるんですよ。

和枝 休業？

運転手 ええ、変人の兄妹で経営してるん

で、女中達が気味悪がってすぐにやめるようです。

和枝、車から降りる。

和枝 どうも有難う。あの、また貴方にお

聞きするような事があると思うのですが、住所を教えて頂けませんか。

運転手 僕ですか、山東タクシーの坂田で

す。電話はこの旅館で聞けばわかりますよ。じゃ——。

タクシー走って行く。

和枝、石河旅館の玄関へ立ち、閉ざされて

いるガラス戸をたたく。

和枝 ごめん下さい、ごめん下さい。ガラス戸をたたくと和枝のうしろに黒い影が

近づき、和枝の肩をたたく。

和枝 あら、青木さん。

青木 心配だったので、ずっとタクシーで

和枝 ああよかった、青木さん。とうとう

姉さんの泊った旅館をつきとめた

わ。

青木 ここがそうだというのかい。

和枝 今乗ったタクシーの運転手さんが偶

然に姉さんの顔を覚えていたの。やっぱり、昨夜の夢は正夢だったのだ

わ。

青木 何だか信じられないな。

玄関のガラス戸の内鍵を外す音。

和枝 すみません、一寸、お聞きしたい事

があるんです、開けて下さい。

ガラス戸が開き中年の女（義子）が顔を出

す。義子、和枝と青木をうさん臭そうに見

る。

義子 うちは今、休業中なんだけどね。

青木 いや、手間はとらせない。一寸、聞

きたい事があるんだ。

義子、青木の顔を不思議そうに見つめる。

義子 ま、お入りなさいよ。

34 同 旅館ロビー

和枝と青木、ソファに坐って、宿帳を調べ

ている。奇妙な顔つきで、二人を見ながら

義子 この宿は場所が場所だけに滅多に人

は泊りに来んのですが。

ける。それを見て和枝、哀願するように。

和枝 その写真の人、何とか思い出して頂

けませんか。

義子 さあね、たしかに見たようでもある

し、見ないようでもあるし。

和枝 一緒に来た男の人は？

義子 さあね、背が高いような低いよう

な。

和枝、義子が何か隠そうとしている事に気

づき、きめつけるような調子で。

和枝 二人が来た事はたしかなんですわ。

義子（うろたえ気味で和枝を見上げる。）

和枝、青木の方を見て。

和枝 ね、青木さん、マダム達にここへ来

て頂きましょうよ。

青木 ええ？

和枝 伊沢さんに宮本さん。皆んなに連絡

して、迷惑でしょうけど、ここへ集

まってもらうのよ。そして、さっき

私をここへ運んでくれた坂田という

運転手さんに来てもらう。

青木 成程、運転手に首実験をさせるって

わけか。

和枝 そう、姉がここへ来たのは間違いな

いわ。マダムに話せばきっと協力し

てくれると思うわ。

青木 よし、わかった。じゃ東京へ電話して来る。

青木、立上って玄関の方へ行く。

義子 (和枝に) じゃ、あんた達、今夜はここへお泊りじゃな。

和枝 そうね、東京からマダム達が来るまでの間、ここで御厄介になりますわ。

義子 休業中じゃから何のおもてなしも出来んがの。泊るなら、二階の荻の間がいい。あんたの探している人が寝た部屋だから。

和枝 ええ？ じゃ、やっぱり姉さんはここへ来たのね。どうして、それを隠していたんです。

義子 (あわてて) いや、ま本人かどうかはわからんが何んとなく、そんな気がしたんだよ。

義子、そわそわと立上って歩いて行く。
そのあとをじっと見つめる和枝。

35 同 荻の間

夜具の中で青木はすでに寝入っているが、和枝はなかなか寝つかれない。

和枝のN マダムは明朝、伊沢、宮本を誘っ

てここへやって来るといふ。いよいよ大詰にきた感じだ。興奮した故か、私は仲々ねむられない。

部屋の襖が、そっと小さく開く。

和枝、それに気づかず寝返りをうつ。

女の声 和枝――。

和枝、ハッとす。

女の声 ――和枝。

和枝、上体を起こす。

和枝 姉さん、姉さんなのっ。

和枝、隣で寝ている青木を揺さぶる。

和枝 青木さん。起きてよ、姉さんの声があるのよ。ね、青木さんったら。

青木 (うるさそうに) また、夢を見たんだろ。僕は疲れてるんだ。そっとしておいてくれよ。

青木、頭から布団をかぶる。

女の声 ――和枝。

和枝、立上る。

襖が小さく開いているのを見つけ、唾を呑みこみ、外へ出て行く。

36 同 廊下

怖る怖る廊下を歩く和枝。

和枝 姉さん、姉さんなの。何処にいるの。

女の声 ――ここよ、ここよ、和枝。

和枝、声のする方へ歩いて行く。

和枝の肩に、うしろから、骨張った手がかかる。

ぎよっとして、うしろを振向いた和枝、悲鳴をあげる。

顔面一杯に、火傷のある男が、立っているのだ。和枝、失神する。

37 地下室

踏台の上に乗った義子。天井の梁にロープをかけ、絞首するための輪を作っている。

義子 さて、用意はいいよ、兄さん。

失神した和枝を横抱きにして入って来た火傷の男(仙吉)。和枝を床の上に寝かし

て、
仙吉 いい女じゃ。むざむざ殺すのが惜しいわい。

義子 何いうとるんじゃ。とうとうここを嗅ぎつけよった女子じゃ。姉と同じ運命になるよう出来とるんよ。

仙吉 殺す前に、ちっとばかり眼の保養をさせてもらおうか。

義子 ふん、相変らず助平な男じゃ。もつとも、その御面相では、普通の女子は相手にしてくれんからの。



んか。

仙吉 よし。

仙吉、床に落ちて
ているロープを
拾い、義子と一
緒に和枝を追
う。

隅へ追いつめら
れ、仙吉と義子
にキリキリとロ

て来る。よく顔を見るがいい。

地下室の階段を降りて来る靴音。

和枝、全身を針のように緊張させる。

仙吉 それ、大悪党様のお出ました。ハハ
ハ。

地下室のドアが音を軋まして開く。

和枝、血走った眼をドアに向け、思わず、

和枝 あっ、青木さんっ。

青木、ニヤリと口元を歪めて和枝の傍に近
づいて来る。

仙吉、面白そうに、驚愕する和枝の顔と青
木の顔を見くらべるようにして、

仙吉 (和枝に) もうお前はここで死ぬの
だから、みんな教えてやる。こいつ
は俺の弟だ。

和枝 な、なんですって。

青木 馬鹿だよ君は。とうとう僕の秘密を
かぎつけてしまった。

和枝

青木 僕はね、君の姉の町子に惚れ抜いて
いたんだ。結婚の約束までした。と

ころが町子は急に僕との縁を切って
くれといひ出した。男が出来たんだ
よ。あいつは伊沢とか宮本とか、社

会的な地位を持つ男と結婚したがっ

仙吉 うるさい。べらべらしゃべらず、死

体を埋める穴でも掘っておけ。

仙吉、失神している和枝の傍らに身をかが
め、和枝の衣類を剥ぎ始める。

仙吉 ほう。これは見事な体をしておる。

裸にした和枝を仙吉、眼を細めて見つめて
いる。

和枝、ふと正気づき、仙吉を見て悲鳴を上
げる。

和枝 誰か、誰か来てっ——青木さんっ。

和枝、乳房を両手で押さえ、納屋の中を逃
げ廻る。

仙吉 じたばたしたってもう無駄だ。おと
なしくしろ。

義子 兄さん、何しとる。早よう縄で縛ら

ープで縛り上げられる和枝。

和枝 あ、あんた達は、一体、私をどうし
ようっていうの。

仙吉 殺す前にわけだけは聞かせてやる。
おとなしくするんだ。

仙吉と義子、和枝の体を柱に押しつけ、ロ
ープで縄止めをする。

義子 お前の姉の町子は、ここでお陀仏し
たんじゃ。死体は、わしと兄がここ

の土の下に埋めてやった。

和枝 (恐怖に顔がひきつる) な、何の理
由で姉さんを——あんた達は一体、

誰に頼まれて——。

仙吉 ハハハ、まだ気がつかんのか。今、
お前の姉を殺した犯人がここへやっ

ていたんだ。それで僕は、二人の最後の旅行にしようとの旅館に連れこんだのだ。

和枝
青木

町子を誰の手にも渡したくなかったんだ。永久に僕のものにするため、僕の生まれた土地の下に埋めてしまったんだ。

和枝

(眼をつりあげ) あ、あんたは、気が狂っているのね。

青木

(狂気めいた笑い方をする) そうさ、その通り。僕の親父は気が狂って精神病院で死んだよ。この兄を見ろ、この姉を見ろ、みんな親父の血をひいて気が狂ってるんだ。俺も同じ事さ。

和枝
青木

(恐怖に顔が歪む)

僕は町子の面影を持っている君を自分のものにしようとして努力した。君の姉を探す仕事を手伝ったのも、君に好かれようとする僕の努力だった。だがとうとうここまで探り出されては、生かしておくわけにはいかない。

義子

(和枝の顎に手をかけ) 私の声色は

どうじゃ。お前の姉さんにそっくりだったろう。私はこう見えても昔は役者だったんだよ。

仙吉

フン、ドサ廻りの田舎役者め。

義子

田舎役者で悪かったわね。

青木

そんな事より兄さん。この女をここへ連れこんだ運転手を生かしておくとはずい。明日の夜、僕が始末をつけます。

仙吉

町子を連れこんだ時に始末をしておかぬからこういう事になるんだ。自動車強盗に見せかけてうまくやるんだぞ。

義子

お前、もうこれで東京の生活を切りあげ、ここで暮したらどうじゃ。東京の女子はみんな町子のように根性が悪い。

青木

いや、そのうち、また、いい娘を見つけますよ——じゃ、兄さん、この娘の始末は頼みますよ。

仙吉

ああ、いいとも。楽に死なしてやる。

青木、

柱に縛りつけられている和枝に近づ

き、

青木

お別れのキッスだ、和枝。

和枝、狂気したように首を振り、それを避けようとする。

青木、和枝の髪の毛をつかみ、強引に口吻をする。

口元を歪めて北叟笑み、出て行こうとする青木。

和枝 ま、待って、青木さん。

青木 (振向いて) マダム達はここへ来ないよ。電話はかけなかった。

和枝 (泣きじゃくる)

青木 さようなら、和枝。

青木、ドアを開けて出て行く。

同時に、仙吉と義子、隅からみかん箱を持って来て、首吊り縄の下へ置く。

仙吉 さて、絞首刑の執行だ。

仙吉と義子、和枝の体を柱から外そうとして、ロープを解き始める。

和枝、狂乱して体を悶えさす。

和枝 嫌っ嫌っ、ああ、お願い、助けてっ。

38 同 旅館ロビー

青木、煙草を口にし、火をつける。ロビーの方へ行こうとして、ハツとする。

刑事A、刑事Bが、ソファの前に立っている。

青木 あ、あんた達は?

刑事A (警察手帖を示して) 警察の者だ。

ずっと君達を尾行していたんだよ。

刑事B 和枝の保護依頼があつてね。

青木 保護? 一体、誰からなんです。

刑事A 君の務めている酒場のマダムだ。

青木 マダムが?

刑事B 和枝さんはどこにいるんだ。

青木、逃げ出す。

刑事達、青木を追ひ、手錠をかける。

刑事A (刑事Bに) 部屋を調べてくれ。

刑事B、走り出す。

青木 マダムが、マダムがどうして俺を。

39 同 地下室

仙吉と義子、必死に抵抗する和枝をみかん箱の上に乗せあげる。

仙吉 往生きわが悪いぞ、この娘は。

仙吉と義子、緊縛されたままみかん箱に乗った和枝の首にロープをかける。

和枝 嫌っ、誰か、誰か助けてっ。

仙吉 さあ、死刑執行だ。

激しい勢いでドアが開き、刑事B、飛びこんで来る。同時に、仙吉、足でみかん箱を蹴り上げる。

刑事B あっ。

刑事B、仙吉と義子を突き飛ばし、宙づり

になった和枝の体をかかえこむ。

仙吉 義子っ、逃げる。

義子 兄さん、早くっ。

仙吉と義子、外へ飛び出そうとするが、ドアの前に刑事A、立塞がる。

仙吉と義子、へなへなその場に尻もちをついてしまう。

40 酒場、春風店内

伊沢と宮本、スタンドに坐って飲んでいゝる。カウンターのの中の艶子、得意になってしゃべっている。

艶子 とにかくさ、九月三日のはっきりしたアリバイがないのはバーテンの青木なのよ。彼が町子と関係を持って

いたのは私も薄々感じていたわ。マダムともなれば、バーテンの女関係ぐらい見当がつくわよ。それに和枝が姉の行方を探すのを彼も一生懸命手伝っていたでしょ。ああいうのは犯罪者の心理なのよ。その辺から私はくさいと思ひ出したわ。

宮本 成程ね。

伊沢 こんな店のマダムなんかやめて、一

そのこと、女探偵にでもなったらどうだ。

艶子 でもねえ、氣違ひの血筋になる男を

長い間、バーテンにしておくなんて

私も迂闊だったわ。

宮本 ところで、和枝ちゃんはどうしたんだ。

艶子 それがね、蒸発しちゃったのよ。

伊沢・宮本 ——蒸発?

艶子 (笑って) 故郷へ昨日帰ったのよ。

虎や狼のいる東京から永久に蒸発したってわけ。

伊沢 そうか、可哀そうにな。

艶子 事件が解決するというのも考えもの

ね。和ちゃんのかえって不幸になつてしまったわ。

艶子、グラスを口に当てながら、遠くの方を見るような眼つきになる。

41 田舎の道

白い長い一本道を旅行鞆を持った和枝、疲れ切った足どりで歩いている。敗残者めいた表情。

和枝、ふと立止って遠くの山を眺める。

眼から幾筋もの涙が流れる。

和枝 ——姉さん。

和枝、悄然とうなだれ、長い道を力なく歩き出す。